

ジャバホウオウゴケ

Fissidens javanicus Dozy & Molk.

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		B2ab	
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
B2. 生育地面積が 2000 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。 【地点数】10 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 生育地は林内の溪流沿いの湿った岩上や土上であり、極めて崩壊しやすい場所である。個体群も小さく、個体数も少ない。森林伐採や近年の気候変動に伴う台風・洪水などによって生育環境が変わり、個体群が消滅する可能性が高い。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

アジア熱帯～亜熱帯に広く分布し、日本では奄美大島以南の琉球列島から報告されている。

協力者： 佐藤匠（広島大学）・西畑和輝（広島大学）・桐生賢太（広島大学）

基礎情報

【形態】

ホウオウゴケ属の中では中くらいの大きさで、茎は葉を含めて長さ 0.5～2 cm、11～41 対の葉を規則正しく密につける。葉腋部の茎上には明瞭な瘤ができる。葉は披針形～狭披針形、長さ 1.8～2.7 mm、鋭頭、葉面はしわが寄り、中肋は強くて葉先から短く突出する。葉の中～上部の縁は 2～3 細胞層となる。葉身細胞は丸みを帯びた方形～六角形、厚壁で膨らむ。葉縁が多細胞層になり暗くなっているところはホウオウゴケ (*F. nobilis*) に似るが、植物体が小さく、葉先の縁に鋭い歯がないことで区別できる。

【生活史】

雌雄異株。

【生育環境】

林内の湿った岩上や土上にまばらな群落を作って生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林, 河川源流域, 河川上流域

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (4) 河川・湿地地域

【分布域】

国内では琉球列島に分布し、国外ではアジアの熱帯～亜熱帯に広く分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト作成のための調査では沖縄島と西表島の数か所で確認できた。

【生育地の現況】

いずれの生育地においても生育環境に大きな変化はないと考えられる。

【個体数の現況】

生育量は少ない。

存続を脅かす要因

森林伐採や自然災害によって生育環境の変化が危惧される。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 自然災害
	(現在)	森林伐採, 自然災害

特記事項

琉球列島（奄美大島）が分布の北限となっている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ジャバホウオウゴケ	<i>Fissidens javanicus</i> Dozy & Molk.	VU
第4次 2019:	ジャバホウオウゴケ	<i>Fissidens javanicus</i> Dozy & Molk.	VU
第4次 2018:	ジャバホウオウゴケ	<i>Fissidens javanicus</i> Dozy & Molk.	VU
第4次 2017:	ジャバホウオウゴケ	<i>Fissidens javanicus</i> Dozy & Molk.	VU
第4次 2015:	ジャバホウオウゴケ	<i>Fissidens javanicus</i> Dozy & Molk.	VU
第4次:	ジャバホウオウゴケ	<i>Fissidens javanicus</i> Dozy & Molk.	VU
第3次:	ジャバホウオウゴケ	<i>Fissidens javanicus</i> Dozy & Molk.	VU
第2次:	ジャワホウオウゴケ	<i>Fissidens javanicus</i> Dozy et Molk.	DD
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

沖縄県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Iwatsuki, Z. and T. Suzuki, 1982. A taxonomic revision of Japanese species of *Fissidens* (Musci). Journal of the Hattori Botanical Laboratory, 51: 329-508.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Fissidens javanicus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Fissidens javanicus* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - extent of occurrence
 - area of occupancy
 - area, extent and/or quality of habitat
 - number of locations or subpopulations

(v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest, River headwater, Upper river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, Natural disasters
Law designation status for conservation	—

執筆者:	山口富美夫（広島大学）
Author:	Tomio Yamaguchi

公表年月：2025 年 3 月

キブネゴケ

Rhachithecium nipponicum (Toyama) Wijk & Margad.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) D2				
基準 A: —	基準 B: —	基準 C: —	基準 D: VU	基準 E: —
生育地面積あるいは分布地点が極めて限定されている 【判断理由】 非常に点々とした限られた生育地しか見つからない。それぞれの群落も樹幹着生なのでとても小さい。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

キブネゴケは、日本の固有種で、本州栃木県以西の、神社、仏閣、城址、学校などの庭に植えられた桜の樹幹にごく稀に着生する小型の蘚類である。それぞれの場所で見つかる量は少量であり、かつて見つかったところでも、その後見つからなくなること多い。

協力者： 鈴木直（服部植物研究所）

基礎情報

【形態】

茎は立ち、長さはわずかに 3~4 mm であまり枝分かれしない小型の蘚類。茎の横断面は薄壁の様な細胞からなり、中心束はない。上部の葉は倒卵形~へら形で先端は広く尖り、長さ約 1.7 mm、葉縁はほとんど全縁、基部で時に弱く内曲する。中肋は葉頂よりはるか下で終わる。葉身細胞は疎、六角形で長さ 18~25 μm 、薄壁で表面は泡状に盛り上がる。雌苞葉は鞘状になって蒴柄を包み、蒴はわずかに苞葉の上に出て直立、相称、乾くと明瞭な縦ひだができる。口環は分化し、ふたには短い嘴がある。蒴齒はない。帽は僧帽状で毛はないが、細胞の上端が乳頭状に突出してざらつく。日本には本属の種は 1 種のみ。本属には国外に数種があるが、本種は蒴齒を欠くことで容易に区別できる。

【生活史】

雌雄同株（異苞）。

【生育環境】

おもに神社、仏閣、城跡、学校などに植えられたサクラなどの古木の樹幹上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_平地部】田地・畑地, 市街緑地

国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域

【分布域】

日本の固有種で、本州の栃木県以西に点々と分布している。

現在の生育状況

【分布域の現況】

原記載地は京都市左京区貴船だが、現地では度重なる調査にもかかわらず、30 年以上再発見されていない（秋山, 2015）。その後大阪市内で産地不明の薪に着生しているのが見つかり（Iwatsuki, 1957）、1960 年代には広島県八千代町（関, 1961）や静岡県大河内村蕨野（現在の静岡市葵区蕨野）（高木, 1962）から報告されているが、これらでは以後見つからず（関・出口, 2012）現状不明。静岡県中川根町と本川根町寸又峡温泉では 1994 年の調査で少量が見つかった（cf. 鈴木, 1975; 岩月, 2000）。愛知県では瀬戸市八王子町と新城市鳳来寺山参道入口で見つかったがこれらの産地では消滅し、かわりに新城市（旧鳳来町）細川小学校で見つかったという（愛知県, 2020）。岡山県では真庭市から（立石・川合, 2009）、栃木県では日光市内 2 か所から報告されている（神山・鈴木, 2010）。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

生育着生基物としてサクラの古木を好むため、サクラの枯死により着生基物の減少による生育地の消失が危惧される。また、産地が局限しているため、絶滅する可能性が高い。京都府レッドデータブックでは、道路整備に伴う並木の伐採、排気ガスによる環境の悪化を、原記載地における絶滅の原因として挙げている。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限, 大気汚染, 基質・基物の減少及び消失
	(現在)	交通インフラ建設, 分布・産地局限, 大気汚染, 基質・基物の減少及び消失

特記事項

本属の種は世界に数種があり、1 種を除き、それぞれ限られた地域に孤立的に分布する。本種は日本では本州中部のみにまれに生育し、保護すべき種である（山口, 2015）。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	キブネゴケ	<i>Rhachithecium nipponicum</i> (Toyama) Wijk & Margad.	CR+EN
第4次 2019:	キブネゴケ	<i>Rhachithecium nipponicum</i> (Toyama) Wijk & Margad.	CR+EN
第4次 2018:	キブネゴケ	<i>Rhachithecium nipponicum</i> (Toyama) Wijk & Margad.	CR+EN
第4次 2017:	キブネゴケ	<i>Rhachithecium nipponicum</i> (Toyama) Wijk & Margad.	CR+EN
第4次 2015:	キブネゴケ	<i>Rhachithecium nipponicum</i> (Toyama) Wijk & Marg. [= <i>Kibunemuscus nipponicus</i> Toyama; <i>Hypnodon nipponicus</i> (Toyama) Z.Iwats.]	CR+EN
第4次:	キブネゴケ	<i>Rhachithecium nipponicum</i> (Toyama) Wijk & Marg. [= <i>Kibunemuscus nipponicus</i> Toyama; <i>Hypnodon nipponicus</i> (Toyama) Z.Iwats.]	CR+EN
第3次:	キブネゴケ	<i>Rhachithecium nipponicum</i> (Toyama) Wijk & Marg. [= <i>Kibunemuscus nipponicus</i> Toyama; <i>Hypnodon nipponicus</i> (Toyama) Z.Iwats.]	CR+EN
第2次:	キブネゴケ	<i>Rhachithecium nipponicum</i> (Toy.) Wijk et Marg. Syn. <i>Kibunemuscus nipponicus</i> Toyama; <i>Hypnodon nipponicus</i> (Toyama) Z. Iwats.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

栃木県[情報不足] 愛知県[絶滅危惧 I A 類(CR)] 京都府[絶滅種] 岡山県[絶滅危惧 I 類] 広島県[情報不足 (DD)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 愛知県, 2020. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2020 植物編. 810 pp. 愛知県.
- 秋山弘之, 2015. 京都府レッドデータブック 2015(<https://www.pref.kyoto.jp/kankyo/rdb/bio/db/moss0014.html>)
- Iwatsuki, Z., 1957. The genus *Hypnodon* and its allies. *Bryologist*, 60: 299-310.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- 岩月善之助, 2000. キブネゴケ. 環境庁 (編), 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブック 9 植物 II (維管束植物以外). p. 59. 自然環境研究センター, 東京.
- 神山隆之, 鈴木直, 2010. 栃木県で新たに見つかった絶滅危惧藓類 12 種. *藓苔類研究*, 10: 18-20.
- Noguchi, A., 1989. Illustrated Moss Flora of Japan. Part 3. pp. 493-742. Hattori Bot. Lab., Nichinan.
- 関 太郎, 1961. Notes on Japanese Bryophytes (1). *Hikobia*, 2: 252.
- 関 太郎・出口博則, 2012. キブネゴケ. レッドデータブックひろしま改訂検討委員会 (編), 広島県の絶滅のおそれのある野生生物 (第3版) レッドデータブックひろしま 2011. p. 548. 広島県.
- 鈴木 直, 1975. キブネゴケの新産地. *日本藓苔学会会報*, 1: 111.
- 高木典雄, 1962. キブネゴケの新産地. *植物分類地理*, 20: 237.
- 立石幸敏, 川合啓二, 2009. 岡山県新産のコケ. *岡山コケの会ニュース*, 27: 21.
- 山口富美夫, 2015. キブネゴケ. 環境省 (編), レッドデータブック 2014 日本の絶滅のおそれのある野生生物 9 植物 II (藓苔類・藻類・地衣類・菌類). p. 81. ぎょうせい, 東京.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Rhachithecium nipponicum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Rhachithecium nipponicum* is listed as VU under criteria D2.

2. Population with a very restricted area of occupancy (typically less than 20 km²) or number of locations (typically five or fewer) such that it is prone to the effects of human activities or stochastic

events within a very short time period in an uncertain future, and is thus capable of becoming Critically Endangered or even Extinct in a very short time period.	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】 Farmland, Urban green area
Threat types:	Limited distribution, Air pollution, Reduction or loss of substrate
Law designation status for conservation	—

執筆者:	有川智己（慶應義塾大学）
Author:	Tomotsugu Arikawa

公表年月：2025 年 3 月

ヤスジゴケ目 Rhabdoweisiales キブネゴケ科 Rhachithecaceae

マゴメゴケ

Rhachithecium perpusillum (Thwaites & Mitt.) Broth.

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		D2	
基準 A: —	基準 B: —	基準 C: —	基準 D: VU	基準 E: —	
生育地面積あるいは分布地点が極めて限定されている					
【判断理由】					
これまでに日本国内の離れた 2 地点でしか見つかっていない。それぞれの生育地で確認された生育量は少量であり、樹木の伐採による生育地の消失が心配される。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

マゴメゴケは、人家周辺の樹木の樹幹に点々と着生する小型の蘚類で、国内ではこれまでに栃木県と長野県の離れた 2 地点でのみ確認されている。人家周辺の樹木の伐採によって生育地がなくなることが心配される。

基礎情報

【形態】

植物体は小型で茎は立ち、葉を含めて高さ 1.5-2.0 mm、あまり分枝しない。上部の葉は 1.3-1.6 mm、倒卵形-ヘラ型で、先端は広く尖り、葉縁はほぼ全縁。葉細胞は平滑で泡状に盛り上がる。雌苞葉は鞘状で蒴柄の大半を包む。蒴は乾いた状態で明瞭な縦ひだがある。キブネゴケ *Rhachithecium nipponicum* に似るが、よく発達する蒴齒が 1 列ある。

【生活史】

雌雄同株（異苞）と思われるが造精器と雄苞葉はみつかっていない。

【生育環境】

人家周辺のカキの木の枝や農家のスモモの樹幹などに生える。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】田地・畑地	【陸域_平地部】住宅地
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域	

【分布域】

国内ではこれまで栃木県と長野県で確認されている。海外ではスリランカ、インド、中国のほか、中南米やアフリカでも見られ、世界のかけ離れた地点に点々と分布している。

現在の生育状況

【分布域の現況】

2003 年に長野県山口村（現中津川市）馬籠で日本新産種として発見された（鈴木・岩月, 2004）。その後、栃木県大田原市今泉でも確認された（神山・鈴木, 2010）。その他の産地は不明。

【生育地の現況】

2003 年に長野県山口村（現中津川市）馬籠の人家のカキの木の枝で日本新産種として発見された（鈴木・岩月, 2004）。その後、栃木県大田原市今泉の農家のスモモの樹幹でも確認された（神山・鈴木, 2010）。それらの地点のその後の状況は不明。

【個体数の現況】

それぞれ少量。

存続を脅かす要因

人家周辺の樹木の伐採によって生育地がなくなることが心配される。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 基質・基物の減少及び消失
	(現在)	森林伐採, 基質・基物の減少及び消失

特記事項

鈴木・岩月（2004）が長野県から日本新産として報告した。

旧レッドリストカテゴリと掲載名

第4次 2020:	マゴメゴケ	<i>Rhachithecium perpusillum</i> (Thwaites & Mitt.) Broth.	DD
第4次 2019:	マゴメゴケ	<i>Rhachithecium perpusillum</i> (Thwaites & Mitt.) Broth.	DD
第4次 2018:	マゴメゴケ	<i>Rhachithecium perpusillum</i> (Thwaites & Mitt.) Broth.	DD
第4次 2017:	マゴメゴケ	<i>Rhachithecium perpusillum</i> (Thwaites & Mitt.) Broth.	DD
第4次 2015:	マゴメゴケ	<i>Rhachithecium perpusillum</i> (Thwaites & Mitt.) Broth.	DD
第4次:	マゴメゴケ	<i>Rhachithecium perpusillum</i> (Thwaites & Mitt.) Broth.	DD
第3次:	マゴメゴケ	<i>Rhachithecium perpusillum</i> (Thwaites & Mitt.) Broth.	DD
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

栃木県[情報不足]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 神山隆之・鈴木 直, 2010. 栃木県で新たに見つかった絶滅危惧藓類 12 種. 藓苔類研究, 10: 18-20.
- 鈴木直・岩月善之助, 2004. *Rhachithecium perpusillum* (マゴメゴケ, 新称) は日本にも産する. 藓苔類研究, 8: 272-276.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Rhachithecium perpusillum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Rhachithecium perpusillum* is listed as VU under criteria D2.

2. Population with a very restricted area of occupancy (typically less than 20 km²) or number of locations (typically five or fewer) such that it is prone to the effects of human activities or stochastic events within a very short time period in an uncertain future, and is thus capable of becoming Critically Endangered or even Extinct in a very short time period.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Farmland 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】 Residential area
Threat types:	Logging and wood harvesting, Reduction or loss of substrate
Law designation status for conservation	—

執筆者: 有川智己 (慶應義塾大学)
Author: Tomotsugu Arikawa

公表年月：2025 年 3 月

センボンゴケ目 Pottiales センボンゴケ科 Pottiaceae

ナガバハリイシバイゴケ

Molendoa hornschuchiana (Hook.) Limpr.

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		D2	
基準 A: —	基準 B: —	基準 C: —	基準 D: VU	基準 E: —	
生育地面積あるいは分布地点が極めて限定されている					
【判断理由】					
国内では長野県の山地の石灰岩壁 1 地点にのみ生育するため、生育地点が極めて限定されている。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

ナガバハリイシバイゴケは国内では長野県に、国外ではヨーロッパ、アフリカ北部、ヒマラヤ、中国に分布する直立性の蘚類。林内の石灰岩壁上に生育する。

協力者： 井上侑哉（国立科学博物館）

基礎情報

【形態】

植物体は直立し、茎は長さ 3-4 cm。茎は分枝せず、幅広い基部から披針形に長く伸びる葉をつける。葉は長さ 2.5-3 mm、葉身細胞には高いパピラがある。日本産のハリイシバイゴケ属のもう 1 種、ハリイシバイゴケ (*Molendoa sendtneriana* (Bruch & Schimp.) Limpr.) から、葉は基部で急に広がること、その肩部の縁に細鋸歯を持つこと、中肋は葉の先端に達することなどで区別される。

【生活史】

国内では孢子体は見つかっていない。

【生育環境】

山地の石灰岩壁に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林、岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では長野県に分布し、国外ではヨーロッパ、アフリカ北部、ヒマラヤ、中国に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

国内では長野県大鹿村から報告されている。第 5 次レッドリスト調査 (2016-2019) では同地で岩壁に 5-30 cm 四方の群落が 5 か所以上あるのが確認された。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

産地が局限し、絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

本種は長野県大鹿村でしか確認されていない。野口 (1988) は本種をハナシゴケ属

(*Gymnostomum*) の 1 種と考えている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ナガバハリイシバイゴケ	<i>Molendoa hornschuchiana</i> (Hook.) Limpr.	CR+EN
第4次 2019:	ナガバハリイシバイゴケ	<i>Molendoa hornschuchiana</i> (Hook.) Limpr.	CR+EN
第4次 2018:	ナガバハリイシバイゴケ	<i>Molendoa hornschuchiana</i> (Hook.) Limpr.	CR+EN
第4次 2017:	ナガバハリイシバイゴケ	<i>Molendoa hornschuchiana</i> (Hook.) Limpr.	CR+EN
第4次 2015:	ナガバハリイシバイゴケ	<i>Molendoa hornschuchiana</i> (Hook.) Limpr.	CR+EN
第4次:	ナガバハリイシバイゴケ	<i>Molendoa hornschuchiana</i> (Hook.) Limpr.	CR+EN
第3次:	ナガバハリイシバイゴケ	<i>Molendoa hornschuchiana</i> (Hook.) Lindb. ex Limpr.	CR+EN
第2次:	ナガバハリイシバイゴケ (新称)	<i>Molendoa hornschuchiana</i> (Hook.) Lindb. ex Limpr.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況 (令和4年度末時点)

長野県[絶滅危惧 I 類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況 (令和4年度末時点)

指定なし

参考文献

- 樋口正信, 2015. ナガバハリイシバイゴケ. 環境省 (編), レッドデータブック 2014 ―日本の絶滅のおそれのある野生生物― 9 植物 II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類). p. 63. ぎょうせい, 東京.
- Noguchi, A., 1988. Illustrated Moss Flora of Japan. Part 2. pp. 243-491. Hattori Bot. Lab., Nichinan.
- Saito, K., 1975. A monograph of Japanese Pottiaceae. J. Hattori Bot. Lab., 39: 373-537.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Molendoa hornschuchiana has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Molendoa hornschuchiana* is listed as VU under criteria D2.

2. Population with a very restricted area of occupancy (typically less than 20 km²) or number of locations (typically five or fewer) such that it is prone to the effects of human activities or stochastic

events within a very short time period in an uncertain future, and is thus capable of becoming Critically Endangered or even Extinct in a very short time period.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest, Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	樋口正信（国立科学博物館）
Author:	Masanobu Higuchi

公表年月：2025 年 3 月

センボンゴケ目 Pottiales センボンゴケ科 Pottiaceae

ハリエゾネジレゴケ

Tortula hoppeana (Schultz) Ochyra

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		D2	
基準 A: —	基準 B: —	基準 C: —	基準 D: VU	基準 E: —	
生育地面積あるいは分布地点が極めて限定されている					
【判断理由】					
これまでに 2 地域 4 か所でしか知られていない。いずれの生育地でもごく少量のみ生育し、大部分の生育地で登山者が踏みつけそうな場所に生えている。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

ハリエゾネジレゴケは、葉先に中肋が突出して毛状に長く伸び出す暗緑色の蘚類で、北半球に広く分布するが、日本では北アルプスと南アルプスの高山帯のハイマツ林を通る登山道脇の岩隙の乾燥した腐植土上にごく稀に生育する。登山者の踏みつけによる衰退が心配される。

協力者： 山口富美夫（広島大学）

基礎情報

【形態】

植物体は直立して長さ 5 mm 以下、暗い緑色。葉は長楕円形で乾くと巻縮して茎に弱く圧着する。葉縁は分化しない。葉先には中肋が突出して毛状に長く伸び出す。中肋の断面で腹側には乳頭がある。葉身細胞は六角形、密に C 字型のパピラで覆われる。本種はムカゴネジレゴケ *Hennediella gemmascens* に似るが、葉には無性芽がなく、葉はより小さく、中肋の腹面の細胞に乳頭があることなどで区別される。

【生活史】

本種の無性芽は見つかっていない。

【生育環境】

高山帯にあるハイマツ林などを通る登山道脇などの岩隙の乾燥した腐植土上に見つかる。

生育環境区分：	【陸域_高標高地】砂地・風衝地、岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では本州の北アルプスと南アルプスにのみ分布し、国外では北半球に広く分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

長野県（北アルプス白馬岳）と山梨県（南アルプス北岳）だけから知られていた（長野県，2005）。白馬岳の現状は不明だが、第 5 次レッドリストのための調査では、2016 年に南アルプスの悪沢岳（静岡県）で 3 つ、北岳（山梨県）で 2 つ、赤石岳（静岡県・長野県）で 1 つの群落が確認された。

【生育地の現況】

それぞれの生育地の岩場の土上に稀に見られるが、大部分の生育地で登山者が踏みつけそうな場所に生えている。

【個体数の現況】

いずれの生育地でもごく少量。

存続を脅かす要因

登山者の踏みつけによる衰退が心配される。

要因の区分：	（過去）	人の踏みつけ
	（現在）	人の踏みつけ

特記事項

本種はエゾネジレゴケ属 *Desmatodon* とされてきたが（例えば Noguchi, 1988; 岩月ほか 2001 など）、Zander（1993）は本種をネジレゴケ属 の一種と考え、*Tortula euryphylla* とした。しかし Ochyra（2004）は、ネジレゴケ属のもとではこの名は不適切であるとして *Tortula hoppeana* とした。

旧レッドリストカテゴリと掲載名

第4次 2020:	ハリエゾネジレゴケ	<i>Desmatodon latifolius</i> (Hedw.) Brid.	VU
第4次 2019:	ハリエゾネジレゴケ	<i>Desmatodon latifolius</i> (Hedw.) Brid.	VU
第4次 2018:	ハリエゾネジレゴケ	<i>Desmatodon latifolius</i> (Hedw.) Brid.	VU
第4次 2017:	ハリエゾネジレゴケ	<i>Desmatodon latifolius</i> (Hedw.) Brid.	VU
第4次 2015:	ハリエゾネジレゴケ	<i>Desmatodon latifolius</i> (Hedw.) Brid. [= <i>Tortula euryphylla</i> R.H.Zand.]	VU
第4次:	ハリエゾネジレゴケ	<i>Desmatodon latifolius</i> (Hedw.) Brid. [= <i>Tortula euryphylla</i> R.H.Zand.]	VU
第3次:	ハリエゾネジレゴケ	<i>Desmatodon latifolius</i> (Hedw.) Brid. (= <i>Tortula euryphylla</i> R.H.Zand.).	VU
第2次:	ハリエゾネジレゴケ（新称）	<i>Desmatodon latifolius</i> (Hedw.) Brid. Syn. <i>Tortula euryphylla</i> Zander	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

長野県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岩月善之助・出口博則・古木達郎，2001．日本の野生植物コケ．平凡社，東京．355pp., 192pls.
- 神田啓史，2000．ハリエゾネジレゴケ．環境庁（編），改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物ーレッドデータブックー9．植物Ⅱ（維管束植物以外）．p. 146．自然環境研究センター，東京．
- 長野県（編），2005．長野県版レッドデータブック 非維管束植物・植物群落編．205pp．長野県．

- Noguchi, A., 1988. Illustrated Moss Flora of Japan. Part 2. pp. 243-491. Hattori Botanical Laboratory, Nichinan.
- Ochyra, R., 2004. *Tortula hoppeana*, the correct name for *Desmatodon latifolius* in *Tortula* (Bryopsida, Pottiaceae). The Bryologist, 107: 497-500.
- Zander, R. H., 1993. Genera of the Pottiaceae: Mosses of harsh environments. Bulletin of the Buffalo Society of Natural Sciences 32. Buffalo, New York. 378pp

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Tortula hoppeana has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Tortula hoppeana* is listed as VU under criteria D2.

2. Population with a very restricted area of occupancy (typically less than 20 km²) or number of locations (typically five or fewer) such that it is prone to the effects of human activities or stochastic events within a very short time period in an uncertain future, and is thus capable of becoming Critically Endangered or even Extinct in a very short time period.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area】 Sandy area/Wind-eroded area, Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Human trampling
Law designation status for conservation	—

執筆者: 有川智己 (慶應義塾大学)
Author: Tomotsugu Arikawa

公表年月：2025 年 3 月

ハリガネゴケ目 Bryales ハリガネゴケ科 Bryaceae

ヒョウタンハリガネゴケ

Plagiobryum japonicum Nog.

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類（VU）		D2	
基準 A: —	基準 B: —	基準 C: —	基準 D: VU	基準 E: —	
生育地面積あるいは分布地点が極めて限定されている					
【判断理由】					
八ヶ岳山塊では複数地点で確認されているが、そもそも長野県八ヶ岳と駒ヶ岳、山形県鳥海山の周辺でしか確認されていない。それぞれの生育地で確認された量は少量であり、土砂崩れや登山道の整備で容易に各生育地は消滅する。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

ヒョウタンハリガネゴケは、高地の岩陰に生える蘚類で、同属の種からは葉先が広く短く尖ることで区別される。国内では山形県鳥海山や長野県八ヶ岳、駒ヶ岳で記録がある。八ヶ岳では複数地点で少量の生育が確認されている。生育地付近の火山噴火や土砂崩れ、登山道の整備の影響が懸念される。

基礎情報

【形態】

植物体は小型で、葉を覆瓦状につけ、ややギンゴケ *Bryum argenteum* に似る。葉は卵状披針形、長さ 0.7～2 mm、葉先は広く短く尖り、中肋は葉先よりもかなり下で終わる。蒴柄は長さ 4～8 mm、蒴はほぼ水平につき、頸部は壺とほぼ同長。同属のナガクビゴケ *Plagiobryum zieri* は葉先が狭く長く尖り、中肋が葉先に達することと、蒴の頸部が壺よりもずっと長いことで、コゴメイトサワゴケ *Plagiobryum hultenii* は葉先が細く長く尖り、中肋は葉先から長く突出することで区別できる。孢子体がないと発見されにくい。

【生活史】

雌雄異株。

【生育環境】

高地の岩陰に生える。

生育環境区分：	【陸域_高標高地】岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では長野県八ヶ岳、駒ヶ岳、山形県鳥海山から報告されており、国外では中国雲南省から報告がある。

現在の生育状況

【分布域の現況】

2001 年、2005 年の調査では八ヶ岳で少量の生育が確認されている。樋口（2013）は八ヶ岳の地獄谷から報告している。八ヶ岳からはほかに赤岳鉱泉と硫黄岳の間と、天狗岳でも報告されている。駒ヶ岳や鳥海山の現況は不明。

【生育地の現況】

高地の岩陰に点々と、数センチ四方の群落をつくって生育している。八ヶ岳では生育環境に大きな変化はないと考えられるが、駒ヶ岳や鳥海山の現況は不明。

【個体数の現況】

それぞれの生育地で確認された量は少量。

存続を脅かす要因

生育地付近の火山噴火や土砂崩れ、登山道の整備の影響が懸念される。

要因の区分：	(過去)	自然災害, その他 (遊歩道整備)
	(現在)	自然災害, その他 (遊歩道整備)

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ヒョウタンハリガネゴケ	<i>Plagiobryum japonicum</i> Nog.	VU
第4次 2019:	ヒョウタンハリガネゴケ	<i>Plagiobryum japonicum</i> Nog.	VU
第4次 2018:	ヒョウタンハリガネゴケ	<i>Plagiobryum japonicum</i> Nog.	VU
第4次 2017:	ヒョウタンハリガネゴケ	<i>Plagiobryum japonicum</i> Nog.	VU
第4次 2015:	ヒョウタンハリガネゴケ	<i>Plagiobryum japonicum</i> Nog.	VU
第4次:	ヒョウタンハリガネゴケ	<i>Plagiobryum japonicum</i> Nog.	VU
第3次:	ヒョウタンハリガネゴケ	<i>Plagiobryum japonicum</i> Nog.	VU
第2次:	ヒョウタンハリガネゴケ	<i>Plagiobryum japonicum</i> Nog.	DD
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

長野県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 樋口正信, 2013. 長野県八ヶ岳のナンジャモンジャゴケとヒョウタンハリガネゴケ. 蘚苔類研究, 10: 357-358.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- 長野県環境部自然保護課・長野県環境保全研究所自然環境部, 2014. 長野県版レッドリスト 長野県の絶滅のおそれのある野生生物 植物編 2014. 長野県環境部自然保護課・長野県環境保全研究所自然環境部, 長野. 224 pp.
- Noguchi, A., 1988. Illustrated Moss Flora of Japan. Part 2. pp. 243-491. Hattori Botanical Laboratory, Nichinan.
- Ochi, H., 1959. A revision of the Bryaceae in Japan and the adjacent regions. The Biological Institute, Faculty of Liberal Arts, Tottori University, Tottori. 124 pp

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Plagiobryum japonicum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Plagiobryum japonicum* is listed as VU under criteria D2.

2. Population with a very restricted area of occupancy (typically less than 20 km²) or number of locations (typically five or fewer) such that it is prone to the effects of human activities or stochastic events within a very short time period in an uncertain future, and is thus capable of becoming Critically Endangered or even Extinct in a very short time period.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area】 Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Natural disasters, Other (遊歩道整備)
Law designation status for conservation	—

執筆者: 有川智己 (慶應義塾大学)
Author: Tomotsugu Arikawa

公表年月：2025 年 3 月

タチヒダゴケ目 Orthotrichales タチヒダゴケ科 Orthotrichaceae

イボタチヒダゴケ

Lewinskya iwatsukii (Ignatov) F.Lara, Garilleti & Goffinet

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		D2	
基準 A: —	基準 B: —	基準 C: —	基準 D: VU	基準 E: —	
生育地面積あるいは分布地点が極めて限定されている					
【判断理由】					
これまでに南アルプスの山頂付近、2、3 か所でしか確認されていない。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

イボタチヒダゴケは、この仲間としては比較的大きな蘚類で、ヒマラヤ地域その他、シベリアやコーカサス地方からも記録がある。日本では南アルプス北岳山頂と東岳（悪沢岳）山頂から知られている。

協力者： 山口富美夫（広島大学）

基礎情報

【形態】

植物体は比較的大きく、長さ 4 cm になり、茎はたまにわずかに枝分かれする。乾いたとき基部の葉は茎に接する。上部の葉は卵形の基部から披針形で、長く尖り、長さ 3.2～3.6 mm、幅 0.7～0.8 mm の大きさがあり、乾くといくらか屈曲する。中肋は葉先近くに達する。葉の縁は全縁で、ほぼ全周にわたり背方に巻く。上部の葉身細胞は丸みを帯びた方形、長さ 9～16 μm 、幅 7～16 μm 、厚壁、表面には 1～2 個の高い、単一または先が分かれたパピラがある。葉の基部の細胞は長い矩形から菱形、厚壁でくびれがある。

【生活史】

雌雄同株（異苞）。

【生育環境】

標高 2,800 m 以上の高山山頂域の主に石灰岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地】岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では本州（南アルプス）、国外では中国（チベット）、インド、ネパール、シベリア、コーカサス地域に分布する（Lewinsky, 1992; Ignatov et al., 2001）。

現在の生育状況

【分布域の現況】

本種は初め南アルプスの北岳から記録された（Iwatsuki, 1959）。その後東岳（悪沢岳）山頂でも見つかっている（山口, 2015）。長野県レッドデータブック（2005）では大鹿村に生育するとされている。2016 年の調査では北岳山頂付近の 2 か所で少量の群落が確認されている。

【生育地の現況】

生育環境に大きな変化はないと考えられる。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

産地が局限している。また、これまでに報告されている産地は高山の山頂域の登山道沿いにあるため、遊歩道の整備などにもなう人為的な影響が懸念される。

要因の区分：	（過去）	分布・産地局限, その他（遊歩道整備）
	（現在）	分布・産地局限, その他（遊歩道整備）

特記事項

本種は日本での発見以来、亜種や変種として扱われてきたが、Ignatov et al. (2001) は独立種とした。Lala et al. (2016) は、本種を含む群を別属とし、*Lewinskya iwatsukii* という学名を提唱している。分類学的再検討の必要がある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	イボタチヒダゴケ	<i>Orthotrichum iwatsukii</i> Ignatov	CR+EN
第4次 2019:	イボタチヒダゴケ	<i>Orthotrichum iwatsukii</i> Ignatov	CR+EN
第4次 2018:	イボタチヒダゴケ	<i>Orthotrichum iwatsukii</i> Ignatov	CR+EN
第4次 2017:	イボタチヒダゴケ	<i>Orthotrichum iwatsukii</i> Ignatov	CR+EN
第4次 2015:	イボタチヒダゴケ	<i>Orthotrichum iwatsukii</i> Ignatov [= <i>O. laevigatum</i> J.E.Zetterest. var. <i>japonicum</i> (Z.Iwats.) Lewinsky]	CR+EN
第4次:	イボタチヒダゴケ	<i>Orthotrichum iwatsukii</i> Ignatov [= <i>O. laevigatum</i> J.E.Zetterest. var. <i>japonicum</i> (Z.Iwats.) Lewinsky]	CR+EN
第3次:	イボタチヒダゴケ	<i>Orthotrichum iwatsukii</i> Ignatov [= <i>O. laevigatum</i> var. <i>japonicum</i> (Z.Iwats.) Lewinsky]	CR+EN
第2次:	イボタチヒダゴケ (新称)	<i>Orthotrichum laevigatum</i> var. <i>japonicum</i> (Iwats.) Lewinsky Syn. <i>O. macounii</i> ssp. <i>japonicum</i> Iwats.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況 (令和4年度末時点)

長野県[絶滅危惧 I 類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況 (令和4年度末時点)

指定なし

参考文献

- Ignatov, M. S., E. I. Ivanova, E. A. Ignatova and K. K. Krivoschapkin, 2001. On the moss flora of Ust-Maya District (Republic Sakha/Yakutia, East Siberia). *Arctoa*, 10: 165-184.

- Iwatsuki, Z., 1959. Bryological miscellanies, VII-XI. Journal of the Hattori Botanical Laboratory, 21: 236-247.
- Lara, F., R. Garilleti, B. Goffinet, I. Draper, R. Medina, B. Vigalondo, and V. Mazimpaka, 2016. *Lewinskya*, a new genus to accommodate the phaneroporous and monoicous taxa of *Orthotrichum* (Bryophyta, Orthotrichaceae). Cryptogamie, Bryologie, 37: 361-382.
- Lewinsky, J., 1992. The genus *Orthotrichum* Hedw. (Orthotrichaceae, Musci) in southeast Asia. A taxonomic revision. Journal of the Hattori Botanical Laboratory, 72: 1-88.
- 長野県, 2005. 長野県版レッドデータブック 長野県の絶滅のおそれのある野生生物 非維管束植物編・植物群落編. 205pp.
- 山口富美夫, 2015. イボタチヒダゴケ. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), レッドデータブック 2014ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー9 植物 II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類). p. 71. ぎょうせい, 東京.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Lewinskya iwatsukii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Lewinskya iwatsukii* is listed as VU under criteria D2.

2. Population with a very restricted area of occupancy (typically less than 20 km²) or number of locations (typically five or fewer) such that it is prone to the effects of human activities or stochastic events within a very short time period in an uncertain future, and is thus capable of becoming Critically Endangered or even Extinct in a very short time period.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area】 Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Limited distribution, Other (遊歩道整備)
Law designation status for conservation	—

執筆者: 有川智己 (慶應義塾大学)

Author: Tomotsugu Arikawa

公表年月: 2025 年 3 月

タチヒダゴケ目 Orthotrichales タチヒダゴケ科 Orthotrichaceae

ヤマタチヒダゴケ

Orthotrichum anomalum Hedw.

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		D2	
基準 A: —	基準 B: —	基準 C: —	基準 D: VU	基準 E: —	
生育地面積あるいは分布地点が極めて限定されている					
【判断理由】					
過去に確認された地域が 4 か所のみと、ごく少ない。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

ヤマタチヒダゴケは、北半球温帯に分布する種で、国内では本州東北地方～中部地方の 4 か所で確認されている。蒴柄が長いこと、外蒴歯がほとんど対にならないこと、内蒴歯を欠くことで同属の他種から区別される。

基礎情報

【形態】

岩上に深緑色の塊状の群落を作る。本属の中では大形で、茎は立ち、長さ 1～1.5 cm で分枝しないか、わずかに枝を出す。葉は密につき、披針形～狭楕円状卵形、先は鋭頭、葉縁は強く反曲する。中肋は太く、葉先近くに達する。葉身細胞は丸みのある方形で、長さ 10～15 μm 、中央部が盛り上がり、2～3 個のパピラを持つ。蒴柄は長さ約 3 mm、蒴は円筒形で葉から超出、乾くと 8 本の縦ひだができる。蒴の基部に沈生した気孔がある。外蒴齒はほとんど対にならず、表面に縦の条がある。内蒴齒を欠く。帽には少数の毛がある。蒴柄が長いこと、外蒴齒がほとんど対にならないこと、内蒴齒を欠くことで同属の他種から区別される。

【生活史】

雌雄同株（異苞）。

【生育環境】

石灰岩を含む岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (2) 里地里山・田園地域

【分布域】

北半球に広く分布し、国内では本州東北地方～中部地方に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

産地は少なく、これまでに山形県、新潟県、長野県から報告されている（山口, 2015）。林（2019）は、群馬県みなかみ町湯原から本種を報告している。

【生育地の現況】

林（2019）は、群馬県みなかみ町湯原から本種を報告している。水上公民館の近くの道路沿いの石垣に着生していた。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

これまでに報告された産地と標本資料も少ないことから、産地が局限していると考えられる。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ヤマタチヒダゴケ	<i>Orthotrichum anomalum</i> Hedw.	CR+EN
第4次 2019:	ヤマタチヒダゴケ	<i>Orthotrichum anomalum</i> Hedw.	CR+EN
第4次 2018:	ヤマタチヒダゴケ	<i>Orthotrichum anomalum</i> Hedw.	CR+EN
第4次 2017:	ヤマタチヒダゴケ	<i>Orthotrichum anomalum</i> Hedw.	CR+EN
第4次 2015:	ヤマタチヒダゴケ	<i>Orthotrichum anomalum</i> Hedw.	CR+EN
第4次:	ヤマタチヒダゴケ	<i>Orthotrichum anomalum</i> Hedw.	CR+EN
第3次:	ヤマタチヒダゴケ	<i>Orthotrichum anomalum</i> Hedw.	CR+EN
第2次:	ヤマタチヒダゴケ	<i>Orthotrichum anomalum</i> Hedw.	DD
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

滋賀県[希少種]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 林 正典, 2019. ヤマタチヒダゴケが群馬県で見つかる. 蘚苔類研究, 11: 349-350.
- 山口富美夫, 2015. ヤマタチヒダゴケ. 環境省 (編), レッドデータブック 2014 日本の絶滅のおそれのある野生生物 9 植物 II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類). p. 70. ぎょうせい, 東京.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Orthotrichum anomalum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Orthotrichum anomalum* is listed as VU under criteria D2.

2. Population with a very restricted area of occupancy (typically less than 20 km²) or number of locations (typically five or fewer) such that it is prone to the effects of human activities or stochastic events within a very short time period in an uncertain future, and is thus capable of becoming

Critically Endangered or even Extinct in a very short time period.	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	有川智己（慶應義塾大学）
Author:	Tomotsugu Arikawa

公表年月：2025 年 3 月

イブキンモウゴケ

Ulota perbreviseta Dixon & Sakurai

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		B2ab	
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
B2. 生育地面積が 2000 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。					
a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。					
【地点数】10 地点以下					
b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。					
【判断理由】					
神奈川県で絶滅したと判断されたこと。高知県天狗高原では 2011 年の調査で 2005 年に比べ約 10 分の 1 に減少していたこと。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

イブキンモウゴケは、日本（神奈川県以西の本州、四国、九州）と朝鮮半島に分布する蘚類で、カラフトキンモウゴケに似るが、不規則に分枝し、蒴柄が短いことで区別できる。神奈川県では絶滅と判断された。高知県天狗高原では 2011 年の調査で 2005 年に比べ約 10 分の 1 に減少していることが確認された。森林伐採や道路建設で生育環境が損なわれる心配がある。

協力者： 立石幸敏（岡山コケの会）

基礎情報

【形態】

木の枝の上に密なかたまりを作り、上部は黄褐色、下部は黒味を帯びる。茎は立ち、高さ約 1.5 cm、不規則、まばらに分枝する。葉は密につき、乾くと強く縮れる。蒴柄は非常に短く 0.7~1 mm、蒴は苞葉からあまり上に出ない。全形はカラフトキンモウゴケ *Ulota crispa* に似るが、カラフトキンモウゴケは蒴柄が長く蒴が苞葉の上にはっきり出ることによって区別できる。

【生活史】

雌雄同株（異苞）。

【生育環境】

奥山の尾根や山頂近くの灌木の枝、時に谷の樹幹にも着生する。本属の種は日本に 7 種があるが、本種の生育条件は特殊で、分布も限られている。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では本州（神奈川県以西）、四国、九州に分布し、国外では朝鮮半島に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

神奈川県では絶滅と判断された（有川, 2022）。秋山（2014）は長野県大鹿村で生育を確認。山田・寺尾（2015）は三重県での生育地としていなべ市藤原岳、松阪市高見山、津市美杉町平倉演習林の 3 か所をあげているが、前 2 者では未確認としている。埴田ほか（2021）は原記載地の滋賀県伊吹山を生育地としてあげている。藤田ほか（2014）は愛媛県赤石山系から報告。第 4 次レッドリストのための 2011 年の調査では高知県天狗高原で確認。大塚（2023）によれば大分県由布・鶴見岳の山頂域では少量が確認。

【生育地の現況】

埴田ほか（2021）は原記載地の滋賀県伊吹山では尾根や山頂付近の風衝地の低木の幹や枝に着生しているとしている。その他の生育地について生育環境の変化などの詳細は不明。

【個体数の現況】

大塚（2023）によれば大分県由布・鶴見岳の山頂域での生育量は少量である。高知県天狗高原では 2011 年の調査では登山道沿いのハリギリ樹幹に少数が確認されたが、2005 年には周辺のウツギ樹幹にも生育しており、当時に比べ約 10 分の 1 に減少していたという。

存続を脅かす要因

生育地付近の森林伐採や、生育地を通る道路の建設により生育環境が損なわれる心配がある。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 交通インフラ建設
	(現在)	森林伐採, 交通インフラ建設

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	イブキキンモウゴケ	<i>Ulota perbreviseta</i> Dixon & Sakurai	VU
第4次 2019:	イブキキンモウゴケ	<i>Ulota perbreviseta</i> Dixon & Sakurai	VU
第4次 2018:	イブキキンモウゴケ	<i>Ulota perbreviseta</i> Dixon & Sakurai	VU
第4次 2017:	イブキキンモウゴケ	<i>Ulota perbreviseta</i> Dixon & Sakurai	VU
第4次 2015:	イブキキンモウゴケ	<i>Ulota perbreviseta</i> Dixon & Sakurai	VU
第4次:	イブキキンモウゴケ	<i>Ulota perbreviseta</i> Dixon & Sakurai	VU
第3次:	イブキキンモウゴケ	<i>Ulota perbreviseta</i> Dixon & Sakurai	VU
第2次:	イブキキンモウゴケ	<i>Ulota perbreviseta</i> Dix. et Sak.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

神奈川県[絶滅(EX)] 長野県[絶滅危惧Ⅱ類(VU)] 三重県[絶滅危惧ⅠB類(EN)] 滋賀県[絶滅危惧種] 大分県[絶滅危惧ⅠA類(CR)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 秋山弘之, 2014. 中央新幹線アセスメント調査で確認された長野県産絶滅危惧種. 蘚苔類研究, 11: 81-82.
- 有川智己, 2022. コケ植物. 神奈川県環境農政局緑政部自然環境保全課・神奈川県立生命の星地球博物館(編), 神奈川県レッドデータブック 2022 植物編. pp. 328-360. 神奈川県, 横浜.

- 藤田あゆな・立石幸敏・松井 透・西村直樹, 2014. 赤石山系(愛媛県)の蘚類予備目録. *Naturalistae*, 18: 97-114.
- Iwatsuki, Z., 1959. A revision of the Japanese species of the genus *Ulot*. *Journal of the Hattori Botanical Laboratory*, 21: 138-156.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355pp., 192pls. 平凡社, 東京.
- 岩月善之助, 2000. イブキキンモウゴケ. 環境庁(編), 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—9. 植物II(維管束植物以外). p. 158. 自然環境研究センター, 東京.
- 長野県環境保全研究所・長野県環境部自然保護課, 2005. 長野県版レッドデータブック 非維管束植物編・植物群落編. p. 205. 信州豊かな環境づくり県民会議, 長野.
- Noguchi, A., 1989. Illustrated Moss Flora of Japan. Part 3, pp. 493-742. Hattori Botanical Laboratory, Nichinan.
- 大塚政雄, 2023. イブキキンモウゴケ. 大分県自然環境学術調査会(編), レッドデータブックおおいた2022 大分県の絶滅のおそれのある野生生物 普及版. p. 168. 大分県生活環境部自然保護推進室, 大分.
- 埴田 宏・笠井 謙・小林圭介, 2021. イブキキンモウゴケ. 滋賀県生きもの総合調査委員会(編), 滋賀県で大切にすべき野生生物 滋賀県レッドデータブック2020年版. p. 303. 滋賀県自然環境保全課, 大津.
- 山田耕作・寺尾恭平, 2015. イブキキンモウゴケ. 三重県農林水産部みどり共生推進課(編), 三重県レッドデータブック2015 三重県の絶滅のおそれのある野生生物. p. 675. 三重県農林水産部みどり共生推進課, 津.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Ulot *perbreviseta* has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Ulot* *perbreviseta* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - extent of occurrence
 - area of occupancy
 - area, extent and/or quality of habitat
 - number of locations or subpopulations
 - number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Transportation infrastructure construction

Law designation status for conservation	—

執筆者:	有川智己（慶應義塾大学）
Author:	Tomotsugu Arikawa

公表年月：2025 年 3 月

タチヒダゴケ目 Orthotrichales タチヒダゴケ科 Orthotrichaceae

ヤクシマキンモウゴケ

Ulotia yakushimensis Z.Iwats.

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		D2	
基準 A: —	基準 B: —	基準 C: —	基準 D: VU	基準 E: —	
生育地面積あるいは分布地点が極めて限定されている					
【判断理由】					
記録がある地点が 3 地点のみであり、ごく少ない。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

ヤクシマキンモウゴケは、国内では四国、九州、屋久島の山の尾根の樹木に着生する蘚類で、中国甘肅省でも見つかっている。茎が這うことが多く、蒴に内蒴歯を欠き、胞子が径 80~100 μm と大きく、胞子内発芽をして数細胞からなっていることなどで、近縁種と区別される。国内では近年、再確認されていない。

基礎情報

【形態】

本属の種としては小型で、ゆるい塊を作る。茎は這い、長さ 20 mm くらい、不規則に枝分かれし、枝は斜上し、長さ 5~10 mm。葉はやや密につき、乾くと枝に接着し、あまり縮れない。葉は丸みを帯びた幅広い基部から線状披針形に伸び、長さ 0.8~1.5 mm、葉先は鋭先。中肋は強壯で、葉先近くで終わる。葉身中部の細胞は円形または丸みを帯びた方形、径 7~9 μm 、中央が盛り上がり、1~3 個のパピラがあるが、時に平滑。葉基部の縁の 3~5 列の細胞は透明。蒴柄は長さ 1.2~1.5 mm。蒴の上部（孢子嚢）はほぼ球形で、下部は急に細くなってやや長い頸部となる。蒴齒は 1 列で内蒴齒を欠く。孢子は多細胞で大きく、径 80~100 μm 。本種は茎が這うことが多く、蒴に内蒴齒を欠き、孢子が大きいことなどで近縁種と区別される。

【生活史】

雌雄同株（異苞）。孢子は蒴の中で孢子内発芽をして数細胞からなる。

【生育環境】

尾根筋や山頂域の木の枝に着生する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では、四国、九州に分布する。日本固有種とされていたが、Wang & Jia (2012) は中国甘肅省から報告した。

現在の生育状況

【分布域の現況】

本種はタイプ産地の屋久島の他、市房山（熊本県）、石鎚山（愛媛県）からも記録されている（Iwatsuki, 1959; 山口, 2015）が、近年の再確認はされていない。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

森林伐採による生育環境の変化によって影響を受ける可能性がある。また、産地が局限し地域絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 分布・産地局限

	(現在)	森林伐採, 分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ヤクシマキンモウゴケ	<i>Ulotia yakushimensis</i> Z.Iwats.	CR+EN
第4次 2019:	ヤクシマキンモウゴケ	<i>Ulotia yakushimensis</i> Z.Iwats.	CR+EN
第4次 2018:	ヤクシマキンモウゴケ	<i>Ulotia yakushimensis</i> Z.Iwats.	CR+EN
第4次 2017:	ヤクシマキンモウゴケ	<i>Ulotia yakushimensis</i> Z.Iwats.	CR+EN
第4次 2015:	ヤクシマキンモウゴケ	<i>Ulotia yakushimensis</i> Z.Iwats.	CR+EN
第4次:	ヤクシマキンモウゴケ	<i>Ulotia yakushimensis</i> Z.Iwats.	CR+EN
第3次:	ヤクシマキンモウゴケ	<i>Ulotia yakushimensis</i> Z.Iwats.	CR+EN
第2次:	ヤクシマキンモウゴケ	<i>Ulotia yakushimensis</i> Z. Iwats.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Iwatsuki, Z., 1959. A revision of the Japanese species of the genus *Ulotia*. J. Hattori Bot. Lab., 21: 138-156.
- Wang, Q. -H. and Y. Jia, 2012. A taxonomic revision of the Asian species of *Ulotia* Mohr (Orthotrichaceae). The Bryologist, 115: 412-443.
- 山口富美夫, 2015. ヤクシマキンモウゴケ. 環境省（編）, レッドデータブック 2014 日本の絶滅のおそれのある野生生物 9 植物 II（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）. p. 100. ぎょうせい, 東京.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Ulotia yakushimensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Ulotia*

yakushimensis is listed as VU under criteria D2.

2. Population with a very restricted area of occupancy (typically less than 20 km²) or number of locations (typically five or fewer) such that it is prone to the effects of human activities or stochastic events within a very short time period in an uncertain future, and is thus capable of becoming Critically Endangered or even Extinct in a very short time period.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	有川智己（慶應義塾大学）
Author:	Tomotsugu Arikawa

公表年月：2025 年 3 月

キダチゴケ目 Hypnodendrales キダチゴケ科 Hypnodendraceae

キダチゴケ

Hypnodendron vitiense Mitt.

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		B2ab	
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
B2. 生育地面積が 2000 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。					
a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。					
【地点数】10 地点以下					
b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。					
【判断理由】					
生育地は自然度の高い林内溪流沿いの湿った岩上に限られており、個体群も小さく、個体数も少ない。近年の気候変動に伴う台風・洪水によって生育地が消失する可能性がある。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

大型の美しい蘚類で、アジア、オセアニアの熱帯地域に広く分布するが、日本では沖縄島と西表島から記録されている。生育地付近の森林伐採で生育環境が損なわれる心配がある。

協力者: 佐藤匠 (広島大学)・西畑和輝 (広島大学)・桐生賢太 (広島大学)・池松泰一 (広島大学)・岸田知展 (広島大学)

基礎情報

【形態】

植物体は大型で、茎は長さ 5 cm に達し、上半部で枝分かれして樹状になる。下部の枝は長くて長さ 20 mm くらい、さらに枝分かれする。枝葉は卵形で長さ 2.5 mm 以下、葉先は鋭頭、葉縁には明瞭な鋭い歯が並び、中肋は葉先に達する。日本の本属には本種のみが生育する。大型の美しい蘚類で、肉眼でも他の種から容易に区別できる。

【生活史】

雌雄異株。国内では孢子体は見つかっていない。

【生育環境】

熱帯、亜熱帯の林内の溪流沿いで、湿った岩上に群落をつくる。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林, 河川源流域, 河川上流域

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (4) 河川・湿地地域

【分布域】

国内では、沖縄島と西表島に分布しており、国外では中国を含むアジアやオセアニアの熱帯、亜熱帯に広く分布している。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト作成のための調査では沖縄島と西表島の数か所で確認できた。

【生育地の現況】

いずれの生育地においても生育環境に大きな変化はないと考えられる。

【個体数の現況】

いずれの生育地でも個体数は少ない。

存続を脅かす要因

生育地付近の森林伐採や自然災害で生育環境が損なわれる心配がある。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 自然災害
	(現在)	森林伐採, 自然災害

特記事項

日本が分布の北限となっている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	キダチゴケ	<i>Hypnodendron vitiense</i> Mitt.	VU
第4次 2019:	キダチゴケ	<i>Hypnodendron vitiense</i> Mitt.	VU
第4次 2018:	キダチゴケ	<i>Hypnodendron vitiense</i> Mitt.	VU
第4次 2017:	キダチゴケ	<i>Hypnodendron vitiense</i> Mitt.	VU
第4次 2015:	キダチゴケ	<i>Hypnodendron vitiense</i> Mitt.	VU
第4次:	キダチゴケ	<i>Hypnodendron vitiense</i> Mitt.	VU
第3次:	キダチゴケ	<i>Hypnodendron vitiense</i> Mitt.	VU
第2次:	キダチゴケ	<i>Hypnodendron vitiense</i> Mitt.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

沖縄県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- Noguchi, A., 1989. Illustrated Moss Flora of Japan. Part 3. pp. 493-742. Hattori Botanical Laboratory, Nichinan.
- Touw, A., 1971. A taxonomic revision of the Hypnodendraceae (Musci). Blumea, 19: 211-354.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Hypnodendron vitiense has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hypnodendron vitiense* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - extent of occurrence
 - area of occupancy
 - area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest, River headwater, Upper river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, Natural disasters
Law designation status for conservation	—

執筆者:	山口富美夫（広島大学）
Author:	Tomio Yamaguchi

公表年月：2025 年 3 月

カクレゴケ

Garovaglia elegans (Dozy & Molk.) Bosch & Sande Lac.

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		B2ab	
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
B2. 生育地面積が 2000 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。 【地点数】10 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 生育地は自然度の高い渓谷や、山頂部の霧がかかりやすい湿度の高い場所に限られている。森林伐採や踏みつけなどによって環境が悪化し、個体群が減少、消滅する可能性が高い。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

アジアの熱帯、亜熱帯の湿った樹幹に生育する蘚類で、蒴柄は短く、蒴は葉の間に見え隠れする。第5次レッドリスト作成のための調査では奄美大島、徳之島、沖縄島、石垣島、西表島で確認された。国内ではもともと産地が限られ、森林伐採や踏みつけにより生育地が失われるおそれがある。

協力者： 佐藤匠（広島大学）・西畑和輝（広島大学）・桐生賢太（広島大学）

基礎情報

【形態】

植物体は大きく、第一次茎は短く、第二次茎は立つがほとんど分枝せず、長さ 3～6 cm、光沢のある葉を丸くつける。葉は卵形で長さ 4～5 mm、凹んで深い縦じわがあり、先端は短く尖る。葉縁には細かい明瞭な歯があり、中肋は短く二叉する。葉身細胞は厚壁でくびれがある。雄株はとても小さく、雌株の葉の上に着生する。蒴柄は短く、長さ約 1.5 mm で、蒴は苞葉からわずかに超出し、葉の間に見え隠れする。日本には本属の種は本種だけが記録されている。

【生活史】

雌雄異株。

【生育環境】

溪谷や霧のかかりやすい山頂部など湿った林内の樹幹に着生する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林, 河川源流域, 河川上流域

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (4) 河川・湿地地域

【分布域】

国内では九州と琉球列島に分布する。国外では中国を含むアジアの熱帯、亜熱帯に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト作成のための調査では奄美大島、徳之島、沖縄島、石垣島、西表島で確認された。また、岩田（2018）は屋久島から報告している。

【生育地の現況】

生育地の一部では森林伐採や自然災害などにより生育条件が悪化している。

【個体数の現況】

生育量はわずかである。

存続を脅かす要因

もともと生育地が限られているが、生育地付近の森林伐採や踏みつけなどの生育環境の変化によって生育地が失われるおそれがある。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 人の踏みつけ, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 人の踏みつけ, 分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	カクレゴケ	<i>Garovaglia elegans</i> (Dozy & Molk.) Bosch & Sande Lac.	VU
第4次 2019:	カクレゴケ	<i>Garovaglia elegans</i> (Dozy & Molk.) Bosch & Sande Lac.	VU
第4次 2018:	カクレゴケ	<i>Garovaglia elegans</i> (Dozy & Molk.) Bosch & Sande Lac.	VU
第4次 2017:	カクレゴケ	<i>Garovaglia elegans</i> (Dozy & Molk.) Bosch & Sande Lac.	VU
第4次 2015:	カクレゴケ	<i>Garovaglia elegans</i> (Dozy & Molk.) Bosch & Sande Lac.	VU
第4次:	カクレゴケ	<i>Garovaglia elegans</i> (Dozy & Molk.) Bosch & Sande Lac.	VU
第3次:	カクレゴケ	<i>Garovaglia elegans</i> (Dozy & Molk.) Hampe ex Bosch & Sande Lac.	VU
第2次:	カクレゴケ	<i>Garovaglia elegans</i> (Dozy et Molk.) Hampe ex Bosch et Lac.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

宮崎県[絶滅危惧Ⅱ類(VU-r)] 沖縄県[絶滅危惧Ⅱ類(VU)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- Noguchi, A., 1989. Illustrated Moss Flora of Japan. Part 3. pp. 493-742. Hattori Botanical Laboratory, Nichinan.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Garovaglia elegans has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Garovaglia elegans* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest, River headwater, Upper river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, Human trampling, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 山口富美夫 (広島大学)
Author: Tomio Yamaguchi

公表年月: 2025 年 3 月

クジャクゴケ目 Hypopterygiales クジャクゴケ科 Hypopterygiaceae

キダチクジャクゴケ

Dendrocyathophorum decolyi (M.Fleisch.) Kruijer

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		B2ab	
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
B2. 生育地面積が 2000 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。 【地点数】10 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 生育地は湿度の高い森林内に限られており、森林伐採や自然遷移によって林内が暗くなると個体群サイズが縮小・消失してしまう。また、石灰岩地では石灰岩の採掘の影響も受けやすく、生育地自体が改変されることによって個体群が減少・消滅するリスクが高く、継続的な減少が予測される。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

東アジアから南アジアにかけて点々と分布する蘚類で、クジャクゴケ属とキジノオゴケ属の中間の形質を備えている。第5次レッドリスト作成のための調査では、熊本県で確認されたが生育量は減少していた。山口県の既存の生育地では生育が確認できなかった。

協力者: 立石幸敏（岡山コケの会）・木口博史（岡山コケの会）・西村直樹（岡山コケの会）・林正典（日本蘚苔類学会）

基礎情報

【形態】

第一次茎は這い、第二次茎は立ち上がって長さ 20～30 mm、不規則に扁平に分枝する。葉は 3 列で、左右の非相称な側葉と、小型で相称な腹葉との区別がある。枝の側葉は卵形で長さ 1.8 mm 以下、葉の縁に不明瞭な舷があり、中肋は弱い。蒴柄は 7～10 mm。本種はクジャクゴケ属 (*Hypopterygium*) とキジノオゴケ属 (*Cyathophorum*) の中間の形質を備えている。

【生活史】

雌雄同株（異苞）。

【生育環境】

湿度の高い森林内の地上や樹幹の基部に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では、本州、四国、九州に分布する。国外では、中国、フィリピン、ベトナム、タイ、インド（アッサム）に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト作成のための調査では、熊本県の 2 か所で確認できたが、山口県の既報の産地では確認できなかった。そのほか、岩田・立石（2018）が愛媛県から、佐治ほか（2020）が徳島県から報告している。また、広島大学植物標本庫には、2016～2017 年に高知県の 2 か所で採集された標本が保管されている。

【生育地の現況】

熊本県の生育地は石灰採掘の影響を受けている。その他の生育地においては生育環境に大きな変化はないと考えられる。

【個体数の現況】

いずれの生育地でも生育量は少なく、熊本県の生育地では生育量の減少が認められた。

存続を脅かす要因

生育地は湿度の高い森林内に限られており、森林伐採や自然遷移の影響を受けやすい。熊本県の生育地は石灰採掘の影響も受けている。

要因の区分：	（過去）	森林伐採, 石灰採掘, 遷移進行・植生変化/自然遷移
	（現在）	森林伐採, 石灰採掘, 遷移進行・植生変化/自然遷移

特記事項

日本は本種の分布の北限である。

旧レッドリストカテゴリと掲載名

第4次 2020:	キダチクジャクゴケ	<i>Dendrocyathophorum decolyi</i> (M.Fleisch.) Kruijer	VU
第4次 2019:	キダチクジャクゴケ	<i>Dendrocyathophorum decolyi</i> (M.Fleisch.) Kruijer	VU
第4次 2018:	キダチクジャクゴケ	<i>Dendrocyathophorum decolyi</i> (M.Fleisch.) Kruijer	VU
第4次 2017:	キダチクジャクゴケ	<i>Dendrocyathophorum decolyi</i> (M.Fleisch.) Kruijer	VU
第4次 2015:	キダチクジャクゴケ	<i>Dendrocyathophorum decolyi</i> (M.Fleisch.) Kruijer [= <i>D. paradoxum</i> (Broth.) Dixon]	VU
第4次:	キダチクジャクゴケ	<i>Dendrocyathophorum decolyi</i> (M.Fleisch.) Kruijer [= <i>D. paradoxum</i> (Broth.) Dixon]	VU
第3次:	フチナシクジャクゴケ	<i>Dendrocyathophorum decolyi</i> (Broth.) Kruijer [= <i>D. paradoxum</i> (Broth.) Dixon]	VU
第2次:	フチナシクジャクゴケ	<i>Dendrocyathophorum paradoxum</i> (Broth.) Dix.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

三重県[絶滅危惧Ⅱ類(VU)] 山口県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 宮崎県[絶滅危惧Ⅱ類(VU-r)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岩田和鷹・立石幸敏, 2018. 桂川溪谷（愛媛県西予市）の蘚類. 岡山コケの会ニュース, 45: 13-16.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.

- 佐治まゆみ・狩野登之助・西村直樹，2020．徳島県南の蘚類 1．イヌマゴケ目，アブラゴケ目．岡山コケの会ニュース，50: 19-22.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Dendrocyathophorum decolyi has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Dendrocyathophorum decolyi* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limestone mining, Successional progression/Vegetation change/Natural succession
Law designation status for conservation	—

執筆者: 山口富美夫 (広島大学)
Author: Tomio Yamaguchi

公表年月：2025 年 3 月

フチナシツガゴケ

Distichophyllum osterwaldii M.Fleisch.

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		B2ab	
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
B2. 生育地面積が 2000 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。 【地点数】10 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 生育地は西表島と石垣島の自然度の高い林内溪流沿いの湿った岩上に限られており、個体数も少ない。近年の気候変動に伴う台風によって林内環境が大きく悪化すると、個体群が消滅する可能性が高い。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

国外では中国、フィリピン、ベトナム、ジャワに分布し、北限として八重山諸島に見られる蘚類で、葉に 2 型がある。第 5 次レッドリスト作成のための調査では西表島の沢沿いの数か所で少量が確認された。森林伐採や自然災害によって生育地が失われるおそれがある。

協力者： 佐藤匠（広島大学）・西畑和輝（広島大学）・桐生賢太（広島大学）

基礎情報

【形態】

植物体は暗緑色で、茎は葉を含めて幅 8 mm に達する。葉は比較的まばらにつき、横に広がり、強く波打つ。葉には 2 型があり、背方の葉は倒卵形～舌形、側方に出る葉は長い舌形、ともに円頭で中肋は葉の上部に達する。葉の下部の縁には 4～5 列の黄色の明瞭な脈がある。マルバツガゴケ (*Distichophyllum obtusifolium*) に比べ、本種は葉に 2 型があり、葉先の細胞は葉身中部の細胞よりもずっと小さく、葉の上部の縁には脈がないことで区別できる。

【生活史】

本種は熱帯、亜熱帯に生育する種で、国内では孢子体は見つかっていない。

【生育環境】

暖地の沢沿いの水の飛沫がかかるような濡れた岩や土の上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林, 河川源流域, 河川上流域

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (4) 河川・湿地地域

【分布域】

国内では八重山諸島に分布している。国外では中国、フィリピン、ベトナム、ジャワに分布している。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト作成のための調査では西表島の数か所で確認された。過去には石垣島から報告されているが、今回の調査では確認できなかった。

【生育地の現況】

八重山諸島の西表島と石垣島の溪流沿いの湿岩上に生育する。生育地の一部では自然災害などにより生育条件が悪化している。

【個体数の現況】

個体群は小さく、個体数も少ない。

存続を脅かす要因

生育地付近の森林伐採や自然災害で生育環境が損なわれる心配がある。また、産地が局限しているため絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 自然災害, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 自然災害, 分布・産地局限

特記事項

八重山諸島が分布の北限となっている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	フチナシツガゴケ	<i>Distichophyllum osterwaldii</i> M.Fleisch.	VU
第4次 2019:	フチナシツガゴケ	<i>Distichophyllum osterwardii</i> M.Fleisch.	VU
第4次 2018:	フチナシツガゴケ	<i>Distichophyllum osterwardii</i> M.Fleisch.	VU
第4次 2017:	フチナシツガゴケ	<i>Distichophyllum osterwardii</i> M.Fleisch.	VU
第4次 2015:	フチナシツガゴケ	<i>Distichophyllum osterwardii</i> M.Fleisch.	VU
第4次:	フチナシツガゴケ	<i>Distichophyllum osterwardii</i> M.Fleisch.	VU
第3次:	フチナシツガゴケ	<i>Distichophyllum osterwardii</i> M.Fleisch.	VU
第2次:	フチナシツガゴケ	<i>Distichophyllum osterwaldii</i> Fl.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

沖縄県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- Noguchi, A., 1956. Musci Japonici, V. The genus *Distichophyllum*. Journal of the Hattori Botanical Laboratory, 17: 19-31.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Distichophyllum osterwaldii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Distichophyllum osterwaldii* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence (ii) area of occupancy (iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest, River headwater, Upper river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, Natural disasters, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	山口富美夫（広島大学）
Author:	Tomio Yamaguchi

公表年月：2025 年 3 月

サオヒメゴケ

Callicostella papillata (Mont.) Mitt.

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		B2ab	
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
B2. 生育地面積が 2000 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。 【地点数】10 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 生育地は自然度の高い林内の溪流沿いの湿った岩上に限られており、周辺環境の影響を受けやすい。個体群も小さく、個体数も少ないため、森林伐採、自然遷移や近年の気候変動に伴う台風・洪水などによって生育地が消失する可能性があり、継続的な減少の傾向が予測される。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

アジア、オセアニアの熱帯、亜熱帯に分布する蘚類で、琉球列島は本種の北限である。葉に長い中肋が2本ある。第5次レッドリスト作成のための調査では、沖縄島、石垣島、西表島の沢沿いの砂岩上で少量が確認された。生育地の森林伐採、自然遷移や自然災害などで生育環境が損なわれるおそれがある。

協力者： 佐藤匠（広島大学）・西畑和輝（広島大学）・桐生賢太（広島大学）

基礎情報

【形態】

植物体はくすんだ緑色で、偏平なマットを作る。茎は這って長さ 5 cm に達し、やや羽状に分枝する。葉は舌形で扁平につく。中肋は 2 本で長く、葉先近くで急に消える。葉先近くの中肋の背面には歯がある。蒴柄は長さ約 20 mm で赤色、蒴は水平に傾き、帽は大きい。同じ科のコアブラゴケ (*Hookeriopsis utacamundiana*) も葉に 2 本の長い中肋があるが、コアブラゴケの葉身細胞にはパピラがなく、平滑であることで区別できる。

【生活史】

雌雄同株（同苞）。

【生育環境】

本種は暖地の森林内を流れる溪流中の転石上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林, 河川源流域, 河川上流域

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (4) 河川・湿地地域

【分布域】

国内では琉球列島に分布し、国外では中国を含むアジア、オセアニアの熱帯、亜熱帯地方に広く分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト作成のための調査では沖縄島、石垣島、西表島で少量が確認された。

【生育地の現況】

沖縄島、石垣島、西表島の溪流沿いで、水をかぶるような湿った砂岩上に、薄いマットを形成して生育するため、森林伐採、自然遷移や自然災害などで生育環境が損なわれる懸念がある。

【個体数の現況】

生育地のいずれでも生育量は少ない。

存続を脅かす要因

生育地の森林伐採、自然遷移、自然災害などによって、生育環境が損なわれるおそれがある。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 遷移進行・植生変化/自然遷移, 自然災害
	(現在)	森林伐採, 遷移進行・植生変化/自然遷移, 自然災害

特記事項

琉球列島（奄美大島）が分布の北限である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	サオヒメゴケ	<i>Callicostella papillata</i> (Müll.Hal.) Mitt.	VU
第4次 2019:	サオヒメゴケ	<i>Callicostella papillata</i> (Müll.Hal.) Mitt.	VU
第4次 2018:	サオヒメゴケ	<i>Callicostella papillata</i> (Müll.Hal.) Mitt.	VU
第4次 2017:	サオヒメゴケ	<i>Callicostella papillata</i> (Müll.Hal.) Mitt.	VU
第4次 2015:	サオヒメゴケ	<i>Callicostella papillata</i> (Müll.Hal.) Mitt.	VU
第4次:	サオヒメゴケ	<i>Callicostella papillata</i> (Müll.Hal.) Mitt.	VU
第3次:	サオヒメゴケ	<i>Callicostella papillata</i> (Müll.Hal.) Mitt.	VU
第2次:	サオヒメゴケ	<i>Callicostella papillata</i> (C. Muell.) Mitt.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

沖縄県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355pp., 192pls. 平凡社, 東京.
- Noguchi, A., 1991. Illustrated moss flora of Japan. Part 4. pp. 743-1012. Hattori Botanical Laboratory, Nichinan.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Callicostella papillata has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Callicostella papillata* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:

(i) extent of occurrence (ii) area of occupancy (iii) area, extent and/or quality of habitat (iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest, River headwater, Upper river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Natural disasters
Law designation status for conservation	—

執筆者:	山口富美夫（広島大学）
Author:	Tomio Yamaguchi

公表年月：2025 年 3 月

ハイゴケ目 Hypnales キヌイトゴケ科 Anomodontaceae

トガリバギボウシゴケ

Bryonorrhisia acutifolia (Mitt.) Enroth

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		D2	
基準 A: —	基準 B: —	基準 C: —	基準 D: VU	基準 E: —	
生育地面積あるいは分布地点が極めて限定されている					
【判断理由】					
これまでに確実な産地は国内で 1 か所で見つかっていない。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

トガリバギボウシゴケは、日本、中国、ヒマラヤに分布する。日本では亜高山帯の石灰岩地に生育し、細胞が平滑であることが特徴である。森林伐採で生育地の環境が変化し、絶滅が危惧されている。

基礎情報

【形態】

植物体は密に芝生状になり、枝は長さ 10 mm になる。枝葉は卵状披針形、長さ 1.6 mm になり、先端は尖る。中肋は太く、葉先近くに達する。葉身細胞は楕円～長方形で、ほとんど平滑、まれに小さな乳頭がある。蒴柄は長さ 13 mm になる。蒴は円柱形。全形はオオギボウシゴケモドキ *Anomodon giraldii* に似るが、葉身細胞がほとんど平滑なこと、蒴の内蒴歯がよく発達すること、外蒴歯の上部がほぼ平滑なことで区別できる。

【生活史】

雌雄異株。

【生育環境】

亜高山帯の石灰岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林、岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では本州に分布し、国外では台湾、中国、ヒマラヤに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

北海道と本州各地から様々な文献記録や標本記録があったが、岩月・木口（2007）によれば、ほとんどはオオギボウシゴケモドキの誤同定で、埼玉県秩父山地十文字峠近くの赤沢岳のみが確実な産地である。赤沢岳では、2005 年に生育が確認されている（岩月・木口, 2007）。

【生育地の現況】

生育環境に大きな変化はないと考えられる。

【個体数の現況】

国内唯一の確実な生育地である赤沢岳では、2005 年には、頂上真下の南向きの岩壁下部の石灰岩上に、60×50 cm 程度の群落を作って生育しているのが確認されている。近隣の場所では調査したものが見つからない（岩月・木口, 2007）。

存続を脅かす要因

森林伐採によって生育環境の変化が危惧される。また、産地が局限しているため絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	（過去）	森林伐採、分布・産地局限
	（現在）	森林伐採、分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	トガリバギボウシゴケ	<i>Bryonorrisia acutifolia</i> (Mitt.) Enroth	CR+EN
第4次 2019:	トガリバギボウシゴケ	<i>Bryonorrisia acutifolia</i> (Mitt.) Enroth	CR+EN
第4次 2018:	トガリバギボウシゴケ	<i>Bryonorrisia acutifolia</i> (Mitt.) Enroth	CR+EN
第4次 2017:	トガリバギボウシゴケ	<i>Bryonorrisia acutifolia</i> (Mitt.) Enroth	CR+EN
第4次 2015:	トガリバギボウシゴケ	<i>Bryonorrisia acutifolia</i> (Mitt.) Enroth [= <i>Anomodon acutifolius</i> Mitt.]	CR+EN
第4次:	トガリバギボウシゴケ	<i>Bryonorrisia acutifolia</i> (Mitt.) Enroth [= <i>Anomodon acutifolius</i> Mitt.]	CR+EN
第3次:	トガリバギボウシゴケ	<i>Bryonorrisia acutifolia</i> (Mitt.) Enroth (= <i>Anomodon acutifolius</i> Mitt.)	CR+EN
第2次:	トガリバギボウシゴケ	<i>Bryonorrisia acutifolia</i> (Mitt.) Enroth Syn. <i>Anomodon acutifolius</i> Mitt.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

栃木県[情報不足] 埼玉県[絶滅危惧Ⅰ類(CE)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岩月善之助・木口博史, 2007. *Bryonorrisia acutifolia* (トガリバギボウシゴケ) 覚え書き. 蘚苔類研究, 9: 205-207.
- 山口富美夫, 2015. トガリバギボウシゴケ. 環境省(編), レッドデータブック 2014 日本の絶滅のおそれのある野生生物 9 植物Ⅱ(蘚苔類・藻類・地衣類・菌類). p. 17. ぎょうせい, 東京.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Bryonorrhisia acutifolia has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Bryonorrhisia acutifolia* is listed as VU under criteria D2.

2. Population with a very restricted area of occupancy (typically less than 20 km²) or number of locations (typically five or fewer) such that it is prone to the effects of human activities or stochastic events within a very short time period in an uncertain future, and is thus capable of becoming Critically Endangered or even Extinct in a very short time period.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest, Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 有川智己（慶應義塾大学）
Author: Tomotsugu Arikawa

公表年月：2025 年 3 月

ハイゴケ目 Hypnales カマバコモチゴケ科 Habrodontaceae

カマバコモチゴケ

Habrodon perpusillus (De Not.) Lindb.

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		D2	
基準 A: —	基準 B: —	基準 C: —	基準 D: VU	基準 E: —	
生育地面積あるいは分布地点が極めて限定されている					
【判断理由】					
これまでに 1 か所でしかみつかっていない。そこでは継続的に確認されている。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

カマバコモチゴケは、樹幹に生育する小型で糸くず状の蘚類で、ヨーロッパに広く分布するが、日本では南アルプスの 1 か所に局所的に分布するのみで、他に知られていない。

基礎情報

【形態】

植物体は小型、糸くず状で密に重なり合った小さな群落を形成する。茎は長さ 1～1.5 cm、茎と枝の幅は葉を含めて約 0.4 mm。葉はまるく密につき、乾くと一方に鎌形に曲がる。茎葉、枝葉とも基部は卵形で、一方に曲がりながら漸尖し、先は鋭頭、長さ 0.7～1 mm、中肋は 2 叉して非常に短い。葉身細胞は楕円形～丸みのある菱形、長さ 10～15 μm 、厚壁、平滑。2～5 細胞の楕円形～紡錘形の無性芽をつける。外見はイワイトゴケ *Haplohymenium triste* に似るが、中肋が非常に短いことで容易に区別できる。

【生活史】

雌雄異株。国内では孢子体は見つかっていない。

【生育環境】

亜高山帯の樹幹に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では南アルプス二軒小屋（静岡市）付近からのみ報告がある。国外では中国、欧州に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

国内では斉藤（1974）によって最初に南アルプスから報告され、それ以外の産地は知られていない。岩月（2001）に 1999 年に同地で撮影された写真が載っている。

【生育地の現況】

生育環境に大きな変化はないと考えられる。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

産地が局限している。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	カマバコモチゴケ	<i>Habrodon perpusillus</i> (De Not.) Lindb.	CR+EN
第4次 2019:	カマバコモチゴケ	<i>Habrodon perpusillus</i> (De Not.) Lindb.	CR+EN
第4次 2018:	カマバコモチゴケ	<i>Habrodon perpusillus</i> (De Not.) Lindb.	CR+EN
第4次 2017:	カマバコモチゴケ	<i>Habrodon perpusillus</i> (De Not.) Lindb.	CR+EN
第4次 2015:	カマバコモチゴケ	<i>Habrodon perpusillus</i> (De Not.) Limpr.	CR+EN
第4次:	カマバコモチゴケ	<i>Habrodon perpusillus</i> (De Not.) Limpr.	CR+EN
第3次:	カマバコモチゴケ	<i>Habrodon perpusillus</i> (De Not.) Limpr.	CR+EN
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岩月善之助（編），2001．日本の野生植物コケ．355pp., 192pls. 平凡社，東京．
- 斉藤亀三，1974．セン類3種の新産地．蘚苔地衣雑報，6: 138-141．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Habrodon perpusillus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Habrodon perpusillus* is listed as VU under criteria D2.

2. Population with a very restricted area of occupancy (typically less than 20 km²) or number of locations (typically five or fewer) such that it is prone to the effects of human activities or stochastic events within a very short time period in an uncertain future, and is thus capable of becoming Critically Endangered or even Extinct in a very short time period.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Limited distribution

Law designation status for conservation	—

執筆者:	有川智己（慶應義塾大学）
Author:	Tomotsugu Arikawa

公表年月：2025 年 3 月

ハイゴケ目 Hypnales ヌマシノブゴケ科 Helodiaceae

ヌマシノブゴケ

Helodium paludosum (A.Jaeger) Broth.

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		D2	
基準 A: —	基準 B: —	基準 C: —	基準 D: VU	基準 E: —	
生育地面積あるいは分布地点が極めて限定されている					
【判断理由】					
これまでに見つかった地点が少なく、近年確実に現存する生育地点が 3 地点のみであり、生育地点が極めて限定されていると判断する。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

ヌマシノブゴケは、日本、中国、ロシア、北米に分布する種で、日本では北海道と本州中部地方以北の数か所から報告されている。埼玉県指定の天然記念物である加須の浮野で生育しているのが近年確認された。湿地に生育することから、開発によって環境が変化し、絶滅が危惧される。

基礎情報

【形態】

植物体は大型で、ゆるいマットをつくる。茎は長さ約 6 cm で羽状に分枝する。茎葉は卵形～広披針形で、長さ 1～1.5 mm、卵形の基部から細く漸尖、中肋は葉先近くに達し、中肋背面は平滑。葉の基部に毛葉がある。葉身細胞は長楕円形～長菱形、長さ 13～25 μm 、平滑か時に背面上端に小さなパピラがある。本種は葉縁および中肋背面が平滑であることで同属の他種から区別できる。

【生活史】

雌雄同株。国内では孢子体は見つかっていない。

【生育環境】

湿地の土壌、腐植土、朽木、樹幹基部に生育する。

生育環境区分：	【陸域_平地部】湿地・湿原、ため池・池沼、潟・湖・ダム湖

国土地域区分：	(4) 河川・湿地地域

【分布域】

国内では北海道、本州中部地方以北に分布し、国外では中国、ロシア、北米に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

木口 (2019) は埼玉県加須市での生育を報告しているが、この報告では、Watanabe (1972) の記録として山形県大平、新潟県新潟市、長野県菅平の 3 か所と、国立科学博物館の標本情報として羽後大平 (秋田県)、長野県茅野市八ヶ岳二子山をあげている。このほか広島大学植物標本庫 (HIRO) には 2000 年に採集された北海道釧路市音羽の標本がある。近年の確実な記録があり、現存していることが期待される地点としては、北海道釧路市音羽、埼玉県加須市北篠崎浮野、長野県茅野市八ヶ岳二子山の 3 か所があげられる。

【生育地の現況】

木口 (2019) は埼玉県加須市北篠崎浮野 (うきや) の低層湿原で、生育を確認している。浮野は名前のとおり、低温の地下水の上に腐植土やアシなどが浮いていて、高層湿原や東北～北海道地方に見られるような植物が生育しており、埼玉県指定の天然記念物になっている。この中にヌマシノブゴケも生育している。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

森林伐採や湿地開発によって生育環境の変化が危惧される。また、産地が局限してい

るため絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 湖沼開発, 湿地開発, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 湖沼開発, 湿地開発, 分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ヌマシノブゴケ	<i>Helodium paludosum</i> (Austin) Broth.	CR+EN
第4次 2019:	ヌマシノブゴケ	<i>Helodium paludosum</i> (Austin) Broth.	CR+EN
第4次 2018:	ヌマシノブゴケ	<i>Helodium paludosum</i> (Austin) Broth.	CR+EN
第4次 2017:	ヌマシノブゴケ	<i>Helodium paludosum</i> (Austin) Broth.	CR+EN
第4次 2015:	ヌマシノブゴケ	<i>Helodium paludosum</i> (Austin) Broth.	CR+EN
第4次:	ヌマシノブゴケ	<i>Helodium paludosum</i> (Austin) Broth.	CR+EN
第3次:	ヌマシノブゴケ	<i>Helodium paludosum</i> (Austin) Broth.	CR+EN
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

福島県[希少 (D)] 新潟県[絶滅危惧 (EN+VU)] 山口県[情報不足 (DD)] 大分県[絶滅危惧 I A 類(CR)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 木口博史, 2019. 埼玉県のヌマシノブゴケとフガゴケ. 蘚苔類研究, 11 (12): 347-348.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Helodium paludosum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Helodium paludosum* is listed as VU under criteria D2.

2. Population with a very restricted area of occupancy (typically less than 20 km²) or number of

locations (typically five or fewer) such that it is prone to the effects of human activities or stochastic events within a very short time period in an uncertain future, and is thus capable of becoming Critically Endangered or even Extinct in a very short time period.	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】 Wetland, Reservoir/Pond, Lagoon/Lake/Dam
Threat types:	Logging and wood harvesting, Lake development, Wetland development, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	有川智己（慶應義塾大学）
Author:	Tomotsugu Arikawa

公表年月：2025 年 3 月

ハイゴケ目 Hypnales イタチゴケ科 Leucodontaceae

コマイタチゴケ

Leucodon coreensis Cardot

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		D2	
基準 A: —	基準 B: —	基準 C: —	基準 D: VU	基準 E: —	
生育地面積あるいは分布地点が極めて限定されている					
【判断理由】					
これまでに確認されていて、現在も生育すると判断される地点は全国に 4 か所のみである。1 か所あたりの生育地を 2 km 四方とすると生育地面積は 16 km ² となる。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

コマイタチゴケは日本産のイタチゴケ属の中ではもっとも小さい。山地の樹幹に生育し、とくに蛇紋岩地などに小さな群落を作る。道路工事など生育環境が変わることによる絶滅が危惧される。

協力者： 大石善隆（福井県立大学）

基礎情報

【形態】

植物体はもろく、暗緑色で光沢を持たない。第二次茎は弓形になって斜上する。枝葉は幅広い卵形で3~4本のしわがあり、長さ約2 mmになる。葉縁はわずかに巻き、先端部の縁に細鈍鋸歯を持つ。葉身細胞は線形、厚壁でいくらかくびれる。上部で不規則な六角形~菱形。翼細胞は方形。蒴は卵形から長楕円形で、長さ2.5~3 mm。日本産のイタチゴケ属ではもっとも小さい。キタイタチゴケ *Leucodon sciuroides* に似るが、植物体はより小型で、茎に中心束を持たず、無性芽をつけないことで区別できる。

【生活史】

雌雄異株。

【生育環境】

山地の樹幹や朽木上に生育するが、とくに蛇紋岩地や石灰岩地などで石灰岩を含む岩上に密な群落を作る。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では、本州の中部地方以北に記録があり、国外では朝鮮半島、台湾、中国に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

国内では、山形県朝日岳、岩手県安家洞（石灰岩）、長野県戸台（蛇紋岩）、八ヶ岳の4か所でのみ知られている（秋山, 2021）。このほか、栃木県 RDB でも絶滅危惧Ⅰ類とされており、80年前に奥日光に生育記録があるが、現状不明（富永, 2018）。第4次レッドリストのための調査では、長野県伊那市（戸台）で生育が確認された。

【生育地の現況】

第4次レッドリストのための調査では、長野県伊那市（戸台）で生育地が確認されたが、生育量は少なかった。本種が確認された一帯は石灰岩の岩壁になっているが、過去に大規模な整備が成された跡があり、今後の開発についても危惧される。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

道路建設やそれに関連する擁壁工事などにより生育地の減少や消失が危惧される。また、産地が局限しているため地域絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	交通インフラ建設, 分布・産地局限
	(現在)	石灰採掘, 交通インフラ建設, 分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	コマイタチゴケ	<i>Leucodon coreensis</i> Cardot	CR+EN
第4次 2019:	コマイタチゴケ	<i>Leucodon coreensis</i> Cardot	CR+EN
第4次 2018:	コマイタチゴケ	<i>Leucodon coreensis</i> Cardot	CR+EN
第4次 2017:	コマイタチゴケ	<i>Leucodon coreensis</i> Cardot	CR+EN
第4次 2015:	コマイタチゴケ	<i>Leucodon coreensis</i> Cardot	CR+EN
第4次:	コマイタチゴケ	<i>Leucodon coreensis</i> Cardot	CR+EN
第3次:	コマイタチゴケ	<i>Leucodon coreensis</i> Cardot	CR+EN
第2次:	コモノイタチゴケ	<i>Leucodon coreensis</i> Card.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

栃木県[絶滅危惧Ⅰ類（Aランク）] 長野県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Akiyama, H., 1988. Studies on *Leucodon* (Leucodontaceae, Musci) and related genera in East Asia, IV. Taxonomic revision of *Leucodon* in East Asia. J. Hattori Bot. Lab., 65: 1-80.
- 秋山弘之, 2021. 新・コケ百選 第23回 イタチゴケ科・イトヒバゴケ科・ヒムロゴケ科（蘚類）. 蘚苔類研究, 12: 188-200.
- Noguchi, A., 1989. Illustrated Moss Flora of Japan. Part 3, pp. 493-742. Hattori Bot. Lab., Nichinan.
- 富永孝昭, 2018. コマイタチゴケ. 栃木県（編）, レッドデータブックとちぎ 2018 栃木県の保護上注目すべき地形・地質・野生動植物, p. 329. 栃木県.
- 山口富美夫, 2015. コマイタチゴケ. 環境省（編）, レッドデータブック 2014 日本の絶滅のおそれのある野生生物 9 植物Ⅱ（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）, p. 55. ぎょうせい, 東京.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Leucodon coreensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Leucodon coreensis* is listed as VU under criteria D2.

2. Population with a very restricted area of occupancy (typically less than 20 km²) or number of locations (typically five or fewer) such that it is prone to the effects of human activities or stochastic events within a very short time period in an uncertain future, and is thus capable of becoming Critically Endangered or even Extinct in a very short time period.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Transportation infrastructure construction, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 有川智己 (慶應義塾大学)
Author: Tomotsugu Arikawa

公表年月：2025 年 3 月

トサノタスキゴケ

Aerobryidium laosiense (Broth. & Paris) S.H.Lin

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		B2ab	
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
B2. 生育地面積が 2000 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。 【地点数】10 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 生育地は湿度の高い林内溪流沿いの樹木の枝上や倒木上であり、個体数も少ない。近年の気候変動に伴う台風によって林内環境が大きく悪化すると、個体群が消滅する可能性が高い。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

日本、中国、ラオス、ボルネオに分布するひも状に長い蘚類で、暖地の沢沿いなどの木の枝から長く垂れ下がる。第5次レッドリスト作成のための調査では徳島県、高知県、和歌山県で確認された。生育地を流れる河川の改修や森林の伐採により生育地が失われるおそれがある。

協力者: 立石幸敏（岡山コケの会）・木口博史（岡山コケの会）・土永浩史（日本蘚苔類学会）・西畑和輝（広島大学）・池松泰一（広島大学）

基礎情報

【形態】

植物体はひも状に長く淡緑色。第二次茎は 20 cm 以上になることがあり、密に葉をつけ、長さ 5～10 mm くらいの枝を不規則に出す。茎や枝の葉は丸くついて偏平にならず、一般に小型で、長さ 2～2.5 mm、卵形で葉先は細長く伸び、時に糸状となり、上部の縁は波打つ。中肋は細く、葉の中部に達する。葉身細胞の中央に 1 個の大型のパピラがある。蒴柄は長さ 12 mm 前後。同属のサメジマタスキ (*P. wallichii*) によく似るが、本種は枝先に葉を丸くつけてひも状となることで区別できる。

【生活史】

雌雄異株。

【生育環境】

暖地の沢沿いなど湿った場所の木の枝からひも状あるいは糸状に長く垂れ下がる。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林, 河川源流域, 河川上流域

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (4) 河川・湿地地域

【分布域】

国内では本州、四国、九州、南西諸島に分布し、国外では中国、ラオス、ボルネオに分布している。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト作成のための調査では徳島県、高知県、和歌山県で確認された。また、2020 年に実施した調査では沖縄県で確認された。いずれも生育量は少なかった。その他、岩田 (2018) は屋久島から本種を報告している。

【生育地の現況】

徳島県と高知県の生育地では、谷筋のスギの倒木上に生育していた。和歌山県では溪谷の灌木の枝から下垂して生育していた。いずれの生育地においても生育環境に大きな変化はないと考えられる。

【個体数の現況】

いずれの生育地でも個体数は少ない。

存続を脅かす要因

生育地を流れる河川の改修や森林の伐採により生育地が失われるおそれがある。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 河川開発
	(現在)	森林伐採, 河川開発

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	トサノタスキゴケ	<i>Pseudobarbella laosiensis</i> (Broth. & Paris) Nog.	VU
第4次 2019:	トサノタスキゴケ	<i>Pseudobarbella laosiensis</i> (Broth. & Paris) Nog.	VU
第4次 2018:	トサノタスキゴケ	<i>Pseudobarbella laosiensis</i> (Broth. & Paris) Nog.	VU
第4次 2017:	トサノタスキゴケ	<i>Pseudobarbella laosiensis</i> (Broth. & Paris) Nog.	VU
第4次 2015:	トサノタスキゴケ	<i>Pseudobarbella laosiensis</i> (Broth. & Paris) Nog. [= <i>P. molissima</i> (Broth.) Nog.]	VU
第4次:	トサノタスキゴケ	<i>Pseudobarbella laosiensis</i> (Broth. & Paris) Nog. [= <i>P. molissima</i> (Broth.) Nog.]	VU
第3次:	トサノタスキゴケ	<i>Pseudobarbella laosiensis</i> (Broth. & Paris) Nog. [= <i>P. molissima</i> (Broth.) Nog.]	VU
第2次:	トサノタスキゴケ	<i>Pseudobarbella laosiensis</i> (Broth. et Par.) Nog. Syn. <i>P. mollissima</i> (Broth.) Nog.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

奈良県[希少種] 和歌山県[準絶滅危惧（NT）] 愛媛県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 宮崎県[絶滅危惧Ⅱ類(VU-r)] 沖縄県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岩田和鷹, 2018. 屋久島（鹿児島県）における蘚苔類の垂直分布. *Naturalistae*, 22: 73-84.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Aerobryidium laosienne has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition.
Aerobryidium laosienne is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest, River headwater, Upper river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development
Law designation status for conservation	—

執筆者: 山口富美夫 (広島大学)
 Author: Tomio Yamaguchi

公表年月: 2025 年 3 月

ヒカゲノカズラモドキ

Aerobryopsis parisii (Cardot) Broth.

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		B2ab	
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
B2. 生育地面積が 2000 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。					
a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。					
【地点数】10 地点以下					
b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。					
【判断理由】					
生育地は湿度の高い林内溪流沿いの樹木の枝上や倒木上であり、近年の気候変動に伴う台風・洪水の影響を受けやすい。個体数も少ないため、森林伐採や洪水によって生育環境が悪化し、個体数の減少が危惧される。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

日本から台湾、フィリピン、マレー半島にかけて分布する蘚類で、湿った森林内の樹幹や枝から垂れ下がるか、森林内の沢沿いの岩の上に生育する。ミズスギモドキに似るが、葉先が明瞭に波打つ。第5次レッドリスト作成のための調査では沖縄県（沖縄島、西表島）で確認された。森林伐採や自然災害によって生育地が失われるおそれがある。

協力者： 佐藤匠（広島大学）・西畑和輝（広島大学）・桐生賢太（広島大学）

基礎情報

【形態】

植物体は柔らかく、茎は 20 cm 以上になる。第二次茎の葉は狭卵形で、上部は明瞭に波打つ。中肋は葉の上部に達する。葉身中部の細胞中央に 1 個のパピラがある。蒴柄は 2.5 mm の長さ、赤褐色で上半部にはパピラがある。蒴は直立して相称、外蒴齒は針状。日本には本種のほかにミズスギモドキ (*Aerobryopsis subdivergens*) が広く分布するが、本種は葉先が長く伸び、明瞭に波打つので容易に区別できる。

【生活史】

雌雄異株。

【生育環境】

湿った森林内の樹幹や枝から垂れ下がるか、森林内の沢沿いの岩の上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林, 河川源流域, 河川上流域

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (4) 河川・湿地地域

【分布域】

国内では紀伊半島、四国（横倉山）と琉球列島（奄美大島、沖縄島、石垣島、西表島）に分布し、国外では台湾、フィリピン、マレー半島に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト作成のための調査では沖縄県沖縄島と西表島で確認された。また、その他の調査では 2018 年に鹿児島県奄美大島で確認された。

【生育地の現況】

生育地の一部では森林伐採や自然災害などにより生育条件が悪化している。

【個体数の現況】

個体数は少ない。

存続を脅かす要因

生育地付近の森林伐採や自然災害で生育環境が損なわれる心配がある。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 自然災害
	(現在)	森林伐採, 自然災害

特記事項

日本が分布の北限となっている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ヒカゲノカズラモドキ	<i>Aerobryopsis parisii</i> (Cardot) Broth.	VU
第4次 2019:	ヒカゲノカズラモドキ	<i>Aerobryopsis parisii</i> (Cardot) Broth.	VU
第4次 2018:	ヒカゲノカズラモドキ	<i>Aerobryopsis parisii</i> (Cardot) Broth.	VU
第4次 2017:	ヒカゲノカズラモドキ	<i>Aerobryopsis parisii</i> (Cardot) Broth.	VU
第4次 2015:	ヒカゲノカズラモドキ	<i>Aerobryopsis parisii</i> (Cardot) Broth.	VU
第4次:	ヒカゲノカズラモドキ	<i>Aerobryopsis parisii</i> (Cardot) Broth.	VU
第3次:	ヒカゲノカヅラモドキ	<i>Aerobryopsis parisii</i> (Cardot) Broth.	VU
第2次:	ヒカゲノカヅラモドキ	<i>Aerobryopsis parisii</i> (Card.) Broth.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

和歌山県[情報不足（DD）] 沖縄県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岩月善之助・出口博則・古木達郎，2001．日本の野生植物コケ．平凡社，東京．355pp., 192pls.
- Noguchi, A., 1976. A taxonomic revision of the family Meteoriaceae of Asia. Journal of the Hattori Botanical Laboratory, 41: 231-357.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Aerobryopsis parisii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Aerobryopsis parisii* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - extent of occurrence
 - area of occupancy
 - area, extent and/or quality of habitat

(iv) number of locations or subpopulations (v) number of mature individuals	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest, River headwater, Upper river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, Natural disasters
Law designation status for conservation	—

執筆者:	山口富美夫（広島大学）
Author:	Tomio Yamaguchi

公表年月：2025 年 3 月

タカサゴハイヒモゴケ

Meteoriopsis reclinata (Müll.Hal.) M.Fleisch.

カテゴリー判定結果 絶滅危惧Ⅱ類 (VU) B2ab				
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
B2. 生育地面積が 2000 km² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。 a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。 【地点数】10 地点以下 b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。 【判断理由】 国内でのこれまでの報告は沖縄県と熊本県南部の石灰岩地に限定されており、Noguchi (1976) が報告した熊本県の 2 か所の産地ではその後確認されていない。樹木の伐採や遷移によって生育環境が変化し、生育地のいくつかが消滅したものと考えられる。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

石灰岩や石灰岩地の樹上に生育する蘚類で、アジアの熱帯～亜熱帯に分布する。日本での生育地は、熊本県と沖縄県に限られている。

基礎情報

【形態】

二次茎は長くのび、不規則に枝を出す。葉は強く背側にそり返り、枝にまるくついて紐状になる。葉の中肋は細くて葉の中部で終わり、葉縁には細かい歯がある。葉身細胞の中央には1個のパピラがある。

【生活史】

雌雄異株で、日本では孢子体は見つかっていない。

【生育環境】

石灰岩上、あるいは石灰岩地の樹上に生育する。

生育環境区分：	【陸域 低標高地】森林、岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では熊本県、沖縄県に分布する。熊本県の生育地は県南部の石灰岩地に限られている。日本国外ではアジアの熱帯から亜熱帯に広く分布している。

現在の生育状況

【分布域の現況】

Shin (1961) は沖縄県から、Noguchi (1976) は沖縄県の1か所、熊本県の4か所から報告した。田中ほか (1999)、田中 (2012、2014) は、沖縄県1か所と熊本県2か所から本種を報告した。これまでの文献上の報告では、本種の生育地は沖縄県の1か所と熊本県の5か所である。

第5次レッドリスト作成のための調査では沖縄県沖縄島北部で確認された。この沖縄島の生育地は、これまで報告されてきた生育地域と同一である。沖縄島においては石灰岩地の尾根沿いの日当たりのよい場所で、乾いた石灰岩上に生育していた。田中 (2014) は、沖縄県の他に熊本県甲佐山、熊本県五木村から報告している。また、広島大学植物標本庫には、1997～1998年に熊本県五木村の3か所、芦北町で採集された標本が保管されている。

【生育地の現況】

生育地の一部では森林伐採や自然災害などにより生育条件が悪化している。沖縄島の生育地は登山道沿いにある。

【個体数の現況】

沖縄島の生育地においては、登山道沿いの複数の地点で確認できた。生育状況は比較的良好である。

存続を脅かす要因

日当たりのよい環境を好むため、倒木や植生遷移によって生育環境の悪化が危惧される。また、登山道沿いにあるため、登山者による踏みつけによる個体群の損傷も危惧される。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 人の踏みつけ, 遷移進行・植生変化/自然遷移, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 人の踏みつけ, 遷移進行・植生変化/自然遷移, 分布・産地局限

特記事項

日本が分布の北限となっている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	—	—	—
第4次 2019:	—	—	—
第4次 2018:	—	—	—
第4次 2017:	—	—	—
第4次 2015:	—	—	—
第4次:	—	—	—
第3次:	—	—	—
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

沖縄県[絶滅危惧 I 類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- Naren, G. -W. and Y. Jia, 2020. Taxonomic study on Meteoriaceae I. Reappraisal of some species of *Barbella* and *Pseudotrachypus*. Journal of Bryology, 42: 333-342.
- Noguchi, A., 1976. A taxonomic revision of the family Meteoriaceae of Asia. Journal of the Hattori Botanical Laboratory, 41: 231-357.

- Shin, T., 1961. Mosses of the Ryukyu Islands I. Science Reports of Kagoshima University, 10: 47-64.
- 田中敦司・立石幸敏・林正典・西村直樹, 1999. 天狗岩（熊本県, 五木村）の蘚類. 自然環境科学研究, 12: 49-59.
- 田中敦司, 2012. 日本の石灰岩性蘚類. Naturalistae, 16: 47-82.
- 田中敦司, 2014. 総説: 日本の石灰岩地における蘚類相. Naturalistae, 18: 67-80.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Meteoriopsis reclinata has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Meteoriopsis reclinata* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest, Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Logging and wood harvesting, Human trampling, Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 山口富美夫（広島大学）
Author: Tomio Yamaguchi

公表年月：2025 年 3 月

ハイゴケ目 Hypnales ナワゴケ科 Myuriaceae

ヤワラクシノハゴケ

Ctenidium molluscum (Hedw.) Mitt.

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		D2	
基準 A: —	基準 B: —	基準 C: —	基準 D: VU	基準 E: —	
生育地面積あるいは分布地点が極めて限定されている					
【判断理由】					
これまでに確認されたことがある地点が 5 か所のみで少ない。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

ヤワラクシノハゴケは、ヨーロッパ、トルコ、シベリア、アラスカなどに分布しており、日本からは Nishimura (2000) によって報告された。国内では本州と四国の 5 か所の石灰岩地に生育している。

基礎情報

【形態】

この属としては小～中型、薄い黄緑色で光沢のある美しいマットを作る。茎は這い、規則正しく密に水平かつ羽状に分枝し、葉や枝を含めて長さ 1.5～2 cm、幅約 1 cm になる。茎葉は広卵形～三角状の披針形、普通は鎌形に曲がり、葉先は漸尖し針状になり、しばしば反り返る。葉翼部は茎に下延する。枝葉は狭い卵形～披針形で、先は細長く尖り、鎌形に曲がる。葉身細胞の上端部は強く突出する。枝が密に規則的に分枝し水平に広がること、卵形～披針形の枝葉が強く鎌形に曲がる先端部を持つことで、同属の他種と区別できる。

【生活史】

雌雄異株。

【生育環境】

石灰岩地の林内で、石灰岩上あるいは石灰岩の上に堆積した土や腐植土上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では本州、四国に分布し、国外では中国、シベリア、トルコ、欧州、アラスカに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

日本からは Nishimura (2000) によって報告され、新潟県青海町（現糸魚川市）千里洞、埼玉県大滝村（現秩父市）大血川西谷溪谷、高知県東津野村（現津野町）天狗高原の、3 か所の石灰岩地が産地としてあげられていた。それ以外の報告はないが、広島大学植物標本庫（HIRO）には、2005 年に採集された、天狗高原と、高知県香美市物部町の別府溪谷、長野県大鹿村塩川溪谷の標本が収蔵されている。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

近年の再確認はされていない。

存続を脅かす要因

森林伐採によって生育環境の変化が危惧される。また、産地が局限しているため地域絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ヤワラクシノハゴケ	<i>Ctenidium molluscum</i> (Hedw.) Mitt.	CR+EN
第4次 2019:	ヤワラクシノハゴケ	<i>Ctenidium molluscum</i> (Hedw.) Mitt.	CR+EN
第4次 2018:	ヤワラクシノハゴケ	<i>Ctenidium molluscum</i> (Hedw.) Mitt.	CR+EN
第4次 2017:	ヤワラクシノハゴケ	<i>Ctenidium molluscum</i> (Hedw.) Mitt.	CR+EN
第4次 2015:	ヤワラクシノハゴケ	<i>Ctenidium molluscum</i> (Hedw.) Mitt.	CR+EN
第4次:	ヤワラクシノハゴケ	<i>Ctenidium molluscum</i> (Hedw.) Mitt.	CR+EN
第3次:	ヤワラクシノハゴケ	<i>Ctenidium molluscum</i> (Hedw.) Mitt.	CR+EN
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Nishimura, N., 2000. *Ctenidium molluscum* (Musci) in Japan. Bull. Natn. Sci. Mus., Tokyo, Ser. B, 26 (1): 1-6.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Ctenidium molluscum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Ctenidium molluscum* is listed as VU under criteria D2.

2. Population with a very restricted area of occupancy (typically less than 20 km²) or number of locations (typically five or fewer) such that it is prone to the effects of human activities or stochastic

events within a very short time period in an uncertain future, and is thus capable of becoming Critically Endangered or even Extinct in a very short time period.	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	有川智己（慶應義塾大学）
Author:	Tomotsugu Arikawa

公表年月：2025 年 3 月

ハイゴケ目 Hypnales ナワゴケ科 Myuriaceae

カタナワゴケ

Oedicladium fragile Cardot

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		D2	
基準 A: —	基準 B: —	基準 C: —	基準 D: VU	基準 E: —	
生育地面積あるいは分布地点が極めて限定されている					
【判断理由】					
屋久島以南の南西諸島の溪流沿いの林内にごく稀に分布するのみで、生育地点が極めて限定されている。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

カタナワゴケは、南西諸島、台湾、中国、フィリピン、ベトナムに生育する大型の蘚類で、国内では生育地点が極めて限定されており、屋久島、沖縄島、石垣島、西表島の溪流沿いの林内にごく稀に分布する。

協力者: 山口富美夫（広島大学）・佐藤匠（広島大学）・西畑和輝（広島大学）・桐生賢太（広島大学）

基礎情報

【形態】

植物体は大型で黄緑色、下部はしばしば褐色になる。第一次茎は細く基物上を這い、第二次茎は立ち上がり、長さ 8~25 mm、まばらに枝をつける。葉は披針形で長さ 2.5~7 mm、葉縁の中部以下は強く内曲する。葉の翼部には数個の透明な細胞がある。葉腋に褐色で糸状のパピラのある無性芽をつけることがある。蒴柄は長さ 10~12 mm、蒴は直立、相称、外蒴歯は透明、中央線に沿って穴がある。ヤクシマナワゴケ *Oedycladium rufescens* var. *yakushimense* に似るが葉先は漸尖し、折れやすい。

【生活史】

糸状の無性芽で繁殖することが多い。

【生育環境】

林内の溪流沿いの樹幹や岩の上に生育する。台湾とフィリピンでは本種は樹上に生育するが、国内では岩の上に生育することもある。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林、河川源流域

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では鹿児島県屋久島、沖縄県沖縄島、石垣島、西表島から報告がある。国外では台湾、中国、フィリピン、ベトナムに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

国内ではこれまでに鹿児島県屋久島（鯛ノ川渓谷、モッチョム岳）、沖縄県沖縄島東村（伊湯岳）、石垣島、西表島から報告がある。第 5 次レッドリストのための調査では 2017 年に西表島浦内川沿いで生育が確認された。

【生育地の現況】

第 5 次レッドリストのための調査では 2017 年に西表島浦内川沿いの岩壁上で生育が確認された。その他の地点の現況は不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

生育地付近の森林伐採や河川開発で生育環境が損なわれる心配がある。

要因の区分：	(過去)	森林伐採、河川開発
	(現在)	森林伐採、河川開発

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	カタナワゴケ	<i>Oedycladium fragile</i> Cardot	VU
第4次 2019:	カタナワゴケ	<i>Oedycladium fragile</i> Cardot	VU
第4次 2018:	カタナワゴケ	<i>Oedycladium fragile</i> Cardot	VU
第4次 2017:	カタナワゴケ	<i>Oedycladium fragile</i> Cardot	VU
第4次 2015:	カタナワゴケ	<i>Oedycladium fragile</i> Cardot	VU
第4次:	カタナワゴケ	<i>Oedycladium fragile</i> Cardot	VU
第3次:	カタナワゴケ	<i>Oedycladium fragile</i> Cardot	VU
第2次:	カタナワゴケ	<i>Oedycladium fragile</i> Card.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

沖縄県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Iwatsuki, Z., 1979. Re-examination of *Myurium* and its related genera from Japan and its adjacent areas. Journal of the Hattori Botanical Laboratory, 46: 257-283.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- 岩月善之助, 2000. カタナワゴケ. 環境庁（編）, 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—9 植物Ⅱ（維管束植物以外）. p. 173. 自然環境研究センター, 東京.
- Noguchi, A., 1989. Illustrated Moss Flora of Japan. Part 3, pp. 493-742. Hattori Botanical Laboratory, Nichinan.
- 山口富美夫, 2018. 蘚苔類. 沖縄県環境部自然保護課（編）, 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物 第3版（菌類編・植物編）. pp. 527-567. 沖縄県環境部自然保護課, 那覇.
- 山口富美夫, 2006. カタナワゴケ. 沖縄県文化環境部自然保護課（編）, 改訂・沖縄県の絶滅のおそれのある野生生物（菌類編・植物編）. p. 383. 沖縄県文化環境部自然保護課, 那覇.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Oedicladium fragile has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Oedicladium fragile* is listed as VU under criteria D2.

2. Population with a very restricted area of occupancy (typically less than 20 km²) or number of locations (typically five or fewer) such that it is prone to the effects of human activities or stochastic events within a very short time period in an uncertain future, and is thus capable of becoming Critically Endangered or even Extinct in a very short time period.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest, River headwater
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development
Law designation status for conservation	—

執筆者: 有川智己 (慶應義塾大学)
Author: Tomotsugu Arikawa

公表年月: 2025 年 3 月

ハイゴケ目 Hypnales ヒラゴケ科 Neckeraceae

シライワスズゴケ

Forsstroemia noguchii L.R.Stark

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		D2	
基準 A: —	基準 B: —	基準 C: —	基準 D: VU	基準 E: —	
生育地面積あるいは分布地点が極めて限定されている					
【判断理由】					
国内では長野県伊那市白岩山、大鹿村豊口山、徳島県美馬市剣山の 3 地点のみから報告されている（立石ほか, 2000）。それぞれ岩壁に 1 か所ずつのみ。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

シライワスズゴケは亜高山帯の石灰岩地に生育する。日本産のスズゴケ属の中では分枝が少なく、葉の中肋が短いことが特徴である。第 5 次レッドリストのための調査では徳島県剣山で生育が確認された。石灰岩採掘や森林伐採などにより絶滅が危惧される。

協力者： 出口博則（広島大学）

基礎情報

【形態】

植物体は黄緑色を帯び、第二次茎は長さ約 10 cm になり、不規則に分枝する。中心束を欠く。偽毛葉は糸状かやや葉状をなす。茎葉は卵状披針形、長さ約 2.3 mm に達する。卵形の基部から上部に向かって狭くなり先端は鋭く尖る。日本産のスズゴケ属の中では分枝が少ないこと、葉の中肋が極めて短いことが特徴である。

【生活史】

雌雄異株だと思われるが不明。孢子体は知られていない。

【生育環境】

標高 1,700～1,800 m の亜高山帯の石灰岩地で、明るい林床の大きな石灰岩か石灰岩壁に垂れ下がるようにして生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林、岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では本州中部と四国に分布する。国外では中国、極東ロシアに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

国内では長野県伊那市白岩山、大鹿村豊口山、徳島県美馬市剣山の 3 か所のみから報告されている（立石ほか, 2000）が、いずれの生育地でも現存していると思われる。

【生育地の現況】

徳島県剣山では、第 5 次レッドリストのための調査（2019 年）において、谷に面した半日陰の風とおしのよい石灰岩の露岩縁部を覆うように生育しているのが確認されている。群落サイズはその 9 年前の調査時から変化がなかったという。鹿の防護ネットによって当該の露岩が守られているので、鹿による踏み荒らしによる群落かく乱は防げているという。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

森林伐採や石灰採掘によって生育環境の変化、生育地の減少が危惧される。また、産地が局限しているため地域絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	（過去）	森林伐採, 石灰採掘, 分布・産地局限, シカ食害
	（現在）	森林伐採, 石灰採掘, 分布・産地局限, シカ食害

特記事項

本種と同様に本州、四国と中国内陸部とに分布し、好石灰岩性のカタヒラゴケ *Neckera polyclada* と、同じ場所に生育することがある（山口, 2015）。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	シライワスズゴケ	<i>Forsstroemia noguchii</i> L.R.Stark	CR+EN
第4次 2019:	シライワスズゴケ	<i>Forsstroemia noguchii</i> L.R.Stark	CR+EN
第4次 2018:	シライワスズゴケ	<i>Forsstroemia noguchii</i> L.R.Stark	CR+EN
第4次 2017:	シライワスズゴケ	<i>Forsstroemia noguchii</i> L.R.Stark	CR+EN
第4次 2015:	シライワスズゴケ	<i>Forsstroemia noguchii</i> L.R.Stark	CR+EN
第4次:	シライワスズゴケ	<i>Forsstroemia noguchii</i> L.R.Stark	CR+EN
第3次:	シライワスズゴケ	<i>Forsstroemia noguchii</i> L.R.Stark	CR+EN
第2次:	シライワスズゴケ	<i>Forsstroemia noguchii</i> Stark	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

長野県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 秋山弘之, 1989. 日本産イタチゴケ科（蘚類）全種の検索表. 日本蘚苔類学会会報, 5: 15-21.
- Stark, L. R., 1983. A new species of *Forsstroemia* from eastern Asia. Misc. Bryol. Lichenol., 9: 181-183.
- 立石幸敏, 木口博史, 田中敦司, 2000. 豊口山（長野県大鹿村）の蘚類. 自然環境科学研究, 13: 105-120.
- 山口富美夫, 2015. シライワスズゴケ. 環境省（編）, レッドデータブック 2014 日本の絶滅のおそれのある野生生物 9 植物Ⅱ（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）. p. 37. ぎょうせい, 東京.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Forsstroemia noguchii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Forsstroemia noguchii* is listed as VU under criteria D2.

2. Population with a very restricted area of occupancy (typically less than 20 km²) or number of locations (typically five or fewer) such that it is prone to the effects of human activities or stochastic events within a very short time period in an uncertain future, and is thus capable of becoming Critically Endangered or even Extinct in a very short time period.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest, Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limestone mining, Limited distribution, Deer feeding damage
Law designation status for conservation	—

執筆者:	有川智己（慶應義塾大学）
Author:	Tomotsugu Arikawa

公表年月：2025 年 3 月

ハイゴケ目 Hypnales サナダゴケ科 Plagiotheciaceae

カイガラゴケ

Myurella julacea (Schwägr.) Schimp.

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		D2	
基準 A: —	基準 B: —	基準 C: —	基準 D: VU	基準 E: —	
生育地面積あるいは分布地点が極めて限定されている					
【判断理由】					
高地の地上や石灰岩の岩隙に生育するが、全ての生育地において極少量ずつしか確認されておらず、生育地点や生育地面積が極めて限定されていると判断する。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

カイガラゴケは、北半球に広く分布する蘚類で、葉腋に紡錘形の無性芽をつける。高地の地上や石灰岩の岩隙に生育する。第5次レッドリストのための調査では南アルプスの北岳と赤石岳で確認された。

協力者： 山口富美夫（広島大学）・佐藤匠（広島大学）・桐生賢太（広島大学）

基礎情報

【形態】

植物体は小さく、明るい緑色の密なマットを作る。茎は不規則に分枝し、長さ 7 mm。紡錘形の無性芽を葉腋につける。枝は鈍頭、葉は瓦状に枝に密着する。枝葉は丸みを帯びた卵形～円形で葉先は丸く、長さ約 0.5 mm。葉縁は全体に細かな鋸歯がある。葉身細胞の上端に小さな目立たない乳頭がある。トガリカイガラゴケ *Myurella tenerrima* に似るが、枝は鈍頭、瓦状に葉が密着し、葉縁に細鋸歯があること、葉腋に無性芽をつけることで区別される。

【生活史】

雌雄異株。国内では孢子体は見つかっていない。

【生育環境】

高地の石灰岩地の地上や石灰岩の岩隙に生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地】岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では北海道、本州、四国に分布し、国外では北半球に広く分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

2009 年に南アルプスの北岳と北海道の嵯山（樋口ほか, 2009）で確認されている。第 5 次レッドリストのための調査では 2016 年に南アルプスの北岳の 2 か所と赤石岳で確認されている。四国・高知県剣山からもかつて報告があったが、その後の調査で見つかってないので、山口（2015）は絶滅した可能性があると述べている。

【生育地の現況】

高地の地上や石灰岩の岩隙に生育するが、生育地は局限し、生育量も少ない。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

森林伐採や石灰採掘によって生育環境の変化、生育地の減少、消失が危惧される。また、産地が局限しているため絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 石灰採掘, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 石灰採掘, 分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	カイガラゴケ	<i>Myurella julacea</i> (Schwägr.) Schimp.	CR+EN
第4次 2019:	カイガラゴケ	<i>Myurella julacea</i> (Schwägr.) Schimp.	CR+EN
第4次 2018:	カイガラゴケ	<i>Myurella julacea</i> (Schwägr.) Schimp.	CR+EN
第4次 2017:	カイガラゴケ	<i>Myurella julacea</i> (Schwägr.) Schimp.	CR+EN
第4次 2015:	カイガラゴケ	<i>Myurella julacea</i> (Schwägr.) Bruch & Schimp.	CR+EN
第4次:	カイガラゴケ	<i>Myurella julacea</i> (Schwägr.) Bruch & Schimp.	CR+EN
第3次:	カイガラゴケ	<i>Myurella julacea</i> (Schwägr.) Bruch, Schimp. & Gumbel	CR+EN
第2次:	カイガラゴケ	<i>Myurella julacea</i> (Schwaegr.) B. S. G.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

秋田県[絶滅危惧種Ⅰ類(CR+EN)] 長野県[絶滅危惧Ⅱ類(VU)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 樋口正信・佐藤 謙・丹羽真一，2009. 北海道中央部に位置する嵯山で確認された絶滅危惧藓類数種. 藓苔類研究, 9: 367-369.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎，2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社，東京. 355pp., 192pls.
- Noguchi, A., 1991. Illustrated Moss Flora of Japan. Part 4. pp. 743-1012. Hattori Bot. Lab., Nichinan.
- 高木典雄，1954. 日本産藓類植物報告（7）. Journal of Japanese Botany, 29 : 35-40.
- 山口富美夫，2015. カイガラゴケ. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室（編），レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—9 植物Ⅱ（藓苔類・藻類・地衣類・菌類）. p. 64. ぎょうせい，東京.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Myurella julacea has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Myurella julacea* is listed as VU under criteria D2.

2. Population with a very restricted area of occupancy (typically less than 20 km²) or number of locations (typically five or fewer) such that it is prone to the effects of human activities or stochastic events within a very short time period in an uncertain future, and is thus capable of becoming Critically Endangered or even Extinct in a very short time period.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area】 Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limestone mining, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	有川智己（慶應義塾大学）
Author:	Tomotsugu Arikawa

公表年月：2025 年 3 月

ハイゴケ目 Hypnales サナダゴケ科 Plagiotheciaceae

トガリカイガラゴケ

Myurella tenerrima (Brid.) Lindb.

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		D2	
基準 A: —	基準 B: —	基準 C: —	基準 D: VU	基準 E: —	
生育地面積あるいは分布地点が極めて限定されている					
【判断理由】					
これまでに知られている生育地はお互いに離れたわずか 3 か所であり、各地点 2 km 四方として計算すると、生育地面積は 12 km ² となる。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

トガリカイガラゴケは、北半球に広く分布する蘚類で、細胞の上部のみに目立たない乳頭がある。高地の石灰岩地の地上に群生する。第 5 次レッドリストのための調査では南アルプスの北岳で確認された。

協力者： 山口富美夫（広島大学）・佐藤匠（広島大学）・桐生賢太（広島大学）

基礎情報

【形態】

植物体は小さく、明るい黄緑色を帯びる。茎は匍匐し、不規則に分枝する。葉は乾いてもあまり茎に密着しない。葉は広い卵形から急に伸び、しばしば長く尖り、長さ約 0.4 mm になる。葉身細胞の上端に小さな目立たない乳頭がある。レイシゴケ *Myurella sibirica* に似るが、葉身細胞には棘状の乳頭はなく、上端に小さな目立たない乳頭があることで区別される。

【生活史】

雌雄異株だと思われるが不明。胞子体は青森県で見つかっている（太田・柿崎, 2003）。

【生育環境】

高地の石灰岩地の地上に群生する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地】岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	（1）奥山自然地域

【分布域】

国内では本州の南アルプス北岳で最初に発見され（高木, 1954）、青森県の 2 か所でその後発見されているのみ。これまでのレッドデータブックでは本州と四国に生育しているとされていたが、四国での記録は見当たらない。国外では中国、シベリア、北半球に広く分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリストのための調査では 2016 年に南アルプス北岳の山頂付近から確認されている。青森県では白神山地と弘前市のそれぞれ 1 か所の産地が記録されている（太田, 2020）。

【生育地の現況】

生育環境に大きな変化はないと考えられる。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

産地が局限しており、国内の産地は登山ルート沿いにあるため遊歩道の整備などの影響が懸念される。

要因の区分：	（過去）	分布・産地局限, その他（遊歩道整備）

	(現在)	分布・産地局限, その他(遊歩道整備)

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	トガリカイガラゴケ	<i>Myurella tenerrima</i> (Brid.) Lindb.	CR+EN
第4次 2019:	トガリカイガラゴケ	<i>Myurella tenerrima</i> (Brid.) Lindb.	CR+EN
第4次 2018:	トガリカイガラゴケ	<i>Myurella tenerrima</i> (Brid.) Lindb.	CR+EN
第4次 2017:	トガリカイガラゴケ	<i>Myurella tenerrima</i> (Brid.) Lindb.	CR+EN
第4次 2015:	トガリカイガラゴケ	<i>Myurella tenerrima</i> (Brid.) Lindb.	CR+EN
第4次:	トガリカイガラゴケ	<i>Myurella tenerrima</i> (Brid.) Lindb.	CR+EN
第3次:	トガリカイガラゴケ	<i>Myurella tenerrima</i> (Brid.) Lindb.	CR+EN
第2次:	トガリカイガラゴケ	<i>Myurella tenerrima</i> (Brid.) Lindb.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

青森県[重要希少野生生物（B ランク）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 太田正文・柿崎敬一, 2003. 青森県立郷土館収蔵コケ植物標本(1) 福田均氏採集弘前市子供の森久渡寺山における蘚苔類. 青森県立郷土館調査研究年報, 27: 107-114.
- 太田正文, 2020. 蘚苔類. 青森県の希少な野生生物 青森県レッドデータブック(2020年版). pp. 119-133. 青森県, 青森.
- 高木典雄, 1954. 日本産蘚類植物報告(7). 植物研究雑誌, 29: 35-40.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Myurella tenerrima has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Myurella tenerrima* is listed as VU under criteria D2.

2. Population with a very restricted area of occupancy (typically less than 20 km²) or number of locations (typically five or fewer) such that it is prone to the effects of human activities or stochastic events within a very short time period in an uncertain future, and is thus capable of becoming Critically Endangered or even Extinct in a very short time period.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area】 Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Limited distribution, Other (遊歩道整備)
Law designation status for conservation	—

執筆者:	有川智己 (慶應義塾大学)
Author:	Tomotsugu Arikawa

公表年月：2025 年 3 月

オオタマコモチイトゴケ

Aptychella robusta (Broth.) M.Fleisch.

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		B2ab	
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
B2. 生育地面積が 2000 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。					
a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。					
【地点数】10 地点以下					
b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。					
【判断理由】					
奄美大島湯湾岳で、5 年間で半減したという報告があることや、宮崎県市房山で、シカ食害とササ枯れにより今後 10 年以内に消える可能性が高いと報告されていること。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

オオタマコモチイトゴケは、東南アジアから南アジアにかけて分布する蘚類で、国内では神奈川県以南の比較的標高の高いところの風通しのよい稜線上の低木や亜高木の樹幹や枝先に、少量ずつまとまって着生する。奄美大島湯湾岳では 5 年間でほぼ半減したという報告がある。宮崎県市房山では、シカ食害と笹枯れにより今後 10 年以内には消える可能性が高いという。

協力者： 秋山弘之（兵庫県立人と自然の博物館）・立石幸敏（岡山コケの会）・木口博史（岡山コケの会）

基礎情報

【形態】

植物体は黄褐色、茎は基物の上を這い、不規則に長さ 1~2 cm の直立~斜上する枝を分ける。枝の中部の葉は、長さ 1.5~2.0 mm、ほぼ卵状披針形で、上部でやや急に狭くなる。葉の基部はやや下延し、透明~褐色、翼細胞は長方形で薄壁。枝の中部~上部の葉腋にしばしば糸状の無性芽をつける。屋久島に産するナガスジコモチイトゴケ *Aptychella brevinervis* は、中肋が普通 1 本で葉の中部に達することで区別される。

【生活史】

国内では孢子体は見つかっておらず、繁殖は葉腋にできる糸状の無性芽による。雌雄異株。

【生育環境】

比較的標高の高い（1,000~1,500 m くらい）ところの風通しのよい稜線上の低木や亜高木の樹幹や枝先に、少量ずつまとまって着生する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では本州（神奈川県以南）、四国、屋久島、奄美大島に分布している。国外では中国、ネパール、フィリピン、ボルネオ、ニューギニアに分布している。

現在の生育状況

【分布域の現況】

奄美大島湯湾岳の明るく開けた場所に生育する灌木の枝で 2006 年と 2011 年に確認された。神奈川県丹沢山地では複数の産地が確認され、報告されている（有川ほか, 2006）。静岡県天城山からも報告がある（樋口, 2013）。第 5 次レッドリストのための調査では、2018 年には熊本県五木村で、2019 年に宮崎県市房山で確認されている。

【生育地の現況】

神奈川県以南で、尾根上の低木に着生するが、希で、点在している。2019 年の調査では、宮崎県市房山の生育地では鹿による食害と笹枯れの影響で乾燥化が進んでいることが確認されており、今後の生育についてはかなり深刻な状態にあり、今後 10 年以内にはこの生育地が消える可能性が高いという。

【個体数の現況】

奄美大島湯湾岳では、2006 年から 2011 年までの 5 年間でほぼ半減した。2018 年には熊本県五木村飯干川大滝入口で 1 群落（5×3 cm 程度）が樹幹に着生していた。2019 年に宮崎県市房山では、9 合目付近で 4 集団が確認され、上記のとおり深刻な状態と考えられる。

存続を脅かす要因

産地が限られているが、その生育地での森林伐採により生育環境が失われる心配がある。一部の生育地では、鹿による食害ならびに笹枯れによる影響で乾燥化が進み、今後の生育についてはかなり深刻な状態にあるという。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 遷移進行・植生変化/自然遷移, 分布・産地局限, シカ食害
	(現在)	森林伐採, 分布・産地局限

特記事項

Akiyama et al. (2023) は、オオタマコモチイトゴケ種群を 12 種に分け、そのうち 5 種が日本に生育するとした。これら日本産については、秋山ほか (2023) にも解説されている。これらによると本州・四国・九州のほとんどの分布するものはアオタマコモチイトゴケ *Aptychella viridis* という日本固有種で、オオタマコモチイトゴケ *Aptychella robusta* を含む 3 種が屋久島固有とされている。しかし、過去の採集記録について、細分化された種のどれにあたるかの再検討ができておらず、細分化された種ごとの評価ができていないので、今回はオオタマコモチイトゴケ種群を単一種として扱っている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	オオタマコモチイトゴケ	<i>Clastobryopsis robusta</i> (Broth.) M.Fleisch.	VU
第4次 2019:	オオタマコモチイトゴケ	<i>Clastobryopsis robusta</i> (Broth.) M.Fleisch.	VU
第4次 2018:	オオタマコモチイトゴケ	<i>Clastobryopsis robusta</i> (Broth.) M.Fleisch.	VU
第4次 2017:	オオタマコモチイトゴケ	<i>Clastobryopsis robusta</i> (Broth.) M.Fleisch.	VU
第4次 2015:	オオタマコモチイトゴケ	<i>Clastobryopsis robusta</i> (Broth.) M.Fleisch. [=	VU
		<i>Aptychella robusta</i> (Broth.) M.Fleisch.]	
第4次:	オオタマコモチイトゴケ	<i>Clastobryopsis robusta</i> (Broth.) M.Fleisch. [=	VU
		<i>Aptychella robusta</i> (Broth.) M.Fleisch.]	
第3次:	オオタマコモチイトゴケ	<i>Clastobryopsis robusta</i> (Broth.) M.Fleisch. [=	VU
		<i>Aptychella robusta</i> (Broth.) M.Fleisch.]	
第2次:	オオタマコモチイトゴケ	<i>Clastobryopsis robusta</i> (Broth.) Fl. Syn.	CR+EN
		<i>Aptychella robusta</i> (Broth.) Fl.	
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

神奈川県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 宮崎県[絶滅危惧Ⅱ類(VU-r)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Akiyama H., J. R. Shevock, M. Matsumoto, N. Hayashida, T. T. Luong, N. Printarakul, and K. -Y. Yao., 2023. Systematic study of *Aptychella robusta* s. lat. in East and Southeast Asia (Pylaisiadelphaceae, Musci). *Hymans and Nature*, 33: 1-38.
- 秋山弘之・林田信明・松本美津, 2023. 日本産オオタマコモチイトゴケ属 *Aptychella*（蘚類, コモチイトゴケ科）7種の解説と和文検索表. *蘚苔類研究*, 13: 1-10.
- 有川智己・木口博史・杉村康司・平岡照代・平岡正三郎, 2006. 神奈川県のおオタマコモチイトゴケ. *蘚苔類研究*, 9: 60-61.
- 樋口正信, 2013. 静岡県天城山のオオタマコモチイトゴケとおオミツヤゴケ. *蘚苔類研究*, 10: 417-418.
- 岩月善之助・出口博則, 1984. オオタマコモチイトゴケ（新称）の新産地. *日本蘚苔類学会会報*, 3: 163-165.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- Noguchi, A., 1994. Illustrated Moss Flora of Japan. Part 5. pp. 1013-1253. *Journal of the Hattori Botanical Laboratory*, Nichinan.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Aptychella robusta has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Aptychella robusta* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Limited distribution, Deer feeding damage

Law designation status for conservation	—

執筆者:	有川智己（慶應義塾大学）
Author:	Tomotsugu Arikawa

公表年月：2025 年 3 月

ハシボソゴケ

Papillidiopsis macrosticta (Broth. & Paris) W.R.Buck & B.C.Tan

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		B2ab	
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
B2. 生育地面積が 2000 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。					
a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。					
【地点数】 10 地点以下					
b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。					
【判断理由】					
生育地は温暖な地域の自然林内にあり、生育量も少ない。台風などによる倒木などによって生育環境が激変したと考えられる。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

ハシボソゴケは和歌山県以南の本州、九州、琉球列島に分布する。溪流沿いの灌木の枝に生育する。枝葉は楕円形で、先端は短く尖り、深く凹み、中肋は短い。葉身細胞は狭い菱形～線形で、背面側の中央に 1 個の明瞭なパピラがある。日本産ハシボソゴケ属のもう 1 種であるホソバハシボソゴケとは、枝葉の先端が短く尖ること、葉身細胞のパピラが不明瞭なことで区別される。

基礎情報

【形態】

植物体は匍匐する。茎は長さ 5～10 mm の枝を密に上方に出し、葉をまばらにつける。茎葉は楕円形で、先端は狭く尖り、長さ 0.8～1.2 mm。枝葉は楕円形で基部が少し狭くなり、先端は短く尖り、深く凹み、長さ 1.0～1.3 mm。中肋は短い。葉身細胞は狭い菱形～線形で、背面側の中央に 1 個の明瞭なパピラがある。日本産ハシボソゴケ属のもう 1 種であるホソバハシボソゴケ (*Papillidiopsis complanata*) とは、枝葉の先端が短く尖ること、葉身細胞のパピラが不明瞭なことで区別される。

【生活史】

雌雄同株。

【生育環境】

暖地の溪流近くの灌木の枝に生育する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では和歌山県以南の本州、九州、琉球列島に分布し、国外ではラオス、タイ、中国に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト作成のための調査では、和歌山県の溪流近くの灌木の枝に少量生育しているのが確認された。その他、岩田 (2018) は屋久島から報告しており、広島大学植物標本庫には、2015 年以降に採集された鹿児島県屋久島、沖縄県沖縄島、西表島産の標本がある。

【生育地の現況】

暖地の林内を流れる溪流沿いで、灌木の枝に生育するが、台風などによる倒木などによって生育環境が激変したと考えられる。

【個体数の現況】

いずれの産地でも生育量は少ない。

存続を脅かす要因

森林伐採、自然災害。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 自然災害, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ハシボソゴケ	<i>Papillidiopsis macrosticta</i> (Broth. & Paris) W.R.Buck & B.C.Tan	VU
第4次 2019:	ハシボソゴケ	<i>Papillidiopsis macrosticta</i> (Broth. & Paris) W.R.Buck & B.C.Tan	VU
第4次 2018:	ハシボソゴケ	<i>Papillidiopsis macrosticta</i> (Broth. & Paris) W.R.Buck & B.C.Tan	VU
第4次 2017:	ハシボソゴケ	<i>Papillidiopsis macrosticta</i> (Broth. & Paris) W.R.Buck & B.C.Tan	VU
第4次 2015:	ハシボソゴケ	<i>Papillidiopsis macrosticta</i> (Broth. & Paris) W.R.Buck & B.C.Tan [= <i>Rhaphidostichum macrostictum</i> (Broth. & Paris) Broth.]	VU
第4次:	ハシボソゴケ	<i>Papillidiopsis macrosticta</i> (Broth. & Paris) W.R.Buck & B.C.Tan [= <i>Rhaphidostichum macrostictum</i> (Broth. & Paris) Broth.]	VU
第3次:	ハシボソゴケ	<i>Papillidiopsis macrosticta</i> (Broth. & Paris) W.R.Buck & B.C.Tan [= <i>Rhaphidostichum macrostictum</i> (Broth. & Paris) Broth.]	VU
第2次:	ハシボソゴケ	<i>Papillidiopsis macrosticta</i> (Broth. et Par.) Buck et Tan Syn. <i>Rhaphidostichum macrostictum</i> (Broth. et Par.) Broth.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

和歌山県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 宮崎県[絶滅危惧Ⅱ類(VU-r)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岩田和鷹, 2018. 屋久島（鹿児島県）における蘚苔類の垂直分布. *Naturalistae*, 22: 73-84.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- Seki, T., 1968. A revision of the family Sematophyllaceae of Japan with special reference to a statistical demarcation of the family. *Journal of Science of the Hiroshima University, Series B, Division 2 (Botany)*, 12: 1-80.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Papillidiopsis macrosticta has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Papillidiopsis macrosticta* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Natural disasters, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 山口富美夫（広島大学）
Author: Tomio Yamaguchi

公表年月：2025 年 3 月

ハイゴケ目 Hypnales ナガハシゴケ科 Sematophyllaceae

フトハイゴケ

Stereodontopsis pseudorevoluta (Reimers) Ando

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		D2	
基準 A: —	基準 B: —	基準 C: —	基準 D: VU	基準 E: —	
生育地面積あるいは分布地点が極めて限定されている					
【判断理由】					
確認されている生育地点は 5 地点のみである。また、各生育地の生育量も少なく、第 4 次レッドリストの横倉山の調査では登山者の踏みつけにより絶滅寸前となっており、同様な状況が続けば容易に消失することが推測される。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

フトハイゴケは四国と九州に分布する。石灰岩地の岩上、腐植土、樹皮上に生育する。

基礎情報

【形態】

植物体は匍匐し、大形。茎はやや羽状に分枝する。茎葉は狭い披針形で、鎌状に曲がり、長さ 2.5-3.0 mm。葉の縁は上部まで背面側に反り返る。中肋は不明瞭。葉身細胞は線形、厚壁でくびれがある。翼細胞は分化する。

【生活史】

胞子体は知られていない。

【生育環境】

石灰岩地の岩上、腐植土、樹皮上に生育する。

生育環境区分：	【陸域 低標高地】岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では高知県と鹿児島県に、国外では中国に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

詳細については不明。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。第4次レッドリスト調査では、横倉山の産地は登山者の踏みつけにより絶滅寸前となっていた。

存続を脅かす要因

産地が局限し、登山者の踏みつけなどにより絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	人の踏みつけ、分布・産地局限
	(現在)	人の踏みつけ、分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリと掲載名

第4次 2020:	フトハイゴケ	<i>Stereodontopsis pseudorevoluta</i> (Reimers) Ando	CR+EN
第4次 2019:	フトハイゴケ	<i>Stereodontopsis pseudorevoluta</i> (Reimers) Ando	CR+EN
第4次 2018:	フトハイゴケ	<i>Stereodontopsis pseudorevoluta</i> (Reimers) Ando	CR+EN
第4次 2017:	フトハイゴケ	<i>Stereodontopsis pseudorevoluta</i> (Reimers) Ando	CR+EN
第4次 2015:	フトハイゴケ	<i>Stereodontopsis pseudorevoluta</i> (Reimers) Ando	CR+EN
第4次:	フトハイゴケ	<i>Stereodontopsis pseudorevoluta</i> (Reimers) Ando	CR+EN
第3次:	フトハイゴケ	<i>Stereodontopsis pseudorevoluta</i> (Reimers) Ando	CR+EN
第2次:	フトハイゴケ	<i>Stereodontopsis pseudorevoluta</i> (Reim.) Ando	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Ando, H., 1963. A second species of *Stereodontopsis*, a unique genus of Hypnaceae. *Hikobia*, 3: 295-299.
- 樋口正信, 2015. フトハイゴケ. 環境省（編）, レッドデータブック 2014 ―日本の絶滅のおそれのある野生生物― 9 植物 II（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）. p. 88. ぎょうせい, 東京.
- Noguchi, A., 1994. Illustrated Moss Flora of Japan. Part 5. pp. 1013-1253. Hattori Bot. Lab., Nichinan.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Stereodontopsis pseudorevoluta has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Stereodontopsis pseudorevoluta* is listed as VU under criteria D2.

2. Population with a very restricted area of occupancy (typically less than 20 km²) or number of locations (typically five or fewer) such that it is prone to the effects of human activities or stochastic events within a very short time period in an uncertain future, and is thus capable of becoming Critically Endangered or even Extinct in a very short time period.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Human trampling, Limited distribution

Law designation status for conservation	—

執筆者:	樋口正信（国立科学博物館）
Author:	Masanobu Higuchi

公表年月：2025 年 3 月

リュウキュウホソエゴケ

Trichosteleum lutschianum (Broth. & Paris) Broth.

カテゴリー判定結果		絶滅危惧Ⅱ類 (VU)		B2ab	
基準 A: —	基準 B: VU	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
B2. 生育地面積が 2000 km ² 未満であると推定されるほか、次の兆候が見られる。					
a) 生育地が過度に分断されているか、10 以下の地点に限定されている。					
【地点数】10 地点以下					
b) 出現範囲、生育地面積、生育地の質、生育地点数、成熟個体数のいずれかに継続的な減少が推定・予測される。					
【判断理由】					
標本庫に保管されている標本から判断すると、Seki (1968) が報告した本種の生育地点の多くは、その後確認されていない。個体群、個体数の減少が考えられる。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

リュウキュウホソエゴケは本州、四国、九州、琉球列島に分布する。林内の樹幹、岩、腐植土上に生育する。植物体は小型で、茎葉は楕円状披針形で凹み、長さ 2.0~2.5 mm、先端は急に狭くなり、長く尖る。日本産のホソエゴケ属のもう 1 種のリュウキュウナガハシゴケから、葉身細胞が平滑なことで区別される。

基礎情報

【形態】

植物体は匍匐し、小型。茎は長さ 5 mm までの枝を上方に出す。茎葉は楕円状披針形で凹み、長さ 2.0～2.5 mm、先端は急に狭くなり、長く尖る。葉身細胞は線形で、表面は平滑。日本産のホソエゴケ属のもう 1 種のリュウキュウナガハシゴケ (*Trichosteleum boschii*) から、葉身細胞が平滑なことで区別される。

【生活史】

雌雄同株。

【生育環境】

暖地の林内の樹幹、岩、腐植土上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林, 河川上流域

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では本州、四国、九州、琉球列島に分布し、国外では中国東南部に分布する。Seki (1968) は、*Rhaphidostichum lutschianum* として、宮城県仙台市、伊豆半島以西の本州、四国、九州、屋久島の各地から本種を報告している。

現在の生育状況

【分布域の現況】

おもに和歌山県以南に知られるが、第 5 次レッドリスト作成のための調査では、確認されなかった。しかし、岩田 (2018) は屋久島モッチョム岳から、また、佐治ほか (2021) は徳島県海部郡牟岐町から報告している。その他、広島大学植物標本庫には、2016 年以降屋久島の数か所で採集された標本が保管されている。

【生育地の現況】

岩田 (2018) や佐治ほか (2021) らの報告および標本庫に保管されている標本データによれば、本種は林内あるいは溪流沿いの岩上や樹幹上に生育している。生育地の一部では森林伐採や自然災害などにより生育条件が悪化している。

【個体数の現況】

不明である。

存続を脅かす要因

産地が局限し、比較的低地の森林内に生育するので、森林伐採による生育環境の変化によって壊滅的な影響を受ける可能性がある。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 分布・産地局限

	(現在)	森林伐採, 分布・産地局限

特記事項

日本が分布の北限となっている。

旧レッドリストカテゴリと掲載名

第4次 2020:	リュウキュウホソエゴケ	<i>Trichosteleum lutschianum</i> (Broth. & Paris) Broth.	CR+EN
第4次 2019:	リュウキュウホソエゴケ	<i>Trichosteleum lutschianum</i> (Broth. & Paris) Broth.	CR+EN
第4次 2018:	リュウキュウホソエゴケ	<i>Trichosteleum lutschianum</i> (Broth. & Paris) Broth.	CR+EN
第4次 2017:	リュウキュウホソエゴケ	<i>Trichosteleum lutschianum</i> (Broth. & Paris) Broth.	CR+EN
第4次 2015:	リュウキュウホソエゴケ	<i>Trichosteleum lutschianum</i> (Broth. & Paris) Broth.	CR+EN
第4次:	リュウキュウホソエゴケ	<i>Trichosteleum lutschianum</i> (Broth. & Paris) Broth.	CR+EN
第3次:	リュウキュウホソエゴケ	<i>Trichosteleum lutschianum</i> (Broth. & Paris) Broth.	VU
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

大阪府[VU] 兵庫県[A ランク] 奈良県[希少種] 和歌山県[準絶滅危惧（NT）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岩田和鷹, 2018. 屋久島（鹿児島県）における蘚苔類の垂直分布. *Naturalistae*, 22: 73-84.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.

- 佐治まゆみ・狩野登之助・西村直樹, 2021. 徳島県南の蘚類 2. シトネゴケ目. 岡山コケの会ニュース, 51: 23-28.
- Seki, T., 1968. A revision of the family Sematophyllaceae of Japan with special reference to a statistical demarcation of the family. Journal of Science of the Hiroshima University, Series B, Division 2 (Botany), 12: 1-80.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Trichosteleum lutschianum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Trichosteleum lutschianum* is listed as VU under criteria B2ab.

B2. Area of occupancy estimated to be less than 2,000 km², and estimate indicating at least two of a-c:

- a. Severely fragmented or known to exist at only a single location.
- b. Continuing decline, observed, inferred or projected, in any of the following:
 - (i) extent of occurrence
 - (ii) area of occupancy
 - (iii) area, extent and/or quality of habitat
 - (iv) number of locations or subpopulations
 - (v) number of mature individuals

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area Low-altitude area】 Forest, Upper river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 山口富美夫 (広島大学)
Author: Tomio Yamaguchi

公表年月: 2025 年 3 月

キノボリツノゴケ

Dendroceros japonicus Steph.

カテゴリー判定結果		準絶滅危惧 (NT)		②
基準 A: —	基準 B: VU 未満	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 ②生育条件が悪化している。 【判断理由】 分布の北限の千葉県を含む他の多くの産地では最近、生育が確認されていない。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

キノボリツノゴケ属は世界の熱帯地方を分布の中心にしている属で、このキノボリツノゴケが分布する本州がこの属の分布の北限となる。他のツノゴケ類の属とは、着生性であるということ以外にも、葉状体が中肋部と翼部に分化すること、胞子が多細胞になること、弾糸が螺旋状に肥厚するなどの違いがある。

協力者: 秋山弘之 (兵庫県立人と自然の博物館)・土永浩史 (日本蘚苔類学会)・山口富美夫 (広島大学)

基礎情報

【形態】

植物体は葉状性で、鮮緑色～濃緑色、樹幹や枝に着生し、基物上を匍匐し、不規則に二叉状に分枝し、2 cm 前後の長さになる。葉状体は、中肋部と翼部が分化し、翼部は1細胞層で、不規則に切れ込み、切片は上方へ立ち上がったり、頭巾上に膨れたりするので、背面は波打つような状態になる。蒴は1.8 cm ぐらいの長さになり、表皮細胞は瘤状に肥厚する。胞子は多細胞で、球状～長橢円状で、0.1 mm 前後の大きさがある。弾糸は螺旋状に肥厚する。日本に産する本属のもう1種、オガサワラキブリツノゴケ *Dendroceros tubercularis* は蒴の表皮胞子が瘤状に肥厚しない、葉状体の背面が波打たない、胞子が小さいことで本種から区別される。

【生活史】

雌雄同株。

【生育環境】

溪流に沿った空中湿度の高い常緑広葉樹の自然林の樹幹上に着生している。海からの霧に恒常的に覆われるような山地の尾根筋の灌木の枝の上などでも見られる。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では、本州（千葉県、神奈川県、静岡県、愛知県、三重県、奈良県、和歌山県）、四国（高知県）、九州（熊本県、宮崎県、鹿児島県、屋久島）、奄美諸島、小笠原諸島に点々と産地が知られている。国外では台湾に分布している。

現在の生育状況

【分布域の現況】

千葉県と神奈川県では100年以上生育が確認されておらず絶滅したとされている（古木2009, 有川2022）。宮崎県では1か所で少量の生育が産認されているが、他の産地では再確認されていない（長谷川2022）。静岡県や高知県など近年の生育状況が不明の地点も多い。

【生育地の現況】

和歌山県と小笠原諸島の母島は、他地域に比べると比較的生育は良好であるが、以前と比べると個体群は減少している。それ以外の産地でも、確認できないところが増えており、確認されても生育量は減少している。

【個体数の現況】

生育量は減少傾向にある。

存続を脅かす要因

森林の伐採などにより生育地の環境が変わることによって消滅するおそれがあるが、最近、多くの産地で確認されなくなっている原因については不明な点が多い。

要因の区分：	(過去)	不明, 森林伐採
	(現在)	不明, 森林伐採

特記事項

キノボリツノゴケ属はツノゴケ類の中で唯一の着生性の属で、ツノゴケ類の多様性を考える上で貴重な存在である。

旧レッドリストカテゴリと掲載名

第4次 2020:	キノボリツノゴケ	<i>Dendroceros japonicus</i> Steph.	CR+EN
第4次 2019:	キノボリツノゴケ	<i>Dendroceros japonicus</i> Steph.	CR+EN
第4次 2018:	キノボリツノゴケ	<i>Dendroceros japonicus</i> Steph.	CR+EN
第4次 2017:	キノボリツノゴケ	<i>Dendroceros japonicus</i> Steph.	CR+EN
第4次 2015:	キノボリツノゴケ	<i>Dendroceros japonicus</i> Steph.	CR+EN
第4次:	キノボリツノゴケ	<i>Dendroceros japonicus</i> Steph.	CR+EN
第3次:	キノボリツノゴケ	<i>Dendroceros japonicus</i> Steph.	CR+EN
第2次:	キノボリツノゴケ	<i>Dendroceros japonicus</i> Steph.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

千葉県[消息不明・絶滅生物(X)] 神奈川県[絶滅(EX)] 三重県[EN] 和歌山県[絶滅危惧 I 類(CR+EN)] 宮崎県[絶滅危惧 I A 類(CR-r)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 有川智己, 2022. コケ植物. 神奈川県環境農政局緑政部自然環境保全課・神奈川県立生命の星・地球博物館編, 神奈川県レッドデータブック 2022 植物編. pp. 328-360. 神奈川県, 横浜
- 古木達郎, 2009. 蘚苔類. 千葉県レッドデータブック改訂委員会(編) 千葉県の保護上重要な野生生物—千葉県レッドデータブック—植物・菌類編(2009年改訂版). pp. 353-380. 千葉県環境生活部自然保護課, 千葉.

- Hasegawa, J., 1980. Taxonomical studies on Asian Anthocerotae II. Some Asian species of *Dendroceros*. J. Hattori Bot. Lab., 47: 287-309.
- 長谷川二郎, 1989. 小笠原諸島のキノボリツノゴケ. 日本蘚苔類学会会報, 5: 8-9.
- 長谷川二郎, 2022. 蘚苔類. In: 宮崎県レッドデータブック改訂・外来種リスト検討委員会 (編), 宮崎県の保護上重要な野生生物. 三訂・宮崎県版レッドデータブック, 2020 年度版. pp. 144-145, 152-159. 宮崎県環境森林部自然環境課, 宮崎.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355 pp., 192 pls. 平凡社, 東京.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Dendroceros japonicus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Dendroceros japonicus* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Unknown, Logging and wood harvesting
Law designation status for conservation	—

執筆者: 片桐知之 (高知大学)
Author: Tomoyuki Katagiri

公表年月: 2025 年 3 月

ゼニゴケ目 Marchantiales ジンガサゴケ科 Aytoniaceae

オキナワサイハイゴケ

Asterella wallichiana (Lehm. & Lindenb.) Grolle

カテゴリー判定結果		準絶滅危惧 (NT)		②
基準 A: —	基準 B: VU 未満	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次の①-④の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 ②生育条件が悪化している。 【判断理由】 沖縄島において、生育地の森林伐採と河川開発によって生育条件が悪化している。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

サイハイゴケ属は葉状体が独特なドクダミ臭を発することから、野外において容易に識別できる葉状苔類である。本種は、本属の中ではアジアでは唯一の雌雄異株であること、偽花被の先端が合着することなどが特徴である。日本では、奄美大島以南の琉球列島の石灰岩地において林内の岩上や沢沿いの湿岩上に生育する。森林伐採や河川開発によって絶滅が危惧されている。

協力者： 山口富美夫（広島大学）

基礎情報

【形態】

植物体は複雑葉状体で、淡～灰緑色、縁がしばしば赤紫色になり、ドクダミ臭があり、長さ 1.2～2.5 cm、幅 1.7～4.5 mm、通気組織は数層、気室孔はアーチ状。腹鱗片の附属物は 1 個で披針形か 2 裂して各々が披針形。無性芽はない。雌器托は葉状体の先端につき、傘状。雌器床（頭部）は全体が 2～5 裂し、中央が盛り上がり、表面は弱い金平糖状になり、目立つ偽花被がある。雄器床は葉状体の先端につき、柄はなく盤状に盛り上がる。無性芽はない。

【生活史】

雌雄異株。胞子は夏から秋に成熟する。

【生育環境】

奄美大島以南の琉球列島において、石灰岩地の林内の岩上や、沢や小中河川の湿岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_平地部】住宅地, 市街緑地, 河川中流域, 農業用水路, 小河川

国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

国内では琉球列島の奄美大島以南の沖縄島、竹富島、宮古島、石垣島、西表島に分布する。国外ではインド、パキスタン、ネパール、ブータン、バングラディシュ、ミャンマー、タイ、中国、台湾、フィリピン、インドネシア（ジャワ島）、ソロモン諸島、パプアニューギニアなどに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

分布域に変化はなく、奄美大島以南の沖縄島、竹富島、宮古島、石垣島、西表島に分布する。

【生育地の現況】

石灰岩地の林内の岩上や沢沿いの湿岩上に生育している。西表島ではかなり広い地域に生育している。沖縄島においては沢沿いの転石上にしばしば大きな群落を形成しているが、森林伐採と河川開発によって生育条件が悪化している。

【個体数の現況】

沖縄島や石垣島では個体数はそれほど多くはないが各所に分布している。西表島では豊富に生育している。

存続を脅かす要因

生育地の森林伐採や河川開発により存続が脅かされている生育地がある。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 河川開発
	(現在)	森林伐採, 河川開発

特記事項

オキナワサイハイゴケは学名を *Asterella liukuensis* (Horik.) Horik. として知られていた。偽花被の先端が合着しないことや雌雄同株であることによって、近縁種と区別されていた。しかし、Long (2006) によって、偽花被の先端は合着し、雌雄性は雌雄同株であると訂正され、*Asterella liukuensis* は *Asterella wallichiana* (Lehm. & Lindenb.) Grolle の同種異名にされた。但し、日本ではしばしば雌雄異株であることがあり、疑問が残っているとされている。

旧レッドリストカテゴリと掲載名

第4次 2020:	オキナワサイハイゴケ	<i>Asterella wallichiana</i> (Lehm. & Lindenb.) Grolle	NT
第4次 2019:	オキナワサイハイゴケ	<i>Asterella wallichiana</i> (Lehm. & Lindenb.) Grolle	NT
第4次 2018:	オキナワサイハイゴケ	<i>Asterella wallichiana</i> (Lehm. & Lindenb.) Grolle	NT
第4次 2017:	オキナワサイハイゴケ	<i>Asterella wallichiana</i> (Lehm. & Lindenb.) Grolle	NT
第4次 2015:	オキナワサイハイゴケ	<i>Asterella wallichiana</i> (Lehm. & Lindenb.) Grolle [= <i>A. liukuensis</i> Horik.]	NT
第4次:	オキナワサイハイゴケ	<i>Asterella wallichiana</i> (Lehm. & Lindenb.) Grolle [= <i>A. liukuensis</i> Horik.]	NT
第3次:	オキナワサイハイゴケ	<i>Asterella wallichiana</i> (Lehm. & Lindenb.) Pande et al. ex Grolle (= <i>A. liukuensis</i> Horik.)	VU
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

沖縄県[準絶滅危惧（NT）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355pp., 192pls. 平凡社, 東京.

- Long, D. G., 2006. Revision of the genus *Asterella* P. Beauv. in Eurasia. Bryophyt. Biblioth., 63: 1-299.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Asterella wallichiana has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Asterella wallichiana* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area Plain】 Residential area, Urban green area, Middle river basin, Agricultural ditch, Small river
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development
Law designation status for conservation	—

執筆者: 古木達郎 (元千葉県立中央博物館)
Author: Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

ヤワラゼニゴケ

Monosolenium tenerum Griff.

カテゴリー判定結果		準絶滅危惧 (NT)		①
基準 A: —	基準 B: VU 未満	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 ①個体数が減少している。 【判断理由】 かつては西南日本の人家付近の栄養分の豊富な地面に生育していた。しかし、生活環境の整備により、減少している				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

本種はゼニゴケ目の中では、葉状体の組織が分化せず、他科との類縁性がほとんどないなど、1 属 1 種で 1 科をなす特異な葉状苔類として知られている。熱帯アジアからに日本にかけて分布し、かつては西南日本の人家付近の栄養分の豊富な地面に生育していた。しかし、生活環境の整備により、減少している。一方、近年、関東地方以南の温室からも見つかっている。また、神社や寺の境内、植物園など、日常的に水撒きされる土上にもしばしば生育している。

基礎情報

【形態】

植物体は鮮緑色で葉状。葉状体は長さ 2～4 cm、幅 5～8 mm、通気組織や同化組織の分化がなく、気室や気室孔はない。無性芽はない。雌器托は傘状。ヤワラゼニゴケ科は 1 属 1 種で、系統的にゼニゴケ目の中で孤立している。油体細胞が散在し、中に大きな油体を 1 つ含むことで、他の葉状苔類から容易に区別できる。

【生活史】

雌雄同株。胞子は春に成熟する。

【生育環境】

畑や水田、人家付近において、窒素分が多い富栄養な土上に生育する。植木の圃場や植物園の温室に生育することもある。

生育環境区分：	【陸域_平地部】湿地・湿原、住宅地、商業・工業施設、農業用水路、小河川、ため池・池沼
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域、(3) 都市地域

【分布域】

熱帯を分布の中心にしており、日本は北限である。国内では関東地方以西、四国、九州、沖縄に分布し、国外ではヒマラヤ、中国、インド、東南アジア、ハワイなどに分布する。国外ではヒマラヤ、中国、ジャワ、インド、ハワイなどに知られている。

現在の生育状況

【分布域の現況】

分布域に大きな変化はないと考えられる。

【生育地の現況】

堆肥場近辺や汲取式便所の付近、水路脇、水田などに生育していたが、生活環境の改善にともない、生育に適した環境が少なくなっている。一方、社寺の境内や、植木の圃場、温室内に生育することが広い地域で確認されている。全国的に人為的な環境に多く、開発により生育環境が悪化している。

【個体数の現況】

どの生育地においても個体数は少ない。個体数の詳細は不明。

存続を脅かす要因

生育地は栄養分が豊富な人為的な環境を好み、年間を通して湿った土上に限られている。乾燥に非常に弱く、生育地の乾燥化によって存続が脅かされている。そのため、河川開発や圃場整備、土地造成など人の活動にともなう環境の改変が存続を脅かす要因である。

要因の区分：	(過去)	河川開発, 圃場整備, 土地造成
	(現在)	河川開発, 圃場整備, 土地造成

特記事項

ゼニゴケ目としては、葉状体に同化組織が分化していない特異な形態を持つ 1 科 1 属 1 種の苔類である。この特徴により外見がゼニゴケに酷似するために、野外では見過ごされている可能性がある。また、近年、アクアリムの水草として知られる東南アジア産の *Pellia* (または *Pelia*) moss は本種のことであり、欧州から北米に広がり、日本ではモスファンとして販売されていることもある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ヤワラゼニゴケ	<i>Monosolenium tenerum</i> Griff.	VU
第4次 2019:	ヤワラゼニゴケ	<i>Monosolenium tenerum</i> Griff.	VU
第4次 2018:	ヤワラゼニゴケ	<i>Monosolenium tenerum</i> Griff.	VU
第4次 2017:	ヤワラゼニゴケ	<i>Monosolenium tenerum</i> Griff.	VU
第4次 2015:	ヤワラゼニゴケ	<i>Monosolenium tenerum</i> Griff.	VU
第4次:	ヤワラゼニゴケ	<i>Monosolenium tenerum</i> Griff.	VU
第3次:	ヤワラゼニゴケ	<i>Monosolenium tenerum</i> Griff.	VU
第2次:	ヤワラゼニゴケ	<i>Monosolenium tenerum</i> Griff.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

千葉県[最重要・重要保護生物 (A-B)] 京都府[要注目種] 大阪府[NT] 奈良県[希少種] 島根県[情報不足 (DD)] 広島県[絶滅危惧Ⅱ類 (VU)] 愛媛県[要注意種] 宮崎県[準絶滅危惧 (NT-g)] 沖縄県[絶滅危惧Ⅱ類 (VU)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Hattori, S., 1942. Notulae de Hepaticis Japonicis (II). J. Jpn. Bot., 18: 66-77.
- Higuchi, M. and T. Furuki, 2014. Bryophytes of the Imperial Palace. Tokyo. Mem. Natl. Mus. Nat. Sci., Tokyo, 49: 49-62.
- 井上 浩, 1976. 続・日本産苔類図鑑. 193pp. 築地書館, 東京.

- 岩月善之助・出口博則・古木達郎，2001．日本の野生植物コケ．355pp., 192pls. 平凡社，東京．

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Monosolenium tenerum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Monosolenium tenerum* is listed as NT under criteria ①.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area Plain】 Wetland, Residential area, Commercial area/Industrial area, Agricultural ditch, Small river, Reservoir/Pond
Threat types:	River development, Field preparation, Land development
Law designation status for conservation	—

執筆者: 古木達郎 (元千葉県立中央博物館)
Author: Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

イチヨウウキゴケ

Ricciocarpos natans (L.) Corda

カテゴリー判定結果 準絶滅危惧 (NT)

②

基準 A: VU 未満	基準 B: VU 未満	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —

生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。

②生育条件が悪化している。

【判断理由】

本種は主に、水田や、用排水路、農業用ため池、菖蒲田に生育している。本種の生育環境が悪化している主な要因は、水田の面積の減少による生育環境の消失であると考えられる。農林水産省（2020）のデータに基づき、2010 年と 2020 年における水稻の作付面積を比較したところ、減少率は 10%だった。本種は必ずしも水田にのみ生育しているわけではなく、すべての水田に生育していることもないが、水稻の作付面積の減少から、生育環境そのものが減少傾向であることが明らかである。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

本種は複雑葉状性のタイ類の仲間であるが、葉状体が退化し、組織分化がやや不明瞭である。葉状体は二叉状に分枝し、イチヨウの葉に似た形になり、水面に浮遊することからイチヨウウキゴケと呼ばれている。また、湿った土上にも生育し、ウキゴケ属の葉状体に類似する口ゼットを作ることもある。全国の水田やため池、農業用水路などに生育しているが、昭和 30 年代以降の水田やため池の減少や稲作の農法の変化のために、生育地面積が減少し、個体数も減少している。現時点では絶滅危険度は小さいが、状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断される。

基礎情報

【形態】

植物体は複雑葉状であるが組織の分化が不明瞭、二叉状に分枝する。葉状体は生育環境によって2型を示す。水面に浮遊するとイチヨウの葉のような形になり、湿った地面に生育するとハタケゴケ属に類似する口ゼット状になる。葉状体は黄緑から緑色、秋から冬に紫色に紅葉し、1～1.5 cm、幅4～8 mm、気室は数層、気室孔は不明瞭、背面に明瞭な溝がある。腹鱗片は紫色で長く、リボン状をなし、縁に微鋸歯があり、浮遊型では顕著に大きくなる。雌器托と雄器托は発達せず、造卵器と造精器は葉状体の溝の内部に埋もれる。胞子体は水面に浮遊する個体だけに形成される。無性芽はない。

【生活史】

雌雄同株。胞子は初夏から晩秋に成熟し、繁殖している。本質的には多年生であるが、一年生的な生活史となることがある。

【生育環境】

水田やため池、用水路などの水の表面に浮遊するか、湿った土上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】田地・畑地 【陸域_平地部】田地・畑地, 湿地・湿原, 農業用水路, 小河川, ため池・池沼
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

北海道、本州、四国、九州、琉球列島。汎世界的に分布。

現在の生育状況

【分布域の現況】

全国に分布し、分布域の拡大・減少については過去の状況を示す情報は少ないが、現在と大きな差はないと思われる。

【生育地の現況】

主に水田やため池、用水路、河川の氾濫原などに生育している。昭和30年代以降、生育地は開発や整備のために、消失ないし、生育環境が改変されつつある。更に、稲作の作付面積の減少に伴い、生育地が減少している。しかし、まだ多くの産地が発見されたため、直ぐに絶滅する恐れは少ない。

【個体数の現況】

本種の生育数に関する詳細なデータはほとんどないが、以下の理由により、個体数の減少が推測される。

- ・水田の耕作面積の継続的な減少に伴い、生育地の継続的な面積の減少。
- ・近年、冬の乾田化により越冬できない個体が確認されている。
- ・刈り取ったイネを細かく切り、水田に播かれることが多く、越冬できない個体が確認されている。

存続を脅かす要因

日本では主に水田やため池などに生育しているが、昭和 30 年代以降の稲作の減少に伴う生育地の減少と農法の変化に伴う生育環境の改変などにより、生育数が減少していると推論され、生育が脅かされている。

要因の区分：	(過去)	湖沼開発, 河川開発, 湿地開発, 圃場整備, 管理放棄
	(現在)	湖沼開発, 河川開発, 湿地開発, 圃場整備, 管理放棄

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	イチヨウウキゴケ	<i>Ricciocarpos natans</i> (L.) Corda	NT
第4次 2019:	イチヨウウキゴケ	<i>Ricciocarpos natans</i> (L.) Corda	NT
第4次 2018:	イチヨウウキゴケ	<i>Ricciocarpos natans</i> (L.) Corda	NT
第4次 2017:	イチヨウウキゴケ	<i>Ricciocarpos natans</i> (L.) Corda	NT
第4次 2015:	イチヨウウキゴケ	<i>Ricciocarpos natans</i> (L.) Corda	NT
第4次:	イチヨウウキゴケ	<i>Ricciocarpos natans</i> (L.) Corda	NT
第3次:	イチヨウウキゴケ	<i>Ricciocarpos natans</i> (L.) Corda	NT
第2次:	イチヨウウキゴケ	<i>Ricciocarpos natans</i> (L.) Corda	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

青森県[重要希少野生生物（B ランク）] 宮城県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 秋田県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 山形県[NT] 福島県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 栃木県[要注目] 埼玉県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 千葉県[一般保護生物（D）] 神奈川県[準絶滅危惧（NT）] 新潟県[準絶滅危惧（NT）] 富山県[準絶滅危惧] 長野県[留意種（N）] 三重県[NT] 滋賀県[その他重要種] 京都府[要注目種] 大阪府[DD] 和歌山県[準絶滅危惧（NT）] 鳥取県[準絶滅危惧（NT）] 島根県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 岡山県[準絶滅危惧] 広島県[準絶滅危惧（NT）] 山口県[準絶滅危惧（NT）] 愛媛県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 長崎県[準絶滅危惧種（NT）] 熊本県[準絶滅危惧（NT）] 大分県[絶滅危惧ⅠB類（EN）] 宮崎県[準絶滅危惧（NT-g）] 沖縄県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 古木達郎, 2020. 新・コケ百選 第21回ウキゴケ科. 蘚苔類研究, 12: 106-117.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355pp., 192pls. 平凡社, 東京.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Ricciocarpos natans has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Ricciocarpos natans* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Farmland 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】 Farmland, Wetland, Agricultural ditch, Small river, Reservoir/Pond
Threat types:	Lake development, River development, Wetland development, Field preparation, Abandonment of management
Law designation status for conservation	—

執筆者: 古木達郎 (元千葉県立中央博物館)
Author: Tatsuwo Furuki

公表年月: 2025 年 3 月

タチクモマゴケ

Anastrepta orcadensis (Hook.) Schiffn.

カテゴリー判定結果		準絶滅危惧 (NT)		①
基準 A: —	基準 B: VU 未満	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 ①個体数が減少している。 【判断理由】 八ヶ岳は登山道上の踏みつけ、乾燥化により減少傾向にある。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

本種は葉の腹縁基部が外曲し、全体的に背面側に凸状になることを特徴とするアミバゴケ科の単型属である茎葉状苔類である。欧米やヒマラヤなどに不連続に分布し、国内では関東地方と中部地方の高山に知られているが、生育数が少なく、登山者の影響や生育地の乾燥化により生育数が減少している。

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉状、褐色、斜上し、長さ 5 cm、幅約 2 mm。葉は斜めにつくが、腹縁基部が横につき、強く外曲するため、葉全体が背側に凸面状になることを特徴とする単型属。腹葉は小さくて痕跡的。無性芽は 1~2 細胞性で角のある楕円体。

【生活史】

雌雄異株。国内では造精器や造卵器、孢子体は見つかっていない。無性芽はまれである。

【生育環境】

高山帯においてハイマツ林やダケカンバ林などの林床に生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地】森林, 草地

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では、本州中部の山岳地帯に分布している。国外ではヒマラヤ、東アジア、北米西部、欧州西部などに不連続に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

尾瀬（群馬県）、秩父山地（長野県）、八ヶ岳赤岳・横岳（長野県）、南アルプス荒川岳（静岡県）、南アルプス甲斐駒ヶ岳（山梨県・長野県）、南アルプス仙丈岳（長野県）、南アルプス塩見岳（長野県）、南アルプス赤石岳（静岡県）、南アルプス聖岳（静岡県）、南アルプス似田（静岡県）、木曽駒ヶ岳（長野県）、北アルプス燕岳（長野県）、北アルプス白馬岳（長野県）、北アルプス立山（富山県）から報告されているが、詳細が不明な生育地が多い。しかし、尾瀬や八ヶ岳、南アルプス、北アルプスでは生育が確認されており、分布域に大きな変化はないと推定される。

【生育地の現況】

過去に、登山者の増加などの影響により絶滅した生育地があったが、多くの生育地に大きな生育環境の変化はない。

【個体数の現況】

八ヶ岳の個体数は、登山道上の踏みつけや乾燥化により減少傾向にある。多くの生育地では個体数の増減は不明であるが、生育地の現況から判断して、大きな変動はないと推定される。

存続を脅かす要因

八ヶ岳では、登山者による影響や、生育地の乾燥化により生育数が減少している。

要因の区分：	(過去)	不明, 気候変動
	(現在)	不明

特記事項

本種のみを含む単型属で、系統学的に重要な種である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	タチクモマゴケ	<i>Anastrepta orcadensis</i> (Hook.) Schiffn.	VU
第4次 2019:	タチクモマゴケ	<i>Anastrepta orcadensis</i> (Hook.) Schiffn.	VU
第4次 2018:	タチクモマゴケ	<i>Anastrepta orcadensis</i> (Hook.) Schiffn.	VU
第4次 2017:	タチクモマゴケ	<i>Anastrepta orcadensis</i> (Hook.) Schiffn.	VU
第4次 2015:	タチクモマゴケ	<i>Anastrepta orcadensis</i> (Hook.) Schiffn.	VU
第4次:	タチクモマゴケ	<i>Anastrepta orcadensis</i> (Hook.) Schiffn.	VU
第3次:	タチクモマゴケ	<i>Anastrepta orcadensis</i> (Hook.) Schiffn.	VU
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

富山県[情報不足] 長野県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355pp., 192pls. 平凡社, 東京.
- Kitagawa, N., 1966. A revision of the family Lophoziaceae of Japan and its adjacent regions, II. J. Hattori Bot. Lab., 29: 101-149.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Anastrepta orcadensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Anastrepta orcadensis* is listed as NT under criteria ①.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat

status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area】 Forest, Grassland
Threat types:	Unknown, Climate change
Law designation status for conservation	—

執筆者:	古木達郎（元千葉県立中央博物館）
Author:	Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

イイシバヤバネゴケ

Odontoschisma jishibae (Steph.) L.Söderstr. & Vána

カテゴリー判定結果 準絶滅危惧 (NT)

②

基準 A: —

基準 B: VU 未満

基準 C: —

基準 D: —

基準 E: —

生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。

②生育条件が悪化している。

【判断理由】

屋久島の個体群は比較的安定しているが、それ以外の本州各地の個体群は森林の乾燥化によって生育環境が悪化していることが予想される。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

本種は分類学的にツボミゴケ科やコヤバネゴケ科とも類縁があると言われていたが、分子系統学的研究の結果、クチキゴケ属にされた特異な茎葉状苔類。アジアと中米にも知られ、奇妙な分布域を示す。日本では、おもに亜高山帯域に分布し、スギやシラビソの樹幹や倒木を好み生育している。森林伐採や乾燥化により、減少している。

基礎情報

【形態】

植物体は白緑色で茎葉状、長さ 1～3 cm、しばしば茎の先端は鞭糸状に伸びる。分枝はムチゴケ型。葉は茎に横につき、瓦状に重なり、卵形、1/2 まで 2 裂し、切れ込みは鋭く、狭く、裂片は鋭突～鈍頭、全縁。葉細胞は小さく、厚壁でトリゴンは不明瞭、表面にベルカがある。腹葉は微小、2～6 細胞からなり、稀に 2 裂する。無性芽はない。雌花は短腹枝につき、苞葉は大きく、卵形、花被は卵形、緩い 3 褶。雄枝は長枝の途中につき、雄苞葉は数対。

【生活史】

雌雄異株。胞子は春から夏に成熟する。

【生育環境】

山地のスギや亜高山性針葉樹の自然林において、主に針葉樹の樹幹に生育する。亜高山帯では、倒木上に藻類と混生していることが多い。

生育環境区分：	【陸域_高標高地 中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では本州（岩手県以南に点在）、四国、九州、屋久島に分布する。国外では韓国、ヒマラヤ、タイ、マレーシア（ボルネオ）、セーシェル、レユニオン、モーリシャス、ニューギニア、シベリア、コスタリカ、ロシア（シベリア、セイアン山脈）などに不連続に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

岩手県（早池峰山）や栃木県（日光）、奈良県（金剛山、大台ヶ原、釈迦ヶ岳など）、三重県（大台ヶ原）、兵庫県（船越山）、高知県（安芸郡柳瀬）、鹿児島県（屋久島）に生育している。また、以前生育が確認されていた埼玉県（秩父）や東京都（奥多摩）、長野県（ハヶ岳）、岐阜県（御岳山）、熊本県では不明である。

【生育地の現況】

生育基物の倒木が山小屋に使用されることで減少している産地や、シカの食害により荒れている産地、生育地の乾燥化が進んでいる産地がある。

【個体数の現況】

屋久島においては、比較的良好に生育しているが、他の地域では個体数が少ない。個体数の詳細は不明。

存続を脅かす要因

森林伐採や乾燥化などによる生育環境の悪化により減少している。長野県では針葉樹倒木の利用によって生育基物の消失による減少が確認されている。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 基質・基物の減少及び消失 , 気候変動
	(現在)	森林伐採, 基質・基物の減少及び消失

特記事項

1924 年に長野県の標本を基に、新種として記載された。本種は系統学的に注目されていたが、近年の分子系統学的な研究によりクチキゴケ属 *Odontoschisma* に移された。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	イシバヤバネゴケ	<i>Iwatsukia jishibae</i> (Steph.) N.Kitag.	VU
第4次 2019:	イシバヤバネゴケ	<i>Iwatsukia jishibae</i> (Steph.) N.Kitag.	VU
第4次 2018:	イシバヤバネゴケ	<i>Iwatsukia jishibae</i> (Steph.) N.Kitag.	VU
第4次 2017:	イシバヤバネゴケ	<i>Iwatsukia jishibae</i> (Steph.) N.Kitag.	VU
第4次 2015:	イシバヤバネゴケ	<i>Iwatsukia jishibae</i> (Steph.) N.Kitag.	VU
第4次:	イシバヤバネゴケ	<i>Iwatsukia jishibae</i> (Steph.) N.Kitag.	VU
第3次:	イシバヤバネゴケ	<i>Iwatsukia jishibae</i> (Steph.) N.Kitag.	CR+EN
第2次:	イシバヤバネゴケ	<i>Iwatsukia jishibae</i> (Steph.) N. Kitag.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

栃木県[絶滅危惧Ⅱ類（B ランク）] 長野県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 兵庫県[A ランク] 奈良県[絶滅危惧種]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Grandstein, S. R., S. C. Aranda and A. Vanderpoorten, 2014. Notes on early plants today. 47. Transfer of *Iwatsukia* to *Odontoschisma* (Cephaloziaceae, Marchantiophyta). *Phytotaxa*, 162: 232-233.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355pp., 192pls. 平凡社, 東京.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Odontoschisma jishibae has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Odontoschisma jishibae* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Reduction or loss of substrate, Climate change
Law designation status for conservation	—

執筆者: 古木達郎 (元千葉県立中央博物館)
Author: Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

キレハヤバネゴケ

Cephaloziella massalongii (Spruce) Müll.Frib.

カテゴリー判定結果 準絶滅危惧 (NT)

②

基準 A: —

基準 B: VU 未満

基準 C: —

基準 D: —

基準 E: —

生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。

②生育条件が悪化している。

【判断理由】

長野県八ヶ岳においては、本種の生育が確認されていた崖が維管束植物で覆われ、本種の生育に適した生育環境が激減している。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

キレハヤバネゴケは重金属イオンの濃度が高い環境を好むことが知られており、欧州と北アメリカの大西洋岸、ネパール、日本に分布している茎葉状苔類である。国内では八ヶ岳山麓と支笏湖畔の2か所に知られており、八ヶ岳では鉄イオンの濃度が高いことが知られている。両地域では生育立地が変化しており、生育条件が悪化し、個体数が減少している。

基礎情報

【形態】

植物体は匍匐し、葉は瓦状に重なり、葉長の $\frac{2}{3}$ ～ $\frac{4}{5}$ まで深く 2 裂し、葉縁に大きな 1 細胞性の鋸歯あり、腹葉は多様、舌状～鱗片状、先がしばしば 2 裂する。花被は主茎か腹短枝の先端に付き、口が刺状である、

【生活史】

雌雄同株。胞子は夏季に成熟する。無性芽は豊富である。

【生育環境】

本種は鉄や銅などを含む生育基物に生育することが知られており、北海道では土石流によって侵食された凝灰岩質の回廊状の峡谷の崖に生育し、長野県では落葉樹林内を流れる河川上流において、水流によって削られた河岸の崖に生育している。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】河川上流域

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では、北海道及び長野県に分布する。国外では、欧州、北米の大西洋岸地域に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

北海道支笏湖畔は崖の崩壊により立ち入りできないため、現在は不明であり、1992 年以降には確認されていない。長野県八ヶ岳山麓では、近年の調査においては生育が確認されていない。

【生育地の現況】

北海道においては、生育地の崖の崩落により、立ち入り禁止のため、生育状況は不明。長野県八ヶ岳においてはミズナラ林内を流れる河川の垂直の崖に生育していた。生育は水流によって削られてできる不安定な垂直面だった。しかし、近年、橋の建設等に伴い、流路が安定し、生育していた崖が維管束植物で覆われており、本種の生育に適した生育環境が激減している。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

生育基物の崩壊や他の植物による被覆などのため、減少及び消失が懸念される。

要因の区分：	(過去)	遷移進行・植生変化/自然遷移, 分布・産地局限, 基質・基物の減少及び消失

	(現在)	分布・産地局限

特記事項

本種は重金属イオンの濃度が高い環境を好むことが知られており (Schuster 1980)、八ヶ岳では生育地の環境から鉄イオンの濃度が高いと推測されている (Furuki & Inoue 1984, 古木 1992)。

旧レッドリストカテゴリと掲載名

第4次 2020:	—	—	—
第4次 2019:	—	—	—
第4次 2018:	—	—	—
第4次 2017:	—	—	—
第4次 2015:	—	—	—
第4次:	—	—	—
第3次:	—	—	—
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況 (令和4年度末時点)

長野県[絶滅危惧 I 類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況 (令和4年度末時点)

指定なし

参考文献

- Furuki, T. & H. Inoue, 1984. The Hepaticae and Anthocerotae of the Mts. Yatsugatake, central Japan. Bull. Natl. Sci. Mus., Tokyo, Ser. B (Bot.), 10: 1-25.
- 古木達郎, 1992. 日本産コヤバネゴケ属について. 日本蘚苔類学会会報, 5: 155-158.
- Schuster, R. M., 1980. The Hepaticae and Anthocerotae of North America 4. Columbia University Press, New York. xviii+1334 pp

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Cephaloziella massalongii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Cephaloziella massalongii* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area Low-altitude area】 Upper river basin
Threat types:	Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Limited distribution, Reduction or loss of substrate
Law designation status for conservation	—

執筆者: 古木達郎 (元千葉県立中央博物館)

Author: Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

チチブイチョウゴケ

Acrobolbus ciliatus (Mitt.) Schiffn.

カテゴリー判定結果		準絶滅危惧 (NT)		①②	
基準 A: —	基準 B: VU 未満	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 ①個体数が減少している。 【判断理由】 埼玉県や愛媛県、高知県、宮崎県では近年生育が確認できない ②生育条件が悪化している。 【判断理由】 多くの生育地が乾燥化しており生育条件が悪化していると思われる。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

本種は葉が2裂し、縁に仮根状の毛を持つことを特徴とする茎葉状苔類。東アジアとニューギニア、北アメリカ東部に不連続に分布し、国内では雄株しか分布しないことから遺存的な種であると考えられており、国内ではおもに古生層地域に分布する。森林伐採や河川開発、乾燥化により、産地数や生育数が減少している。

基礎情報

【形態】

植物体は匍匐し、淡緑色、茎葉状、長さ 1～1.5 cm、幅 1.5～2.5 mm。葉は瓦状に離れないし接在、先端から約 1/2 まで 2 裂し、裂片の先端は鋭頭～鈍頭、腹葉は痕跡的。細胞表面にベルカがある。油体は 1 細胞に 5～8 個、単粒。無性芽はない。雄苞葉は茎の途中につき、基部が腕状に膨れる。葉縁に仮根状の毛があることで、容易に識別できる。

【生活史】

雌雄異株。国内では雌株が見つからない。

【生育環境】

落葉広葉樹や亜高山性針葉樹の自然林において、岩上に生育し、全国のおもに古生層地域に分布する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林, 河川源流域, 河川上流域

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では本州（関東地方～紀伊半島： 埼玉県、東京都、神奈川県、山梨県、岐阜県、三重県、奈良県）、四国（愛媛県、高知県）、九州（熊本県、宮崎県）から報告されており、国外ではヒマラヤ、ニューギニア、中国、アリューシャン列島、北米東部などに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

埼玉県や愛媛県、高知県、宮崎県では、近年、生育が確認できない産地が多い。東京都では御嶽山ではわずかに生育しているが、他の生育地では不明である。神奈川県、山梨県、岐阜県、三重県、奈良県、熊本県では生育が確認できない産地があり、多くの産地においても個体数が少なく、減少傾向が見られる。

【生育地の現況】

森林伐採や河川開発、石灰採掘などにより生育が脅かされている。

【個体数の現況】

不明。

存続を脅かす要因

多くの産地において森林伐採や河川開発、石灰採掘、気候変動などの影響により生育地が乾燥し、影響を受けている。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 河川開発, 石灰採掘, 分布・産地局限, 気候変動
	(現在)	森林伐採, 河川開発, 石灰採掘, 分布・産地局限

特記事項

チチブイチョウゴケ属としては日本に産する唯一の種である。同属の他種は近隣国には分布せず、南半球に20数種が知られている。世界における分布や国内には雄株しか分布しないことから遺存的な種であると見なされている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	チチブイチョウゴケ	<i>Acrobolbus ciliatus</i> (Mitt.) Schiffn.	VU
第4次 2019:	チチブイチョウゴケ	<i>Acrobolbus ciliatus</i> (Mitt.) Schiffn.	VU
第4次 2018:	チチブイチョウゴケ	<i>Acrobolbus ciliatus</i> (Mitt.) Schiffn.	VU
第4次 2017:	チチブイチョウゴケ	<i>Acrobolbus ciliatus</i> (Mitt.) Schiffn.	VU
第4次 2015:	チチブイチョウゴケ	<i>Acrobolbus ciliatus</i> (Mitt.) Schiffn.	VU
第4次:	チチブイチョウゴケ	<i>Acrobolbus ciliatus</i> (Mitt.) Schiffn.	VU
第3次:	チチブイチョウゴケ	<i>Acrobolbus ciliatus</i> (Mitt.) Schiffn.	VU
第2次:	チチブイチョウゴケ (チチブイチョウウ 口コゴケ)	<i>Acrobolbus ciliatus</i> (Mitt.) Schiffn. Syn. <i>A.</i> <i>titibuensis</i> (Hatt.) Hatt.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

埼玉県[絶滅危惧Ⅰ類(CE)] 神奈川県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 三重県[絶滅危惧Ⅱ類(EN)]
奈良県[絶滅危惧種] 愛媛県[情報不足(DD)] 宮崎県[絶滅危惧Ⅱ類(VU-r)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 井上 浩, 1974. 日本産苔類図鑑. 189pp. 築地書館, 東京.
- 岩月善之助・水谷正美, 1972. 原色日本蘚苔類図鑑. 405pp., 48pls. 保育社, 大阪.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355pp., 192pls. 平凡社, 東京.
- Kitagawa, N., 1966. A revision of the family Lophoziaaceae of Japan and its adjacent regions, II. J. Hattori Bot. Lab., 29: 101-149.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Acrobolbus ciliatus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition.

Acrobolbus ciliatus is listed as NT under criteria ①②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area Low-altitude area】 Forest, River headwater, Upper river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development, Limestone mining, Limited distribution, Climate change
Law designation status for conservation	—

執筆者: 古木達郎 (元千葉県立中央博物館)
Author: Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

ヒラウロコゴケ

Nardia compressa (Hook.) Gray

カテゴリー判定結果		準絶滅危惧 (NT)		①
基準 A: —	基準 B: VU 未満	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 ①個体数が減少している。 【判断理由】 秋田県鳥海山の一部の地域では生育数の減少傾向が確認される。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

本種は腎臓形の葉が茎に圧接してつくことで野外でも容易に識別できる茎葉状苔類。アルミニウムや鉄などの金属イオンを豊富に含む強酸性河川の水中に生育している。北半球にまれに知られ、国内では数か所の山から知られている。特殊な生育環境であり、比較的安定しているが、わずかな環境の変化により減少するおそれがある。

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉状、緑色、水中に斜上し、長さ数 cm になり、幅約 2～3 mm。腎臓形の葉が茎の左右に圧接することで識別される。腹葉は小さく目立たない。無性芽はない。

【生活史】

国内では造精子器や造卵器、胞子体は見つかっていない。

【生育環境】

落葉樹林や亜高山帯針葉樹林において、強酸性の河川流域や湧水による水中に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】湿地・湿原・細流

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では焼石連峰（岩手県）、鳥海山（秋田県、山形県）、吾妻連峰（福島県）、鷲羽岳（富山県）及び黒部五郎岳（富山県）に知られている。国外では欧米や中国など北半球の冷温帯に不連続に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

鳥海山、吾妻連峰において生育が確認されているが、他では現状不明である。

【生育地の現況】

生育環境に大きな変化はないと考えられる。

【個体数の現況】

鳥海山では広範囲に群落を形成しており豊富であるが、一部に減少がみられる。他の産地では個体数の現況は不明である。

存続を脅かす要因

産地が局限しており、非常に特殊な生育環境であることから、何らかの影響による水環境の変化が危惧される。

要因の区分：	（過去）	分布・産地局限, その他（酸性水域）
	（現在）	分布・産地局限, その他（酸性水域）

特記事項

アルミニウムなど金属イオンの濃度が高い、酸性水域の水中に生育するという特殊な環境条件を必要としている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ヒラウロコゴケ	<i>Nardia compressa</i> (Hook.) Gray	VU
第4次 2019:	ヒラウロコゴケ	<i>Nardia compressa</i> (Hook.) Gray	VU
第4次 2018:	ヒラウロコゴケ	<i>Nardia compressa</i> (Hook.) Gray	VU
第4次 2017:	ヒラウロコゴケ	<i>Nardia compressa</i> (Hook.) Gray	VU
第4次 2015:	ヒラウロコゴケ	<i>Nardia compressa</i> (Hook.) Gray	VU
第4次:	ヒラウロコゴケ	<i>Nardia compressa</i> (Hook.) Gray	VU
第3次:	ヒラウロコゴケ	<i>Nardia compressa</i> (Hook.) Gray	VU
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

秋田県[絶滅危惧種 I 類(CR+EN)] 山形県[CR+EN] 福島県[絶滅危惧 I 類(CR+EN)] 富山県[情報不足]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Amakawa, T., 1959. Family Jungermanniaceae of Japan. I. J. Hattori Bot. Lab., 21: 248-291.
- 福島県植物誌編さん委員会（編），1987. 福島県植物誌. 481 pp. 福島県植物誌編さん委員会，いわき.
- 本田啓七，1963. 日本アルプスの水辺のミズゴケ類と苔類. 蘚苔地衣雑報，3: 40.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Nardia compressa has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Nardia compressa* is listed as NT under criteria ①.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Wetland/Marsh/Stream

Threat types:	Limited distribution, Other (酸性水域)
Law designation status for conservation	—



©古木達郎 (元千葉県立中央博物館)

執筆者:	古木達郎 (元千葉県立中央博物館)
Author:	Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

イギイチョウゴケ

Mesoptychia igiana (S.Hatt.) L.Söderstr. & Vána

カテゴリー判定結果 準絶滅危惧 (NT) ②				
基準 A: —	基準 B: VU 未満	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 ②生育条件が悪化している。 【判断理由】 生育地の乾燥化によって、本種の一部の生育地は減少傾向であることが確認されている。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

本種は、1956 年に徳島県から新種として報告されて以来、全国数か所の石灰岩地に知られ、近年は中国からも報告されている。生育地における森林伐採や観光、石灰岩の採掘などにより、生育地が少なくなり、生育が脅かされている。

基礎情報

【形態】

植物体は匍匐し、緑色、茎葉状、長さ 7 mm、幅 0.8～1.2 mm。葉は瓦状に接在、先端から 1/5～1/4 まで 2 裂し、裂片は鋭頭、全縁。腹葉は小さい。葉身細胞の表面にベルカがある。無性芽はない。雌花は茎に頂生、雌苞葉と腹苞葉はそれぞれ葉、腹葉と似るが大きい。花被は円筒形。雄苞葉は茎の途中につく。

【生活史】

雌雄異株。胞子の成熟時期は不明である。

【生育環境】

落葉広葉樹や亜高山性針葉樹の自然林の石灰岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では本州（関東以西）、四国に分布し、国外では中国に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

現在埼玉県や山梨県、長野県、奈良県、岡山県、徳島県、高知県などで生育が確認されるが、各地の生育範囲が狭く、生育量が少ない。

【生育地の現況】

生育環境の乾燥化や石灰採掘により、生育数が減少している生育地がある。

【個体数の現況】

生育面積が減少しており、数も減少していると推測されるが個体数は不明。

存続を脅かす要因

石灰採掘や生育地の乾燥化により、生育量が減少している。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 石灰採掘
	(現在)	石灰採掘

特記事項

1956 年に徳島県産の標本に基づき新種として記載された。日本固有と考えられていたが、最近、中国から報告された。近年の分子系統学的な研究結果、*Mesoptychia* 属とされた (Váňa et al., 2012)。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	イギイチョウゴケ	<i>Leiocolea igiana</i> (S.Hatt.) Inoue	VU
第4次 2019:	イギイチョウゴケ	<i>Leiocolea igiana</i> (S.Hatt.) Inoue	VU
第4次 2018:	イギイチョウゴケ	<i>Leiocolea igiana</i> (S.Hatt.) Inoue	VU
第4次 2017:	イギイチョウゴケ	<i>Leiocolea igiana</i> (S.Hatt.) Inoue	VU
第4次 2015:	イギイチョウゴケ	<i>Leiocolea igiana</i> (S.Hatt.) Inoue [= <i>Lophozia igiana</i> S.Hatt.]	VU
第4次:	イギイチョウゴケ	<i>Leiocolea igiana</i> (S.Hatt.) Inoue [= <i>Lophozia igiana</i> S.Hatt.]	VU
第3次:	イギイチョウゴケ	<i>Leiocolea igiana</i> (S.Hatt.) Inoue (= <i>Lophozia igiana</i> S.Hatt.)	VU
第2次:	イギイチョウゴケ (イギイチョウウロコゴケ)	<i>Lophozia igiana</i> Hatt.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

埼玉県[絶滅危惧Ⅰ類(CE)] 長野県[絶滅危惧Ⅱ類(VU)] 奈良県[絶滅寸前種] 岡山県[絶滅危惧Ⅰ類]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Institute Botanicum Kunmingense Academiae Sinicae (ed.), 2000. Flora Yunnanica, 17. Bryophyta: Hepaticae, Anthocerotae. Science Press, Beijing. 650pp
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355pp., 192pls. 平凡社, 東京.
- Kitagawa, N., 1966. A revision of the family Lophoziaceae of Japan and its adjacent regions, II. J. Hattori Bot. Lab., 29: 101-149.
- 榊崎浩亮・片桐知之, 2010. 北岳・間の岳の苔類. 増沢武弘（編）, 南アルプス 地形と生物. pp. 257-276, 静岡県, 静岡.
- Váňa, J., L. Söderström, A. Hagborg and M. von Konrat, 2012. Notes on early land plants today 8. New combinations and some lectotypifications in *Mesoptychia*. Phytotaxa, 65: 52-56.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Mesoptychia igiana has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Mesoptychia igiana* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limestone mining
Law designation status for conservation	—

執筆者:	古木達郎 (元千葉県立中央博物館)
Author:	Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

ハンデルソロイゴケ

Solenostoma handelii (Schiffn.) Müll.Frib.

カテゴリー判定結果		準絶滅危惧 (NT)		②
基準 A: —	基準 B: VU 未満	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 ②生育条件が悪化している。 【判断理由】 一部の産地においては、生育環境の悪化が懸念されるが、絶滅のおそれがあるほどの悪化は認められない。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

本種は鉄やアルミニウムによる強酸性河川の流域にできた湿地の水中や水際に生育している特異な茎葉状苔類。世界的にも珍しい種で不連続に分布しており、国内でも 3 か所にしか生育していないが、保護地域内にあり、比較的安定している。

協力者： 太田正文（元青森県立郷土館）

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉状、黄緑色、水中に斜上し、長さ数 cm になり、幅 1～2 mm。葉は斜めにつき、広卵形、全縁、円頭。腹葉はない。無性芽はない。花被は紡錘形で 3 稜。葉が大きな細胞で縁取られ、各葉身細胞に均質で大きな油体を 2 個含むことで近縁種と区別される。

【生活史】

雌雄異株。国内では孢子体は見つかっていない。

【生育環境】

ブナや亜高山針葉樹の自然林において、鉄やアルミニウムによる強酸性河川の流域にできた湿地の水中や水際に生育している。

生育環境区分：	【陸域_高標高地 中標高地】湿地・湿原・細流

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (4) 河川・湿地地域

【分布域】

国内では鳥海山秋田県側、八ヶ岳長野県側に分布することが知られていたが、近年青森県大鰐町茶臼山においても確認された。国外ではスペイン、地中海、中国などに不連続に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

分布域に大きな変化はないと考えられる。

【生育地の現況】

八ヶ岳では生育地が登山ルート上にあるため、整備や登山者による踏みつけにより、影響を受けている。その他の地域では、生育環境に大きな変化はないと考えられる。

【個体数の現況】

青森県大鰐町では鉄イオンが多く含まれると思われる小川の水辺に微量が生育している。秋田県にかほ市ではブナ林においてアルミニウムイオンの濃度が高い湧水による強酸性水域の小川や湿地に豊富に生育している。八ヶ岳では亜高山帯針葉樹林において鉄イオンの濃度が高い水域にわずかに生育している。いずれの生育地においても大きな変化は確認されていない。

存続を脅かす要因

産地は局限しており、湿原は河川の流れの影響を受け易い。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限, その他 (鉄やアルミニウムなどの重金属イオン濃度が高い水域)

	(現在)	分布・産地局限, その他(鉄やアルミニウムなどの重金属イオン濃度が高い水域)

特記事項

学名は、*Jungermannia handelii* (Schiffn.) Amakawa とされていたが、近年の分子系統学的研究の結果、本属にされた。分布が不連続であり、欧州でも絶滅危惧種に指定されている。鉄やアルミニウムなど金属イオンの濃度が高い、酸性水域の水中に生育するという特殊な環境条件を必要としている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ハンデルソロイゴケ	<i>Solenostoma handelii</i> (Schiffn.) Müll.Frib.	VU
第4次 2019:	ハンデルソロイゴケ	<i>Solenostoma handelii</i> (Schiffn.) Müll.Frib.	VU
第4次 2018:	ハンデルソロイゴケ	<i>Solenostoma handelii</i> (Schiffn.) Müll.Frib.	VU
第4次 2017:	ハンデルソロイゴケ	<i>Solenostoma handelii</i> (Schiffn.) Müll.Frib.	VU
第4次 2015:	ハンデルソロイゴケ	<i>Solenostoma handelii</i> (Schiffn.) Müll.Frib. [= <i>Jungermannia handelii</i> (Schiffn.) Amakawa]	VU
第4次:	ハンデルソロイゴケ	<i>Solenostoma handelii</i> (Schiffn.) Müll.Frib. [= <i>Jungermannia handelii</i> (Schiffn.) Amakawa]	VU
第3次:	ハンデルソロイゴケ	<i>Jungermannia handelii</i> (Schiffn.) Amak.	VU
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

秋田県[絶滅危惧種Ⅰ類(CR+EN)] 長野県[絶滅危惧Ⅱ類(VU)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Amakawa, T., 1960. Family Jungermanniaceae of Japan, II. J. Hattori Bot. Lab., 22: 1-88.
- 古木達郎・井上正鉄, 1992. ハンデルソロイゴケ島海山で見つかる. 日本蘚苔類学会会報, 5: 162.
- 太田正文, 2023. 青森県中南津軽地域のコケ植物目録. 青森県立郷土館研究紀要, 47: 29-52.

- Váňa, J. and D. G. Long, 2009. Jungermanniaceae of the Sino-Himalaya region. Nova Hedwigia, 89: 3-4.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Solenostoma handelii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Solenostoma handelii* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area Mid-altitude area】 Wetland/Marsh/Stream
Threat types:	Limited distribution, Other (鉄やアルミニウムなどの重金属イオン濃度が高い水域)
Law designation status for conservation	—



©古木達郎 - (元千葉県立中央博物館)

執筆者: 古木達郎 (元千葉県立中央博物館)
Author: Tatsuwo Furuki

公表年月: 2025 年 3 月

サケバキハネゴケ

Plagiochila fordiana Steph.

カテゴリー判定結果 準絶滅危惧 (NT)

②

基準 A: —

基準 B: VU 未満

基準 C: —

基準 D: —

基準 E: —

生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。

②生育条件が悪化している。

【判断理由】

本種は本州、四国、九州、南西諸島、小笠原諸島（火山列島を含む）の空中湿度の高い林内に生育するが、本州、四国、九州では森林の開発等により本種の生育に適した環境が減少したことから、生育条件が悪化していると判断した。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

本種は小笠原諸島や南西諸島、本州、四国、九州など山頂付近の湿性低木林に生育する着生茎葉状苔類。近年、小笠原諸島では台風などの影響により森林が荒廃し、生育が脅かされている。本州、四国及び九州では、50 年以上生育が確認されていない。

基礎情報

【形態】

植物体は緑色で茎葉状、長さ 2～3 cm、幅は葉を含めて 2.5～4 mm。葉は瓦状に接在、折れて落ち易い早落性、長方形、先端に大きな 2 歯、背縁に 1～2 個の鋸歯がある。腹葉は痕跡的。無性芽はない。雌花は茎に頂生、花被は口部が広く、左右に偏平、翼がある。雄花は未知。キハネゴケ (*Plagiochila trabeculata* Steph.) が近縁とされるが、茎の分枝が異なり、花被に翼を欠く。

【生活史】

雌雄異株。国内では孢子体は見つかっておらず、早落性の葉により繁殖していると考えられる。

【生育環境】

空中温度が高い湿った常緑広葉樹林において、樹幹や枝に着生する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

本州（三重県、広島県）、四国（徳島県、高知県）、九州（宮崎県、鹿児島県唐国岳・紫尾山）、南西諸島（屋久島、奄美大島、徳之島、沖縄島、石垣島、西表島）、小笠原諸島（母島、北硫黄島）に分布し、国外では中国、タイ、インドに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

本州、四国、及び九州では、1930 年代に採集された標本に基づいており、50 年以上生育が確認されていない。一方、小笠原諸島と火山列島においては 2000 年以降に多くの地点で生育が確認されている。

【生育地の現況】

本州、四国、九州では森林の開発等により本種の生育に適した環境が減少している。小笠原諸島では、台風などの影響により、本種の生育する森林が荒廃している。

【個体数の現況】

小笠原諸島においては多くの地点で豊富に生育しており、成熟個体数は 10,000 を超えると推定できる。

存続を脅かす要因

小笠原諸島では、台風による森林の荒廃により、影響を受けることが観察されている。

要因の区分：	(過去)	不明, 自然災害

	(現在)	不明

特記事項

本種は、国内では 1932 年に *Plagiochila minor* Horik.として高知県横倉山産の標本をタイプとして記載された。更に 1944 年にサケバキハネゴケ *Plagiochila trabeculata* var. *bifida* S.Hatt. として宮崎県尾鈴山の標本をタイプとしても記載されたが、Inoue (1958) によってキハネゴケ *Plagiochila trabeculata* Steph.の異名にされた。また、1970 年にムニンハネゴケ *Plagiochila boninensis* Inoue が小笠原諸島固有種として新種記載された (Inoue & Iwatsuki 1970)。その後、これらは So (2001) によって本種の同種異名にされた。このような経緯から小笠原諸島以外では、Inoue (1958) 以降は見過ごされている可能性が高いと思われる。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	サケバキハネゴケ (ムニンハネゴケ)	<i>Plagiochila fordiana</i> Steph.	VU
第4次 2019:	サケバキハネゴケ (ムニンハネゴケ)	<i>Plagiochila fordiana</i> Steph.	VU
第4次 2018:	サケバキハネゴケ (ムニンハネゴケ)	<i>Plagiochila fordiana</i> Steph.	VU
第4次 2017:	サケバキハネゴケ (ムニンハネゴケ)	<i>Plagiochila fordiana</i> Steph.	VU
第4次 2015:	サケバキハネゴケ (ムニンハネゴケ)	<i>Plagiochila fordiana</i> Steph. [= <i>P. boninensis</i> Inoue]	VU
第4次:	サケバキハネゴケ (ムニンハネゴケ)	<i>Plagiochila fordiana</i> Steph. [= <i>P. boninensis</i> Inoue]	VU
第3次:	サケバキハネゴケ (ムニンハネゴケ)	<i>Plagiochila fordiana</i> Steph. (= <i>P. boninensis</i> Inoue)	VU
第2次:	ムニンハネゴケ	<i>Plagiochila boninensis</i> Inoue	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況 (令和4年度末時点)

掲載なし

保護に係る法令指定状況 (令和4年度末時点)

指定なし

参考文献

- Inoue, H., 1958. The family Plagiochilaceae of Japan and Formosa. I. J. Hattori Bot. Lab., 19: 25-59.
- Inoue, H. and Z. Iwatsuki, 1970. Bryophytes of the Bonin Islands and the Volcano Island (3). Bull. Natl. Sci. Mus., Tokyo, 13: 475-488.
- So, M. L., 2001. *Plagiochila* (Hepaticae, Plagiochilaceae) in China. System. Bot. Monog., 60: 1-214.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Plagiochila fordiana has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Plagiochila fordiana* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Unknown, Natural disasters
Law designation status for conservation	—

執筆者: 古木達郎 (元千葉県立中央博物館)
Author: Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

ヨウジョウゴケ

Cololejeunea trichomanis (Gottsche) Besch.

カテゴリー判定結果		準絶滅危惧 (NT)		②
基準 A: —	基準 B: VU 未満	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 ②生育条件が悪化している。 【判断理由】 かつては近畿地方の南部では普通に見られたが、近年その生育地は急速に減少していると考えられている。京都府では 2 か所からの報告があるが近年の調査では生育が確認できていない。国内でも分布域が広く現在でも多くの産地があることから今すぐには絶滅の恐れがないと判断した。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

クサリゴケ科の茎葉性苔類。常緑樹林の渓谷で樹木やシダ植物の生葉に着生して生育する生葉上苔類。かつては近畿地方の南部では普通に見られたが、近年その生育地は急速に減少していると考えられている。森林の伐採などにより生育地の環境が変わることによって消滅する恐れがあるが分布域が広く現在でも多くの産地があることから今すぐには絶滅の恐れがないと考えられる。

協力者: 山口富美夫 (広島大学)・佐藤匠 (広島大学)・西畑和輝 (広島大学)・桐生賢太 (広島大学)

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉性、茎は長さ 5~10 mm、幅は葉を含めて 1.0~1.5 mm、不規則に羽状に分枝する。背片は楕円形から卵形、円頭、長さ 0.5~0.7 mm、背縁に近い細胞の背面に低いパピラがあり、縁は細鋸歯状。腹片は卵形、背片の 1/3~2/3 長、凸面状、第 1 歯は 2 細胞からなり、第 2 歯は単細胞で尖る。無性芽は円盤状。花被は 5 稜で側稜はやや翼が発達し、背腹に扁平になる (Mizutani 1961, 岩月ほか 2001)。

【生活史】

雌雄同株。無性芽を頻繁につける。

【生育環境】

湿性常緑樹林の溪谷で生葉や樹幹上、稀に岩上に着生して生育する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林 【陸域_平地部】森林, 河川中流域, 河川下流域
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域, (4) 河川・湿地地域

【分布域】

国内では本州、四国、九州、琉球列島、伊豆諸島に分布し、国外では東アジア～東南アジアに広く分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

過去には国内に広く分布し近畿地方の南部では普通に見られたが、近年、産地数は急速に減少していると考えられている。京都府では 2 か所からの報告があるが近年の調査では生育が確認できていない (京都府 2015)。ただし、国内でも分布域が広く、現在でも多くの産地がある。

【生育地の現況】

湿った溪谷において樹木やシダ植物の生葉上に着生している。

【個体数の現況】

生育数は減少傾向にある。

存続を脅かす要因

森林の伐採や河川の改修などによる生育地の環境が変わることによって消滅するおそれがある。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 河川開発, ダム・河川工作物建設
	(現在)	森林伐採, 河川開発, ダム・河川工作物建設

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ヨウジョウゴケ	<i>Cololejeunea trichomanis</i> (Gottsche) Steph.	NT
第4次 2019:	ヨウジョウゴケ	<i>Cololejeunea trichomanis</i> (Gottsche) Steph.	NT
第4次 2018:	ヨウジョウゴケ	<i>Cololejeunea trichomanis</i> (Gottsche) Steph.	NT
第4次 2017:	ヨウジョウゴケ	<i>Cololejeunea trichomanis</i> (Gottsche) Steph.	NT
第4次 2015:	ヨウジョウゴケ	<i>Cololejeunea trichomanis</i> (Gottsche) Steph. [= <i>C. goebelii</i> (Schiffn.) Schiffn.]	NT
第4次:	ヨウジョウゴケ	<i>Cololejeunea trichomanis</i> (Gottsche) Steph. [= <i>C. goebelii</i> (Schiffn.) Schiffn.]	NT
第3次:	ヨウジョウゴケ	<i>Cololejeunea trichomanis</i> (Gottsche) Steph. (= <i>C. goebelii</i> (Schiffn.) Schiffn.)	NT
第2次:	ヨウジョウゴケ	<i>Cololejeunea goebelii</i> (Schiffn.) Schiffn.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

宮城県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 千葉県[要保護生物(C)] 神奈川県[絶滅危惧Ⅱ類(VU)] 三重県[準絶滅危惧(NT)] 京都府[絶滅寸前種] 岡山県[準絶滅危惧] 広島県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 山口県[情報不足(DD)] 長崎県[情報不足(DD)] 宮崎県[準絶滅危惧(NT-g)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355 pp., 192 pls. 平凡社, 東京.
- 京都府, 2015. 京都府レッドデータブック 2015. 第2巻: 野生植物・菌類編. 京都府環境部自然環境, 京都. 611 pp.
- Mizutani, M., 1961. A revision of Japanese Lejeuneaceae. J. Hattori Bot. Lab., 24: 115-302.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Cololejeunea trichomanis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition.

Cololejeunea trichomanis is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】 Forest, Middle river basin, Lower river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development, Dam/River structures construction
Law designation status for conservation	—

執筆者: 片桐知之（高知大学）

Author: Tomoyuki Katagiri

公表年月：2025 年 3 月

カビゴケ

Leptolejeunea elliptica (Lehm. & Lindenb.) Besch.

カテゴリー判定結果		準絶滅危惧 (NT)		②
基準 A: —	基準 B: VU 未満	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 ②生育条件が悪化している。 【判断理由】 かつては分布域である西南日本の暖地では空中湿度の高い溪谷に広く見られたが、近年では森林伐採や開発といった要因により生育条件が悪化している。山口県をはじめ生育地が減少傾向であることが指摘されているため、分布域の一部において生育条件が悪化していると判断した。また野外でも容易に認識できる本種は今後の環境変化を調べるための指標としても優れており、乾燥や大気汚染の指標植物とされる生葉上苔類の代表としての点も考慮した。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

クサリゴケ科の茎葉性苔類で、常緑樹林内の湿った溪谷内において維管束植物の生葉上に着生して生育する。植物体は微小だが、独特な臭いを放つことから野外でも容易に識別可能である。本種は環境変化を調べるための指標としても優れており、乾燥や大気汚染の指標植物とされる生葉上苔類の代表でもある。生育地は減少傾向にあるが、現在でも多くの産地があることから今すぐには絶滅の恐れがないと判断した。

協力者： 山口富美夫（広島大学）・佐藤匠（広島大学）・西畑和輝（広島大学）・桐生賢太（広島大学）・古木達郎（元千葉県立中央博物館）・木口博史（岡山コケの会）・林正典（日本蘚苔類学会）・土永浩史（日本蘚苔類学会）・川合啓二（岡山コケの会）

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉性、淡緑色、茎は長さ 5～10 mm。葉背片は長楕円形、背側に偏向し、長さ約 0.4 mm、全縁、5～18 個の眼点細胞が散在する。腹片は背片の 2/3 長、楕円形、第 1 歯は単細胞、第 2 歯は不明瞭。腹葉は広く 2 裂し、裂片は 1～2 細胞幅で 3～4 細胞長さ。湿った溪谷において維管束植物の生葉上に着生し、独特な臭いを放つことから野外でも容易に識別可能である（岩月ほか 2001）。

【生活史】

雌雄同株。

【生育環境】

常緑樹林内の湿った溪谷において維管束植物の生葉上に着生する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林, 河川上流域, 河川中流域
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (2) 里地里山・田園地域, (4) 河川・湿地地域

【分布域】

国内では本州（福島県以南）、四国、九州、琉球列島に分布し、国外では世界の亜熱帯から熱帯に広く分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

産地数は減少していると考えられるが、現在でも多くの産地がある。

【生育地の現況】

一部の分布域では、森林伐採や開発といった要因により生育条件が悪化している。

【個体数の現況】

生育量は減少傾向にある。

存続を脅かす要因

森林伐採や河川開発などにより着生木の消失や森林の乾燥化により生育地を失う可能性がある。

要因の区分：	（過去）	森林伐採, 河川開発, ダム・河川工作物建設
	（現在）	森林伐採, 河川開発, ダム・河川工作物建設

特記事項

近年の分子系統学的研究の結果に基づいて、これまで世界に広く分布するとされた

Leptolejeunea elliptica（広義）を細分化し、*Leptolejeunea elliptica*（狭義）は中南米にのみ認める見解が示されている（Bechteler et al. 2017, Shu et al. 2022）。この見解に従うと日本国内のカビゴケに対しては *Leptolejeunea subacuta* の学名が使用されている。しかし、これらの先行研究では日本国内からは沖縄県西表島産の植物体のみが解析に用いられていることから日本産のすべての個体群に対して *Leptolejeunea subacuta* の学名を用いるには根拠が乏しい。そのためここでは従来の *Leptolejeunea elliptica*（広義）の種概念に従った。今後国内各地の個体群を含めた更なる研究が必要である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	カビゴケ	<i>Leptolejeunea elliptica</i> (Lehm. & Lindenb.) Schiffn.	NT
第4次 2019:	カビゴケ	<i>Leptolejeunea elliptica</i> (Lehm. & Lindenb.) Schiffn.	NT
第4次 2018:	カビゴケ	<i>Leptolejeunea elliptica</i> (Lehm. & Lindenb.) Schiffn.	NT
第4次 2017:	カビゴケ	<i>Leptolejeunea elliptica</i> (Lehm. & Lindenb.) Schiffn.	NT
第4次 2015:	カビゴケ	<i>Leptolejeunea elliptica</i> (Lehm. & Lindenb.) Schiffn.	NT
第4次:	カビゴケ	<i>Leptolejeunea elliptica</i> (Lehm. & Lindenb.) Schiffn.	NT
第3次:	カビゴケ	<i>Leptolejeunea elliptica</i> (Lehm. & Lindenb.) Schiffn.	NT
第2次:	カビゴケ	<i>Leptolejeunea elliptica</i> (Lehm. et Lindenb.) Schiffn.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

福島県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 茨城県[準絶滅危惧] 栃木県[準絶滅危惧(Cランク)] 埼玉県[絶滅危惧Ⅰ類(CE)] 神奈川県[絶滅危惧Ⅱ類(VU)] 長野県[情報不足(DD)] 三重県[準絶滅危惧(NT)] 滋賀県[分布上重要種] 京都府[絶滅寸前種] 大阪府[VU] 鳥取県[準絶滅危惧(NT)] 島根県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 岡山県[準絶滅危惧] 広島県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 山口県[準絶滅危惧(NT)] 愛媛県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 福岡県[準絶滅危惧] 長崎県[準絶滅危惧種(NT)] 大分県[準絶滅危惧種(NT)] 宮崎県[その他の保護上重要な種(OT-1)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Bechteler, J., A. Schäfer-Verwimp, G. E. Lee, K. Feldberg, O. A. Pérez-Escobar, T. Pócs, D. F. Peralta, M. A. M. Renner and J. Heinrichs, 2017. Geographical structure, narrow species ranges, and Cenozoic diversification in a pantropical clade of epiphyllous leafy liverworts. *Ecology and Evolution*, 7: 638-653.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355 pp., 192 pls. 平凡社, 東京.
- Shu, L., X. -J. Jin and R. -L. Zhu, 2022. Novel classification and biogeography of *Leptolejeunea* (Lejeuneaceae, Marchantiophyta) with implications for the origin and evolution of the Asian evergreen broad-leaved forests. *Journal of Systematics and Evolution*, 60: 1199-1217.
- 山口県, 2019. レッドデータブックやまぐち 2019. 山口県の絶滅のおそれのある野生生物. 986 pp. 山口県環境生活部自然保護課. <https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/soshiki/41/20708.html> (2024 年 4 月 28 日参照)

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Leptolejeunea elliptica has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Leptolejeunea elliptica* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest, Upper river basin, Middle river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development, Dam/River structures construction
Law designation status for conservation	—



©片桐知之

執筆者:	片桐知之（高知大学）
Author:	Tomoyuki Katagiri

公表年月：2025 年 3 月

ナンジャモンジャゴケ目 Takakiales ナンジャモンジャゴケ科 Takakiaceae

ナンジャモンジャゴケ

Takakia lepidozoides S.Hatt. & Inoue

カテゴリー判定結果		準絶滅危惧 (NT)		①
基準 A: —	基準 B: VU 未満	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 ①個体数が減少している。 【判断理由】 本種は北海道と本州の高山など冷涼で湿潤な限られた場所に生育するが、長野県の一部では上層の高木が失われた結果、乾燥化が進み、生育量が減少している。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

ナンジャモンジャゴケは日本の北アルプスで発見された特徴的な形態を持つ微小な蘚類。国内では北海道と本州に、国外ではネパール、中国、ボルネオ、台湾、アラスカ、カナダ西部に分布する。国内のいくつかの生育地では現在は生育が確認されていない。

基礎情報

【形態】

植物体は直立し、長さ約 1 cm。密生するが、各個体の間にはすきまがある。茎の中部から葉をつけるシュートを横方向に、茎の下部から葉をつけないシュートを下方に出す。葉は棒状で、長さ 1-1.5 mm、茎に不規則に螺旋状につき、茎から外れやすい。雌雄異株。雌株のみ知られており、造卵器は茎の上部に散生し、苞葉などの保護器官はない。

【生活史】

雌雄異株。国内では雄株と孢子体は知られておらず、シュートの成長や葉の脱落により繁殖していると考えられる。

【生育環境】

亜高山性針葉樹林や高山の岩場に生育する。日陰で湿潤な場所の岩壁や薄く堆積した腐植土上に群落をつくる。

生育環境区分：	【陸域_高標高地 中標高地】裸地, 森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では北海道、本州中部以北に、国外ではネパール、中国、ボルネオ、台湾、アラスカ、カナダ西部に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

本種は国内では北海道、山形県、富山県、栃木県、長野県、岐阜県の 10 数か所から報告されている。第 5 次レッドリスト調査 (2016-2019) ではデータが得られていないが、2015 年以降、既報告 2 地点と新報告 1 地点での生育が確認されている。とくに、2019 年の北海道からの報告は新しい生育地の発見であり、登山道の 3 km ほどの間に 10 数か所の地点で岩塊の隙間に群落が見つかった。

【生育地の現況】

八ヶ岳の生育地の一つでは岩壁下部に張り付くように生育し、大きな群落は作らず、スポット状に生えているが、上層の高木が倒れたことにより光、水環境が変化し、生育量が減少している。栃木県金精峠の生育地は砂防ダムのそばで、生育量も少ないことから絶滅する危険性が高い。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

奥日光では、生育地が砂防ダムのそばにあるため、集中豪雨などによる土砂崩落による生育地の消失が危ぶまれる。全体として、産地が局限し、個体群の数もサイズも小さい。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 河川開発
	(現在)	森林伐採, 河川開発

特記事項

日本の北アルプスで発見され、特徴的な形態を持ち、近縁なものが不明な新種として発表された。最近の分子系統解析では蘚類の基部にくることが明らかになり、コケ植物の系統や進化を考える上で重要な分類群である。本属のもう一つの種であるヒマラヤナンジャモンジャゴケはネパール、中国、アリューシャン列島に分布し、国内には分布しない。

旧レッドリストカテゴリと掲載名

第4次 2020:	ナンジャモンジャゴケ	<i>Takakia lepidozioides</i> S.Hatt. & Inoue	CR+EN
第4次 2019:	ナンジャモンジャゴケ	<i>Takakia lepidozioides</i> S.Hatt. & Inoue	CR+EN
第4次 2018:	ナンジャモンジャゴケ	<i>Takakia lepidozioides</i> S.Hatt. & Inoue	CR+EN
第4次 2017:	ナンジャモンジャゴケ	<i>Takakia lepidozioides</i> S.Hatt. & Inoue	CR+EN
第4次 2015:	ナンジャモンジャゴケ	<i>Takakia lepidozioides</i> S.Hatt. & Inoue	CR+EN
第4次:	ナンジャモンジャゴケ	<i>Takakia lepidozioides</i> S.Hatt. & Inoue	CR+EN
第3次:	ナンジャモンジャゴケ	<i>Takakia lepidozioides</i> S.Hatt. & Inoue	CR+EN
第2次:	ナンジャモンジャゴケ	<i>Takakia lepidozioides</i> Hatt. et Inoue	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

山形県[CR+EN] 栃木県[絶滅危惧Ⅰ類（Aランク）] 新潟県[絶滅危惧（EN+VU）] 富山県[情報不足] 長野県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 服部新佐・井上 浩, 1958. *Takakia lepidozioides* 予報. 服部植物研究所報告, 19: 133-137.

- 樋口正信, 2015. ナンジャモンジャゴケ. 環境省 (編), レッドデータブック 2014 ―日本の絶滅のおそれのある野生生物― 9 植物 II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類). p. 91. ぎょうせい, 東京.
- 井上 浩, 1989. ナンジャモンジャゴケ総説. 日本の生物, 3: 53-60.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- 神田啓史・乙幡康之, 2019. 北海道, 大雪山におけるナンジャモンジャゴケの新たな生育地. 蘚苔類研究, 11: 354-356.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Takakia lepidozioides has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Takakia lepidozioides* is listed as NT under criteria ①.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area Mid-altitude area】 Bare area, Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development
Law designation status for conservation	—



執筆者: 樋口正信 (国立科学博物館)
Author: Masanobu Higuchi

公表年月: 2025 年 3 月

ミズゴケ目 Sphagnales ミズゴケ科 Sphagnaceae

ホソベリミズゴケ

Sphagnum junghuhnianum Dozy & Molk.

カテゴリー判定結果		準絶滅危惧 (NT)		②
基準 A: —	基準 B: VU 未満	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 ②生育条件が悪化している。 【判断理由】 岡山県では 1950 年代に確認されていた 3 か所の生育地において 2002 年の調査で見出されなかったため、絶滅したものと考えられていた（その後新たな生育地が 1 か所見つかった）（西村ほか, 2006）。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

ホソベリミズゴケは、常緑広葉樹林内の水がしみ出る湿った岩壁面や岩棚に生育するミズゴケ類で、枝葉の横断面で葉緑細胞は三角形で、葉の腹側により広く開く。本州から九州に至る各地で確認されており、愛知県以西で多い。岡山県では絶滅したものと考えられていたが、のちに大きな生育地が見つかった。

基礎情報

【形態】

やや大型で淡緑色～黄褐色、ときに暗褐色を帯びる。頂端付近に多くの枝が集まる。枝には開出枝と下垂枝がある。茎と枝の表皮細胞に螺旋状の肥厚はない。茎葉は二等辺三角形で長さ約 1.3 mm、先端は狭い切形で鋸歯がある。茎葉の脈は基部で 3～5 細胞列でほとんど広がらない。枝葉は卵形～卵状披針形で凹み、まばらにつき、上部はやや反曲する。葉細胞には大型、菱形の透明細胞と、線形で目立たない葉緑細胞とが交互に並んでいる。透明細胞には螺旋状の肥厚がみられ、表面に数個の孔があるが、枝葉背面下部では中央部に縁の厚く肥厚した孔が少数並ぶ。枝葉の横断面で葉緑細胞は三角形で、葉の腹側により広く開く。

【生活史】

雌雄異株。

【生育環境】

ほとんどのミズゴケ類は湿地に生育するが、本種は、常緑広葉樹林内の、水がしみ出る湿った岩壁面や岩棚に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林、岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

本州～九州。台湾、中国大陸、ヒマラヤ。

現在の生育状況

【分布域の現況】

本州から九州に至る各地で確認されている。愛知県以西に多い。成田（2011）、愛知県（2020）、西村ほか（2006）、西村（2020）、有川・西村（2023）などで各地での分布状況が報告されている。岡山県では 1950 年代に確認されていた 3 か所の生育地において 2002 年の調査で見出されなかったため、絶滅したものと考えられていた（その後新たな生育地が 1 か所見つかっている）（西村ほか, 2006）。

【生育地の現況】

存続している生育地では、生育環境に大きな変化はないと考えられる。

【個体数の現況】

それぞれの生育地ではまとまった量が見つかっている。

存続を脅かす要因

森林内の岩壁や岩棚に生育するので、森林伐採により周辺環境が変化すると群落が存続できなくなる可能性がある。

要因の区分：	(過去)	森林伐採
	(現在)	森林伐採

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ホソバリミズゴケ	<i>Sphagnum junghuhnianum</i> Dozy & Molk.	DD
第4次 2019:	ホソバリミズゴケ	<i>Sphagnum junghuhnianum</i> Dozy & Molk.	DD
第4次 2018:	ホソバリミズゴケ	<i>Sphagnum junghuhnianum</i> Dozy & Molk.	DD
第4次 2017:	ホソバリミズゴケ	<i>Sphagnum junghuhnianum</i> Dozy & Molk.	DD
第4次 2015:	ホソバリミズゴケ	<i>Sphagnum junghuhnianum</i> Dozy & Molk.	DD
第4次:	ホソバリミズゴケ	<i>Sphagnum junghuhnianum</i> Dozy & Molk.	DD
第3次:	ホソバリミズゴケ	<i>Sphagnum junghuhnianum</i> Dozy & Molk.	DD
		<i>Sphagnum junghuhnianum</i> Dozy et Molk. Syn. <i>S.</i>	
第2次:	ホソバリミズゴケ	<i>junghuhnianum</i> ssp. <i>pseudomolle</i> (Warnst.) H.	DD
		Suzuki	
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

青森県[要調査野生生物（Dランク）] 福島県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 栃木県[情報不足] 埼玉県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 新潟県[絶滅危惧（EN+VU）] 長野県[準絶滅危惧（NT）] 愛知県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 京都府[準絶滅危惧種] 兵庫県[Bランク] 奈良県[絶滅危惧種] 鳥取県[準絶滅危惧（NT）] 島根県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 岡山県[絶滅危惧Ⅰ類] 広島県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 大分県[準絶滅危惧種（NT）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 愛知県, 2020. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2020 植物編. 810 pp. 愛知県.
- 有川智己・西村直樹, 2023. コケ植物. 永松 大・鶴崎展巨・有川智己・エスジーズ（編）, レッドデータブックとっとり第3版 2022 鳥取県の絶滅のおそれのある野生動植物. pp. 222-230. 鳥取県.

- 岩月善之助（編），2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社，東京. 355pp., 192pls.
- 成田 務，2011. 愛知県のミズゴケ類. 鳳来寺山自然科学博物館館報，40: 47-51.
- 西村直樹・大竹邦暁・大竹園子・川合啓二・清末幸久・地職 恵・難波靖司・平井佐津紀，2006. 岡山県吉備中央町におけるホソバリミズゴケ生育地の蘚苔類相. *Naturalistae*, 10: 27-34.
- 西村直樹，2020. コケ植物. 岡山県（編），岡山県版レッドデータブック 2020 植物編. pp. 329-355. 岡山県.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Sphagnum junghuhnianum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Sphagnum junghuhnianum* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area Low-altitude area】 Forest, Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Logging and wood harvesting
Law designation status for conservation	—

執筆者: 有川智己（慶應義塾大学）
Author: Tomotsugu Arikawa

公表年月：2025 年 3 月

オオミズゴケ

Sphagnum palustre L.

カテゴリー判定結果

準絶滅危惧 (NT)

①②③

基準 A: VU 未満

基準 B: —

基準 C: —

基準 D: —

基準 E: —

生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。

①個体数が減少している。

【判断理由】

岩手県遠野市では 5 年前に比べ半減している群落が確認されており、登山道沿いにあるものは園芸採取で減少しているようである。

②生育条件が悪化している。

【判断理由】

千葉県では、1970 年代に生育が確認されていた九十九里平野の湿原や安房丘陵の湿地では、開発や園芸用の乱獲により消失した（古木, 2023）。都市近郊や平野部では全国的に同様の状況と思われる。山口県でも群落の縮小が複数地点で確認されている。

③過度の捕獲・採取圧による圧迫を受けている。

【判断理由】

千葉県では、1970 年代に生育が確認されていた九十九里平野の湿原や安房丘陵の湿地では、開発や園芸用の乱獲により消失した（古木, 2023）。岩手県遠野市では 5 年前に比べ半減している群落が確認されており、登山道沿いにあるものは園芸採取で減少しているようである。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

オオミズゴケは、山地の湿った地上や中間湿原に白緑色の大きな群落をつくる大型のミズゴケ類で、茎は直立し長さ 10 cm 以上にもなる。日本中に広く分布し、健全に生育しているが、千葉県では、1970 年代に生育が確認されていた九十九里平野の湿原や安房丘陵の湿地では、開発や園芸用の乱獲により消失したとされており、都市近郊や平野部では全国的に同様の状況と思われる。岩手県や山口県でも群落が縮小しているのが確認されている。

協力者： 古木達郎（元千葉県立中央博物館）・木口博史（岡山コケの会）・内田暁友（日本蘚苔類

学会)・林正典(日本蘚苔類学会)・川合啓二(岡山コケの会)・樋口正信(国立科学博物館)

基礎情報

【形態】

茎は直立し、長さ 10 cm 以上、頂端付近に多くの枝が集まる。枝には開出枝と下垂枝がある。茎と枝は明瞭な螺旋状の肥厚をもつ表皮細胞に被われる。茎葉は舌形で先端はささくれる。枝葉は鱗状につき、長さ 1.5～2 mm、広楕円形でボート状に深く凹む。葉縁は内曲し、細かな目立たない歯がある。葉細胞には大型、菱形の透明細胞と、線形で目立たない葉緑細胞とが交互に並んでいる。透明細胞には数本の横線状の肥厚がみられ、表面に数個の孔があり、葉緑細胞と接する側壁面は平滑。枝葉の横断面で葉緑細胞は狭二等辺三角形で、葉の腹側により広く開く。

【生活史】

雌雄異株で、蒴は稀。

【生育環境】

山地の湿った地上や中間湿原に白緑色の大きな群落をつくる。

生育環境区分：	【陸域_高標高地 中標高地 低標高地】森林, 湿地・湿原・細流

国土地域区分：	(4) 河川・湿地地域

【分布域】

北海道、本州、四国、九州。世界に広く分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

日本中に広く分布し、健全に生育していることが報告されている。第 5 次レッドリストのための調査でも、全国各地で確認されている。しかし、千葉県では、1970 年代に生育が確認されていた九十九里平野の湿原や安房丘陵の湿地では、開発や園芸用の乱獲により消失し、鴨川市で移植されて保護されているのみで、野生絶滅とされている（古木, 2023）。都市近郊や平野部では全国的に同様の状況と思われる。

【生育地の現況】

過去には広い範囲に生育していたと思われ、現在でも多くの産地があるが、地域によって減少傾向が著しい。第 5 次レッドリストのための調査では、全国各地で確認されているが、岩手県遠野市では 5 年前に比べ半減している群落が確認されており、登山道沿いにあるものは園芸採取で減少しているようである。山口県岩国市錦町の遊歩道沿いの幅 1～2 m、長さ 10 m の群落が、10 年前に比べ約 5 分の 1 に減少していることが確認されている。遊歩道の舗装やササの侵入により乾燥化が進んだものと思われる。また、山口県周南市の県道沿いの湿地に、幅 15 m、長さ 40 m ほどの群生地が、乾燥化による高等植物の侵入により急激に減少していることが確認されている。

【個体数の現況】

詳細については不明だが、上記のとおりいくつかの地域では減少が認められる。

存続を脅かす要因

森林伐採や湿地開発により生育地が失われる。また、本種は園芸資材として採取され、乱獲により激減、消滅することがある。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 湿地開発, 捕獲・狩猟/園芸採取
	(現在)	森林伐採, 湿地開発, 捕獲・狩猟/園芸採取

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	オオミズゴケ	<i>Sphagnum palustre</i> L.	NT
第4次 2019:	オオミズゴケ	<i>Sphagnum palustre</i> L.	NT
第4次 2018:	オオミズゴケ	<i>Sphagnum palustre</i> L.	NT
第4次 2017:	オオミズゴケ	<i>Sphagnum palustre</i> L.	NT
第4次 2015:	オオミズゴケ	<i>Sphagnum palustre</i> L.	NT
第4次:	オオミズゴケ	<i>Sphagnum palustre</i> L.	NT
第3次:	オオミズゴケ	<i>Sphagnum palustre</i> L.	NT
第2次:	オオミズゴケ	<i>Sphagnum palustre</i> L.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

青森県[重要希少野生生物（B ランク）] 宮城県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 秋田県[準絶滅危惧種（NT）] 山形県[NT] 福島県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 茨城県[準絶滅危惧] 栃木県[準絶滅危惧（C ランク）] 千葉県[消息不明・絶滅生物（X）] 神奈川県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 新潟県[準絶滅危惧（NT）] 富山県[準絶滅危惧] 長野県[準絶滅危惧（NT）] 愛知県[準絶滅危惧（NT）] 三重県[絶滅危惧Ⅱ類(VU)] 滋賀県[その他重要種] 京都府[要注目種] 大阪府[VU] 兵庫県[C ランク] 奈良県[絶滅危惧種] 和歌山県[準絶滅危惧（NT）] 鳥取県[準絶滅危惧（NT）] 島根県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 岡山県[準絶滅危惧] 広島県[準絶滅危惧（NT）] 山口県[絶滅危惧ⅠA 類(CR)] 愛媛県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 福岡県[準絶滅危惧] 長崎県[準絶滅危惧種（NT）] 熊本県[準絶滅危惧（NT）] 大分県[準絶滅危惧種（NT）] 宮崎県[準絶滅危惧（NT-r）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 古木達郎, 2023. オオミズゴケ (ミズゴケ). 千葉県希少生物及び外来生物に係るリスト作成検討会 (編), 千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック 植物・菌類編 2023 年改訂版. p. 423. 千葉県.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Sphagnum palustre has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Sphagnum palustre* is listed as NT under criteria ①②③.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

③There is significant pressure from over-harvesting.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area High-altitude area Mid-altitude area Low-altitude area】 Forest, Wetland/Marsh/Stream
Threat types:	Logging and wood harvesting, Wetland development, Hunting and collecting animals/Gathering plants
Law designation status for conservation	—

執筆者: 有川智己 (慶應義塾大学)
Author: Tomotsugu Arikawa

公表年月: 2025 年 3 月

クロゴケ目 Andreaeales クロゴケ科 Andreaeaceae

ガッサンクロゴケ

Andreaea nivalis Hook.

カテゴリー判定結果		準絶滅危惧 (NT)		②
基準 A: —	基準 B: VU 未満	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 ②生育条件が悪化している。 【判断理由】 降雪量の減少による環境の変化によって生育地の減少が危惧される。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

ガッサンクロゴケは国内では本州と北海道の高山に、国外ではヨーロッパ、カムチャツカ、北米に分布する小形の直立性の蘚類。生育環境が不安定で生育地の減少が危惧される。

協力者: 坂井奈緒子 (富山市立科学博物館)・古木達郎 (元千葉県立中央博物館)・内田暁友 (日本蘚苔類学会)

基礎情報

【形態】

植物体は直立し、全長 4-10 cm になり、ふつう倒状する。茎はほとんど分枝せず、長さ 1-1.5 mm の卵形の基部から披針形に長く伸びる葉を密につける。葉には 1 本の中肋がある。クロゴケ属の種は蒴にはふたがなく、縦に 4 つの裂け目ができる。クロゴケ属の他の種からは、葉の先端が尖ること、中肋があること、葉の上半部の縁に鋸歯があること、葉身細胞に高いパピラがあることなどで区別される。

【生活史】

雌雄異株。

【生育環境】

高山の雪解け水が流れるような場所の岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地 中標高地】河川上流域

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では本州の高山と北海道に分布し、国外ではヨーロッパ、カムチャッカ、北米に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

2019 年の調査で北海道大雪山と富山県立山で比較的多数の群落が確認された。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

産地が局限し、降雪量の減少による環境の変化によって生育地の減少が危惧される。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

1953 年に国内では初めて、山形県月山、長野県白馬岳、山梨県駒ヶ岳、富山県立山から報告された。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ガッサンクロゴケ	<i>Andreaea nivalis</i> Hook.	VU
第4次 2019:	ガッサンクロゴケ	<i>Andreaea nivalis</i> Hook.	VU
第4次 2018:	ガッサンクロゴケ	<i>Andreaea nivalis</i> Hook.	VU
第4次 2017:	ガッサンクロゴケ	<i>Andreaea nivalis</i> Hook.	VU
第4次 2015:	ガッサンクロゴケ	<i>Andreaea nivalis</i> Hook.	VU
第4次:	ガッサンクロゴケ	<i>Andreaea nivalis</i> Hook.	VU
第3次:	ガッサンクロゴケ	<i>Andreaea nivalis</i> Hook.	VU
第2次:	ガッサンクロゴケ	<i>Andreaea nivalis</i> Hook.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

山形県[VU] 新潟県[絶滅危惧（EN+VU）] 富山県[準絶滅危惧] 長野県[絶滅危惧 I 類 (CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 樋口正信・山浦清. 2014. 長野県八ヶ岳のガッサンクロゴケ. 蘚苔類研究, 11: 79-80.
- 樋口正信, 2015. ガッサンクロゴケ. 環境省（編）, レッドデータブック 2014 ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー 9 植物 II（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）. p. 151. ぎょうせい, 東京.
- 樋口利雄, 1952. ガッサンクロゴケ（新稱）及びライテウゴケ第二の産地について. 植物研究雑誌, 27: 208.
- 高木典雄, 1953. 日本産クロゴケ属 (*Andreaea* Hedw.). 服部植物研究所報告, 10: 30-34.

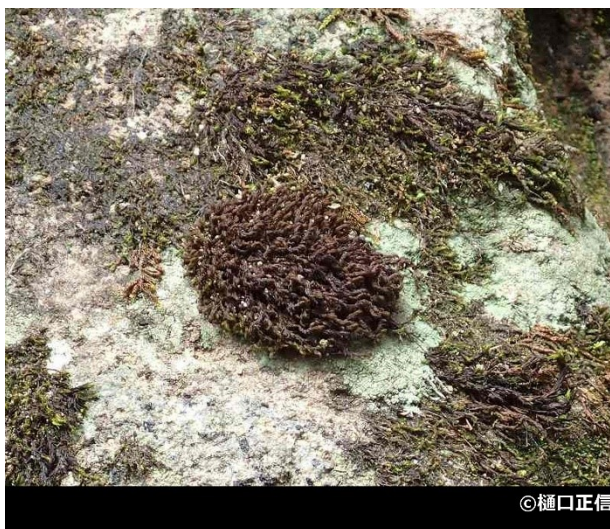
アセスメントサマリー（Assessment summary）

Andreaea nivalis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Andreaea nivalis* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area Mid-altitude area】 Upper river basin
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—



執筆者:	樋口正信（国立科学博物館）
Author:	Masanobu Higuchi

公表年月：2025 年 3 月

スギゴケ目 Polytrichales スギゴケ科 Polytrichaceae

ヒメハミズゴケ

Pogonatum camusii (Thér.) Touw

カテゴリー判定結果		準絶滅危惧 (NT)		②
基準 A: —	基準 B: VU 未満	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 ②生育条件が悪化している。 【判断理由】 琉球列島の林内の裸地に生育するが、生育量は少なく、樹木の伐採や植生遷移によって山道沿いの環境が変化し、一部の生育地では個体群の減少または消失している。しかし、現在でも比較的多くの生育地があることから、今すぐには絶滅の恐れがないと判断した。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

本種ははじめ琉球列島から記載され、その後東南アジアの数か所からも記録された。琉球列島では屋久島、奄美大島、沖縄島、西表島、西表島から報告されている。

基礎情報

【形態】

葉や茎の発達が悪く、小型。茎は非常に短く、葉は薄くて鱗片状。上部の葉は三角形の基部から針状にのび、長さ約 4 mm、葉縁の上部に不規則な突起があり、葉身表面に薄板がない。中肋は不明瞭で、その横断面は 2 層の一樣な細胞からなる。雌雄異株。蒴柄は褐色～赤褐色で長さ約 2 cm、表面に明瞭な乳頭状の突起があってざらつくのがよい特徴である。蒴は円筒形。帽に多くの毛がある。本種は蒴柄が褐色～赤褐色で長さ約 2 cm ほどしかなく、表面に明瞭な乳頭状突起があるので、ハミズゴケ (*Pogonatum spinulosum*) からは容易に区別される。蒴や帽はハミズゴケに似るが、より小型である。

【生活史】

雌雄異株だが孢子体をよくつける。配偶体が小型なため、孢子体を付けていないと野外で見つけることは困難である。一般の蘚類では配偶体が成長すると原糸体は消失するが、本種では原糸体が長く残り、光合成を行う。

【生育環境】

暖地の林内の陰地や、山道脇などの湿った土上または岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林

国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

琉球列島。中国、タイ、ベトナム、フィリピン、インドネシア。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト作成のための調査では、沖縄県西表島で生育が確認された。また、小林 (2010) は屋久島から報告している。これらのほかに、広島大学植物標本庫には過去 15 年間のうちに採集された奄美大島、沖縄産の標本がある。

【生育地の現況】

琉球列島の林内の裸地に生育するが、樹木の伐採や植生遷移によって山道沿いの環境が変化している。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

森林伐採による環境の変化、また、多くの生育地が山道沿いにあることから、人の踏みつけによる個体群の減少が危惧される。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 人の踏みつけ
	(現在)	森林伐採, 人の踏みつけ

特記事項

生育地の一部は国立公園内にある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ヒメハミズゴケ	<i>Pogonatum camusii</i> (Thér.) Touw	NT
第4次 2019:	ヒメハミズゴケ	<i>Pogonatum camusii</i> (Thér.) Touw	NT
第4次 2018:	ヒメハミズゴケ	<i>Pogonatum camusii</i> (Thér.) Touw	NT
第4次 2017:	ヒメハミズゴケ	<i>Pogonatum camusii</i> (Thér.) Touw	NT
第4次 2015:	ヒメハミズゴケ	<i>Pogonatum camusii</i> (Thér.) Touw [= <i>Racelopodopsis camusii</i> Thér.]	NT
第4次:	ヒメハミズゴケ	<i>Pogonatum camusii</i> (Thér.) Touw [= <i>Racelopodopsis camusii</i> Thér.]	NT
第3次:	ヒメハミズゴケ	<i>Pogonatum camusii</i> (Thér.) Touw (= <i>Rhacelopodopsis camusii</i> Thér.)	NT
第2次:	ヒメハミズゴケ	<i>Pogonatum camusii</i> (Thér.) Touw Syn. <i>Rhacelopodopsis camusii</i> Thér.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

沖縄県[準絶滅危惧（NT）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- 小林亮平, 2010. 屋久島（鹿児島県）で新たに見つかった絶滅危惧藓類2種. 藓苔類研究, 10: 56.
- Touw, A., 1986. A revision of *Pogonatum* sect. *Racelopsus*, sect. nov., including *Racelopus* Dozy & Molk., *Pseudoracelopus* Broth., and *Racelopodopsis* Thér. Journal of the Hattori Botanical Laboratory, 60: 1-33.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Pogonatum camusii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Pogonatum camusii* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Human trampling
Law designation status for conservation	—

執筆者:	山口富美夫 (広島大学)
Author:	Tomio Yamaguchi

公表年月：2025 年 3 月

ギボウシゴケ目 Grimmiales チヂレゴケ科 Ptychomitriaceae

ヤマトハクチョウゴケ

Campylostelium brachycarpum (Nog.) Z.Iwats., Yuk.Tateishi & Tad.Suzuki

カテゴリー判定結果		準絶滅危惧 (NT)		①
基準 A: —	基準 B: VU 未満	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 ①個体数が減少している。 【判断理由】 石川県の生育地では岩壁の崩落により生育地が消滅した。山口県の生育地では生育量が減少した。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

ヤマトハクチョウゴケは国内では本州、九州に、国外では北米東部に分布する微小な直立性の蘚類。山地の林内の湿った火成岩や凝灰岩上に生育する。

協力者： 林正典（日本蘚苔類学会）・川合啓二（岡山コケの会）

基礎情報

【形態】

茎は高さ 1-2 mm、線形の葉が集まってつき、乾くと巻縮する。葉身細胞は方形で幅 5 μm、厚壁で平滑。蒴柄は繊細で長く、白鳥の首のように湾曲する。同属のハクチョウゴケ (*Campylostelium saxicola* (F.Weber & Mohr) Bruch & Schimp.) に似るが、蒴歯が二縦裂せず単一で、蒴歯の間隔が広いことで区別できる。

【生活史】

雌雄同株（異苞）。

【生育環境】

山地の林内の湿った火成岩や凝灰岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では秋田県、新潟県、東京都、静岡県、愛知県、長野県、石川県、岡山県、鳥取県、大分県、宮崎県に、国外では北米東部に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト調査（2016-2019）では山口県周防大島で生育量の減少が、福岡県英彦山で少量の生育が確認された。石川県の生育地では岩壁の崩落により生育地が消滅した。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

森林伐採、河川開発、林道の整備や工事によって生育環境が損なわれることが心配される。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 河川開発, 交通インフラ建設
	(現在)	森林伐採, 河川開発, 交通インフラ建設

特記事項

植物体が小さいので野外では胞子体がないと見つけにくい。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ヤマトハクチョウゴケ	<i>Campylostelium brachycarpum</i> (Nog.) Z.Iwats., Yuk.Tateishi & Tad.Suzuki	VU
第4次 2019:	ヤマトハクチョウゴケ	<i>Campylostelium brachycarpum</i> (Nog.) Z.Iwats., Yuk.Tateishi & Tad.Suzuki	VU
第4次 2018:	ヤマトハクチョウゴケ	<i>Campylostelium brachycarpum</i> (Nog.) Z.Iwats., Yuk.Tateishi & Tad.Suzuki	VU
第4次 2017:	ヤマトハクチョウゴケ	<i>Campylostelium brachycarpum</i> (Nog.) Z.Iwats., Yuk.Tateishi & Tad.Suzuki	VU
第4次 2015:	ヤマトハクチョウゴケ	<i>Campylostelium brachycarpum</i> (Nog.) Z.Iwats., Y.Tateishi & Tad.Suzuki	VU
第4次:	ヤマトハクチョウゴケ	<i>Campylostelium brachycarpum</i> (Nog.) Z.Iwats., Y.Tateishi & Tad.Suzuki	VU
第3次:	ヤマトハクチョウゴケ	<i>Campylostelium brachycarpum</i> (Nog.) Z.Iwats., Y.Tateishi & Tad.Suzuki	VU
第2次:	ヤマトハクチョウゴケ	<i>Campylostelium saxicola</i> var. <i>brachycarpum</i> Nog.	NT
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

宮城県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 茨城県[絶滅危惧Ⅱ類] 埼玉県[絶滅危惧Ⅱ類(VU)] 神奈川県[準絶滅危惧(NT)] 愛知県[絶滅危惧Ⅱ類(VU)] 京都府[準絶滅危惧種] 鳥取県[準絶滅危惧(NT)] 岡山県[絶滅危惧Ⅱ類] 広島県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 山口県[絶滅危惧ⅠA類(CR)] 大分県[絶滅危惧ⅠB類(EN)] 宮崎県[絶滅危惧Ⅱ類(VU-r)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 有川智己・平岡照代・木口博史・平岡正三郎, 2006. コケ植物. 高桑正敏・勝山輝男・木場英久(編), 神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006. pp. 131-145. 神奈川県立生命の星地球博物館.

- 有川智己, 2015. ヤマトハクチョウゴケ. 環境省 (編), レッドデータブック 2014 ―日本の絶滅のおそれのある野生生物― 9 植物 II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類). p. 159. ぎょうせい, 東京.
- 樋口正信・川合啓二, 2013. 明治神宮の蘚苔類. 鎮座百年記念第二次明治神宮境内総合調査委員会 (編), 鎮座百年記念第二次明治神宮境内総合調査報告書. pp. 101-121. 明治神宮社務所, 東京.
- 岩月善之助・立石幸敏・鈴木 直, 1999. 日本産 *Campylostelium* (ハクチョウゴケ) 属. *Hikobia*, 13: 79-85.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- 大分県自然環境学術調査会野生生物専門部会 (編), 2011. レッドデータブックおおいだ ―大分県の絶滅のおそれのある野生生物―.
- 立石幸敏, 2012. ヤマトハクチョウゴケ. 鳥取県生物学会 (編), レッドデータブックとっとり改訂版. p. 184. 鳥取県.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Campylostelium brachycarpum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Campylostelium brachycarpum* is listed as NT under criteria ①.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development, Transportation infrastructure construction
Law designation status for conservation	—

執筆者: 樋口正信 (国立科学博物館)
Author: Masanobu Higuchi

公表年月: 2025 年 3 月

イサワゴケ

Syrrhopodon tosaensis Cardot

カテゴリー判定結果 準絶滅危惧 (NT) ②				
基準 A: —	基準 B: VU 未満	基準 C: —	基準 D: VU 未満	基準 E: —
生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 ②生育条件が悪化している。 【判断理由】 西日本の各地に分布しているが、生育地は自然林内に限られ、出現頻度は極めて低く、また生育個体群も小さい。広島県宮島で 40 年ぶりに確認されたことが報告されているように、生育地は不安定で、森林伐採、植生遷移や自然災害等で着生樹木が失われたり、周囲の環境が変化することによって、個体群が消滅する危険がある。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

本州（中部以西）、四国、九州、琉球列島と中国大陆に分布する白緑色の小型の蘚類で、中肋背面の鋭い湾曲した棘のかたまりと、葉の基部の網目状組織が特徴的である。愛知県以西の各地に点在し、新たな生育地も確認されているが、大部分の生育地で、森林伐採や林道整備などによりその存続が危ぶまれている。

協力者: 土永浩史（日本蘚苔類学会）・鶴沢美穂子（ミュージアムパーク茨城県自然博物館）・木口博史（岡山コケの会）・立石幸敏（岡山コケの会）・佐藤匠（広島大学）・西畑和輝（広島大学）・桐生賢太（広島大学）

基礎情報

【形態】

植物体は小型で白緑色。茎は長さ 6～10 mm、葉は乾いてもあまり縮れず、披針形で透明な 2 または 3 細胞列の脈がある。中肋は葉頂に達し、頂端近くの背面には大きな、鋭い、やや湾曲した棘がかたまつてつく。葉の基部の中肋の左右には明瞭な網目状組織がある。葉身細胞は中央に高いパピラがあり、その先端はいくつかに分かれる。蒴柄は細くて長さ 7～9 mm、蒴は直立する。

【生活史】

胞子体は比較的まれだが、胞子以外に葉の先につく紡錘形の無性芽でも繁殖する。

【生育環境】

山地の樹上や岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

国内では本州（中部以西）、四国、九州、琉球列島に分布し、国外では中国に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト作成のための調査では、三重県、和歌山県、高知県、宮崎県、沖縄県（西表島）で生育が確認された。また、近年の報告では、広島県（井上ほか 2016）、徳島県（木口ほか 2017）、鹿児島県屋久島（岩田 2018）で確認されている。

【生育地の現況】

大部分の生育地周辺で生育環境の人為的改変が確認されている。

【個体数の現況】

生育量に変化がみられない生育地が多いが、大部分の生育地で存続が心配される。

存続を脅かす要因

大部分の生育地で、森林伐採や河川開発、堰堤やダムの整備、海岸の整備、遊歩道の拡幅や林道整備により、その生育環境の存続が危ぶまれる。

要因の区分：	（過去）	森林伐採, 河川開発, 海岸開発, 交通インフラ建設, ダム・河川工作物建設
	（現在）	森林伐採, 河川開発, 海岸開発, 交通インフラ建設, ダム・河川工作物建設

特記事項

一部の生育地は国立公園内、県立公園内にある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	イサワゴケ	<i>Syrrhopodon tosaensis</i> Cardot	VU
第4次 2019:	イサワゴケ	<i>Syrrhopodon tosaensis</i> Cardot	VU
第4次 2018:	イサワゴケ	<i>Syrrhopodon tosaensis</i> Cardot	VU
第4次 2017:	イサワゴケ	<i>Syrrhopodon tosaensis</i> Cardot	VU
第4次 2015:	イサワゴケ	<i>Syrrhopodon tosaensis</i> Cardot	VU
第4次:	イサワゴケ	<i>Syrrhopodon tosaensis</i> Cardot	VU
第3次:	イサワゴケ	<i>Syrrhopodon tosaensis</i> Cardot	VU
第2次:	イサワゴケ	<i>Syrrhopodon tosaensis</i> Card.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

愛知県[絶滅危惧ⅠA類(CR)] 和歌山県[準絶滅危惧(NT)] 広島県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]
宮崎県[絶滅危惧Ⅱ類(VU-r)] 沖縄県[絶滅危惧Ⅱ類(VU)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 井上侑哉・久保晴盛・内田慎治・向井誠二・坪田博美, 2016. 40年ぶりに生育が再確認された広島県のイサワゴケ（カタシログケ科、蘚類）. 植物研究雑誌, 91: 186-190.
- 岩田和鷹, 2018. 屋久島（鹿児島県）における蘚苔類の植物分布. Naturalistae, 22: 73-84.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ 355pp., 192pls. 平凡社, 東京.
- 立石幸敏・木口博史・西村直樹, 2017. 轟九十九滝（徳島県海陽町）の蘚類. Naturalistae, 21: 89-96.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Syrrhopodon tosaensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Syrrhopodon tosaensis* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat

status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development, Coastal development, Transportation infrastructure construction, Dam/River structures construction
Law designation status for conservation	—

執筆者: 山口富美夫 (広島大学)
Author: Tomio Yamaguchi

公表年月：2025 年 3 月

キサゴゴケ

Hypnodontopsis apiculata Z.Iwats. & Nog.

カテゴリー判定結果		準絶滅危惧 (NT)		①②	
基準 A: —	基準 B: VU 未満	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 ①個体数が減少している。 【判断理由】 もともと既知の産地が限られ、十分な情報はないが、愛知県豊川市、三重県松阪市、宮崎県日南市五百禰神社など、着生木がなくなって見られなくなった産地や、愛知県犬山市など着生木の伐採で減少しているところ、三重県多気町（佐名）と伊勢市（外宮）や、兵庫県丹波市のように確認できなくなっている産地などが知られている。 ②生育条件が悪化している。 【判断理由】 もともと既知の産地が限られ、十分な情報はないが、愛知県豊川市、三重県松阪市、宮崎県日南市五百禰神社など、着生木がなくなって見られなくなった産地や、愛知県犬山市など着生木の伐採で減少しているところ、三重県多気町（佐名）と伊勢市（外宮）や、兵庫県丹波市のように確認できなくなっている産地などが知られている。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

キサゴゴケはスギなどの樹幹に着生するととも小型の蘚類で、舌形からへら形の葉をと紡錘形の無性芽をつける。日本固有で、本州の中部以西と九州に分布している。知られている産地は限られるが、生育状況が詳細に報告されている地点もある一方で、着生していた木が減ったりなくなったりした産地や、見られなくなっている産地が知られており、個体数の減少や生育条件の悪化が認められている。

協力者： 大石善隆（福井県立大学）・鈴木直（服部植物研究所）

基礎情報

【形態】

植物体はとても小型で、直立し、茎は長さ 2～3 mm。茎はほとんど分枝せず、舌形からへら形の葉をつける。葉は長さ 1.1～1.3 mm で、中肋は先端から少し突出する。葉の上に紡錘形の無性芽をつける。蒴柄は短く、湿ると螺旋状に巻く。蒴は乾くと明瞭な縦みぞができ、外蒴歯は 8 本で、その表面に柵状の肥厚がある。

【生活史】

雌雄同株。

【生育環境】

スギなどの樹幹に生育する。

生育環境区分： 【陸域_平地部】 森林

国土地域区分： (2) 里地里山・田園地域

【分布域】

日本固有で、本州中部以西、九州に分布する。これまでに記録があるのは、静岡県浜松市北区（旧引佐町）、森町、愛知県新城市、豊川市（旧一宮町）、豊田市（旧猿投町）、犬山市、三重県四日市市（西日野町）、松阪市（下村町）、飯高町（宮前、赤樋）、多気町（佐名）、伊勢市、京都府京都市天龍寺、兵庫県丹波市、宮崎県宮崎市、日南市、高鍋町、都農町。

現在の生育状況

【分布域の現況】

静岡県浜松市北区（旧引佐町）と森町では、2000 年のレッドデータブックの調査時点で稀に確認されていた。愛知県の 2020 年のレッドデータブックでは、新城市では良好、豊田市（旧猿投町）、犬山市でも減少しながらも健在、豊川市（旧一宮町）では着生していたスギが伐採されて絶滅とされている。三重県の 2015 年版のレッドデータブック（山田, 2015）では松阪市（下村町）では着生樹が倒壊して消滅、多気町（佐名）と伊勢市（外宮）では確認できなかったとされている。四日市市（西日野町）、飯高町（宮前、赤樋）の現状は不明。京都府京都市天龍寺では第 4 次レッドリスト作成のための調査でスギとイロハモミジの樹幹に生育しているのが確認されている。兵庫県の 2020 年版のレッドデータブックでは、丹波市の県内唯一の産地では数度の調査にかかわらず再確認できていないという。宮崎県では宮崎市、日南市、高鍋町、都農町の合計 6 か所以上で生育が確認されている（松本, 2022）。

全体として、着生している木（主にスギ）が伐採されたり倒壊したりして消滅したり、再発見されなくなる事例も多いが、新たな産地も見つかっている。

【生育地の現況】

詳細については不明だが、比較的低地の森林内に生育するので、森林伐採による生育環境の変化によって壊滅的な影響を受ける可能性がある。

【個体数の現況】

詳細については不明だが、上記のとおりいくつかの地域では減少が見られる。愛知県新城市と宮崎県宮崎市では詳細な生育状況の報告がされている（成田, 2009; 松本・福松, 2017）。

存続を脅かす要因

比較的低位の森林内に生育するので、森林伐採による生育環境の変化によって壊滅的な影響を受ける可能性がある。生育地付近の着成木の老木化や周辺の森林の遷移の進行により生育環境が悪化しているのも確認されている。

要因の区分：	（過去）	森林伐採、遷移進行・植生変化/自然遷移
	（現在）	森林伐採、遷移進行・植生変化/自然遷移

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	キサゴゴケ	<i>Hypodontopsis apiculata</i> Z.Iwats. & Nog.	CR+EN
第4次 2019:	キサゴゴケ	<i>Hypodontopsis apiculata</i> Z.Iwats. & Nog.	CR+EN
第4次 2018:	キサゴゴケ	<i>Hypodontopsis apiculata</i> Z.Iwats. & Nog.	CR+EN
第4次 2017:	キサゴゴケ	<i>Hypodontopsis apiculata</i> Z.Iwats. & Nog.	CR+EN
第4次 2015:	キサゴゴケ	<i>Hypodontopsis apiculata</i> Z.Iwats. & Nog.	CR+EN
第4次:	キサゴゴケ	<i>Hypodontopsis apiculata</i> Z.Iwats. & Nog.	CR+EN
第3次:	キサゴゴケ	<i>Hypodontopsis apiculata</i> Z.Iwats. & Nog.	CR+EN
第2次:	キサゴゴケ	<i>Hypodontopsis apiculata</i> Z. Iwats. et Nog.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

愛知県[絶滅危惧ⅠB類(EN)] 三重県[絶滅危惧Ⅱ類(VU)] 兵庫県[Aランク] 宮崎県[絶滅危惧Ⅱ類(VU-r)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 愛知県, 2020. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2020 植物編. 愛知県, 810pp.
- 樋口正信・松本美津, 2016. 宮崎県南部のキサゴゴケ. 蘚苔類研究, 11: 172-173.
- 兵庫県, 2020. 兵庫の貴重な自然 兵庫県版レッドデータブック 2020 (植物・植物群落). 兵庫県. 227pp.
- Iwatsuki, Z., 1957. The genus *Hypnodon* and its allies. Bryologist, 60: 299-310.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355pp., 192pls. 平凡社, 東京.
- 松本美津・福松東一, 2017. 民家園のスギに着生するキサゴゴケ. 宮崎県総合博物館研究紀要, 37: 29-32.
- 松本美津, 2022. キサゴゴケ. 宮崎県 (編), 三訂 宮崎県版レッドデータブック 宮崎県の保護上重要な野生生物, p 154. 宮崎県.
- 成田 務, 2009. 新城市永住寺のキサゴゴケ 14 年間の変動. 鳳来寺山自然科学博物館館報, 39: 52-53.
- Noguchi, A., 1989. Illustrated Moss Flora of Japan. Part 3. pp. 493-742. Hattori Bot. Lab., Nichinan.
- 山田耕作, 2015. キサゴゴケ. 三重県 (編), 三重県レッドデータブック 2015 三重県の絶滅のおそれのある野生生物. p. 682. 三重県.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Hypnodontopsis apiculata has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Hypnodontopsis apiculata* is listed as NT under criteria ①②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area Plain】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Successional progression/Vegetation change/Natural succession

Law designation status for conservation	—

執筆者:	有川智己（慶應義塾大学）
Author:	Tomotsugu Arikawa

公表年月：2025 年 3 月

センボンゴケ目 Pottiales センボンゴケ科 Pottiaceae

ダンダンゴケ

Eucladium verticillatum (With.) Bruch & Schimp.

カテゴリー判定結果		準絶滅危惧 (NT)		②
基準 A: —	基準 B: VU 未満	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 ②生育条件が悪化している。 【判断理由】 分布域に限られるが、いずれも市街化が進む地域の崖なので、工事により減ることが心配される。福岡県では見つからなくなっている。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

ダンダンゴケは、北半球に広く分布し、好塩基性の蘚類として知られている。日本では海岸付近の洞窟内など、湿った砂岩や凝灰岩の崖に見られる。千葉県、神奈川県、福岡県から記録があるが、福岡県では近年確認されていない。海岸の護岸工事などにより生育地が失われる心配がある。

基礎情報

【形態】

植物体は緑色～灰緑色で、柔らかい密な群落を作る。茎は高さ 10 mm、茎の断面で中心束を欠く。葉は線状～長披針形、長さ 1～2.5 mm、葉鞘部の縁に細かい鋸歯がある。中肋は強壯で、先端で短く突出する。葉身細胞は長方形～不規則な方形で 2～3 個の乳頭がある。葉基部で長方形～卵状六角形となり、薄壁。本種はオウムゴケ *Gymnostomum recurvirostrum* に似るが、葉基部の大きな透明細胞と、上部の小さな緑色細胞が顕著であり、葉鞘部の縁に鋸歯があることで区別される。

【生活史】

雌雄異株。

【生育環境】

好塩基性の蘚類として知られており、日本では海岸付近の洞窟内や丘陵部の切り通しなど、水が染み出している砂岩や凝灰岩の崖に見られる。炭酸カルシウムが多く含まれる地層にのみ生育すると言われる。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】岩壁・ガレ場（石灰岩地等） 【陸域_平地部 海岸部】住宅地, 市街緑地, 洞窟・地下浅層, 海崖・岩浜・岩礁（磯）
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域, (3) 都市地域

【分布域】

国内では千葉県南部と神奈川県南東部、福岡県から記録がある。国外では中国など北半球に広く分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

福岡県では 1975 年に北九州市平尾台から報告された後、生育は確認されていない（福岡県, 2011）。千葉県での生育地は古木ほか（2005）や古木（2023）に、神奈川県での生育は佐々木・平岡（2004）や有川（2022）に詳細にまとめられており、房総半島から三浦半島にかけての地域に限られるものの、多数の地点で確認されている。

【生育地の現況】

炭酸カルシウムに富む砂岩や礫岩、凝灰岩が露出した、海蝕崖や切り通しなどに、密な群落が見られる。神奈川県逗子市神武寺や鎌倉市と横浜市金沢区の間にある朝比奈切通には大群落ができている（有川, 2022）。千葉県富津市長浜では水路のコンクリート製パネルに生えている（古木ほか, 2005）。いずれも市街化の進む地域である。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

洞窟のある海岸の護岸工事などにより生育地が失われる心配がある。

要因の区分：	(過去)	海岸開発, 洞窟の消失や環境悪化, 交通インフラ建設
	(現在)	海岸開発, 洞窟の消失や環境悪化, 交通インフラ建設

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ダンダンゴケ	<i>Eucladium verticillatum</i> (With.) Bruch & Schimp.	VU
第4次 2019:	ダンダンゴケ	<i>Eucladium verticillatum</i> (With.) Bruch & Schimp.	VU
第4次 2018:	ダンダンゴケ	<i>Eucladium verticillatum</i> (With.) Bruch & Schimp.	VU
第4次 2017:	ダンダンゴケ	<i>Eucladium verticillatum</i> (With.) Bruch & Schimp.	VU
第4次 2015:	ダンダンゴケ	<i>Eucladium verticillatum</i> (Brid.) Bruch & Schimp.	VU
第4次:	ダンダンゴケ	<i>Eucladium verticillatum</i> (Brid.) Bruch & Schimp.	VU
第3次:	ダンダンゴケ	<i>Eucladium verticillatum</i> (With.) Bruch & Schimp.	VU
第2次:	ダンダンゴケ	<i>Eucladium verticillatum</i> (Brid.) B. S. G.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

千葉県[一般保護生物（D）] 神奈川県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 福岡県[情報不足]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 有川智己, 2022. コケ植物. 神奈川県環境農政局緑政部自然環境保全課・神奈川県立生命の星地球博物館 (編), 神奈川県レッドデータブック 2022 植物編. pp. 328-360. 神奈川県, 横浜.
- 福岡県, 2011. 福岡県の希少野生生物 ―福岡県レッドデータブック―.
<https://biodiversity.pref.fukuoka.lg.jp/rdb/>
- 古木達郎・川名 興・樋口正信, 2005. 千葉県内のダンダンゴケの産地. 蘚苔類研究, 8: 370-372.
- 古木達郎, 2023. ダンダンゴケ. 千葉県希少生物及び外来生物に係るリスト作成検討会 (編), 千葉県の保護上重要な野生生物 千葉県レッドデータブック 植物・菌類編 2023 年改訂版. p. 453. 千葉県環境生活部自然保護課, 千葉.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- 神田啓史, 2000. ダンダンゴケ. 環境庁 (編), 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物―レッドデータブック―9. 植物 II (維管束植物以外). p. 42. 自然環境研究センター, 東京.
- 永野 巖, 1959. 三浦半島における *Eucladium verticillatum* (Smith) B. S. G. の分布と着生基岩について. 横須賀市博物館研究報告 (自然科学), 4: 26-34.
- 佐々木シゲ子・平岡照代, 2004. 神奈川県横浜市・鎌倉市で新たに発見されたダンダンゴケとフガゴケ (蘚類) の生育地. 自然環境科学研究, 17: 37-41.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Eucladium verticillatum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Eucladium verticillatum* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】Cliff/Talus area (e.g. limestone area) 【Terrestrial/Freshwater area_Plain Beach】Residential area, Urban green area, Cave/Shallow underground, Sea Cliff/Rocky beach/Reef
Threat types:	Coastal development, Loss of caves and environmental deterioration, Transportation infrastructure construction
Law designation status for conservation	—

執筆者: 有川智己 (慶應義塾大学)
Author: Tomotsugu Arikawa

公表年月：2025 年 3 月

フガゴケ

Gymnostomiella longinervis Broth.

カテゴリー判定結果		準絶滅危惧 (NT)		②
基準 A: —	基準 B: VU 未満	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 ②生育条件が悪化している。 【判断理由】 神奈川県では都市化・造成の進行により、本種の生育地である凝灰岩の露頭の大部分が消滅の危機にある（神奈川県 2022）。また、千葉県においても、過去に生育記録のある 2 地域で確認されていない（千葉県 2023）。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

石灰岩、または石灰を含む岩の上に生育し、国外では中国、フィリピン、ミャンマーに分布している。これまでに千葉県、神奈川県、和歌山県、大分県、沖縄県から記録があり、第 5 次レッドリスト作成のための調査では沖縄県で確認された。切り通しや石垣などに生育しているので、道路工事や管理放棄による衰退が心配される。

協力者： 西畑和輝（広島大学）

基礎情報

【形態】

植物体は小型、集まって黄色味を帯びた密なマットを作る。茎は枝分かれせず、長さ 8 mm 以下、ややまばらに葉をつける。葉は倒卵形～へら型で、長さ 1 mm 程度、葉先は丸みを帯びた鈍頭、中肋は葉先近くに達する。葉身中部の細胞は六角形で長さ 13～20 μm 、各細胞に 2～4 個の小さなパピラがある。葉の基部の細胞はより長く平滑。枝の先端部に長楕円形で、長さ 80～100 μm の多くの無性芽がつく。本属の種は日本には 1 種のみがある。

【生活史】

雌雄異株。国内では孢子体は見つかっていない。

【生育環境】

石灰岩、または石灰を含む岩の上に生育する。沖縄島や宮古島では琉球石灰岩で作られた石垣の上にも生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】岩壁・ガレ場（石灰岩地等）	【陸域_平地部】住宅地、市街緑地
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域	

【分布域】

国内では本州、九州、琉球列島に分布し、国外では、中国、フィリピン、ミャンマーに分布している。

現在の生育状況

【分布域の現況】

これまでに千葉県、神奈川県、和歌山県、大分県、沖縄県から記録がある。第 5 次レッドリスト作成のための調査では、沖縄県沖縄島で生育が確認された。そのほか、木口 (2019) は埼玉県から、山口 (2019) は沖縄県宮古島から報告し、また、広島大学植物標本庫には、2017 年に神奈川県で採集された標本が保管されている。

【生育地の現況】

千葉県以西の低地の石灰質の岩上に点在する。神奈川県では都市化・造成の進行により、本種の生育地である凝灰岩の露頭の大部分が消滅の危機にある。大部分の生育地が人為的影響を受けやすい立地なので個体群の存続が危惧される。

【個体数の現況】

個体群は小さく、個体数も少ない。

存続を脅かす要因

切り通しや石垣などに生育することが多いので、道路工事によって生育地が失われる

ことや、管理放棄や自然遷移による群落の衰退、崖崩れなどが心配される。		
要因の区分：	(過去)	石灰採掘, 土地造成, 交通インフラ建設, 管理放棄, 遷移進行・植生変化/自然遷移, 分布・産地局限, 基質・基物の減少及び消失
	(現在)	石灰採掘, 土地造成, 交通インフラ建設, 管理放棄, 遷移進行・植生変化/自然遷移, 分布・産地局限, 基質・基物の減少及び消失

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリと掲載名

第4次 2020:	フガゴケ	<i>Gymnostomiella longinervis</i> Broth.	VU
第4次 2019:	フガゴケ	<i>Gymnostomiella longinervis</i> Broth.	VU
第4次 2018:	フガゴケ	<i>Gymnostomiella longinervis</i> Broth.	VU
第4次 2017:	フガゴケ	<i>Gymnostomiella longinervis</i> Broth.	VU
第4次 2015:	フガゴケ	<i>Gymnostomiella longinervis</i> Broth. [= <i>G. ryukyuensis</i> Toyama]	VU
第4次:	フガゴケ	<i>Gymnostomiella longinervis</i> Broth. [= <i>G. ryukyuensis</i> Toyama]	VU
第3次:	フガゴケ	<i>Gymnostomiella longinervis</i> Broth.(= <i>G. ryukyuensis</i> Toyama)	VU
第2次:	フガゴケ	<i>Gymnostomiella longinervis</i> Broth. Syn. <i>G. ryukyuensis</i> Toyama	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

千葉県[最重要・重要保護生物（A-B）] 神奈川県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 和歌山県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 大分県[情報不足（DD）] 沖縄県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- 神奈川県環境農政局緑政部自然環境保全課・神奈川県立生命の星・地球博物館（編）, 2022. 神奈川県レッドデータブック 2022 植物編. 438pp., 16pls. 神奈川県, 横浜.

- 関 太郎・宮城朝章, 1980. フガゴケ (マルダイゴケ科, 蘚類) の沖縄における生態. *Hikobia*, 8: 416-423.
- 木口博史, 2019. 埼玉県のヌマシノブゴケとフガゴケ. *蘚苔類研究*, 11: 347-348.
- 山口富美夫, 2019. コケ植物. 宮古島市史編さん委員会 (編), 宮古島市史第三巻自然編第 I 部 (本編) みやこの自然. pp. 245-252. 宮古島市教育委員会, 宮古島市.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Gymnostomiella longinervis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Gymnostomiella longinervis* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area Low-altitude area】 Cliff/Talus area (e.g. limestone area) 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】 Residential area, Urban green area
Threat types:	Limestone mining, Land development, Transportation infrastructure construction, Abandonment of management, Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Limited distribution, Reduction or loss of substrate
Law designation status for conservation	—

執筆者: 山口富美夫 (広島大学)
Author: Tomio Yamaguchi

公表年月: 2025 年 3 月

アオシマヒメシワゴケ

Aulacopilum glaucum Wilson subsp. *trichophyllum* (Ångstr.) Pursell

カテゴリー判定結果		準絶滅危惧 (NT)		①②	
基準 A: —	基準 B: VU 未満	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 ①個体数が減少している。 【判断理由】 大塚（2023）は、大分県佐伯市の産地について、着生木周辺の樹木類の繁茂による環境の変化や着生木の樹皮の剥離により、生育する量がごく微量になっているとしている。 ②生育条件が悪化している。 【判断理由】 大塚（2023）は、大分県佐伯市の産地について、着生木周辺の樹木類の繁茂による環境の変化や着生木の樹皮の剥離により、生育する量がごく微量になっているとしている。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

アオシマヒメシワゴケは、三重県以南の海岸近くの樹木に着生する小型の蘚類で、国外ではアフリカから記録がある。これまでに本州（三重県、和歌山県）、四国（徳島県）、九州（宮崎県、屋久島）などから記録があり、大分県や宮城県では近年も生育が確認されている。大部分の生育地で台風などの災害や樹幹の乾燥により生育環境が失われることが心配される。

協力者： 大塚政雄（日本蘚苔類学会）

基礎情報

【形態】

植物体は小型で、茎は這い、やや偏平に葉をつける。葉は長さ 0.5～0.65 mm、卵状楕円形で、葉先は長く伸び、透明。中肋を欠く。葉身細胞は多くのパピラに覆われる。葉先の細胞は長く、透明で平滑。蒴柄は約 1 mm の長さがあり、蒴は楕円形、蒴齒はない。近縁のヒメシワゴケ *Aulacopilum japonicum* は日本に広く分布するが、葉先は広く鋭頭、または鈍頭で、先端に長い透明な細胞がないことから容易に区別できる。

【生活史】

雌雄同株（異苞）で孢子体をよくつける。

【生育環境】

暖地の海岸に近い樹幹に着生する。また、神社の境内など、比較的人家に近いところにも生育する場合もある。

生育環境区分： 【陸域_海岸部】森林

国土地域区分： (2) 里地里山・田園地域

【分布域】

国内では本州（三重県以南）、四国、九州の沿海部に分布し、国外ではアフリカから記録がある。

現在の生育状況

【分布域の現況】

これまでに本州（三重県紀北町（旧海山町）、熊野市、尾鷲市、和歌山県田辺市）、四国（徳島県海陽町（旧海南町））、九州（大分県佐伯市、宮崎県宮崎市、日南市、鹿児島県屋久島）から記録がある（芦田ほか, 2005; 大塚, 2007）。2000 年のレッドデータブック（岩月, 2000）では、田辺市大湊神社や屋久島では確認できなかったとされていたが、芦田ほか（2005）はその後屋久島の栗生や永田で確認されたことを報告している。第 4 次レッドリスト作成のための調査では大分県佐伯市で生育が確認された。松本（2022）は宮崎市、日南市それぞれの複数か所で生育を報告している。

【生育地の現況】

大塚（2023）は着生木周辺の樹木類の繁茂による環境の変化や着生木の樹皮の剥離により、生育する量がごく微量になっているとしている。

【個体数の現況】

大分県佐伯市の集団について、2010 年の第 4 次レッドリストの調査では 2005 年以降生育量に変化はないとされていたが、その後大塚（2023）は微量になったことを報告している。その他の生育地の詳細については不明。

存続を脅かす要因

着生する樹木の伐採や、樹木が生える海岸部の開発が心配される。台風などの災害による樹木の倒壊や、植生の遷移や変化による樹幹の乾燥や被陰も心配される。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 海岸開発, 管理放棄, 遷移進行・植生変化/自然遷移, 自然災害
	(現在)	森林伐採, 海岸開発, 管理放棄, 遷移進行・植生変化/自然遷移, 自然災害

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	アオシマヒメシワゴケ	<i>Erpodium glaucum</i> (Wilson) I.G.Stone var. <i>trichophyllum</i> (Ångstr.) I.G.Stone	VU
第4次 2019:	アオシマヒメシワゴケ	<i>Erpodium glaucum</i> (Wilson) I.G.Stone var. <i>trichophyllum</i> (Ångstr.) I.G.Stone	VU
第4次 2018:	アオシマヒメシワゴケ	<i>Erpodium glaucum</i> (Wilson) I.G.Stone var. <i>trichophyllum</i> (Ångstr.) I.G.Stone	VU
第4次 2017:	アオシマヒメシワゴケ	<i>Erpodium glaucum</i> (Wilson) I.G.Stone var. <i>trichophyllum</i> (Ångstr.) I.G.Stone	VU
第4次 2015:	アオシマヒメシワゴケ	<i>Erpodium glaucum</i> (Wilson) I.G.Stone var. <i>trichophyllum</i> (Ångstr.) I.G.Stone [= <i>Aulacopilum trichophyllum</i> Ångstr.]	VU
第4次:	アオシマヒメシワゴケ	<i>Erpodium glaucum</i> (Wilson) I.G.Stone var. <i>trichophyllum</i> (Ångstr.) I.G.Stone [= <i>Aulacopilum trichophyllum</i> Ångstr.]	VU
第3次:	アオシマヒメシワゴケ	<i>Erpodium glaucum</i> (Wilson) I.G.Stone var. <i>trichophyllum</i> (Ångstr.) I.G.Stone (= <i>Aulacopilum trichophyllum</i> Ångstr.)	VU
第2次:	アオシマヒメシワゴケ	<i>Aulacopilum trichophyllum</i> Aongstr. ex C. Muell. Syn. <i>A. piliferum</i> Nog.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

和歌山県[準絶滅危惧（NT）] 大分県[絶滅危惧ⅠA類(CR)] 宮崎県[絶滅危惧Ⅱ類(VU-r)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 芦田喜治・立石幸敏・西村直樹, 2005. 三重県で見つけたアオシマヒメシワゴケ. 蘚苔類研究, 8: 372-373.
- 岩月善之助, 2000. アオシマヒメシワゴケ. 環境庁（編）, 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—9 植物Ⅱ（維管束植物以外）. p. 46. 自然環境研究センター, 東京.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355pp., 192pls. 平凡社, 東京.
- 松本美津, 2022. アオシマヒメシワゴケ. 宮崎県レッドデータブック改訂・外来種リスト検討委員会（編）, 三訂 宮崎県版レッドデータブック 宮崎県の保護上重要な野生生物. p.153. 宮崎県.
- Noguchi, A., 1988. Illustrated Moss Flora of Japan, part 2. pp. 243-491. Hattori Bot. Lab., Nichinan.
- 大塚政雄, 2007. 大分県産蘚苔類ノート（14）. 大分県の植物, 17: 30-31.
- 大塚政雄, 2023. アオシマヒメシワゴケ. 大分県自然環境学術調査会（編）, レッドデータブック おおいた 2022 —大分県の絶滅のおそれのある野生生物—. p. 166. 大分県.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Aulacopilum glaucum subsp. *trichophyllum* has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Aulacopilum glaucum* subsp. *trichophyllum* is listed as NT under criteria ①②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Beach】 Forest

Threat types:	Logging and wood harvesting, Coastal development, Abandonment of management, Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Natural disasters
Law designation status for conservation	—

執筆者:	有川智己（慶應義塾大学）
Author:	Tomotsugu Arikawa

公表年月：2025 年 3 月

カサゴケモドキ

Rhodobryum ontariense (Kindb.) Paris

カテゴリー判定結果		準絶滅危惧（NT）		①②	
基準 A: —	基準 B: VU 未満	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 ①個体数が減少している。 【判断理由】 徳島県の生育地などで、シカによる森林の荒廃に伴い群落が 5 年間で半減し、継続して縮小している。 ②生育条件が悪化している。 【判断理由】 徳島県の生育地などで、シカによる森林の荒廃に伴い群落が 5 年間で半減し、継続して縮小している。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

カサゴケモドキは、アジア、ヨーロッパ、北米に広く分布し、林床下の腐植土上に生育する。葉縁の歯が単生であることが特徴である。第 5 次レッドリスト作成のための調査では埼玉県、長野県や徳島県で確認された。シカによる森林の荒廃により半減している地点もあった。生育地付近の森林伐採やシカによる森林の荒廃、石灰採掘や道路建設により、生育地の環境が損なわれている。

協力者: 出口博則 (広島大学)・坪田博美 (広島大学)・久保晴盛 (広島大学)・大石善隆 (福井県立大学)・堀清鷹 (高知県立牧野植物園)・井上侑哉 (国立科学博物館)・古木達郎 (元千葉県立中央博物館)・木口博史 (岡山コケの会)

基礎情報

【形態】

植物体は直立し、茎頂に 20～50 枚の葉が集まって、傘のような形になっている。葉は倒卵形、長さ約 10 mm、葉縁は中部以上で強く反曲し、上部の歯は単生。葉身細胞は狭い六角形。蒴柄は 1 茎に 1～数本つく。オオカサゴケ *Rhodobryum giganteum* に似るがより小型で、葉縁の上部の歯は単生であることで区別できる。また、カサゴケ *Rhodobryum roseum* とは、同種として扱う研究者もいるが、傘の葉の数がより多いことなどで区別されている。

【生活史】

雌雄異株。孢子体はまれ。

【生育環境】

林下の腐植土上に群落を作る。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では北海道、本州、四国、九州に分布しており、国外では朝鮮半島、中国、マレー半島、インド、ネパール、シベリア、ヨーロッパ、北アメリカに分布している。

現在の生育状況

【分布域の現況】

栃木県日光市（神山・鈴木, 2010）や奈良県川上村高原（木村, 2014）、青森県八戸市（太田, 2019）で、近年新産地が見つかった。滋賀県では伊吹山で 1950 年代に採集されているがその後の再調査でも再発見されていない（埴田・葛山, 2021）。第 4 次レッドリストのための調査では長野県菅平、豊口山や、徳島県剣山での生育が確認されている。第 5 次レッドリストのための調査では、2018 年に長野県大鹿村青木川燕岩付近と大鹿村大河原、川上村毛木平のカラ松林林床、埼玉県秩父市奥秩父林道の終点付近の道路上で、2019 年には長野県川上村梓川の休暇村付近一帯のカラマツの林床と徳島県美馬市剣山行場で確認されている。

【生育地の現況】

林床下の腐植上に点在するが希。長野県川上村では大きな群落が無数にあった。徳島県剣山では、1995 年以降、継続的に調査が実施され、確認されてきたが、2010 年の時点で 5 年前にくらべ、シカによる林床かく乱、コケ群落剥離により、他の種のコケ群落とともに半減して、群落の縮小が続いている。2019 年の調査では、石灰岩地の腐植土上で 50 cm 四方の群落が 2 か所隣接して認められた。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

生育地付近の森林伐採やシカによる森林の荒廃、石灰採掘や 道路建設により、生育地の環境が損なわれている。大型で園芸利用される美しい種なので園芸目的で販売用に採取されることがある。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 石灰採掘, 交通インフラ建設, 捕獲・狩猟/園芸採取, シカ食害
	(現在)	森林伐採, 石灰採掘, 交通インフラ建設, 捕獲・狩猟/園芸採取, シカ食害

特記事項

カサゴケ *Rhodobryum roseum* とは、同種として扱う研究者もいる。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	カサゴケモドキ	<i>Rhodobryum ontariense</i> (Kindb.) Kindb.	VU
第4次 2019:	カサゴケモドキ	<i>Rhodobryum ontariense</i> (Kindb.) Kindb.	VU
第4次 2018:	カサゴケモドキ	<i>Rhodobryum ontariense</i> (Kindb.) Kindb.	VU
第4次 2017:	カサゴケモドキ	<i>Rhodobryum ontariense</i> (Kindb.) Kindb.	VU
第4次 2015:	カサゴケモドキ	<i>Rhodobryum ontariense</i> (Kindb.) Kindb.	VU
第4次:	カサゴケモドキ	<i>Rhodobryum ontariense</i> (Kindb.) Kindb.	VU
第3次:	カサゴケモドキ	<i>Rhodobryum ontariense</i> (Kindb.) Kindb.	VU
第2次:	カサゴケモドキ	<i>Rhodobryum ontariense</i> (Kindb.) Kindb.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

青森県[希少野生生物（C ランク）] 宮城県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 秋田県[情報不足種(DD)] 山形県[VU] 福島県[絶滅危惧Ⅱ類(VU)] 栃木県[絶滅危惧Ⅱ類(B ランク)] 埼玉県[絶滅危惧Ⅱ類(VU)] 神奈川県[絶滅危惧Ⅱ類(VU)] 新潟県[絶滅危惧(EN+VU)] 長野県[絶滅危惧Ⅱ類(VU)] 滋賀県[要注目種] 奈良県[絶滅寸前種, 注目種] 宮崎県[絶滅危惧Ⅱ類(VU-r)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Iwatsuki, Z. and T. Koponen, 1972. On the taxonomy and distribution of *Rhodobryum roseum* and its related species (Bryophyta). Acta Bot. Fenn., 96: 1-22.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- 神山隆之・鈴木 直, 2010. 栃木県で新たに見つかった絶滅危惧藓類 12 種. 藓苔類研究, 10: 18-20.
- 神田啓史, 2000. カサゴケモドキ. 環境庁 (編), 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—9 植物 II (維管束植物以外). p. 153. 自然環境研究センター, 東京.
- 木村全邦, 2014. 奈良県新産のカサゴケモドキ. 藓苔類研究, 11: 45-46.
- 太田正文, 2019. 青森県コケ植物分布ノート (4). 青森県立郷土館研究紀要, 43: 65-68.
- 埜田 宏・葛山博次, 2021. カサゴケモドキ. 滋賀県生きものの総合調査委員会 (編), 滋賀県で大切にすべき野生生物 滋賀県レッドデータブック 2020 年版. p. 310, 滋賀県自然環境保全課, 大津.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Rhodobryum ontariense has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Rhodobryum ontariense* is listed as NT under criteria ①②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limestone mining, Transportation infrastructure construction, Hunting and collecting animals/Gathering plants, Deer feeding damage
Law designation status for conservation	—

執筆者: 有川智己 (慶應義塾大学)
Author: Tomotsugu Arikawa

公表年月: 2025 年 3 月

クジャクゴケ目 Hypopterygiales クジャクゴケ科 Hypopterygiaceae

キジノオゴケ

Cyathophorum adiantum (Griff.) Mitt.

カテゴリー判定結果		準絶滅危惧 (NT)		①
基準 A: —	基準 B: VU 未満	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 ①個体数が減少している。 【判断理由】 第 5 次レッドリスト調査では和歌山県と高知県で生育が確認された一方、以前生育が確認されていた高知県や沖縄県の一部では生育が確認できなかった。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

キジノオゴケ国内では本州（近畿地方以西）、四国、九州、琉球列島に、国外では中国、ベトナム、タイ、ヒマラヤ、ボルネオに分布する匍匐性の蘚類。岩や樹幹に着生する。原因は不明であるが生育地が減少している。

協力者: 木口博史（岡山コケの会）・立石幸敏（岡山コケの会）・林正典（日本蘚苔類学会）・土永浩史（日本蘚苔類学会）・鶴沢美穂子（ミュージアムパーク茨城県自然博物館）

基礎情報

【形態】

植物体は長さ 4-5 cm、茎は分枝せず、基部に仮根が密生する。葉は大型の側葉と小型の腹葉が三列につく。側葉は狭楕円状卵形で非相称、茎の先端で小さくなり、尾状になる。葉縁には刺状の長い鋸歯がある。短い中肋がある。腹葉は倒卵形～楕円形、先端は急に細長く尖る。中肋を欠く。茎の先端の尾状部の葉腋に線状の無性芽をつける。胞子体は茎の途中につき、蒴柄は短く、楕円状円筒形の蒴は直立し、曲がらない。

【生活史】

雌雄異株。

【生育環境】

渓谷の岩や樹幹に生育する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】河川中流域

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では本州（近畿地方以西）、四国、九州、琉球列島に分布する。国外では中国、ベトナム、タイ、ヒマラヤ、ボルネオから報告されている。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト調査（2016-2019）では、和歌山県と高知県で生育が確認された。和歌山県では、ツクバネガシ、サカキ、ヤマモミジ、ウツギの樹幹に多くの群落が見られた。高知県では、安芸郡の神社境内の樹幹に 20×50 cm の群落が、神社脇の溪流の樹幹基部に 5×5 cm の群落が見られた。以前生育が確認されていた高知県室戸市と沖縄県西表島では生育を確認できなかった。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

森林伐採。

要因の区分：	(過去)	森林伐採
	(現在)	森林伐採

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	キジノオゴケ	<i>Cyathophorum adiantum</i> (Griff.) Mitt.	NT
第4次 2019:	キジノオゴケ	<i>Cyathophorum adiantum</i> (Griff.) Mitt.	NT
第4次 2018:	キジノオゴケ	<i>Cyathophorum adiantum</i> (Griff.) Mitt.	NT
第4次 2017:	キジノオゴケ	<i>Cyathophorum adiantum</i> (Griff.) Mitt.	NT
第4次 2015:	キジノオゴケ	<i>Cyathophorum adiantum</i> (Griff.) Mitt. [= <i>Cyathophorella tonkinensis</i> (Broth. & Paris) Broth.]	NT
第4次:	キジノオゴケ	<i>Cyathophorum adiantum</i> (Griff.) Mitt. [= <i>Cyathophorella tonkinensis</i> (Broth. & Paris) Broth.]	NT
第3次:	キジノオゴケ	<i>Cyathophorum adiantum</i> (Griff.) Mitt. [= <i>Cyathophorella tonkinensis</i> (Broth. & Paris) Broth.]	NT
第2次:	キジノオゴケ	<i>Cyathophorella tonkinensis</i> (Broth. et Par.) Broth.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

三重県[絶滅危惧 IB 類(EN)] 奈良県[絶滅寸前種] 和歌山県[絶滅危惧Ⅱ類 (VU)] 宮崎県[準絶滅危惧 (NT-r)] 沖縄県[絶滅危惧Ⅱ類 (VU)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 樋口正信, 2015. キジノオゴケ. 環境省 (編), レッドデータブック 2014 ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー 9 植物Ⅱ (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類). p. 252. ぎょうせい, 東京.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Cyathophorum adiantum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Cyathophorum adiantum* is listed as NT under criteria ①.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Middle river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting
Law designation status for conservation	—

執筆者: 樋口正信 (国立科学博物館)
Author: Masanobu Higuchi

公表年月：2025 年 3 月

ササオカゴケ(アオモリカギハイゴケ)

Sasaokaea aomoriensis (Paris) Kanda

カテゴリー判定結果 準絶滅危惧 (NT)

②

基準 A: —

基準 B: VU 未満

基準 C: —

基準 D: —

基準 E: —

生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。

②生育条件が悪化している。

【判断理由】

石川県七尾市の生育地では 5 年前と比べて生育量が 1/10 程度に減少し、また自動車道の工事予定地になっていることから将来消滅する可能性がある。ほかの生育地についても、人為的な影響、植生の影響を受けやすく、生育条件が悪化する可能性もある。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

日本と台湾に分布する 1 属 1 種の蘚類である。茎および葉基部に分枝した毛葉がつくことが特徴である。低地のため池や水田などの湿った土上や水中に生育する。休耕田やため池の埋め立てなどが進み、絶滅が危惧されている。

協力者: 横山正弘 (日本蘚苔類学会)・鶴沢美穂子 (ミュージアムパーク茨城県自然博物館)・土永浩史 (日本蘚苔類学会)・川合啓二 (岡山コケの会)

基礎情報

【形態】

植物体は光沢のある明るい緑色、下部は褐色を帯びる。茎は匍匐し、長さ 10 cm 以上に達する。葉は茎に偏平につき、時々、先端でカギ状になり長さ約 2.3 mm。茎一面に、多数の分岐した毛葉がつき、また葉の基部にもつくことがある。茎葉は卵状楕円形、先端は鈍頭。葉縁上部に鋸歯がある。中肋は 1 本で、葉の全長の 3/4 に達する。葉身細胞は線状、薄壁であるが細胞の先端は肥厚する。葉の上部の細胞は短く、長い六角形、葉の基部の細胞は短い長方形、翼細胞はほとんど分化しない。本種は毛葉を持つことでシノブゴケ科のヌマシノブゴケ科のヌマシノブゴケ (*Helodium paludosum*) に似るが、茎葉の先端が鈍頭、中肋は葉頂に達せず、細胞は線状で薄壁であることで区別される。

【生活史】

雌雄異株。孢子体は知られていない。

【生育環境】

低地のため池や水田の付近の湿った土上、または水中に生育する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】湿地・湿原・細流 【陸域_平地部】田地・畑地, 耕作放棄地, 湿地・湿原
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域, (4) 河川・湿地地域

【分布域】

国内では本州、四国、九州に分布し、国外では台湾に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト作成のための調査で、宮城県大崎市、石川県七尾市、和歌山県東牟婁郡古座川町、高知県室戸市で生育が確認された。また、澤田他 (2018) は青森県つがる市と青森市から、根本他 (2020) は福島県いわき市から、土永他 (2020) は和歌山県西牟婁郡すさみ町、東牟婁郡古座川町と串本町から、大塚・林 (2021) は大分県竹田市から、佐治他 (2021) は徳島県海部郡海陽町から報告している。

【生育地の現況】

低地の溜め池や放棄水田、湿地などの湿った土上や水中に生育する。生育地のいずれも植生の変化、人為的な影響を受けやすい場所にあり、生育地の悪化あるいは消滅が危惧される。一部の生育地は自動車道の工事が予定されている。

【個体数の現況】

生育環境によっては大きな個体群となり良好に生育している場所もあるが、5 年前と比べて個体数が減少している生育地もある。

存続を脅かす要因

湿地開発によって生育環境の変化、生育地の消失が危惧される。また、産地が局限しているため絶滅する可能性がある。

要因の区分：	(過去)	湖沼開発, 湿地開発, 遷移進行・植生変化/自然遷移, 分布・産地局限
	(現在)	湖沼開発, 湿地開発, 遷移進行・植生変化/自然遷移, 分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ササオカゴケ (アオモリカギハイゴケ)	<i>Sasaokaea aomoriensis</i> (Paris) Kanda	CR+EN
第4次 2019:	ササオカゴケ (アオモリカギハイゴケ)	<i>Sasaokaea aomoriensis</i> (Paris) Kanda	CR+EN
第4次 2018:	ササオカゴケ (アオモリカギハイゴケ)	<i>Sasaokaea aomoriensis</i> (Paris) Kanda	CR+EN
第4次 2017:	ササオカゴケ (アオモリカギハイゴケ)	<i>Sasaokaea aomoriensis</i> (Paris) Kanda	CR+EN
第4次 2015:	ササオカゴケ (アオモリカギハイゴケ)	<i>Sasaokaea aomoriensis</i> (Paris) Kanda	CR+EN
第4次:	ササオカゴケ (アオモリカギハイゴケ)	<i>Sasaokaea aomoriensis</i> (Paris) Kanda	CR+EN
第3次:	ササオカゴケ (アオモリカギハイゴケ)	<i>Sasaokaea aomoriensis</i> (Paris) Kanda	CR+EN
第2次:	ササオカゴケ (アオモリカギハイゴケ)	<i>Sasaokaea aomoriensis</i> (Par.) Kanda	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況 (令和4年度末時点)

掲載なし

保護に係る法令指定状況 (令和4年度末時点)

指定なし

参考文献

- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- 根本秀一・鵜沢美穂子・澤田満, 2020. ササオカゴケの福島県での現状と新産地. 蘚苔類研究, 12: 79-80.

- 大塚政雄・林 正典, 2021. 大分県産蘚苔類ノート (22) –大分県産蘚苔類の絶滅危惧種 その1–. 大分県の植物, 31: 45-50.
- 佐治まゆみ・狩野登之助・西村直樹, 2021. 徳島県南の蘚類 2. シトネゴケ目. 岡山コケの会ニュース, 51: 23-28.
- 澤田 満・石戸谷芳子・乗田利一・鶴沢美穂子, 2018. 青森県つがる市と青森市で発見したササオカゴケ. 蘚苔類研究, 11: 313-314.
- 土永浩史・鶴沢美穂子・秋山弘之, 2020. 紀伊半島南部のササオカゴケ. 蘚苔類研究, 12: 130-132.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Sasaokaea aomoriensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Sasaokaea aomoriensis* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Wetland/Marsh/Stream 【Terrestrial/Freshwater area Plain】 Farmland, Abandoned farmland, Wetland
Threat types:	Lake development, Wetland development, Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 山口富美夫 (広島大学)
Author: Tomio Yamaguchi

公表年月: 2025 年 3 月

イトヒバゴケ

Cryphaea obovatocarpa S.Okamura

カテゴリー判定結果		準絶滅危惧（NT）		①②	
基準 A: ー	基準 B: VU 未満	基準 C: ー	基準 D: ー	基準 E: ー	
生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。					
①個体数が減少している。 【判断理由】 埼玉県や広島県では現に確認されていた生育地が消失しておりその分個体数が減少している。愛知県でもカキノキやクワの老木の減少や、管理放棄で、生育量が減少しているとされている。					
②生育条件が悪化している。 【判断理由】 おもにクワの樹幹に着生するが、養蚕業の衰退によりクワは減っている。埼玉県や広島県では現に確認されていた生育地が消失している。愛知県でもカキノキやクワの老木の減少や、管理放棄で生育量が減少しているとされている。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

イトヒバゴケは、日本、台湾、中国本土に分布し、クワやカキノキの樹幹に生育する蘚類。萌は同一の枝に並ぶように多数つく。養蚕の衰退にともなうクワの伐採により、各地で絶滅が危惧される。

協力者： 出下卓（広島大学）・片桐知之（高知大学）・竹中大祐（広島大学）

基礎情報

【形態】

植物体は光沢のない黄緑色～黒褐色を帯びている。第一次茎は匍匐して、所々で不規則に分枝し、直立した第二次茎を出す。中心束を欠く。葉は茎に密につき、乾くと瓦状になる。葉形は広い心臓形～卵形、長さ 0.8～1.8 mm、葉先は鋭頭。葉基部はやや下延し、内側に巻く。葉面はくぼみ、しわが寄らない。葉の中肋は葉の 2/3 に達する。葉細胞の上端には 1 個の乳頭がある。蒴柄は非常に短く、蒴は卵形～球形で直立し、苞葉に沈生する。外観はツルゴケ *Pilotrichopsis dentata* に似るが、葉先が鋭く長く尖り、よく蒴をつけ、数個の蒴が同一の枝の上に並ぶように多数つくことなどで区別できる。

【生活史】

雌雄同株（異苞）。

【生育環境】

霧のかかるような湿潤な山間地域の、植栽された樹木、おもにクワの樹幹に着生するが、他にカキノキやオニグルミなどにも着生する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林、田地・畑地

国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域

【分布域】

国内では本州、四国に分布し、国外では台湾、中国に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

国内にはまれに産し、産地でも個体数は少ない。長野県南信濃村（現飯田市）梶谷川沿いの近接した 2 か所で見ついている（樋口・有川, 2004）。第 4 次レッドリスト作成のための調査では、過去に記録のあった広島県帝釈峡で記録上の被着生木であるカキノキが伐採されていて、確認できなかった（山口, 2015）。埼玉県では唯一秩父地域の畑に生育していたクワの木に着生していたが、クワの木を切られ、近年では観察されておらずその場所では絶滅したという（埼玉県, 2012）。愛知県では北設楽郡から南設楽郡にかけての 8 か所から標本がえられているが、発見が難しく、クワの老樹が少なくなっていることと、環境攪乱で個体数が減少しているという（愛知県, 2020）。京都府では、福知山市夜久野町、南丹市安掛、京丹波町質志から記録があり、このうち質志で、洞窟入り口近くの林の中、ノグルミの落枝上に着生していたのが確認されている（秋山, 2015）。岡山県では中部の湿潤な渓谷内のオニグルミ上 1 か所のみで知られている（西村, 2020）。

【生育地の現況】

クワやカキノキの木の樹幹に希に着生する藓類で、しばしば人家周辺が生育地となっている。クワやカキノキの木の伐採などにより、生育基物が減少しつつあり、各地で生育地が縮小、消滅している。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

河川開発や道路建設によって生育地の減少が危惧される。また、養蚕業の衰退によるクワの減少によって影響を受けている。産地が局限しているため各地で地域絶滅する可能性がある。

要因の区分：	(過去)	河川開発, 交通インフラ建設, 分布・産地局限, 基質・基物の減少及び消失
	(現在)	河川開発, 交通インフラ建設, 分布・産地局限, 基質・基物の減少及び消失

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	イトヒバゴケ	<i>Cryphaea obovatocarpa</i> S.Okamura	CR+EN
第4次 2019:	イトヒバゴケ	<i>Cryphaea obovatocarpa</i> S.Okamura	CR+EN
第4次 2018:	イトヒバゴケ	<i>Cryphaea obovatocarpa</i> S.Okamura	CR+EN
第4次 2017:	イトヒバゴケ	<i>Cryphaea obovatocarpa</i> S.Okamura	CR+EN
第4次 2015:	イトヒバゴケ	<i>Cryphaea obovatocarpa</i> S.Okamura	CR+EN
第4次:	イトヒバゴケ	<i>Cryphaea obovatocarpa</i> S.Okamura	CR+EN
第3次:	イトヒバゴケ	<i>Cryphaea obovatocarpa</i> S.Okam.	CR+EN
第2次:	イトヒバゴケ	<i>Cryphaea obovatocarpa</i> Okam.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

埼玉県[絶滅危惧Ⅰ類(CE)] 愛知県[絶滅危惧Ⅱ類(VU)] 滋賀県[絶滅危惧種] 京都府[絶滅寸前種] 大阪府[CR+EN] 兵庫県[A ランク] 岡山県[絶滅危惧Ⅰ類] 広島県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 愛知県, 2020. 愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2020 植物編. 810 pp.
- 秋山弘之, 2015. イトヒバゴケ. 京都府 (編), 京都府レッドデータブック普及版 2015. 214 pp.
- 樋口正信・有川智己, 2004. 長野県南信濃村のイトヒバゴケ、レイシゴケ、イシツチゴケ. 蘚苔類研究, 8: 281-282.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- 西村直樹, 2020. イトヒバゴケ. 岡山県野生動植物調査検討会 (編), 岡山県レッドデータブック 2020 植物編. 368 pp.
- Noguchi, A., 1989. Illustrated Moss Flora of Japan. Part 3. pp. 493-742. Hattori Bot. Lab., Nichinan.
- 埼玉県, 2012. 埼玉県の希少な野生生物 埼玉県レッドデータブック 2011 植物編. 433pp.
- 山口富美夫, 2015. イトヒバゴケ. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), レッドデータブック 2014ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー9 植物 II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類). p. 21. ぎょうせい, 東京.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Cryphaea obovatocarpa has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Cryphaea obovatocarpa* is listed as NT under criteria ①②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest, Farmland
Threat types:	River development, Transportation infrastructure construction, Limited distribution, Reduction or loss of substrate
Law designation status for conservation	—

執筆者:	有川智己（慶應義塾大学）
Author:	Tomotsugu Arikawa

公表年月：2025 年 3 月

カワブチゴケ

Cyptodontopsis leveillei (Thér.) P.Rao & Enroth

カテゴリー判定結果		準絶滅危惧 (NT)		②
基準 A: —	基準 B: VU 未満	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 ②生育条件が悪化している。 【判断理由】 降雨やダム建設などによる河川の増水等で生育地や植物体が消滅する可能性がある。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

カワブチゴケは国内では本州西南部と四国に、国外ではラオス、ボルネオ、ニューギニアに分布する大形の蘚類。増水時に水に浸るような川岸の低木に着生するため、ダムなどの河川開発や大量の降水等による河川の増水により生育地や植物体が消滅する可能性がある。

協力者: 木口博史 (岡山コケの会)・立石幸敏 (岡山コケの会)・林正典 (日本蘚苔類学会)・土永浩史 (日本蘚苔類学会)

基礎情報

【形態】

植物体は匍匐し、茎は長さ 20 cm 以上になることがある。茎は不規則に分枝し、枝は真横に伸びる。葉は卵状楕円形で、長さ 1.5-2.0 mm。中肋は 1 本で長く、葉先に達する。蒴柄は短く、倒卵形の蒴は苞葉から出ない。

【生活史】

雌雄同株（異苞）。

【生育環境】

増水時に水に浸るような川岸の低木に着生する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】河川中流域

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内からは静岡県、愛知県、三重県、和歌山県、徳島県、高知県、山口県から標本が採取されている。国外ではラオス、ボルネオ、ニューギニアに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

2017 年の調査では徳島県海陽町野根川本流で比較的多量の生育が確認された。2018 年の調査では和歌山県新宮市熊野川町静閑瀬で少量の生育が確認された一方、山口県岩国市天尾北河内では 7 月の豪雨により消滅した。また、山口県周南市錦川で 2018 年 3 月に確認された生育場所も 7 月の豪雨により消滅した。さらに、山口県周南市鹿野下小泉で確認できたが、10 年前と比較すると護岸工事や豪雨のためかなり生育量が減少した。2019 年の調査では和歌山県熊野川支流成見川で少量の生育が確認された。他の生育地の状況は不明である。

【生育地の現況】

いくつかの生育地において、豪雨等による河川の増水により生育地の減少や消滅が起こっている。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

降雨やダム建設などによる河川の増水等で生育地が消滅する可能性がある。

要因の区分：	(過去)	河川開発, ダム・河川工作物建設
	(現在)	河川開発, ダム・河川工作物建設

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	カワブチゴケ	<i>Cyptodontopsis leveillei</i> (Thér.) P.Rao & Enroth	NT
第4次 2019:	カワブチゴケ	<i>Cyptodontopsis leveillei</i> (Thér.) P.Rao & Enroth	NT
第4次 2018:	カワブチゴケ	<i>Cyptodontopsis leveillei</i> (Thér.) P.Rao & Enroth	NT
第4次 2017:	カワブチゴケ	<i>Cyptodontopsis leveillei</i> (Thér.) P.Rao & Enroth	NT
第4次 2015:	カワブチゴケ	<i>Cyptodontopsis leveillei</i> (Thér.) P.Rao & Enroth [= <i>C. obtusifolia</i> (Nog.) Nog.]	NT
第4次:	カワブチゴケ	<i>Cyptodontopsis leveillei</i> (Thér.) P.Rao & Enroth [= <i>C. obtusifolia</i> (Nog.) Nog.]	NT
第3次:	カワブチゴケ	<i>Cyptodontopsis levieri</i> (Thér.) P.Rao & Enroth [= <i>C. obtusifolia</i> (Nog.) Nog.]	NT
第2次:	カワブチゴケ	<i>Cyptodontopsis obtusifolia</i> (Nog.) Nog.	NT
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

愛知県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 三重県[絶滅危惧ⅠA類（CR）] 奈良県[絶滅寸前種] 和歌山県[準絶滅危惧（NT）] 山口県[準絶滅危惧（NT）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 樋口正信, 2015. カワブチゴケ. 環境省（編）, レッドデータブック 2014 ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー 9 植物Ⅱ（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）. p. 252. ぎょうせい, 東京.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Cyptodontopsis leveillei has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Cyptodontopsis leveillei* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat

status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Middle river basin
Threat types:	River development, Dam/River structures construction
Law designation status for conservation	—



執筆者: 樋口正信 (国立科学博物館)
Author: Masanobu Higuchi

公表年月：2025 年 3 月

オオミツヤゴケ

Entodon conchophyllus Cardot

カテゴリー判定結果		準絶滅危惧 (NT)		①②	
基準 A: —	基準 B: VU 未満	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 ①個体数が減少している。 【判断理由】 和歌山県田辺市大塔山山頂ではブナ林の誤伐により生育環境が悪化し、新たな樹幹に着生しているのが確認された一方で、以前生育していた切り株や腐木にはなくなっていることが確認されている。高知県高知市土佐山でも以前生育が確認されていたコンクリート壁が撤去され本種が確認できなくなっている。 ②生育条件が悪化している。 【判断理由】 新たに確認された生育地点や、基物が失われても周辺に新たに生育する様子なども見られてはいるが、ブナ林の伐採等で減少や消滅が心配されている地点も多い。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

オオミツヤゴケは、中国と日本に分布する蘚類で、他のツヤゴケ属の種と比べ胞子が著しく大きい。和歌山県大塔山の生育地では継続して確認されている。近年、神奈川県箱根町、静岡県天城山で確認されている。宮崎県では比較的安定してみられている。生育地付近の森林伐採や石灰採掘、森林の荒廃が心配される。

協力者： 土永浩史（日本蘚苔類学会）・出口博則（広島大学）・坪田博美（広島大学）・久保晴盛（広島大学）

基礎情報

【形態】

植物体は光沢のある鮮やかな黄緑色。葉は茎に密につき、卵形～楕円状卵形、1.5～2.0 mm、深く窪み、先端は急に尖る。葉縁は先端を除き全縁。カラフトツヤゴケ *Entodon scabridens* に似るが、他のツヤゴケ属の種と比べて、蒴が短く、卵形であり、胞子は 35～55 μm で著しく大きいことで、独立した属として扱うこともある。しかし胞子体がない場合の区別は難しい。

【生活史】

雌雄同株（異苞）。

【生育環境】

山地のブナ、モミなどの樹上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では本州と九州に分布しており、国外では中国に分布している。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第4次レッドリスト作成のための調査では、2007年に発見された和歌山県田辺市大塔山山頂の生育地（土永, 2009）が保護されていること、高知県高知市土佐山で以前生育が確認されていたコンクリート壁が撤去され本種が確認できなくなっていることが確認されていた（有川, 2014）。第5次レッドリスト作成のための調査では、2019年に、大塔山山頂付近の生育地で、数カ所、少数が確認された。このほか、近年静岡県天城山（樋口, 2013）でも数カ所で生育が確認されている。神奈川県では近年、丹沢主稜線沿いの複数地点や箱根の多数地点で確認されている（有川, 2022）。愛知県では豊川市本宮山でのみ記録があるが、現在では消滅した模様（愛知県, 2020）。宮崎県では日南市鰐塚山と西米良村市房山で比較的安定してみられ、綾町大森岳、曽見谷、椎葉村では生育量は多くはない（松本, 2022）。

【生育地の現況】

石灰岩地を含む全国各地で、モミ・ツガの樹幹などに生育するが、珍しい。和歌山県田辺市大塔山山頂ではブナ林の誤伐により生育環境が悪化したものの保護されていた（土永, 2009）が、2019年には、以前生育していた切り株や腐木はなくなり、新たな樹幹に着生しているのが、数カ所のみ少数確認された。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

和歌山県大塔山では山頂部ブナ林の無断伐採により生育地の存続が危惧された。ほかの産地でも生育地付近の森林伐採や石灰採掘で生育地が失われるおそれがある。また、森林の遷移も生育環境を損なう。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 石灰採掘, 遷移進行・植生変化/自然遷移
	(現在)	森林伐採, 石灰採掘, 遷移進行・植生変化/自然遷移

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	オオミツヤゴケ	<i>Entodon conchophyllus</i> Cardot	VU
第4次 2019:	オオミツヤゴケ	<i>Entodon conchophyllus</i> Cardot	VU
第4次 2018:	オオミツヤゴケ	<i>Entodon conchophyllus</i> Cardot	VU
第4次 2017:	オオミツヤゴケ	<i>Entodon conchophyllus</i> Cardot	VU
第4次 2015:	オオミツヤゴケ	<i>Entodon conchophyllus</i> Cardot [= <i>Sakuraia concophylla</i> (Cardot) Nog.]	VU
第4次:	オオミツヤゴケ	<i>Entodon conchophyllus</i> Cardot [= <i>Sakuraia concophylla</i> (Cardot) Nog.]	VU
第3次:	オオミツヤゴケ	<i>Entodon conchophyllus</i> Cardot [= <i>Sakuraia concophylla</i> (Cardot) Nog.]	VU
第2次:	オオミツヤゴケ	<i>Entodon conchophyllus</i> Card. Syn. <i>Sakuraia concophylla</i> (Card.) Nog.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

神奈川県[絶滅危惧Ⅱ類 (VU)] 愛知県[絶滅危惧ⅠA類(CR)] 滋賀県[希少種] 和歌山県[絶滅危惧Ⅱ類 (VU)] 山口県[情報不足 (DD)] 愛媛県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 福岡県[絶滅危惧Ⅰ類] 長崎県[情報不足 (DD)] 熊本県[絶滅危惧Ⅱ類 (VU)] 宮崎県[絶滅危惧Ⅱ類 (VU-r)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 愛知県環境調査センター，2020．愛知県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックあいち 2020 植物編．810 pp．愛知県環境局環境政策部自然環境課，名古屋．
- 有川智己，2022．コケ植物．神奈川県環境農政局緑政部自然環境保全課・神奈川県立生命の星地球博物館（編），神奈川県レッドデータブック 2022 植物編．pp. 328-360，神奈川県，横浜．
- 樋口正信，2013．静岡県天城山のオオタマコモチイトゴケとオオミツヤゴケ．蘚苔類研究，10: 417-418．
- 松本美津，2022．オオミツヤゴケ．宮崎県レッドデータブック改訂・外来種リスト検討委員会（編），三訂・宮崎県版レッドデータブック 宮崎県の保護上重要な野生生物．p. 155．宮崎県環境森林部自然環境課，宮崎．
- 土永浩史，2009．紀伊半島大塔山山頂におけるオオミツヤゴケの生育状況．蘚苔類研究，9: 395-396．

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Entodon conchophyllus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Entodon conchophyllus* is listed as NT under criteria ①②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limestone mining, Successional progression/Vegetation change/Natural succession
Law designation status for conservation	—

執筆者: 有川智己（慶應義塾大学）
Author: Tomotsugu Arikawa

公表年月：2025 年 3 月

コシノヤバネゴケ

Dichelyma japonicum Cardot

カテゴリー判定結果 準絶滅危惧 (NT) ①

基準 A: —	基準 B: VU 未満	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —

生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
 具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。

①個体数が減少している。

【判断理由】

第 5 次レッドリストのための調査では、2018 年に宮城県加美郡加美町鹿原南滝庭で僅かな量の生育が確認されているが、当地では 5 年前の半分程度という。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

コシノヤバネゴケは、日本固有種で、中部地方以北の川岸や湖沼周辺の倒木や樹幹に生育する。縦に折りたたまれた葉と明瞭な中肋が特徴である。第 5 次レッドリストのための調査では宮城県で確認されたが、当地では 5 年前の半分程度に減少しているという。湖沼や湿地の開発による生育環境の変化によって絶滅が危惧される。

協力者： 横山正弘（日本蘚苔類学会）・堀清鷹（高知県立牧野植物園）・笠井譲（滋賀県高島市）

基礎情報

【形態】

植物体は緑色～黄緑色で、下部は黒みを帯び、長さ 15 cm に達する大型の蘚類。茎は 1～2 回羽状に分枝し、先端で弓状に曲がり、ややまばらに葉をつける。葉は狭い卵状披針形、長さ 2.5～4 mm、先端は鈍頭になる。中肋は葉頂に届く。縦に折りたたまれた葉の先端には小歯があり、葉縁は反曲する。葉身細胞は平滑で、線形、薄壁。蒴柄は長さ約 8 mm と短く、蒴は卵形で直立する。本種は水際の水面上に生育するが、同じ科に属するカワゴケ属 *Fontinalis* は水中に生育し、蒴柄が本種よりもずっと短い。配偶体はクロカワゴケ *Fontinalis antipyretica* に似るが、葉形は披針形、葉縁は反曲することと、葉頂に達する中肋があることで区別される。

【生活史】

雌雄異株。

【生育環境】

川岸や湖沼周辺の低木林の根本、樹幹、倒木上に生育する。樹幹部に比較的大きな群落を形成するが、生育地はまれである。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林, 河川中流域, ため池・池沼

国土地域区分：	(4) 河川・湿地地域

【分布域】

日本固有で、本州中部以北と北海道に分布する。新潟県では、内陸の山岳地域に比較的広く分布している。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 4 次レッドリストのための調査では滋賀県高島市で確認されていた。第 5 次レッドリストのための調査では、2018 年に宮城県加美郡加美町鹿原南滝庭で確認された。青森県、福島県や富山県のレッドリストでは高いランクとはされてない。青森県では近年の調査で県内に広く分布していることがわかってきた（太田, 2019a, b）。中泊町、青森市、弘前市、五所川原市、東通村でみついている。富山県では上市町 1 か所、長野県は飯山市と長野市（旧鬼無里村）から報告されている。

【生育地の現況】

生育環境に大きな変化はないと考えられる。

【個体数の現況】

第 4 次レッドリストのための調査では、滋賀県高島市の池畔に生育するヤブデマリの幹上に、やや豊富に着生しているのが確認されていた。第 5 次レッドリストのための調査では、2018 年に宮城県加美郡加美町鹿原南滝庭で僅かな量の生育が確認されている。しかし当地では 5 年前の半分程度という。青森県では近年の調査で県内に広く分布して

いることがわかってきた（太田, 2019a, b）。

存続を脅かす要因

森林伐採や湖沼開発による生育環境の変化によって個体群が減少する可能性がある。
また、産地が局限しているため、地域絶滅する可能性がある。

要因の区分：	（過去）	森林伐採, 湖沼開発, 分布・産地局限
	（現在）	森林伐採, 湖沼開発, 分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	コシノヤバネゴケ	<i>Dichelyma japonicum</i> Cardot	CR+EN
第4次 2019:	コシノヤバネゴケ	<i>Dichelyma japonicum</i> Cardot	CR+EN
第4次 2018:	コシノヤバネゴケ	<i>Dichelyma japonicum</i> Cardot	CR+EN
第4次 2017:	コシノヤバネゴケ	<i>Dichelyma japonicum</i> Cardot	CR+EN
第4次 2015:	コシノヤバネゴケ	<i>Dichelyma japonicum</i> Cardot	CR+EN
第4次:	コシノヤバネゴケ	<i>Dichelyma japonicum</i> Cardot	CR+EN
第3次:	コシノヤバネゴケ	<i>Dichelyma japonicum</i> Cardot	CR+EN
第2次:	コシノヤバネゴケ	<i>Dichelyma japonicum</i> Card.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

青森県[希少野生生物（C ランク）] 宮城県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 秋田県[絶滅危惧種Ⅰ類(CR+EN)] 山形県[CR+EN] 福島県[準絶滅危惧（NT）] 新潟県[準絶滅危惧（NT）] 富山県[絶滅危惧Ⅱ類] 長野県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 滋賀県[絶滅危惧種] 京都府[絶滅寸前種]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355pp., 192pls. 平凡社, 東京.
- Noguchi, A., 1994. Illustrated Moss Flora of Japan. Part 5. pp. 1013-1253. Hattori Bot. Lab., Nichinan.

- 太田正文, 2019. 青森県中南津軽地域のコケ植物調査 (1). 青森県立郷土館研究紀要, 43: 55-64.
- 太田正文, 2019. 青森県コケ植物分布ノート (4). 青森県立郷土館研究紀要, 43: 65-68.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Dichelyma japonicum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Dichelyma japonicum* is listed as NT under criteria ①.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area Mid-altitude area Low-altitude area】 Forest, Middle river basin, Reservoir/Pond
Threat types:	Logging and wood harvesting, Lake development, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 有川智己 (慶應義塾大学)
Author: Tomotsugu Arikawa

公表年月: 2025 年 3 月

クロカワゴケ

Fontinalis antipyretica Hedw.

カテゴリー判定結果 準絶滅危惧 (NT)

①

基準 A: —	基準 B: VU 未満	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —

生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。

①個体数が減少している。

【判断理由】

坂井 (2010) が報告しているように、過去に富山県で確認されてきた生育地 9 か所のうち、7 か所で生育が認められなかった。生育地は清流の流れの中に限られており、河川改修などによって生育地の消滅が危惧される。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

世界に広く分布し、山地の流水中や池などの底の、岩上や倒木上などに生育する蘚類。茎は長さ 30 cm に達し、葉が縦に折りたたまれることが本種の特徴である。第 5 次レッドリスト作成のための調査では、宮城県と広島県で確認されている。多くの生育地が森林伐採や河川の開発、水質汚濁により消滅している。

協力者： 坪田博美 (広島大学)・横山正弘 (日本蘚苔類学会)

基礎情報

【形態】

植物体は黒緑色を帯び、茎は長く時に 30 cm に達する。不規則に分岐し、葉は 3 列でまばらにつく。葉は広披針形～卵形で長さ 3～8 mm、縦に折りたたまれ、強く舟形になる。葉先は鈍頭で、目立たない鋸歯がある。中肋を欠く。葉柄は非常に短く、葉は卵形でほとんど苞葉に覆われる。カワゴケ (*Fontinalis hypnoides*) に似るが、葉が縦に折りたたまれることで区別できる。

【生活史】

雌雄異株。

【生育環境】

流量が安定した清涼な山地の流水中や池、ときに用水路などの水底の岩上や倒木上などに生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】湿地・湿原・細流, 河川源流域, 河川上流域 【陸域_平地部】湿地・湿原, 農業用水路, 小河川, ため池・池沼
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (2) 里地里山・田園地域, (3) 都市地域, (4) 河川・湿地地域

【分布域】

国内では北海道と本州に分布するが、国外では世界に広く分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト作成のための調査では、広島県と宮城県の 2 か所で確認された。また、広島大学植物標本庫には、2016 年以降に採集された長野県、岡山県産標本が保管されている。

【生育地の現況】

流水中や池の底に生える。多くの生育地で、河川改修や水質汚染などにより生育環境が悪化している。広島県ではクロカワゴケが激減し地域絶滅の危機に瀕している。

【個体数の現況】

流量が豊富で、安定した生育地では大規模な群落が認められるが、河川改修などの影響により、個体数は減少しつつある。

存続を脅かす要因

多くの生育地で生育地付近の森林伐採や生育地となっている河川の開発、水質汚濁により個体数が減少あるいは個体群が消滅している。また、広島県北広島町では環境の改変により激減し存続が脅かされている。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 河川開発, 水質汚濁
	(現在)	森林伐採, 河川開発, 水質汚濁

特記事項

植物体が細身で、葉身細胞が線形から波形になるものを変種エゾカワゴケ (*Fontinalis antipyretica* var. *gracilis*) として区別するが、このレッドリストでは本変種を含め種レベルで扱っている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	クロカワゴケ	<i>Fontinalis antipyretica</i> Hedw.	VU
第4次 2019:	クロカワゴケ	<i>Fontinalis antipyretica</i> Hedw.	VU
第4次 2018:	クロカワゴケ	<i>Fontinalis antipyretica</i> Hedw.	VU
第4次 2017:	クロカワゴケ	<i>Fontinalis antipyretica</i> Hedw.	VU
第4次 2015:	クロカワゴケ	<i>Fontinalis antipyretica</i> Hedw.	VU
第4次:	クロカワゴケ	<i>Fontinalis antipyretica</i> Hedw.	VU
第3次:	クロカワゴケ	<i>Fontinalis antipyretica</i> Hedw.	VU
第2次:	クロカワゴケ	<i>Fontinalis antipyretica</i> Hedw.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

青森県[重要希少野生生物（B ランク）] 宮城県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 秋田県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 山形県[VU] 福島県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 栃木県[絶滅危惧Ⅱ類（B ランク）] 新潟県[絶滅危惧（EN+VU）] 富山県[絶滅危惧Ⅰ類] 長野県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 愛知県[絶滅危惧ⅠA類(CR)] 三重県[絶滅危惧ⅠA類(CR)] 鳥取県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 広島県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355pp., 192pls. 平凡社, 東京.
- 坂井奈緒子, 2010. 富山県内におけるクロカワゴケの分布の状況. 富山市科学博物館研究報告, 33: 9-14.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Fontinalis antipyretica has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Fontinalis antipyretica* is listed as NT under criteria ①.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Wetland/Marsh/Stream, River headwater, Upper river basin 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】 Wetland, Agricultural ditch, Small river, Reservoir/Pond
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development, Water pollution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 山口富美夫 (広島大学)
Author: Tomio Yamaguchi

公表年月：2025 年 3 月

カワゴケ

Fontinalis hypnoides Hartm.

カテゴリー判定結果		準絶滅危惧 (NT)		①
基準 A: —	基準 B: VU 未満	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 ①個体数が減少している。 【判断理由】 第 5 次レッドリスト調査 (2016-2019) では、北海道、宮城県、石川県で生育状況が確認された。北海道霧多布湿原ではわずかに生育が確認された。宮城県では生育量の減少が見られる。石川県小松市の以前生育が確認されていた 3 か所では河川開発のため絶滅していた。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

カワゴケは世界に広く分布し、国内では北海道と本州の河川などの流水中に生育する大型の匍匐性の蘚類。今回の調査で生育量の減少や河川開発による絶滅が確認されている。

協力者： 上野健（都留文科大学）・川合啓二（岡山コケの会）・横山正弘（日本蘚苔類学会）

基礎情報

【形態】

植物体はわずかに分枝し、細長くなり、葉はややまばらにつく。葉は狭い卵状披針形、長さ約 5 mm。葉縁はほぼ全縁。葉が縦に折りたたまれることはない。

【生活史】

流水による植物体断片の分散により繁殖していると考えられる。

【生育環境】

河川などの流水中の底の岩上などに生える。冷涼な地域に見られることが多いが本州中部の低地の湧水にも生育する。なお、河川由来の人工的な水路（富永，2011）や湧水由来の人工的な環境（堀・鵜沢，2011）にも確認されている。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】湿地・湿原・細流 【陸域_平地部】湿地・湿原，農業用水路，小河川，ため池・池沼
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域，(2) 里地里山・田園地域

【分布域】

世界に広く分布し、国内では北海道と本州に分布している。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト調査（2016-2019）では、北海道、宮城県、石川県で生育状況が確認された。北海道霧多布湿原ではわずかに生育が確認された。宮城県登米市津山町横山不動尊は、国指定天然記念物の「横山のウグイ生息地」となっているため、その保護のために湧水池や河川で除草が行われており、生育量は年々減少している。石川県小松市の 1 か所では生育が確認されたが、以前生育が確認されていた 3 か所では河川開発のため絶滅していた。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

生育地の消滅につながる河川開発の他、土砂流入、水質汚濁、水温変化も生育に悪影響を与えている。

要因の区分：	（過去）	河川開発，水質汚濁，水温変化
	（現在）	河川開発，水質汚濁，水温変化

特記事項

より幅の広い卵形の葉を持つものを変種ノコギリカワゴケ (*Fontinalis hypnoides* var. *duriaei* (Schimp.) Hush.) として区別することもある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	カワゴケ	<i>Fontinalis hypnoides</i> Hartm.	VU
第4次 2019:	カワゴケ	<i>Fontinalis hypnoides</i> Hartm.	VU
第4次 2018:	カワゴケ	<i>Fontinalis hypnoides</i> Hartm.	VU
第4次 2017:	カワゴケ	<i>Fontinalis hypnoides</i> Hartm.	VU
第4次 2015:	カワゴケ	<i>Fontinalis hypnoides</i> Hartm. [= <i>F. duriaei</i> Schimp.]	VU
第4次:	カワゴケ	<i>Fontinalis hypnoides</i> Hartm. [= <i>F. duriaei</i> Schimp.]	VU
第3次:	カワゴケ	<i>Fontinalis hypnoides</i> Hartm. (= <i>F. duriaei</i> Schimp.)	VU
第2次:	カワゴケ	<i>Fontinalis hypnoides</i> C. J. Hartm. Syn. <i>F. duriaei</i> Schimp.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

青森県[重要希少野生生物（B ランク）] 宮城県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 秋田県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 山形県[VU] 福島県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 茨城県[絶滅危惧Ⅰ類] 栃木県[準絶滅危惧（C ランク）] 新潟県[絶滅危惧（EN+VU）] 富山県[準絶滅危惧] 滋賀県[分布上重要種] 兵庫県[A ランク] 鳥取県[情報不足（DD）] 広島県[情報不足（DD）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 有川智己, 2015. カワゴケ. 環境省（編）, レッドデータブック 2014 ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー 9 植物Ⅱ（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）. p. 175. ぎょうせい, 東京.
- 堀清 鷹・鵜沢美穂子, 2011. 東京都と茨城県のカワゴケ新産地. 蘚苔類研究, 10: 136-138.
- 富永孝昭, 2011. 栃木県の河川由来の水路に生育するカワゴケ. 蘚苔類研究, 10: 97-98.

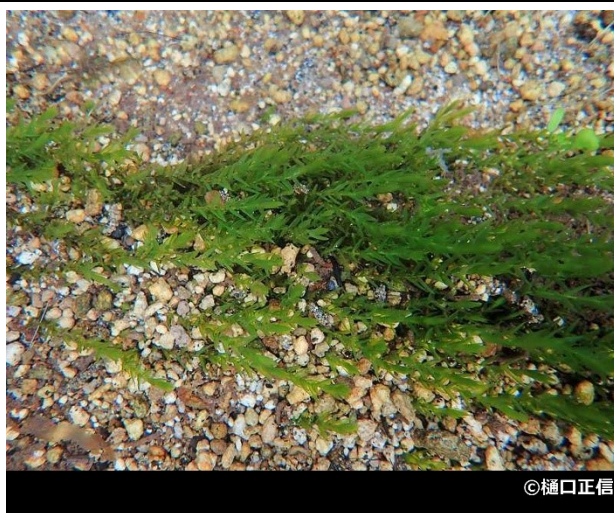
アセスメントサマリー (Assessment summary)

Fontinalis hypnoides has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Fontinalis hypnoides* is listed as NT under criteria ①.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Wetland/Marsh/Stream 【Terrestrial/Freshwater area_Plain】 Wetland, Agricultural ditch, Small river, Reservoir/Pond
Threat types:	River development, Water pollution, Water temperature change
Law designation status for conservation	—



©樋口正信

執筆者: 樋口正信 (国立科学博物館)
Author: Masanobu Higuchi

公表年月: 2025 年 3 月

イヌコクサゴケ

Neobarbella comes (Griff.) Nog.

カテゴリー判定結果		準絶滅危惧 (NT)		①
基準 A: —	基準 B: VU 未満	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 ①個体数が減少している。 【判断理由】 京都府など、かつて記録がありながら近年では確認できない地点もある。岡山県高梁市では 1995 年から 2010 年ごろにかけて半減している。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

イヌコクサゴケは、アジアの熱帯、亜熱帯に分布し、谷沿いの樹幹や石灰岩から懸垂するひも状の蘚類で、本州、四国、九州でまれに見られる。第 4 次レッドリスト作成のための調査では、第 2 次レッドリスト作成のための調査で絶滅と推定されていた高知県矢筈谷で見つかったが、岡山県高梁市では半減していた。

協力者: 出下卓 (広島大学)・出口博則 (広島大学)・坪田博美 (広島大学)・久保晴盛 (広島大学)・川合啓二 (岡山コケの会)

基礎情報

【形態】

第一次茎は這い、第二次茎はひも状で時に長さ 10 cm 以上にもなり、垂れ下がる。枝はまばらで長さ 10～15 mm。葉は茎や枝に円くつき、卵形で深く凹むが縦じわはなく、長さ 1.5～2 mm、先はやや急に細く尖る。蒴柄は細く、長さ 3～4 mm。トラノオゴケ科の他の属からは、葉の中肋がないか、あっても短く二又することで区別される。

【生活史】

雌雄異株。中国地方では矮雄をつけるためよく孢子体をつけているが、九州では孢子体は見られない（田中, 2012）。

【生育環境】

中国地方では谷沿いの樹幹に生育するが、九州では石灰岩にのみ生育している（田中, 2012）。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林, 岩壁・ガレ場（石灰岩地等）
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (2) 里地里山・田園地域

【分布域】

国内では本州中部以西（京都府・和歌山県・岡山県・広島県・山口県）、四国（高知県）、九州（宮崎県・熊本県）の石灰岩地に分布しており、国外では中国、熱帯アジア、ヒマラヤに分布している。

現在の生育状況

【分布域の現況】

田中（2012）は岡山、広島、山口、宮崎、熊本を生育地としてあげている。しかし、以下のように京都、和歌山、高知にも記録がある。京都府では、変種ケサガリゴケが記録のあった京都市左京区鞍馬山で 2002 年には確認できなくなっている（秋山, 2015）。岩月（2000）は和歌山県本宮町（現、田辺市）、岡山県哲多町（現、新見市）、成羽町（現、高梁市）、川上町（現、高梁市）、山口県徳地町、山口県阿東町で確認できたとしているが、この調査は 1994 年ごろに行われたようである。第 4 次レッドリスト（2012 年）作成のための調査では、岩月（2000）が絶滅したようであるとしていた高知県北川村矢筈谷の変種ケサガリゴケが、非常にまれながら見つかった。また、岡山県高梁市では 1995 年の調査時点に比べて半減していた。さらに、広島県帝釈峡では非常にまれながら確認された（有川, 2014）。宮崎県では高千穂町、日南市、えびの市で報告があるが、日南市で変種ケサガリゴケの生育が確認できており、生育量は少ない（松本, 2022）。第 5 次レッドリストのための調査では確認がされていない。

【生育地の現況】

広島県神石高原町（帝釈峡）では石灰岩峰のチョウセンヒメツゲなどの樹枝から垂れ下がっている（関・出口, 2012）。それぞれの生育地での生育環境の変化など詳細は不

明。

【個体数の現況】

岡山県高梁市では 1995 年から 2010 年ごろにかけて半減していた。その他の生育地の詳細については不明。

存続を脅かす要因

生育地付近の森林伐採や石灰採掘、生育地を流れる河川の改修や、森林の遷移で生育地が損なわれている。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 河川開発, 石灰採掘, 遷移進行・植生変化/自然遷移
	(現在)	森林伐採, 河川開発, 石灰採掘, 遷移進行・植生変化/自然遷移

特記事項

より大きく、茎は時に長さ 30 cm を超え、第二次茎の葉の先端が毛状に尖るものを、変種ケサガリゴケ *Neckera comes* var. *pilifera* として区別するが、このレッドリストでは本変種を含め種レベルで扱っている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	イヌコクサゴケ	<i>Neobarbella comes</i> (Griff.) Nog.	VU
第4次 2019:	イヌコクサゴケ	<i>Neobarbella comes</i> (Griff.) Nog.	VU
第4次 2018:	イヌコクサゴケ	<i>Neobarbella comes</i> (Griff.) Nog.	VU
第4次 2017:	イヌコクサゴケ	<i>Neobarbella comes</i> (Griff.) Nog.	VU
第4次 2015:	イヌコクサゴケ	<i>Neobarbella comes</i> (Griff.) Nog. [= <i>Isotheciopsis comes</i> (Griff.) Nog.]	VU
第4次:	イヌコクサゴケ	<i>Neobarbella comes</i> (Griff.) Nog. [= <i>Isotheciopsis comes</i> (Griff.) Nog.]	VU
第3次:	イヌコクサゴケ	<i>Neobarbella comes</i> (Griff.) Nog. [= <i>Isotheciopsis comes</i> (Griff.) Nog.]	VU
第2次:	イヌコクサゴケ	<i>Neobarbella comes</i> (Griff.) Nog. Syn. <i>Isotheciopsis comes</i> (Griff.) Nog.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

岡山県[絶滅危惧Ⅱ類] 広島県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 山口県[情報不足(DD)] 宮崎県[絶滅危惧Ⅱ類(VU-r)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 秋山弘之, 2013. ケサガリゴケ. 京都府レッドデータブック.
(<https://www.pref.kyoto.jp/kankyo/rdb/index.html>)
- 有川智己, 2014. イヌコクサゴケ. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室（編）, レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—9 植物 II（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）. p. 186. ぎょうせい, 東京.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- 岩月善之助, 2000. イヌコクサゴケ. 環境庁（編）, 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—9 植物 II（維管束植物以外）. p. 79. 自然環境研究センター, 東京.
- 松本美津, 2022. イヌコクサゴケ. 宮崎県レッドデータブック改訂・外来種リスト検討委員会（編）, 三訂・宮崎県版レッドデータブック 宮崎県の保護上重要な野生生物. p. 155. 宮崎県環境森林部自然環境課, 宮崎.
- Noguchi, A., 1989. Illustrated Moss Flora of Japan, part 3. pp. 493-742. Hattori Bot. Lab., Nichinan.
- 関 太郎・出口博則, 2012. イヌコクサゴケ. レッドデータブック広島改定検討委員会（編）, 広島県の絶滅のおそれのある野生生物（第3版）レッドデータブックひろしま 2011. p. 538. 広島県, 広島
- Tan, B. C., S. He and P. Isoviita, 1992. A review of *Isotheciopsis* and *Neobarbella* (Lembophyllaceae, Musci). *Cryptogamic Bot.*, 2: 314-316.
- 田中敦司, 2012. 日本の石灰岩性蘚類. *Naturalistae*, 16: 47-82.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Neobarbella comes has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Neobarbella comes* is listed as NT under criteria ①.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest, Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development, Limestone mining, Successional progression/Vegetation change/Natural succession

Law designation status for conservation	—

執筆者:	有川智己（慶應義塾大学）
Author:	Tomotsugu Arikawa

公表年月：2025 年 3 月

ヒロハシノブイトゴケ

Trachycladiella aurea (Mitt.) M.Menzel

カテゴリー判定結果 準絶滅危惧 (NT)

②

基準 A: —	基準 B: VU 未満	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —

生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。

②生育条件が悪化している。

【判断理由】

本州、四国、九州のいくつかの地域に生育するが、山口県の一部の生育地ではダム建設が行われ生育環境が悪化している。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

ヒロハシノブイトゴケは国内では本州、四国、九州、琉球列島に、国外ではアジアの熱帯、亜熱帯に分布する匍匐性の蘚類。樹木や岩から垂れ下がるように生育する。溪谷などに生育するので、ダム工事などの河川開発や道路整備などによる環境変化によって容易に消滅する。

協力者: 木口博史 (岡山コケの会)・立石幸敏 (岡山コケの会)・林正典 (日本蘚苔類学会)・土永浩史 (日本蘚苔類学会)

基礎情報

【形態】

植物体はひも状、30 cm 以上になることがある。茎は不規則に分枝し、葉は茎に扁平につく。枝葉は卵状披針形で、長さ 2-2.5 mm、細長く尖る。中肋は 1 本で葉の中部に達する。葉身細胞は菱形から六角形、壁沿いに多数のパピラが密生し、細胞の境界は不明瞭。蒴はつぼ状、蒴柄は短い。帽は尖帽形、下部が四～五裂する。

【生活史】

雌雄異株。

【生育環境】

渓谷などの樹木や岩から垂れ下がるように生育する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】河川中流域

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では本州、四国、九州、琉球列島に、国外ではアジアの熱帯、亜熱帯に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト調査（2016-2019）では、和歌山県、山口県、高知県、徳島県、熊本県で生育が確認された。和歌山県では熊野川と古座川の流域と田辺市中小屋谷で確認された。山口県では岩国市木谷峡で確認された。高知県では蛇谷川の流域で確認された。徳島県では海部郡海陽町と野根川の流域で確認された。熊本県では球磨郡五木村の天狗岩と人吉市鹿目の滝で確認された。

【生育地の現況】

山口県岩国市木谷峡ではダム建設が進んでおり消滅する可能性が高い。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

直接的な森林伐採の他、光や湿度に影響を与える河川開発や道路建設も本種の生育に大きな影響を与える。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 河川開発, 交通インフラ建設
	(現在)	森林伐採, 河川開発, 交通インフラ建設

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ヒロハシノブイトゴケ	<i>Trachycladiella aurea</i> (Mitt.) M.Menzel	NT
第4次 2019:	ヒロハシノブイトゴケ	<i>Trachycladiella aurea</i> (Mitt.) M.Menzel	NT
第4次 2018:	ヒロハシノブイトゴケ	<i>Trachycladiella aurea</i> (Mitt.) M.Menzel	NT
第4次 2017:	ヒロハシノブイトゴケ	<i>Trachycladiella aurea</i> (Mitt.) M.Menzel	NT
第4次 2015:	ヒロハシノブイトゴケ	<i>Trachycladiella aurea</i> (Mitt.) M.Menzel [= <i>Floribundaria aurea</i> (Mitt.) Broth. ssp. <i>nipponica</i> (Nog.) Nog.; <i>F. nipponica</i> Nog.]	NT
第4次:	ヒロハシノブイトゴケ	<i>Trachycladiella aurea</i> (Mitt.) M.Menzel [= <i>Floribundaria aurea</i> (Mitt.) Broth. ssp. <i>nipponica</i> (Nog.) Nog.; <i>F. nipponica</i> Nog.]	NT
第3次:	ヒロハシノブイトゴケ	<i>Trachycladiella aurea</i> (Mitt.) M.Menzel [= <i>Floribundaria aurea</i> ssp. <i>nipponica</i> (Nog.) Nog.; <i>F. nipponica</i> Nog.]	NT
第2次:	ヒロハシノブイトゴケ	<i>Trachycladiella aurea</i> (Mitt.) M. Menzel Syn. <i>Floribundaria aurea</i> ssp. <i>nipponica</i> (Nog.) Nog.; <i>F. nipponica</i> Nog.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

神奈川県[絶滅危惧Ⅱ類(VU)] 滋賀県[分布上重要種] 京都府[絶滅危惧種] 大阪府[CR+EN]
兵庫県[C ランク] 岡山県[準絶滅危惧] 広島県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 山口県[絶滅危惧Ⅰ
B 類 (EN)] 愛媛県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 福岡県[絶滅危惧Ⅱ類] 熊本県[準絶滅危惧
(NT)] 大分県[絶滅危惧ⅠA 類(CR)] 宮崎県[準絶滅危惧 (NT-r)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 樋口正信, 2015. ヒロハシノブイトゴケ. 環境省 (編), レッドデータブック 2014 ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー 9 植物Ⅱ (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類). p. 252. ぎょうせい, 東京.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Trachycladiella aurea has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Trachycladiella aurea* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Middle river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development, Transportation infrastructure construction
Law designation status for conservation	—

執筆者: 樋口正信 (国立科学博物館)
Author: Masanobu Higuchi

公表年月：2025 年 3 月

ヒメタチヒラゴケ

Homaliadelphus targionianus (Mitt.) Dixon & P.de la Varde var. *rotundatus* Nog.

カテゴリー判定結果		準絶滅危惧（NT）		①②	
基準 A: ー	基準 B: VU 未満	基準 C: ー	基準 D: ー	基準 E: ー	
生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。					
①個体数が減少している。 【判断理由】 かつて記録のあった栃木県や埼玉県からは近年の記録がない。大分県臼杵市野津田町のように少量の生育地が失われた事例も確認されている。					
②生育条件が悪化している。 【判断理由】 かつて記録があった栃木県や埼玉県では近年の記録がない。大分県臼杵市野津町のように少量の生育地が失われた事例も確認されている。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

ヒメタチヒラゴケは、国内では本州（福島県以南）、四国、九州の石灰岩地にまれに記録されている蘚類。中国地方には生育地が多い。2010 年の調査では熊本県五木村で、2018 年の調査では山口県美祢市秋芳町と、福岡県香春町で生育が確認されたが、原記載地の大分県臼杵市野津町では付近を探索しても生育を確認することが出来ていないという。

協力者： 林正典（日本蘚苔類学会）・立石幸敏（岡山コケの会）

基礎情報

【形態】

茎は長さ 2 cm くらいになり、わずかに分枝する。4 列の葉が偏平につき、やや光沢がある。葉は円形で、基部は狭く、長さ 0.8~1.0 mm、幅 0.7~0.8 mm。葉の基部の後ろの縁が小舌片として耳状に内側に折れ曲がる。葉縁はほぼ全縁、葉身細胞は長さ 20~30 μm 。基本種のタチヒラゴケ *Homaliadelphus targionianus* var. *targionianus* からは葉がずっと小さく丸いことで区別される。

【生活史】

雌雄異株。

【生育環境】

石灰岩地の石灰岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林、岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域、(2) 里地里山・田園地域

【分布域】

国内では本州福島県以南、四国、九州の石灰岩地分布し、国外では中国、ベトナムに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

田中（2012）は産地として福島、広島、岡山、山口、高知、大分、熊本をあげているが、栃木県と埼玉県でもレッドリストに掲載されている。しかし、栃木県では、栃木市と佐野市に記録があるが近年の記録がなく現状不明（富永, 2018）、埼玉県でも秩父地域に分布とされているが近年確認されていない（埼玉県, 2012）、と明記されている。中国地方には生育地が多く、岡山県では真庭市、新見市、高梁市、山口県では美祢市秋芳町・美東町、萩市（旧福栄村）、岩国市美川町など、複数の石灰岩地に生育している。原記載地の大分県臼杵市野津町では付近を探索しても生育を確認することが出来ていない（大分県, 2022）。2010 年の調査では熊本県五木村の石灰岩上で少量が確認された。この生育地は 1998 年の調査でも確認された場所であり、量的な変化は認められなかった（山口, 2015）。第 5 次レッドリストのための調査では、2018 年、山口県美祢市秋芳町と、福岡県香春町高座石寺で確認された。

【生育地の現況】

大分県臼杵市野津町の風連鍾乳洞がタイプロカリティで、谷の岩上に生えていたが、遊歩道拡幅工事により着生する岩が撤去されており、付近を探索したが生育を確認することが出来なかった（大分県, 2022）。第 5 次レッドリストのための調査では、2018 年、以前から確認されている山口県美祢市秋芳町で、登山道の転石に点々と確認できた。また、福岡県香春町高座石寺の境内横にある森林内では、大きな石灰岩の割れ目に沿って

自生していた。この周りの石灰岩にも確認できた。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

森林伐採や石灰採掘によって生育環境の変化、生育地の減少、消失が危惧される。また、産地が局限しているため地域絶滅する可能性がある。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 石灰採掘, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 石灰採掘, 分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ヒメタチヒラゴケ	<i>Homaliadelphus targionianus</i> (Mitt.) Dixon & P.de la Varde var. <i>rotundatus</i> Nog.	CR+EN
第4次 2019:	ヒメタチヒラゴケ	<i>Homaliadelphus targionianus</i> (Mitt.) Dixon & P.de la Varde var. <i>rotundatus</i> Nog.	CR+EN
第4次 2018:	ヒメタチヒラゴケ	<i>Homaliadelphus targionianus</i> (Mitt.) Dixon & P.de la Varde var. <i>rotundatus</i> Nog.	CR+EN
第4次 2017:	ヒメタチヒラゴケ	<i>Homaliadelphus targionianus</i> (Mitt.) Dixon & P.de la Varde var. <i>rotundatus</i> Nog.	CR+EN
第4次 2015:	ヒメタチヒラゴケ	<i>Homaliadelphus targionianus</i> (Mitt.) Dixon & P.Vard. var. <i>rotundatus</i> Nog. [= <i>H. sharpii</i> (R.S.Williams) Sharp var. <i>rotundatus</i> (Nog.) Z.Iwats.]	CR+EN
第4次:	ヒメタチヒラゴケ	<i>Homaliadelphus targionianus</i> (Mitt.) Dixon & P.Vard. var. <i>rotundatus</i> Nog. [= <i>H. sharpii</i> (R.S.Williams) Sharp var. <i>rotundatus</i> (Nog.) Z.Iwats.]	CR+EN
第3次:	ヒメタチヒラゴケ	<i>Homaliadelphus targionianus</i> (Mitt.) Dixon & P.Vard. var. <i>rotundatus</i> Nog. [= <i>H. sharpii</i> var. <i>rotundatus</i> (Nog.) Z.Iwats.]	CR+EN
第2次:	ヒメタチヒラゴケ	<i>Homaliadelphus targionianus</i> var. <i>rotundatus</i> Nog. Syn. <i>H. sharpii</i> var. <i>rotundatus</i> (Nog.)	CR+EN

第1次:

—

—

—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

福島県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 栃木県[情報不足] 埼玉県[絶滅危惧Ⅰ類(CE)] 岡山県[絶滅危惧Ⅰ類] 山口県[絶滅危惧ⅠB類(EN)] 熊本県[絶滅危惧ⅠB類(EN)] 大分県[情報不足(DD)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Iwasuki, Z., 1958. Review of the genus *Homaliadelphus*. The Bryologist, 61: 68-78.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- Noguchi, A., 1989. Illustrated Moss Flora of Japan. Part 3. pp. 493-742. Hattori Bot. Lab., Nichinan.
- 大分県, 2022. レッドデータブックおおいた 2022 大分県の絶滅のおそれのある野生生物. (<https://www.rdb-oita.jp>)
- 埼玉県環境部自然環境課, 2012. 埼玉県の希少野生生物 埼玉県レッドデータブック 2011 植物編. 432 pp. 埼玉県環境部自然環境課, さいたま.
- 田中敦司, 2012. 日本の石灰岩性蘚類. Naturalistae, 16: 47-82.
- 富永孝昭, 2018. ヒメタチヒラゴケ. 栃木県環境森林部自然環境課・栃木県立博物館（編）, レッドデータブックとちぎ 2018 栃木県の保護上注目すべき地形・地質・野生動植物. p. 346. 栃木県, 宇都宮.
- 山口富美夫, 2015. ヒメタチヒラゴケ. 環境省（編）, レッドデータブック 2014 日本の絶滅のおそれのある野生生物 9 植物Ⅱ（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）. p. 46. ぎょうせい, 東京.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Homaliadelphus targionianus var. *rotundatus* has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Homaliadelphus targionianus* var. *rotundatus* is listed as NT under criteria ① ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are

likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest, Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limestone mining, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	有川智己（慶應義塾大学）
Author:	Tomotsugu Arikawa

公表年月：2025 年 3 月

カトウゴケ

Palisadula katoi (Broth.) Z.Iwats.

カテゴリー判定結果		準絶滅危惧 (NT)		①
基準 A: —	基準 B: VU 未満	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 ①個体数が減少している。 【判断理由】 継続的に調べられていて、過去に確認されていたながら見られなくなっている地点が、少なくとも滋賀県で 2 か所、京都府で 1 か所、山口県で 1 か所あるので、減少傾向にあると推測できる。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

カトウゴケは、森林内の岩上や樹上に生育する匍匐性の中型の蘚類で、胞子体の外蒴歯に垣根状に穴が開いている。本州中部地方以南、三重県以西と、四国、九州の各地で確認されている。継続的に調査されているが消失した地点が各地にあり、減少傾向にあると推察できる。

協力者： 林正典（日本蘚苔類学会）

基礎情報

【形態】

匍匐性の中型の蘚類で、一次茎ははうが、二次系が立ち上がり、高さ 3～6 mm のマットとなり、密に葉をつける。光沢のある黄緑色で、しばしば赤味をおびる。葉は卵形で深く凹み長さ 1～2 mm。先端は急に鋭く尖り、葉縁に細かな鋸歯がある。葉細胞は不規則な六角形で細胞壁は著しくくびれて肥厚する。擬毛葉は小葉状で縁に大きな歯がある。蒴は長卵形で直立し、外蒴歯は透明で平滑、上半部に規則的に孔があって垣根状。

【生活史】

雌雄異株。

【生育環境】

森林内の岩上や樹上に生育するが稀。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林, 岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (2) 里地里山・田園地域

【分布域】

本州の中部以南・三重県以西と、四国、九州の各地に記録がある。国外では中国に分布。

現在の生育状況

【分布域の現況】

三重県、奈良県、大阪府には記録があるのだろうが詳細は不明。和歌山県では熊野川町、本宮町（現田辺市）、大塔山系法師山、龍神村（現田辺市）、小森谷、田辺市大塔山黒蔵谷で確認されている（樋口ほか, 2007）。滋賀県では観音寺山、箕作山、庚申山で確認されており、比叡山と飯道山には過去の記録はあるが確認できなくなった（埴田ほか, 2021）。京都府では京都市左京区比叡山では確認されており、笠置町笠置山には記録があるが確認できなかった（秋山, 2015）。兵庫県では姫路市でだけ確認されている（兵庫県, 2020）。広島県では広島市佐伯区湯来、大竹市、廿日市市佐伯、宮島で確認されている（関・出口, 2012）。山口県では岩月（2000）で挙げられていた岩国市錦町では 2016 年までに消失していたが、下関市豊北町では新たに確認された（林, 2019）。愛媛県では面河溪、滑床溪谷で確認されている（関, 2014）。

【生育地の現況】

林内の岸壁や樹幹に生育する。タイプ産地の滋賀県観音寺山では、ヒノキ・アラカシの林下の岩壁に生育しているが、関（1990）の報告時に比べて岩壁が暗くなり、生育量が減少しているという（埴田ほか, 2021）。

【個体数の現況】

第 5 次レッドリスト作成のための 2019 年の調査では、2016 年に確認されていた山口県下関市豊北町田耕白滝山観音岩の垂直で湿った岩壁とその周辺で、以前確認したときよりも多く、直径 5～10 cm 程度の群落が 3～5 か所確認されたという。その他の生育地の

詳細については不明。

存続を脅かす要因

生育地周辺の森林伐採により生育地が失われることが心配される。生育地が限られるので、森林の管理放棄により光が届かなくなるなどの環境悪化や、崖崩れや大水等によって生育地が失われることも心配される。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 管理放棄, 遷移進行・植生変化/自然遷移, 自然災害, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 管理放棄, 遷移進行・植生変化/自然遷移, 自然災害, 分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	カトウゴケ	<i>Palisadula katoi</i> (Broth.) Z.Iwats.	NT
第4次 2019:	カトウゴケ	<i>Palisadula katoi</i> (Broth.) Z.Iwats.	NT
第4次 2018:	カトウゴケ	<i>Palisadula katoi</i> (Broth.) Z.Iwats.	NT
第4次 2017:	カトウゴケ	<i>Palisadula katoi</i> (Broth.) Z.Iwats.	NT
第4次 2015:	カトウゴケ	<i>Palisadula katoi</i> (Broth.) Z.Iwats. [=	
		<i>Clastobryum katoi</i> Broth.; <i>Myurium katoi</i> (Broth.) Seki]	NT
第4次:	カトウゴケ	<i>Palisadula katoi</i> (Broth.) Z.Iwats. [=	
		<i>Clastobryum katoi</i> Broth.; <i>Myurium katoi</i> (Broth.) Seki]	NT
第3次:	カトウゴケ	<i>Palisadula katoi</i> (Broth.) Z.Iwats. [=	
		<i>Clastobryum katoi</i> Broth.; <i>Myurium katoi</i> (Broth.) Seki]	NT
第2次:	カトウゴケ	<i>Palisadula katoi</i> (Broth.) Z. Iwats. Syn.	
		<i>Clastobryum katoi</i> Broth.; <i>Myurium katoi</i> (Broth.) Seki	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

滋賀県[絶滅危惧種] 京都府[絶滅危惧種] 大阪府[VU] 兵庫県[A ランク] 奈良県[希少種]
和歌山県[準絶滅危惧(NT)] 広島県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 山口県[絶滅危惧ⅠB類(EN)]

愛媛県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 秋山弘之, 2015. カトウゴケ. 京都府レッドデータブック.
(<https://www.pref.kyoto.jp/kankyo/rdb/index.html>)
- 林 正典, 2019. カトウゴケ. レッドデータブックやまぐち 2019 山口県の絶滅のおそれのある野生生物. p. 984. 山口県環境生活部自然保護課, 山口.
- 樋口正信・土永浩史・山本誠二, 2007. 和歌山県大塔山系のイサワゴケとカトウゴケ. 蘚苔類研究, 9: 234-235.
- 兵庫県, 2020. 兵庫の貴重な自然 兵庫県版レッドデータブック 2020 (植物・植物群落). 兵庫県. 227pp.
- 岩月善之助, 2000. カトウゴケ. 環境庁 (編), 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物ーレッドデータブックー9 植物Ⅱ (維管束植物以外). p. 97. 自然環境研究センター, 東京.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355pp., 192pls. 平凡社, 東京.
- 関 太郎, 1990. 加藤鉄治郎氏とカトウゴケ. 日本蘚苔類学会会報, 5: 55-57.
- 関 太郎・出口博則, 2012. カトウゴケ. レッドデータブック広島改定検討委員会 (編), 広島県の絶滅のおそれのある野生生物 (第3版) レッドデータブックひろしま 2011. p. 536. 広島県, 広島.
- 関 太郎, 2014. カトウゴケ. 愛媛県レッドデータブック 2014.
(https://www.pref.ehime.jp/reddatabook2014/detail/10_03_012390_1.html)
- 埴田 宏・笠井 謙・関 太郎・小林圭介, 2021. カトウゴケ. 滋賀県生きものの総合調査委員会 (編), 滋賀県で大切にすべき野生生物 滋賀県レッドデータブック 2020 年版. p. 304. 滋賀県自然環境保全課, 大津.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Palisadula katoi has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Palisadula katoi* is listed as NT under criteria ①.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area Low-altitude area】 Forest, Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Logging and wood harvesting, Abandonment of management, Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Natural disasters, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	有川智己（慶應義塾大学）
Author:	Tomotsugu Arikawa

公表年月：2025 年 3 月

ハイゴケ目 Hypnales ヒラゴケ科 Neckeraceae

ホウライハゴロモゴケ

Circulifolium microdendron (Mont.) S.Olsson, Enroth & D.Quandt

カテゴリー判定結果		準絶滅危惧 (NT)		②
基準 A: —	基準 B: VU 未満	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 ②生育条件が悪化している。 【判断理由】 本種の分布は琉球列島の沖縄島、石垣島、西表島、与那国島に限られているが、生育量は少ないものの、各島内では比較的多くの生育地がある。しかし、生育地の一部では森林伐採や自然災害などにより生育条件が悪化している。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

本種は日本、台湾、中国、熱帯アジアに分布する。日本では琉球列島の沖縄島、石垣島、西表島、与那国島に分布し、森林内の岩上や樹幹上に生育する。

協力者： 佐藤匠（広島大学）・西畑和輝（広島大学）・桐生賢太（広島大学）

基礎情報

【形態】

二次茎は平らに 2-3 回羽状に分祀し、光沢のある葉が扁平につく。植物体は大きく長さ約 7 cm に達し、葉は舌形～卵状下形で、葉先は円頭～弱い切頭になる。

【生活史】

雌雄異株。

【生育環境】

暖地の森林内の岩上や樹幹上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

日本では琉球列島（沖縄島、石垣島、西表島、与那国島）に分布し、国外では台湾、中国、熱帯アジアに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト作成のための調査では、西表島と石垣島で確認された。その他、広島大学植物標本庫には、2021 年に採集された沖縄島産の標本がある。

【生育地の現況】

林内の岩上や樹幹上に生育する。生育地の一部では森林伐採や自然災害などにより生育条件が悪化している。

【個体数の現況】

生育量は少ない。

存続を脅かす要因

森林伐採。

要因の区分：	(過去)	森林伐採
	(現在)	森林伐採

特記事項

ホウライハゴロモゴケの学名はこれまで *Homaliodendron microdendron* とされてきたが、Olsson et al. (2010) の分子系統学的な解析により、*Circulifolium* 属に組み替えられた。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ホウライハゴロモゴケ	<i>Homaliodendron microdendron</i> (Mont.) M.Fleisch.	NT
第4次 2019:	ホウライハゴロモゴケ	<i>Homaliodendron microdendron</i> (Mont.) M.Fleisch.	NT
第4次 2018:	ホウライハゴロモゴケ	<i>Homaliodendron microdendron</i> (Mont.) M.Fleisch.	NT
第4次 2017:	ホウライハゴロモゴケ	<i>Homaliodendron microdendron</i> (Mont.) M.Fleisch.	NT
第4次 2015:	ホウライハゴロモゴケ	<i>Homaliodendron microdendron</i> (Mont.) M.Fleisch.	NT
第4次:	ホウライハゴロモゴケ	<i>Homaliodendron microdendron</i> (Mont.) M.Fleisch.	NT
第3次:	ホウライハゴロモゴケ	<i>Homaliodendron microdendron</i> (Mont.) M.Fleisch.	NT
第2次:	ホウライハゴロモゴケ	<i>Homaliodendron microdendron</i> (Mont.) Fl.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

沖縄県[準絶滅危惧（NT）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- Noguchi, A., 1989. Noguchi, A., 1989. Illustrated Moss Flora of Japan. Part 3. pp. 493-742. Hattori Botanical Laboratory, Nichinan.
- Olsson, S., V. Buchbender, J. Enroth, L. Hedenäs, S. Huttunen and D. Quandt, 2010. Phylogenetic relationships in the ‘*Pinnatella*’ clade of the moss family Neckeraceae (Bryophyta). *Organisms Diversity & Evolution*, 10: 107-122.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Circulifolium microdendron has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Circulifolium microdendron* is listed as NT under criteria ②.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

②Habitat conditions are deteriorating.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting
Law designation status for conservation	—

執筆者: 山口富美夫 (広島大学)
Author: Tomio Yamaguchi

公表年月: 2025 年 3 月

ハイゴケ目 Hypnales ヒラゴケ科 Neckeraceae

キブリハネゴケ

Pinnatella makinoi (Broth.) Broth.

カテゴリー判定結果		準絶滅危惧 (NT)		①
基準 A: —	基準 B: VU 未満	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。 具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。 ①個体数が減少している。 【判断理由】 第5次レッドリスト調査（2016-2019）では山口県の2か所で生育が確認されているが、どちらの生育地でも生育個体数は激減している。また、福岡県内の生育地では、今回の調査で確認できなかった。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

本州から九州、台湾、中国の石灰岩地に生育する蘚類。生育環境は限られており、大雨による河川の氾濫、森林伐採、植生遷移などによる環境の変化によって生育地の減少が危惧される。

協力者： 林正典（日本蘚苔類学会）

基礎情報

【形態】

一次茎は基物上を這い、二次茎は起き上がって長さは約 5 cm、ときに 10 cm に達する。二次茎の中部以上で密に羽状に枝を出す。葉はまるくついて、乾いても開いたままである。葉先は尖り、葉先の縁に小さな歯がある。中肋は強くて葉頂近くに達する。

【生活史】

雌雄異株 (?)。日本では孢子体は未報告。

【生育環境】

石灰岩上に群生する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林, 岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (2) 里地里山・田園地域

【分布域】

本州、四国、九州。台湾、中国。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト調査 (2016-2019) では山口県の 2 か所で生育が確認されている。また、広島大学植物標本庫には、2015 年以降に採集された熊本県、宮崎県、福岡県、愛媛県、広島県、岡山県産の標本が保管されている。その他、佐治ほか (2020) は徳島県阿南市から報告している。

【生育地の現況】

生育地の一部では森林伐採や自然災害などにより生育条件が悪化している。

【個体数の現況】

各産地での個体数はいずれも少なく、減少傾向が認められる。

存続を脅かす要因

森林伐採や石灰採掘によって生育環境の変化、生育地の消失が危惧される。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 石灰採掘
	(現在)	森林伐採, 石灰採掘

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	キブリハネゴケ	<i>Pinnatella makinoi</i> (Broth.) Broth.	NT
第4次 2019:	キブリハネゴケ	<i>Pinnatella makinoi</i> (Broth.) Broth.	NT
第4次 2018:	キブリハネゴケ	<i>Pinnatella makinoi</i> (Broth.) Broth.	NT
第4次 2017:	キブリハネゴケ	<i>Pinnatella makinoi</i> (Broth.) Broth.	NT
第4次 2015:	キブリハネゴケ	<i>Pinnatella makinoi</i> (Broth.) Broth.	NT
第4次:	キブリハネゴケ	<i>Pinnatella makinoi</i> (Broth.) Broth.	NT
第3次:	キブリハネゴケ	<i>Pinnatella makinoi</i> (Broth.) Broth.	NT
第2次:	キブリハネゴケ	<i>Pinnatella makinoi</i> (Broth.) Broth.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

埼玉県[絶滅危惧Ⅰ類(CE)] 愛知県[絶滅危惧Ⅱ類(VU)] 滋賀県[要注目種] 奈良県[絶滅危惧種] 岡山県[絶滅危惧Ⅱ類] 広島県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 山口県[準絶滅危惧(NT)] 愛媛県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 福岡県[絶滅危惧Ⅱ類] 長崎県[準絶滅危惧種(NT)] 熊本県[準絶滅危惧(NT)] 大分県[絶滅危惧ⅠA類(CR)] 宮崎県[準絶滅危惧(NT-r)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岩月善之助・出口博則・古木達郎，2001．日本の野生植物コケ．平凡社，東京．355pp., 192pls.
- 佐治まゆみ・狩野登之助・西村直樹，2020．徳島県南の蘚類 1．イヌマゴケ目，アブラゴケ目．岡山コケの会ニュース，50: 19-22.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Pinnatella makinoi has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Pinnatella makinoi* is listed as NT under criteria ①.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest, Cliff/Talus area (e.g. limestone area)

Threat types:	Logging and wood harvesting, Limestone mining
Law designation status for conservation	—

執筆者:	山口富美夫（広島大学）
Author:	Tomio Yamaguchi

公表年月：2025 年 3 月

タイワントラノオゴケ

Taiwanobryum speciosum Nog.

カテゴリー判定結果 準絶滅危惧 (NT) ①

基準 A: —	基準 B: VU 未満	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —

生育状況の推移から見て、種の存続への圧迫が強まっていると判断されるもの。
具体的には、分布域の一部において、次の傾向が顕著であり、今後さらに進行するおそれがあるもの。

①個体数が減少している。

【判断理由】

高知県横倉山では 1995 年までに減少し、その後 2014 年までは不変で、香美市石立山では 1995 年から 2012 年にかけて減少している。このように、生育地により減ったという報告がちらほらあるが、増加したという報告はない。新たな生育地も発見されているが、それらは増加に伴うものではないと思われる。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

タイワントラノオゴケは、日本、台湾、中国、ベトナムに分布し、国内では関東以西の石灰岩地にのみ生育する大型の蘚類。第 4 次レッドリスト作成のための調査では、岡山県、徳島県、高知県、熊本県の石灰岩地で確認されているが、その少し前に奈良県でも発見された。第 5 次レッドリストのための調査では、熊本県内の、2010 年の調査では発見できていなかった地点で、新たに確認された。生育地付近の森林伐採や石灰採掘で生育地が失われるおそれがある。

協力者： 松井透（高知大学）・出口博則（広島大学）・坪田博美（広島大学）・久保晴盛（広島大学）・立石幸敏（岡山コケの会）・木口博史（岡山コケの会）

基礎情報

【形態】

植物体は大型、第一次茎は這い、小さな葉をつける。第二次茎は立ち上がり、長さ 10 cm になることがあり、不規則に分枝する。第二次茎の葉は卵状楕円形で、先端は斬尖して長く伸び、長さ 5.0 mm に達し、基部は狭く下延し、中部はややしわ寄る。葉先の縁には大きな歯がある。中肋は細く、葉の 3/4 に達する。蒴柄は長さ 15 mm、蒴は直立、相称、蒴歯は 1 列。

【生活史】

雌雄異株。

【生育環境】

日本では関東以西の石灰岩地のみに生育する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林、岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では東京、山梨、静岡、奈良、岡山、徳島、高知、熊本の石灰岩地で報告されている（岩月, 2000; 土永, 2009; 田中, 2012; 有川, 2014）。土永（2009）は生育地として埼玉県もあげているが、該当する記録は見いだせず誤解であると思われる。国外では中国、台湾とベトナムに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

岩月（2000）によれば 1980 年に生育していた山梨県丹波山村では生育が確認できなかったという。第 4 次レッドリスト作成のための調査では、岡山県高梁市、高知県横倉山で 1995 年と比べて変わらず少数が、1995 年に比較的多数が確認されていた高知県香美市物部の石立山では少数が確認されていた。徳島県上勝町でも少数が確認されたが、それまでの 5 年間は増減がなかった。熊本県（2019）は、五木村の限られた石灰岩地に生育しそのか所は非常に少ないとしているが、第 5 次レッドリストのための調査では、2018 年に熊本県山江村水無の石灰岩の垂直面上に生育しているのが新たに確認されている。なお、山江村水無では、2010 年にも調査を実施していたが、発見できていなかった。

【生育地の現況】

いずれの生育地においても変化の詳細については不明。

【個体数の現況】

第 4 次レッドリスト作成（2012 年）のための調査では、岡山県高梁市、高知県横倉山で 1995 年と比べて変わらず少数が、1995 年に比較的多数が確認されていた高知県香美市物部の石立山では少数が確認されていた。徳島県上勝町でも少数が確認されたが、それまでの 5 年間は増減がなかった。2018 年に新たに確認された熊本県山江村水無の石灰岩

の垂直面上では、群落数は1つで、60×80 cm 程度だった。その他の生育地の詳細については不明。

存続を脅かす要因

生育地付近の森林伐採や石灰採掘で生育地が失われるおそれがある。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 石灰採掘
	(現在)	森林伐採, 石灰採掘

特記事項

タイワントラノオゴケ科とする見解もあった。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	タイワントラノオゴケ	<i>Taiwanobryum speciosum</i> Nog.	VU
第4次 2019:	タイワントラノオゴケ	<i>Taiwanobryum speciosum</i> Nog.	VU
第4次 2018:	タイワントラノオゴケ	<i>Taiwanobryum speciosum</i> Nog.	VU
第4次 2017:	タイワントラノオゴケ	<i>Taiwanobryum speciosum</i> Nog.	VU
第4次 2015:	タイワントラノオゴケ	<i>Taiwanobryum speciosum</i> Nog.	VU
第4次:	タイワントラノオゴケ	<i>Taiwanobryum speciosum</i> Nog.	VU
第3次:	タイワントラノオゴケ	<i>Taiwanobryum speciosum</i> Nog.	VU
第2次:	タイワントラノオゴケ	<i>Taiwanobryum speciosum</i> Nog.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

奈良県[絶滅寸前種] 岡山県[絶滅危惧Ⅰ類] 熊本県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 有川智己, 2014. タイワントラノオゴケ. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室（編）, レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—9 植物Ⅱ（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）. p.201. ぎょうせい, 東京.

- 岩月善之助・出口博則・古木達郎，2001．日本の野生植物コケ．平凡社，東京．355pp., 192pls.
- 岩月善之助，2000．タイワントラノオゴケ．環境庁（編），改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物－レッドデータブック－9 植物 II（維管束植物以外）．p. 69．自然環境研究センター，東京．
- 熊本県希少野生動植物検討委員会，2019．レッドデータブックくまもと 2019－熊本県の絶滅のおそれのある野生動植物－．632pp．熊本県環境生活部自然保護課，熊本．
- Noguchi, A., 1989. Illustrated Moss Flora of Japan. Part 3. pp. 493-742. Hattori Bot. Lab., Nichinan.
- 田中敦司，2012．日本の石灰岩性藓類．Naturalistae, 16: 47-82.
- 立石幸敏・西村直樹，1995．ムチエダイトゴケとタイワントラノオゴケの新産地．日本藓苔類学会会報，6: 162-163.
- 土永浩史，2009．大台ヶ原山山麓の絶滅危惧藓類数種．藓苔類研究，9: 396-397.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Taiwanobryum speciosum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Taiwanobryum speciosum* is listed as NT under criteria ①.

The species that is considered to be under increasing pressure for survival, as indicated by habitat status trends, specifically with the following notable tendencies in parts of its distribution that are likely to continue.

①The number of individuals is decreasing.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest, Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limestone mining
Law designation status for conservation	—

執筆者: 有川智己（慶應義塾大学）
Author: Tomotsugu Arikawa

公表年月：2025 年 3 月

ムカシヤバネゴケ

Cephaloziella crispata N.Kitag.

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD)

②

基準 A: —	基準 B: データ不足	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

②生育地が局限されている。

【判断理由】

過去に 1 点しか採集されたことがなく、近年の詳細な調査にも関わらず確認できず、50 年以上確認されていない。ただし、まだ生育している可能性も否定できないため、今回は DD と評価した。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

ムカシヤバネゴケは 1973 年に *Metacephalozia exigua* として西表島に固有な新属新種の茎葉状苔類として記載されたが、後に *Cephaloziella crispata* の異名とされた。国外ではタイに分布し、国内では西表島の溪谷の土手に生育していたが、50 年以上確認されていないため、絶滅が危惧される。

協力者： 山口富美夫（広島大学）

基礎情報

【形態】

植物体は匍匐し、淡緑色、茎葉状、茎は長さ 2~4 mm、枝は斜上して長さ 0.8~1.3 mm、幅は葉を含めて 0.5~0.7 mm。葉は斜めに開出し、不等に 1/3~1/5 まで 2 裂し、背側が小さく、円頭で全縁。腹葉は痕跡的。葉身細胞は矩形、やや厚壁。油体は円形で小粒からなる。雌花は造卵器は頂生する。無性芽はない。

【生活史】

雌雄異株。国内では花被と雄株、孢子体は確認されていない。

【生育環境】

常緑広葉樹林の湿った砂岩の岸壁に生育する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】河川源流域

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では西表島の仲間川から御座岳山麓（沖縄県）に分布し、国外ではタイに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

不明。

【生育地の現況】

不明。

【個体数の現況】

不明。

存続を脅かす要因

産地は局限し、何らかの要因により、生育量が減少していると考えられる。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

国内では *Metacephalozia exigua* Inoue のタイプ標本 1 点だけが確認されている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ムカシヤバネゴケ	<i>Cephaloziella crispata</i> N.Kitag.	DD
第4次 2019:	ムカシヤバネゴケ	<i>Cephaloziella crispata</i> N.Kitag.	DD
第4次 2018:	ムカシヤバネゴケ	<i>Cephaloziella crispata</i> N.Kitag.	DD
第4次 2017:	ムカシヤバネゴケ	<i>Cephaloziella crispata</i> N.Kitag.	DD
第4次 2015:	ムカシヤバネゴケ	<i>Cephaloziella crispata</i> N.Kitag. [= <i>Cephaloziopsis exigua</i> (Inoue) R.M.Schust.]	DD
第4次:	ムカシヤバネゴケ	<i>Cephaloziella crispata</i> N.Kitag. [= <i>Cephaloziopsis exigua</i> (Inoue) R.M.Schust.]	DD
第3次:	ムカシヤバネゴケ	<i>Cephaloziopsis exigua</i> (Inoue) R.M.Schust.	DD
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

沖縄県[情報不足（DD）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Inoue, H., 1973. *Metacephalozia*, a new genus of the Hepaticae. J. Hattori Bot. Lab., 37: 287-291.
- Inoue, H. and R. M. Schuster, 1974. The taxonomic status of the genus *Metacephalozia* Inoue. Bull. Natl. Sci. Mus. Tokyo, 17: 161-162.
- 片桐知之・古木達郎, 2012. 日本産タイ類ツノゴケ 類チェックリスト, 2012. 蘚苔類研究, 10: 13-210.
- Kitagawa, N., 1969. Studies on the Hepaticae of Thailand. II. J. Hattori Bot. Lab., 32: 290-306.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Cephaloziella crispata has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Cephaloziella crispata* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 River headwater

Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	古木達郎（元千葉県立中央博物館）
Author:	Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

タガワヤバネゴケ

Cylindrocolea tagawae (N.Kitag) R.M.Schust.

カテゴリー判定結果

情報不足 (DD)

①

基準 A: —

基準 B: データ不足

基準 C: —

基準 D: —

基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

①どの生育地においても生育密度が低く希少である。

【判断理由】

本種は南西諸島の林道沿い・河川岸に点々と発生するが、植物体が小さく、形成する群落も小さいため、生育密度が低い。稀にしか報告されないことから、生育密度が低いことが示唆される。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

本種は茎は扁平になり、葉がほぼ横に茎につき、先端が浅く2裂することを特徴とする茎葉状苔類。国内では、奄美群島以南に分布するが、生育範囲が狭く、生育数も少ない。しかし、植物体が小さいことから見過ごされている可能性がある。

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉状、濃緑色、匍匐し、長さ数 mm、幅約 0.5 mm。葉は斜めから縦につき、1/5 まで浅く 2 裂する。腹葉はない。葉身細胞の表面にベルカがある。無性芽はない。花被は長紡錘形。茎が扁平で、葉がほぼ縦についていることで近縁種から区別される。

【生活史】

雌雄異株。産地が少なく、確認されている標本も少ないため、生活史や孢子体の有無など不明な点が多い。

【生育環境】

常緑広葉樹の自然林の湿った林床の岩上や倒木上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_平地部】森林, 河川中流域

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

国内では奄美群島以南（奄美大島、沖縄島、西表島、石垣島、与那国島）に分布するが、植物体が小さいことから見逃されている生育地があると予想される。国外では東南アジア、中国に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

分布域に大きな変化はないと考えられる。

【生育地の現況】

森林伐採が確認される生育地がある。また、河川流域の生育地の立地は不安定である。

【個体数の現況】

各生育地における生育数は非常に少ない。

存続を脅かす要因

産地は森林伐採などの影響を受け、生育量が減少している。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 河川開発, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 河川開発, 分布・産地局限

特記事項

奄美大島以南に広く分布していると推定され、植物体が小さいことから見過ごされている可能性がある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	タガワヤバネゴケ	<i>Cylindrocolea tagawae</i> (N.Kitag) R.M.Schust.	VU
第4次 2019:	タガワヤバネゴケ	<i>Cylindrocolea tagawae</i> (N.Kitag) R.M.Schust.	VU
第4次 2018:	タガワヤバネゴケ	<i>Cylindrocolea tagawae</i> (N.Kitag) R.M.Schust.	VU
第4次 2017:	タガワヤバネゴケ	<i>Cylindrocolea tagawae</i> (N.Kitag) R.M.Schust.	VU
第4次 2015:	タガワヤバネゴケ	<i>Cylindrocolea tagawae</i> N.Kitag.	VU
第4次:	タガワヤバネゴケ	<i>Cylindrocolea tagawae</i> N.Kitag.	VU
第3次:	タガワヤバネゴケ	<i>Cylindrocolea tagawae</i> N.Kitag.	VU
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

沖縄県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 文献なし

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Cylindrocolea tagawae has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Cylindrocolea tagawae* is listed as DD under criteria ①.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】 Forest, Middle river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development, Limited distribution

Law designation status for conservation	—

執筆者:	古木達郎（元千葉県立中央博物館）
Author:	Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

マルバイチョウゴケ

Obtusifolium obtusum (Lindb.) S.W.Arnell

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD)

②

基準 A: —

基準 B: データ不足

基準 C: —

基準 D: —

基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

②生育地が局限されている。

【判断理由】

富山県のワリモ岳の 1 か所で、1967 年に 1 度のみ報告があった。生育地が狭く、局限されていると判断した。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

本種は 1 属 1 種の単型属の茎葉状苔類。植物体は茎葉状、長さが 2.5 cm 以下の茎葉状苔類。葉が茎に斜めにつき、全体的に平らであるが切込みの最深部が背軸側に張り出し、先端が円頭である。日本や欧州、北米、中国に分布し、国内では、富山県の高山帯にのみ知られているが、50 年以上生育が確認されていない。絶滅した可能性もあるが、結論付けるためには更なる調査が必要である。

基礎情報

【形態】

1 属 1 種の単型属。植物体は茎葉状、濃緑色、匍匐し、長さは 1.0～2.5 cm、幅は葉を含めて 1.5～2.0 mm、芳香を持つ。茎はヤスデゴケ型分枝、表皮と髄層がほぼ同じ。葉は瓦状に斜めにつき、全体的に平らであるが切込最深部が背軸側に張り出し、長さが幅よりもわずかに短く、約 1.5×2.0 mm、1/4～1/3 まで 2 裂、裂片は正三角形状、円頭、稀にやや尖る。腹葉は欠くことが多いが、稀に痕跡的、時に大きくてなり裂片状。葉身細胞は多角形、薄壁、トリゴンは極小、油体は国内では未確認。植物体は芳香を発する。

【生活史】

雌雄異株であるとされているが、生殖器官は国内では確認されていない。

【生育環境】

高山帯の腐葉土上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では富山県の高山のみ分布、国外では欧州、北アメリカと中国に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

50 年以上未確認。

【生育地の現況】

不明。

【個体数の現況】

不明。

存続を脅かす要因

不明。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

単型属。科については、新科 Obtusifoliaceae とする見解もある (Bakalin et al., 2021)。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	マルバイチョウゴケ	<i>Obtusifolium obtusum</i> (Lindb.) S.W.Arnell	DD
第4次 2019:	マルバイチョウゴケ	<i>Obtusifolium obtusum</i> (Lindb.) S.W.Arnell	DD
第4次 2018:	マルバイチョウゴケ	<i>Obtusifolium obtusum</i> (Lindb.) S.W.Arnell	DD
第4次 2017:	マルバイチョウゴケ	<i>Obtusifolium obtusum</i> (Lindb.) S.W.Arnell	DD
第4次 2015:	マルバイチョウゴケ	<i>Obtusifolium obtusum</i> (Lindb.) S.W.Arnell [= <i>Lophozia obtusa</i> (Lindb.) A.Evans]	DD
第4次:	マルバイチョウゴケ	<i>Obtusifolium obtusum</i> (Lindb.) S.W.Arnell [= <i>Lophozia obtusa</i> (Lindb.) A.Evans]	DD
第3次:	マルバイチョウゴケ	<i>Lophozia obtusa</i> (Lindb.) A.Evans	DD
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

富山県[情報不足]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Bakalin, V. A., V. E. Fedosov, A. V. Fedorova and W. -Z. Ma, 2021. *Obtusifoliaceae*, a new family liverworts to accommodate *Konstantinovia*, newly described from the Hengduan Mts. (South China) and *Obtusifolium* (Cephaloziineae, Marchantiophyta). *Pl. Syst. Evol.*, 307: 1-16.
- De Roo, R. T., T. A. Hedderson and L. Söerström, 2007. Molecular insights into the phylogeny of the leafy liverwort family Lophoziaceae Cavers. *Taxon*, 56: 301-314.
- Kitagawa, N., 1967. Two species of Lophoziaceae, new to Japan. *Bull. Nara U. Educ. (Nat.)*, 15: 37-43.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Obtusifolium obtusum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Obtusifolium obtusum* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area】 Forest
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	古木達郎（元千葉県立中央博物館）
Author:	Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

タニガワヒシヤクゴケ

Scapania ciliatospinosa Horik.

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD)

②

基準 A: —

基準 B: データ不足

基準 C: —

基準 D: —

基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

②生育地が局限されている。

【判断理由】

国内では谷川岳の山頂付近にのみ生育が確認されている。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

本種はヒシヤクゴケ属の中では、腹片と背片の癒合が短く、葉縁の鋸歯が長い単細胞であることを特徴とする茎葉状苔類。ヒマラヤや中国、台湾に分布する。日本では谷川岳の山頂付近にのみ分布している。1956-1957年に採集された標本に基づき1977年に報告されて以来、報告がなく、最近20年の調査でも確認できない。減少した理由は不明であり、継続調査が望まれる。

協力者： 白崎仁（新潟薬科大学）

基礎情報

【形態】

植物体は斜上し、明るい褐色、長さ 1.0～1.5 cm、幅は葉を含めて 1.2～1.8 mm。葉は瓦状に緩く重なるか接在、大きな腹片と小さな背片となり、キールは短く、縁は単細胞からなる鋸歯があり。背片は円形。腹片は楕円形、背片の約 2 倍長、基部は長く下延する。細胞の表面は平滑。花被や雄苞葉は未知、無性芽は 2 細胞性楕円体。

【生活史】

生殖器官は知られていない。

【生育環境】

高山の山頂付近の露岩地。

生育環境区分：	【陸域_高標高地】岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では群馬県にのみ知られている。国外ではヒマラヤ、中国、台湾に知られている。

現在の生育状況

【分布域の現況】

谷川岳の山頂付近だけに知られているが、過去 50 年以上採集されていない。

【生育地の現況】

生育環境に大きな変化はないと考えられる。

【個体数の現況】

確認できない。

存続を脅かす要因

局所分布。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	タニガワヒシャクゴケ	<i>Scapania ciliatospinosa</i> Horik.	DD
第4次 2019:	タニガワヒシャクゴケ	<i>Scapania ciliatospinosa</i> Horik.	DD
第4次 2018:	タニガワヒシャクゴケ	<i>Scapania ciliatospinosa</i> Horik.	DD
第4次 2017:	タニガワヒシャクゴケ	<i>Scapania ciliatospinosa</i> Horik.	DD
第4次 2015:	タニガワヒシャクゴケ	<i>Scapania ciliatospinosa</i> Horik.	DD
第4次:	タニガワヒシャクゴケ	<i>Scapania ciliatospinosa</i> Horik.	DD
第3次:	タニガワヒシャクゴケ	<i>Scapania ciliatospinosa</i> Horik.	DD
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 井上 浩. 1977. 日本新産の苔類 *Scapania ciliatospinosa* Horik.について. 植物研究雑誌, 52: 318-320.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Scapania ciliatospinosa has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Scapania ciliatospinosa* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area】 Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	古木達郎（元千葉県立中央博物館）
Author:	Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

ツバサヒシヤクゴケ

Scapania crassiretis Bryhn

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD)

②

基準 A: —

基準 B: データ不足

基準 C: —

基準 D: —

基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

②生育地が局限されている。

【判断理由】

北岳や知床半島周辺といった冷涼な山岳地域にのみ生育し、いずれの生育地においても生育範囲が狭いため、生育地が局限していると判断した。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

本種はヒシヤクゴケ科の茎葉状苔類。葉のキールに大きな翼部があることからツバサヒシヤクゴケと呼ばれ、細胞のトリゴンが大きいことで同じように翼部を持つ同属の他種から区別される。欧米や中国など北半球の寒帯に分布しており、国内では北海道と本州中部高山に分布する。いずれの生育地においても生育範囲が狭く、生育数が少ない。

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉状、黒褐色～赤褐色、斜上し、長さ 1～3 cm、幅 2～3 mm。不等に 2 裂し、強く 2 つに折りたたまれ、小さい背片と大きな腹片になり、折り目が明瞭なキールになる。背片は長卵形、縁に 2～3 細胞長の鋸歯がある。腹片は背片の約 1.5 倍、楕円形。葉身細胞に大きなトリゴンがある。無性芽は単細胞性楕円体。和名は葉のキールに幅広い翼部があることによる。

【生活史】

雌雄異株。国内では胞子体は見つかっていない。無性芽は豊富である。

【生育環境】

高山帯の露岩地において、岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地】岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では北海道と本州中部高山に分布し、国外では欧米や中国など北半球の寒帯に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

知床半島（北海道）に知られていたが、最近、南アルプス（山梨県）で生育が確認された。

【生育地の現況】

詳細については不明。。

【個体数の現況】

北海道では不明。本州では少数が確認された。

存続を脅かす要因

産地が少なく局限しており、生育数が少ない。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ツバサヒシャクゴケ	<i>Scapania crassiretis</i> Bryhn	VU
第4次 2019:	ツバサヒシャクゴケ	<i>Scapania crassiretis</i> Bryhn	VU
第4次 2018:	ツバサヒシャクゴケ	<i>Scapania crassiretis</i> Bryhn	VU
第4次 2017:	ツバサヒシャクゴケ	<i>Scapania crassiretis</i> Bryhn	VU
第4次 2015:	ツバサヒシャクゴケ	<i>Scapania crassiretis</i> Bryhn	VU
第4次:	ツバサヒシャクゴケ	<i>Scapania crassiretis</i> Bryhn	VU
第3次:	ツバサヒシャクゴケ	<i>Scapania crassiretis</i> Bryhn	DD
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 古木達郎・滝田謙譲, 1988. 北海道羅臼岳で見つかった2種の日本新産の苔類. 日本蘚苔類学会会報, 4: 197-200.
- 桝崎浩亮・片桐知之, 2010. 北岳・間ノ岳の苔類. 増沢武弘（編）, 南アルプス 地形と生物. pp. 257-276. 静岡県, 静岡.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Scapania crassiretis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Scapania crassiretis* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area】 Cliff/Talus area (e.g. limestone area)

Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	古木達郎（元千葉県立中央博物館）
Author:	Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

コサキジロゴケ

Gymnomitrium laceratum (Steph.) Horik.

カテゴリー判定結果

情報不足 (DD)

②

基準 A: データ不足

基準 B: データ不足

基準 C: —

基準 D: —

基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

②生育地が局限されている。

【判断理由】

国内では、タイプ産地の 1 か所のみで知られている。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

本種は南アルプス高山帯で採集されたタイプを基に 1917 年に新種記された茎葉状苔類。サキジロゴケ属としては珍しく腹葉があり、葉身細胞に大きなトリゴンを持つことで、他種から容易に区別できる。国内ではタイプしか確認されていないため、絶滅した可能性が高い。しかし、国外では中国や北米、中米、アフリカ、ハワイ等に広く知られている。

基礎情報

【形態】

植物体は緑褐色、茎葉状、長さ 5～15 mm、幅 0.2～0.4 mm、全体が背腹にやや扁平。葉は横につき、圧接、1/3～1/2 まで 2 裂し、裂片は三角形状、縁はわずかに外曲する。腹葉は痕跡的な裂片状。葉身細胞は円状多角形、トリゴンが大きい。雌花は、花被を欠き、幅 0.7 mm になり、雌苞葉は葉に似るが大きい。雄花は未知。孢子体は未知。

【生活史】

雌雄異株。国内では造精器と孢子体は未知。

【生育環境】

高山帯の岩上に生育している。

生育環境区分：	【陸域_高標高地】岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では山梨県南アルプスのみに知られている。国外では中国、北米、中米、アフリカ、ハワイに知られている。

現在の生育状況

【分布域の現況】

1917 年に新種記載された以後、確認されていない。

【生育地の現況】

不明。

【個体数の現況】

不明。

存続を脅かす要因

生育地点が 1 か所に限定されているが、詳細は不明である。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

本種は、フォーリーサキジロゴケと外観が酷似しており、誤同定されている可能性もある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	コサキジロゴケ	<i>Gymnomitrium laceratum</i> (Steph.) Horik.	DD
第4次 2019:	コサキジロゴケ	<i>Gymnomitrium laceratum</i> (Steph.) Horik.	DD
第4次 2018:	コサキジロゴケ	<i>Gymnomitrium laceratum</i> (Steph.) Horik.	DD
第4次 2017:	コサキジロゴケ	<i>Gymnomitrium laceratum</i> (Steph.) Horik.	DD
第4次 2015:	コサキジロゴケ	<i>Gymnomitrium laceratum</i> (Steph.) Horik.	DD
第4次:	コサキジロゴケ	<i>Gymnomitrium laceratum</i> (Steph.) Horik.	DD
第3次:	コサキジロゴケ	<i>Gymnomitrium laceratum</i> (Steph.) Horik.	DD
第2次:	コサキジロゴケ	<i>Gymnomitrium laceratum</i> (Steph.) Horik.	DD
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Bakalin, V. A., 2016. Does *Gymnomitrium corallioides* Nees (Hepaticae) occur in temperate East Asia?. Bot. Pacifica, 5: 53-61.
- Kitagawa, N., 1963. A revision of the family Marsupellaceae. J. Hattori Bot. Lab., 26: 76-204.
- Stephani, F., 1985. Icones Hepaticarum (microfiche), 165 microfiches, Microfiche. Zug, Switzerland.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Gymnomitrium laceratum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Gymnomitrium laceratum* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area】 Cliff/Talus area (e.g. limestone area)

Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	古木達郎（元千葉県立中央博物館）
Author:	Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

アカサキジロゴケ

Gymnomitrion mucronulatum (N.Kitag.) N.Kitag.

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD)

②

基準 A: —

基準 B: データ不足

基準 C: —

基準 D: —

基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

②生育地が局限されている。

【判断理由】

日本固有種であり、分布が本州中部の高山山頂付近に限られている。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

本種は本州中部高山帯の山頂付近にのみ生育している日本固有の茎葉状苔類。植物体は赤褐色～黄褐色。葉は茎に密に接し、広いV字形に切込み、先端が尖る。高山帯の岩場に生育することが知られていたが、数10年間、生育が確認されていない。評価するためには更なる調査が必要である。

基礎情報

【形態】

植物体は赤褐～黄褐色、茎葉状、長さ 1 cm、葉を含めて 0.35 mm 以下。葉は瓦状に密に茎に接し、長卵形、深さ 1/4 まで広い V 字形に切込み、先端が尖る。

【生活史】

造精器、造卵器、孢子体は知られていない。

【生育環境】

高山帯の露岩地の岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地】岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

長野県木曽駒ヶ岳、乗鞍岳、八ヶ岳赤岳から報告されている（Kitagawa, 1963）。また、富山県立山で採集された標本が確認されている。

現在の生育状況

【分布域の現況】

不明。50 年以上に亘り生育が確認されていない。

【生育地の現況】

夏期に生育地が乾燥化している。

【個体数の現況】

確認されていない。

存続を脅かす要因

産地が局限しており、確認されている産地がなく、生育数も少なかったことから絶滅が危惧される。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限, 気候変動
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	—	—	—
第4次 2019:	—	—	—
第4次 2018:	—	—	—
第4次 2017:	—	—	—
第4次 2015:	—	—	—
第4次:	—	—	—
第3次:	—	—	—
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Bakalin, V. A., 2016. Does *Gymnomitrion corallioides* Nees (Hepaticae) occur in temperate East Asia. *Botanica Pacifica*, 5: 53-61.
- Kitagawa, N., 1962. Status of *Gymnomitrion concinnatum* var. *mucronulatum*. *Acta Phytotax. Geobot.*, 19: 53.
- Kitagawa, N., 1963. A revision of the family Marsupellaceae of Japan. *J. Hattori Bot. Lab.*, 26: 76-118.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Gymnomitrion mucronulatum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Gymnomitrion mucronulatum* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area】 Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Limited distribution, Climate change

Law designation status for conservation	—

執筆者:	古木達郎（元千葉県立中央博物館）
Author:	Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

ヒロシウロコゴケ

Nardia hiroshii Amakawa

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD)

③

基準 A: —	基準 B: データ不足	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

③生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。

【判断理由】

中部地方の亜高山帯にのみ生育している。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

本種は茎葉状苔類であり、葉は不透明な緑色で、先が2裂しており、タカネイチョウゴケ属に似ているが、痕跡的ながら腹葉があることでアカウロコゴケ属であることがわかる。国外では北アメリカに分布し、国内では東北地方と中部地方の亜高山・高山に分布する。これまでに3か所に知れていたが、2か所では50年以上確認されていないことから絶滅が危惧される。

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉状、不透明な黄緑～緑色、タカネイチョウゴケ属 *Lophozia* のような外見をしている。岩上に小さな群落を作り、幅は葉を含めて、0.7-1.3 mm、葉は離生し、1/4まで浅く2裂して、腹葉は小さい。国内では生殖器官は知られていない。

【生活史】

造卵器と造精器、孢子体は国内では確認されていない。

【生育環境】

亜高山帯、高山帯の岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地】森林、岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

山形県（鳥海山）、長野県（仙丈ヶ岳、八ヶ岳）。

現在の生育状況

【分布域の現況】

中部地方の亜高山帯の1か所で生育を確認している。

【生育地の現況】

生育地では樹木の成長に伴い暗くなり、環境が変化している。

【個体数の現況】

減少している。

存続を脅かす要因

分布が局限しており、各生育地において、何らかの要因により絶滅が危惧される。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

本種はヒトスジウロコゴケ *Nardia unispiralis* Amakawa の異名であるとされていたが（Vána 1976）、Bakalin（2012）と Stotler & Crandall-Stotler（2017）において別種であるとされた。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	—	—	—
第4次 2019:	—	—	—
第4次 2018:	—	—	—
第4次 2017:	—	—	—
第4次 2015:	—	—	—
第4次:	—	—	—
第3次:	—	—	—
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

長野県[情報不足（DD）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Bakalin, V. A., 2012. *Nardia hiroshii* Amakawa – a new species for North American liverworts flora and the key to *Nardia* species in North Pacific. *Arctoa*, 21: 97-100.
- Stotler, R. E and B. Crandall-Stotler, 2017. A synopsis of the liverwort flora of North America north of Mexico. *Ann. Miss. Bot. Garden*, 102: 574-709.
- Váňa, J., 1976. Studien über die Jungermannioideae (Hepaticae) 10. *Nardia*. *Bot. Inst. Karls-Univ.*, 128: 367-425.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Nardia hiroshii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Nardia hiroshii* is listed as DD under criteria ③.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

③Distribution is biogeographically isolated (e.g., endemic species confined to a narrow range).

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area】 Forest, Cliff/Talus area (e.g.

	limestone area)
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	古木達郎（元千葉県立中央博物館）
Author:	Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

ヒトスジウロコゴケ

Nardia unispiralis Amakawa

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD)

③

基準 A: —	基準 B: データ不足	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

③生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。

【判断理由】

本種は北海道の高山帯の岩場にのみ生育する。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

本種は北海道に固有に分布する茎葉状苔類。和名はアカウロコゴケ属の中では唯一胞子体の弾糸が一重であるという特徴に因んでいる。高山帯の岩場に生育するが、40年以上生育が確認されていない。

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉状、黄緑～褐緑色、蘚類に混生して岩上に生育している。幅は葉を含めて、0.7～1.3 mm、葉は離生し、1/4 まで浅く 2 裂する。腹葉は小さい。 胞子体の弾糸が 1 重であることで他の種と区別される。

【生活史】

雌雄異株。花被は知られているが、造精器は未知。

【生育環境】

高山帯の岩上や岸壁や湿原周辺の風穴の周辺の岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地】岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

北海道（利尻島）から報告されている。

現在の生育状況

【分布域の現況】

近年の調査によって、いずれの産地においても生育が確認できない。

【生育地の現況】

生育環境が乾燥化している。

【個体数の現況】

近年の調査においては生育を確認できない。

存続を脅かす要因

産地が局限し、生育地が乾燥化しているため、生育数が減少している。

要因の区分：	（過去）	分布・産地局限, 気候変動
	（現在）	分布・産地局限

特記事項

Váňa（1976）によって本種の異名にされていたヒロシウロコゴケ *Nardia hiroshii* Amakawa は、Bakalin（2012）と Stotler & Crandall-Stotler（2017）において本種とは異なると指摘された。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ヒトスジウロコゴケ	<i>Nardia unispiralis</i> Amakawa	DD
第4次 2019:	ヒトスジウロコゴケ	<i>Nardia unispiralis</i> Amakawa	DD
第4次 2018:	ヒトスジウロコゴケ	<i>Nardia unispiralis</i> Amakawa	DD
第4次 2017:	ヒトスジウロコゴケ	<i>Nardia unispiralis</i> Amakawa	DD
第4次 2015:	ヒトスジウロコゴケ	<i>Nardia unispiralis</i> Amakawa	DD
第4次:	ヒトスジウロコゴケ	<i>Nardia unispiralis</i> Amakawa	DD
第3次:	ヒトスジウロコゴケ	<i>Nardia unispiralis</i> Amak.	DD
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

長野県[情報不足（DD）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Amakawa, T., 1959. Family Jungermanniaceae of Japan. I. J. Hattori Bot. Lab., 21: 248-291.
- Bakalin, V. A., 2012. *Nardia hiroshii* Amakawa – a new species for North American liverwort flora and the key to *Nardia* species in North Pacific. Arctoa, 21: 97-100.
- Inoue, H., 1980. Chromosome numbers of some Japanese Hepaticae (1). Bull. Natn. Sci. Mus. Mus. Tokyo, Ser. B, 6: 1-6.
- Váňa, J., 1976. Studien über die Jungermannioideae (Hepaticae) 10. *Nardia*. Bot. Inst. Karls-Univ., 128: 367-425.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Nardia unispiralis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Nardia unispiralis* is listed as DD under criteria ③.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

③Distribution is biogeographically isolated (e.g., endemic species confined to a narrow range).

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area】 Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Limited distribution, Climate change
Law designation status for conservation	—

執筆者:	古木達郎（元千葉県立中央博物館）
Author:	Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

リシリツボミゴケ

Solenostoma hokkaidense (Váňa) Váňa, Hentschel & Heinrichs

カテゴリ判定結果 情報不足 (DD) ②

基準 A: データ不足	基準 B: —	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。				
②生育地が局限されている。				
【判断理由】				
生育地が利尻島の山頂付近に限定されているが、タイプ標本以外に知られていない。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

リシリツボミゴケは長さが数 mm の小さい茎葉状苔類。ソロイゴケ属の他種とは雌花に長いペリギニウムが発達する特徴によって区別されている。利尻島の山頂付近に固有に分布するが、1954 年に採集されたタイプ標本しか確認されていない。

基礎情報

【形態】

植物体は斜上し、褐色、茎葉状、長さ 0.7 mm 以下、幅は葉を含めて 1.2 mm。仮根は茎に散在し、薄赤色。葉は離在してつき、楕円形、雌花はペリギニウムが発達して花被と同等の長さになり、ほとんどしわがなく捻じれずドーム状。雄苞葉は茎の途中につく。

【生活史】

雌雄異株。

【生育環境】

利尻島山頂付近の安山岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

利尻島に固有。

現在の生育状況

【分布域の現況】

利尻島の山頂付近に知られていたが、近年に生育は確認されていない。

【生育地の現況】

以前よりも乾燥している。

【個体数の現況】

最近の調査では確認できない。

存続を脅かす要因

産地が局限し、何らかの要因により生育数が減少しており絶滅が危惧される。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限, 気候変動
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

タイプ標本しか知られておらず、分類の解釈が研究者によって異なっており、分類学上有効な種とみなさない場合もある。今後、更なる分類学的な研究が必要である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	リシリツボミゴケ	<i>Solenostoma hokkaidense</i> (Vána) Vána, Hentschel & J. Heinrichs	DD
第4次 2019:	リシリツボミゴケ	<i>Solenostoma hokkaidense</i> (Vána) Vána, Hentschel & J. Heinrichs	DD
第4次 2018:	リシリツボミゴケ	<i>Solenostoma hokkaidense</i> (Vána) Vána, Hentschel & J. Heinrichs	DD
第4次 2017:	リシリツボミゴケ	<i>Solenostoma hokkaidense</i> (Vána) Vána, Hentschel & J. Heinrichs	DD
第4次 2015:	リシリツボミゴケ	<i>Solenostoma hokkaidense</i> (Vána) Vána, Hentschel & J. Heinrichs [= <i>Jungermannia</i> <i>hokkaidensis</i> Vána]	DD
第4次:	リシリツボミゴケ	<i>Solenostoma hokkaidense</i> (Vána) Vána, Hentschel & J. Heinrichs [= <i>Jungermannia</i> <i>hokkaidensis</i> Vána]	DD
第3次:	リシリツボミゴケ	<i>Jungermannia hokkaidensis</i> Vana	DD
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Amakawa, T., 1960. Family Jungermanniaceae of Japan. II. J. Hattiri Bot. Lab., 22: 1-90.
- Vána, J., 1972. Miscellaneous notes on the Asiatic Jungermannioideae. J. Hattiri Bot. Lab., 35: 312-318.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Solenostoma hokkaidense has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Solenostoma hokkaidense* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due

to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Limited distribution, Climate change
Law designation status for conservation	—

執筆者: 古木達郎 (元千葉県立中央博物館)

Author: Tatsuwo Furuki

公表年月: 2025 年 3 月

タカネハネゴケモドキ

Plagiochila vexans Schiffn. ex Steph.

カテゴリ判定結果 情報不足 (DD)

③

基準 A: —

基準 B: データ不足

基準 C: —

基準 D: —

基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

③生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。

【判断理由】

本種は常緑広葉樹林の内、空中湿度の高い林の樹幹や岩上の狭い範囲に生育しており、国内で生育が確認されたことのある地点は孤立している。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

本種はインド、ヒマラヤ、中国、日本に分布するハネゴケ科の茎葉状苔類。植物体は茎葉状。緑褐色、やや光沢があり、国内では 2001 年までタカネハネゴケに誤同定されていたが、葉がもろくて、折れやすく、小枝状の無性芽を持つことで区別された。国内では東京都伊豆七島（八丈島・御蔵島）、静岡県及び和歌山県に希に分布するが、最近 20 年間は現状不明であり、評価するための情報が不足している。

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉状。緑褐色、やや光沢があり、長さ約 2～4 cm、幅は葉を含めて 2.5～4 mm。茎の基部でハネゴケ型分枝をする。葉は瓦状に蜜に重なり、背縁は強く外曲し、小さい歯が 20 数個あり、もろくて折れ易い。葉基部の細胞は長くなり、明瞭なビツタ状。腹葉は痕跡的。

【生活史】

国内では造卵器や造精器、胞子体は見つかっていない。早落性の葉と小枝状の無性芽を持つ。

【生育環境】

常緑広葉樹林において空中湿度の高い林の樹幹や岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

国内では、静岡県（産地不明）、和歌山県（本宮町、東牟婁郡黒蔵から大杉谷）及び東京都伊豆七島（八丈島・御蔵島）に分布し、国外ではインド、ネパール、中国、台湾に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

詳細については不明。

【生育地の現況】

八丈島においては、約 20 年前、生育地の乾燥化が見られた。その他の生育地の生育環境の変化については不明である。

【個体数の現況】

不明である。

存続を脅かす要因

生育地の乾燥化が懸念される。

要因の区分：	(過去)	気候変動
	(現在)	気候変動

特記事項

本種は So (2001) によって日本から初めて報告されたが、国内ではタカネハネゴケ *Plagiochila semidecurrens* と混同されていたことが指摘された。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	—	—	—
第4次 2019:	—	—	—
第4次 2018:	—	—	—
第4次 2017:	—	—	—
第4次 2015:	—	—	—
第4次:	—	—	—
第3次:	—	—	—
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 古木達郎, 2006. 伊豆諸島八丈島のタイ類ツノゴケ類. Hikobia, 14: 403-411.
- So, M. L., 2001. *Plagiochila* (Hepaticae, Plagiochilaceae) in China. System. Bot. Monog., 60: 1-214.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Plagiochila vexans has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Plagiochila vexans* is listed as DD under criteria ③.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

③Distribution is biogeographically isolated (e.g., endemic species confined to a narrow range).

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest

Threat types:	Climate change
Law designation status for conservation	—

執筆者:	古木達郎（元千葉県立中央博物館）
Author:	Tatsuwo Furuki

公表年月：2025 年 3 月

オキナワヤスデゴケ

Frullania okinawensis Kamim.

カテゴリー判定結果

情報不足 (DD)

②

基準 A: —

基準 B: データ不足

基準 C: —

基準 D: —

基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

②生育地が局限されている。

【判断理由】

1961 年に採取された標本に基づき 1982 年に新種記載されているが、その後の記録がない。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

ヤスデゴケ科の日本固有種で、沖縄県伊江島のタイプ産地（城山）でのみ知られている。1961 年に採取された標本に基づき新種記載された以後に記録がなく、再調査が望まれる。

基礎情報

【形態】

植物体は乾燥標本で黄色から赤茶色、茎葉性で不規則に羽状に分枝する。茎は長さ 20～25 mm、幅は葉を含めて 1.3～1.5 mm、背片は円頭で卵形から円形、長さ幅共に 0.75～0.80 mm 程度、腹片はふつつ開出し、時に袋状になり嘴が発達する。腹葉は茎の 4.0～4.5 倍幅、円形～楕円形、全縁で先端が 1/4～1/6 まで 2 裂する。雌苞葉の背片は円頭で広卵型、腹片は広三角形で 3～4 の歯をもつ。花被は長楕円形で 3 稜。本種はカラヤスデゴケ *Frullania muscicola* に似るが、雌苞葉や花被の形態から区別できる (Kamimura 1982)。

【生活史】

雌雄異株と考えられているが、雄花序は未知。孢子体も未知のため詳しい生活史は不明。

【生育環境】

樹幹上に生育することが知られているが詳しい生育環境は不明。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林

国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

日本固有種で沖縄県伊江島の城山に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

1961 年に採取された標本に基づき新種記載された以後に記録がなく、再調査が望まれる。

【生育地の現況】

不明。

【個体数の現況】

不明。

存続を脅かす要因

不明。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

1961年に採取された標本に基づき1982年に新種記載。タイプ産地でのみ知られており、新種記載された以後に記録がなく、再調査が望まれる。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	オキナワヤスデゴケ	<i>Frullania okinawensis</i> Kamim.	DD
第4次 2019:	オキナワヤスデゴケ	<i>Frullania okinawensis</i> Kamim.	DD
第4次 2018:	オキナワヤスデゴケ	<i>Frullania okinawensis</i> Kamim.	DD
第4次 2017:	オキナワヤスデゴケ	<i>Frullania okinawensis</i> Kamim.	DD
第4次 2015:	オキナワヤスデゴケ	<i>Frullania okinawensis</i> Kamim.	DD
第4次:	オキナワヤスデゴケ	<i>Frullania okinawensis</i> Kamim.	DD
第3次:	オキナワヤスデゴケ	<i>Frullania okinawensis</i> Kamim.	DD
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

和歌山県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 沖縄県[情報不足(DD)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Kamimura, M., 1982. Some addenda to the *Frullania* of Japan and neighboring areas III. Misc. Bryol. Lichenol., 9: 87-93.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Frullania okinawensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Frullania okinawensis* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	片桐知之（高知大学）
Author:	Tomoyuki Katagiri

公表年月：2025 年 3 月

クラマゴケモドキ目 Porellales クサリゴケ科 Lejeuneaceae

ユーレンキララゴケ

Cololejeunea aequabilis (Sande Lac.) Schiffn.

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD)

②

基準 A: —

基準 B: データ不足

基準 C: —

基準 D: —

基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

②生育地が局限されている。

【判断理由】

1999 年に報告されたが西表島において 1993 年に採取された標本 1 点しか知られておらず生育現況が不明であり、再調査が望まれる。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

クサリゴケ科の茎葉性苔類で東南アジアに広く分布する。花被が倒心臓形で先端が耳状に大きく発達することなどが特徴。日本では 1999 年に報告されたが西表島において 1993 年に採取された標本 1 点しか知られておらず生育現況が不明であり、再調査が望まれる。

協力者: 山口富美夫（広島大学）・佐藤匠（広島大学）・西畑和輝（広島大学）・桐生賢太（広島大学）・井上侑哉（国立科学博物館）

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉性、茎は長さ 4~9 mm、幅は葉を含めて 1.1~1.5 mm、不規則に分枝する。背片は卵形で円頭、長さ 0.50~0.75 mm、縁はほぼ全縁から微鋸歯状。腹片は卵形から長楕円形、背片の約 1/3 長、第 1 歯は 2 細胞長で基部は 1 細胞で、第 2 歯は三角形、1~3 細胞長で基部は 1~2 細胞幅。腹葉はない。葉細胞には 1 個のパピラがある。花被は倒心臓形で先端が耳状に大きく発達する (Zhu et al. 1999)。

【生活史】

雌雄同株。無性芽はない。胞子体の成熟時期は 9 月頃。

【生育環境】

川沿いのシダ植物の生葉上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林, 河川上流域, 河川中流域

国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

西表島の浦内川からのみ報告されている。国外では中国、東南アジア、パプアニューギニア、ミクロネシアなどに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

1993 年に標本 1 点が採取されて以降生育が確認されておらず、再調査が望まれる。

【生育地の現況】

不明。

【個体数の現況】

不明。

存続を脅かす要因

不明。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

1993 年に標本 1 点が採取されて以降生育が確認されておらず、再調査が望まれる。西表島が分布の北限である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ユーレンキララゴケ	<i>Cololejeunea aequabilis</i> (Sande Lac.) Schiffn.	DD
第4次 2019:	ユーレンキララゴケ	<i>Cololejeunea aequabilis</i> (Sande Lac.) Schiffn.	DD
第4次 2018:	ユーレンキララゴケ	<i>Cololejeunea aequabilis</i> (Sande Lac.) Schiffn.	DD
第4次 2017:	ユーレンキララゴケ	<i>Cololejeunea aequabilis</i> (Sande Lac.) Schiffn.	DD
第4次 2015:	ユーレンキララゴケ	<i>Cololejeunea yulensis</i> (Steph.) Benedix	DD
第4次:	ユーレンキララゴケ	<i>Cololejeunea yulensis</i> (Steph.) Benedix	DD
第3次:	ユーレンキララゴケ	<i>Cololejeunea yulensis</i> (Steph.) Benedix	DD
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

沖縄県[情報不足（DD）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Zhu, R. -L., D. G. Long and T. Yamaguchi, 1999. *Cololejeunea yulensis* (Steph.) Benedix and *Rhaphidolejeunea spicata* (Steph.) Grolle new to Japan, with taxonomic notes on *Cololejeunea obliqua* (Nees & Mont.) Schiffn. J. Bryol., 21: 293-297.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Cololejeunea aequabilis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Cololejeunea aequabilis* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest, Upper river basin, Middle river basin

Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	片桐知之（高知大学）
Author:	Tomoyuki Katagiri

公表年月：2025 年 3 月

ヤエヤマサンカクゴケ

Drepanolejeunea spicata (Steph.) Grolle & R.L.Zhu

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD)

②

基準 A: —

基準 B: データ不足

基準 C: —

基準 D: —

基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

②生育地が局限されている。

【判断理由】

1999 年に報告されたが西表島において 1993 年に採取された標本 2 点しか知られておらず生育現況が不明であり、再調査が望まれる。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

クサリゴケ科の茎葉性苔類で東南アジアに広く分布する。背片の基部に 2 個の油体細胞があることや腹葉の長い裂片が特徴。日本では 1999 年に報告されたが西表島において 1993 年に採取された標本 2 点しか知られておらず生育現況が不明であり、再調査が望まれる。

協力者: 山口富美夫 (広島大学)・佐藤匠 (広島大学)・西畑和輝 (広島大学)・桐生賢太 (広島大学)

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉性、茎は長さ 5~20 mm、幅は葉を含めて 0.6~0.8 mm、不規則に分枝する。葉背片は卵形で円頭、0.32~0.42 mm 長、縁は全縁から微鋸歯状。腹片は卵形、背片の約 1/4~1/3 長、第 1 歯はくの字形の細胞からなり、第 2 歯は無い。腹葉は広く 2 裂してほぼ水平に広がり、裂片は 6~10 細胞長。葉の基部に 2 個の油体細胞がある。国内では雌株は知られていない (Zhu et al. 1999)。

【生活史】

雌雄異株。無性芽はない。雄株しか発見されておらず詳しい生活史は不明。

【生育環境】

溪流沿いのシダ植物の生葉上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林, 河川上流域, 河川中流域

国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

沖縄県西表島の浦内川からのみ報告されている。国外ではインド北部、中国、東南アジアなどに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

1993 年に標本 2 点が採取されて以降生育が確認されておらず、再調査が望まれる。

【生育地の現況】

不明。

【個体数の現況】

不明。

存続を脅かす要因

不明。

要因の区分：	(過去)	不明, 分布・産地局限
	(現在)	不明, 分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ヤエヤマサンカクゴケ	<i>Drepanolejeunea spicata</i> (Steph.) Grolle & R.L.Zhu	DD
第4次 2019:	ヤエヤマサンカクゴケ	<i>Drepanolejeunea spicata</i> (Steph.) Grolle & R.L.Zhu	DD
第4次 2018:	ヤエヤマサンカクゴケ	<i>Drepanolejeunea spicata</i> (Steph.) Grolle & R.L.Zhu	DD
第4次 2017:	ヤエヤマサンカクゴケ	<i>Drepanolejeunea spicata</i> (Steph.) Grolle & R.L.Zhu	DD
第4次 2015:	ヤエヤマサンカクゴケ	<i>Drepanolejeunea spicata</i> (Steph.) Grolle & R.L.Zhu	DD
第4次:	ヤエヤマサンカクゴケ	<i>Drepanolejeunea spicata</i> (Steph.) Grolle & R.L.Zhu	DD
第3次:	ヤエヤマサンカクゴケ	<i>Drepanolejeunea spicata</i> (Steph.) Grolle & R.L.Zhu	DD
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

沖縄県[情報不足（DD）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Zhu, R. -L., D. G. Long and T. Yamaguchi, 1999. *Cololejeunea yulensis* (Steph.) Benedix and *Rhaphidolejeunea spicata* (Steph.) Grolle new to Japan, with taxonomic notes on *Cololejeunea obliqua* (Nees & Mont.) Schiffn. J. Bryol., 21: 293-297.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Drepanolejeunea spicata has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Drepanolejeunea spicata* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due

to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest, Upper river basin, Middle river basin
Threat types:	Unknown, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 片桐知之（高知大学）

Author: Tomoyuki Katagiri

公表年月：2025 年 3 月

オノクサリゴケ

Lejeunea syoshii Inoue

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD) ②				
基準 A: —	基準 B: データ不足	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。 ②生育地が局限されている。 【判断理由】 小笠原諸島の母島で最近生育が確認されている。母島以外では近年の生育地の状況が不明であるため、再調査が望まれる。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

クサリゴケ科の日本固有種で奄美大島、徳之島、沖縄島、小笠原諸島（母島）に分布する。日陰の湿岩上で他の蘚苔類と共に生育するが、詳しい生活史などは不明。母島以外では近年の生育地の状況が不明であるため、再調査が望まれる。

協力者： 山口富美夫（広島大学）

基礎情報

【形態】

植物体は茎葉性で淡緑色、7~10 mm 長、0.70~0.85 mm 幅、不規則に分枝する。葉背片は卵型で先端が鋭形、0.35~0.45 mm 長、0.25~0.32 mm 幅。腹片は広卵形から三角形で顕著に膨らみ、0.10~0.14 mm 長、0.09~0.11 mm 幅。花被は長橢円形、5 稜、短枝上に頂生する。葉背片の先端が鋭く尖ることや花被が長橢円形で短枝に頂生することなどから国内のクサリゴケ属の他種と識別される (Inoue 1977)。

【生活史】

雌雄同株。孢子体は未知。詳しい生活史は不明。

【生育環境】

やや日陰の場所で浸水しない湿岩上に他の蘚苔類と共に生育する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林, 河川中流域

国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

日本固有種で奄美大島、徳之島、沖縄島、小笠原諸島（母島）に分布する。奄美大島と徳之島の植物体を基に新種記載され、その後沖縄島と母島からも報告された。

現在の生育状況

【分布域の現況】

母島以外では近年の生育地の状況が不明であるため再調査が望まれる。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

不明。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	オノクサリゴケ	<i>Lejeunea syoshii</i> Inoue	DD
第4次 2019:	オノクサリゴケ	<i>Lejeunea syoshii</i> Inoue	DD
第4次 2018:	オノクサリゴケ	<i>Lejeunea syoshii</i> Inoue	DD
第4次 2017:	オノクサリゴケ	<i>Lejeunea syoshii</i> Inoue	DD
第4次 2015:	オノクサリゴケ	<i>Lejeunea syoshii</i> Inoue	DD
第4次:	オノクサリゴケ	<i>Lejeunea syoshii</i> Inoue	DD
第3次:	オノクサリゴケ	<i>Lejeunea syoshii</i> Inoue	DD
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Inoue, H., 1977. A remarkable new species of the genus *Lejeunea* Libert from Southern Japan. Bull. Nat. Sci. Mus. Tokyo Ser. B, 3: 143-148.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Lejeunea syoshii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Lejeunea syoshii* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area _Low-altitude area】 Forest, Middle river basin
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	片桐知之（高知大学）
Author:	Tomoyuki Katagiri

公表年月：2025 年 3 月

トガリバクラマゴケモドキ

Porella acutifolia (Lehm. & Lindenb.) Trevis. subsp. *acutifolia*

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD)

②

基準 A: —

基準 B: データ不足

基準 C: —

基準 D: —

基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

②生育地が局限されている。

【判断理由】

Hattori (1976, 1978) により沖縄島から報告されているが詳細な生育場所が不明であり、この報告の基になった標本に関しても所在が確認できていない。世界ではインドから東南アジア、ハワイまで分布。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

日本では 1939 年に沖縄島の与那覇岳で採取された標本を基に 1976 年に報告されているが、詳細な生育場所は不明であり、日本産の植物体に関する詳しい形態の情報も乏しい。これまでの調査でも未発見であるため再調査が必要。世界ではインドから東南アジア、ハワイまで分布。

基礎情報

【形態】

日本産の植物体に関する詳しい形態の情報は乏しい（Hattori 1976）。以下の形態の記述は Hattori（1969, 1970）によるインド産のタイプ標本に基づく。植物体は乾燥標本で茶色～黄茶色、大型で茎は長さ約 5~10 cm、羽状に分枝する。葉背片は卵形～長橢円形、2.0~2.5 mm 長、1.2~1.5 mm 幅、先端は鋭形で尖り、不規則な 1~5 個の歯をもつ、キールは短い。腹片は披針形で鈍頭から亜切形、0.8~0.9 mm 長、腹縁基部は長く下延し、多少ひだ状になる。腹葉は狭卵型、鈍頭から切形で約 1.0~1.2 mm 長、基部の幅は 0.7~0.9 mm、基部は長く下延する。本亜種は別亜種であるトサクラマゴケモドキ *Porella acutifolia* subsp. *tosana* に似るが、葉背片の先端部が鋭形で歯の数が少ないことなどから区別される（Hattori 1978）。

【生活史】

不明。

【生育環境】

不明。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林

国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

日本では 1939 年に沖縄島の与那覇岳で採取された標本を基に 1976 年に報告されているが、詳細な分布・生育場所は不明。国外ではインド、中国、マレーシア、フィリピン、インドネシア、ハワイなどに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

1970 年代の報告以来再発見されていない。

【生育地の現況】

生育地の詳細が不明であり、これまでの調査でも未発見であるため再調査が必要。

【個体数の現況】

不明。

存続を脅かす要因

不明。

要因の区分：	(過去)	不明, 分布・産地局限
	(現在)	不明, 分布・産地局限

特記事項

Hattori (1976, 1978) によって 1939 年に沖縄島の与那覇岳で採取された標本を基に報告されている。詳細な生育場所が不明であり、この報告の基になった標本に関しても所在が確認できていない。沖縄島が分布の北限でもあり、再調査が望まれる。Furuki (2000) により和名が与えられている。

旧レッドリストカテゴリと掲載名

第4次 2020:	トガリバクラマゴケモドキ	<i>Porella acutifolia</i> (Lehm. & Lindenb.) Trevis. subsp. <i>acutifolia</i>	DD
第4次 2019:	トガリバクラマゴケモドキ	<i>Porella acutifolia</i> (Lehm. & Lindenb.) Trevis. var. <i>acutifolia</i>	DD
第4次 2018:	トガリバクラマゴケモドキ	<i>Porella acutifolia</i> (Lehm. & Lindenb.) Trevis. var. <i>acutifolia</i>	DD
第4次 2017:	トガリバクラマゴケモドキ	<i>Porella acutifolia</i> (Lehm. & Lindenb.) Trevis. var. <i>acutifolia</i>	DD
第4次 2015:	トガリバクラマゴケモドキ	<i>Porella acutifolia</i> (Lehm. & Lindenb.) Trevis. var. <i>acutifolia</i>	DD
第4次:	トガリバクラマゴケモドキ	<i>Porella acutifolia</i> (Lehm. & Lindenb.) Trevis. var. <i>acutifolia</i>	DD
第3次:	トガリバクラマゴケモドキ	<i>Porella acutifolia</i> (Lehm. & Lindenb.) Trevis. var. <i>acutifolia</i>	DD
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

沖縄県[情報不足（DD）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Furuki, T., 2000. Taxonomic status of *Porella tenera* M. Hara (Hepaticae) described from Shikoku, Japan. 蘚苔類研究, 7: 341-342.
- Hattori, S., 1969. Studies on the Asiatic species of the genus *Porella* (Hepaticae). II. J. Hattori Bot. Lab., 32: 319-359.
- Hattori, S., 1970. Studies on the Asiatic species of the genus *Porella* (Hepaticae). III. J. Hattori Bot. Lab., 33: 41-87.
- Hattori, S., 1976. Studies on the Asiatic species of the genus *Porella* (Hepaticae). VI. J. Hattori Bot. Lab., 40: 121-138.
- Hattori, S., 1978. Studies on the Asiatic species of the genus *Porella* (Hepaticae). VII. A synopsis of Asiatic Porellaceae. J. Hattori Bot. Lab., 44: 91-120.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Porella acutifolia subsp. *acutifolia* has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Porella acutifolia* subsp. *acutifolia* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Unknown, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 片桐知之 (高知大学)
Author: Tomoyuki Katagiri

公表年月: 2025 年 3 月

スギゴケ目 Polytrichales スギゴケ科 Polytrichaceae

オキナスギゴケ

Polytrichum juniperinum Hedw. subsp. *strictum* (Brid.) Nyl. & Saelan

カテゴリ判定結果 情報不足 (DD) ③				
基準 A: —	基準 B: データ不足	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。				
③生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。				
【判断理由】				
限られた高山の湿地に生育する。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

オキナスギゴケは両半球の冷涼な地域に分布する直立性の蘚類。国内では北海道と本州中部の高地に数か所の生育地が知られている。生育地の1か所で確認されたが、他の現況については不明。

協力者： 横山正弘（日本蘚苔類学会）

基礎情報

【形態】

植物体は直立し、茎は長さ 3-8 cm。茎のほとんどがフェルト状の灰色の仮根で覆われる。スギゴケの亜種で、基本亜種のスギゴケ (*Polytrichum juniperinum* Hedw. subsp. *juniperinum*) とは、フェルト状の仮根以外に、葉が短く (3-5.5 mm、基本亜種は 4-9 mm)、乾燥時には茎に強く接着すること、蒴が小さいこと (頸部を除いた長さ 2-2.5 mm、基本亜種は 3.5-6 mm) で区別される。

【生活史】

雌雄異株。

【生育環境】

亜高山帯の林床や高層湿原などに生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地 中標高地】湿地・湿原・細流

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では北海道（大雪山）と本州中部の高地（日光、立山、白馬岳）に分布する。国外では、ヨーロッパ、シベリア、中国、韓国、北米、グリーンランド、パタゴニア、南極に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

2019 年の調査では北海道大雪山で確認されたが、他の生育地の現況は資料がなく不明。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

湿原の自然遷移による乾燥化や遊歩道などの整備による環境の変化が懸念される。

要因の区分：	(過去)	交通インフラ建設, 管理放棄, 遷移進行・植生変化/自然遷移
	(現在)	交通インフラ建設, 管理放棄, 遷移進行・植生変化/自然遷移

特記事項

Osada (1966) はスギゴケの変種 *Polytrichum juniperinum* var. *gracilius* として扱った

が、独立種とする考えもある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	オキナスギゴケ	<i>Polytrichum juniperinum</i> Hedw. ssp. <i>strictum</i> (Brid.) Nyl. & Saelan	CR+EN
第4次 2019:	オキナスギゴケ	<i>Polytrichum juniperinum</i> Hedw. ssp. <i>strictum</i> (Brid.) Nyl. & Saelan	CR+EN
第4次 2018:	オキナスギゴケ	<i>Polytrichum juniperinum</i> Hedw. ssp. <i>strictum</i> (Brid.) Nyl. & Saelan	CR+EN
第4次 2017:	オキナスギゴケ	<i>Polytrichum juniperinum</i> Hedw. ssp. <i>strictum</i> (Brid.) Nyl. & Saelan	CR+EN
第4次 2015:	オキナスギゴケ	<i>Polytrichum juniperinum</i> Hedw. ssp. <i>strictum</i> (Brid.) Nyl. & Saelan	CR+EN
第4次:	オキナスギゴケ	<i>Polytrichum juniperinum</i> Hedw. ssp. <i>strictum</i> (Brid.) Nyl. & Saelan	CR+EN
第3次:	オキナスギゴケ	<i>Polytrichum juniperinum</i> ssp. <i>strictum</i> (Brid.) Nyl. & Saelan	CR+EN
第2次:	オキナスギゴケ (新称)	<i>Polytrichum juniperinum</i> ssp. <i>strictum</i> (Brid.) Nyl. et Sael.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

宮城県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 福島県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 長野県[絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 樋口正信, 2015. オキナスギゴケ. 環境省（編）, レッドデータブック 2014 ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー 9 植物Ⅱ（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）. p. 78. ぎょうせい, 東京.
- Osada, T., 1966. Japanese Polytrichaceae. II. The genera *Polytrichum*, *Oligotrichum*, *Bartramopsis* and *Atrichum* and phytogeography. J. Hattori Bot. Lab., 29: 1-52.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Polytrichum juniperinum subsp. *strictum* has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Polytrichum juniperinum* subsp. *strictum* is listed as DD under criteria ③.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

③Distribution is biogeographically isolated (e.g., endemic species confined to a narrow range).

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area Mid-altitude area】 Wetland/Marsh/Stream
Threat types:	Transportation infrastructure construction, Abandonment of management, Successional progression/Vegetation change/Natural succession
Law designation status for conservation	—

執筆者: 樋口正信 (国立科学博物館)
Author: Masanobu Higuchi

公表年月: 2025 年 3 月

クマノゴケ

Diphyscium lorifolium (Cardot) Magombo

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD) ④				
基準 A: —	基準 B: データ不足	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。				
④生活史の一部又は全部で特殊な環境条件を必要としている。				
【判断理由】				
比較的希少であり、谷や沢の流水付近の湿岩上という不安定な立地に生育する。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

クマノゴケは国内では本州、四国、九州、国外では朝鮮半島、中国、カシミールに分布する小形の直立性の蘚類。谷や沢の流水付近の湿岩上に生育するため、水源の枯渇や増水などの影響を受けやすい。

協力者: 古木達郎（元千葉県立中央博物館）・木口博史（岡山コケの会）・林正典（日本蘚苔類学会）・坪田博美（広島大学）・土永浩史（日本蘚苔類学会）

基礎情報

【形態】

植物体は小形で、茎は分枝せず、葉を密につける。葉は細長く、長さ 6-12 mm、中部以上は中肋のみになる。中肋は太く、幅広い。葉は乾いてもあまり縮れない。蒴は非相称の卵形で、蒴柄は短い。

【生活史】

胞子体の記録は少ない。

【生育環境】

沢や谷の流水付近の湿岩上に生える。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】河川中流域

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では本州、四国、九州に、国外では朝鮮半島、中国、カシミールに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリストの調査では、東京都青梅市、和歌山県新宮市、広島県八幡高原、福岡県英彦山などで少量の生育が確認された。広島県臥竜山では生育が確認されなかった。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

河川工事や増水による生育地の消失

要因の区分：	(過去)	河川開発
	(現在)	河川開発

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリと掲載名

第4次 2020:	クマノゴケ	<i>Diphyscium lorifolium</i> (Cardot) Magombo	NT
第4次 2019:	クマノゴケ	<i>Diphyscium lorifolium</i> (Cardot) Magombo	NT
第4次 2018:	クマノゴケ	<i>Diphyscium lorifolium</i> (Cardot) Magombo	NT
第4次 2017:	クマノゴケ	<i>Diphyscium lorifolium</i> (Cardot) Magombo	NT
第4次 2015:	クマノゴケ	<i>Diphyscium lorifolium</i> (Cardot) Magombo [=	NT
		<i>Theriotia lorifolia</i> Cardot]	
第4次:	クマノゴケ	<i>Diphyscium lorifolium</i> (Cardot) Magombo [=	NT
		<i>Theriotia lorifolia</i> Cardot]	
第3次:	クマノゴケ	<i>Diphyscium lorifolium</i> (Cardot) Magombo (=	NT
		<i>Theriotia lorifolia</i> Cardot)	
第2次:	クマノゴケ	<i>Theriotia lorifolia</i> Card.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

宮城県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 秋田県[絶滅危惧種Ⅰ類(CR+EN)] 福島県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 茨城県[絶滅危惧Ⅱ類] 栃木県[要注目] 埼玉県[絶滅危惧Ⅰ類(CE)] 神奈川県[絶滅危惧Ⅱ類(VU)] 新潟県[絶滅危惧(EN+VU)] 愛知県[絶滅危惧Ⅱ類(VU)] 三重県[準絶滅危惧(NT)] 京都府[準絶滅危惧種] 大阪府[NT] 兵庫県[Cランク] 鳥取県[準絶滅危惧(NT)] 島根県[絶滅危惧Ⅱ類(VU)] 岡山県[準絶滅危惧] 広島県[絶滅危惧Ⅱ類(VU)] 山口県[準絶滅危惧(NT)] 愛媛県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 福岡県[準絶滅危惧] 熊本県[準絶滅危惧(NT)] 大分県[絶滅危惧ⅠB類(EN)] 宮崎県[準絶滅危惧(NT-r)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 樋口正信, 2015. クマノゴケ. 環境省(編), レッドデータブック 2014 ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー 9 植物Ⅱ(蘚苔類・藻類・地衣類・菌類), p. 252. ぎょうせい, 東京.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Diphyscium lorifolium has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Diphyscium lorifolium* is listed as DD under criteria ④.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

④Specialized habitats are required at some or all stages of its life history

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Middle river basin
Threat types:	River development
Law designation status for conservation	—



執筆者:	樋口正信（国立科学博物館）
Author:	Masanobu Higuchi

公表年月：2025 年 3 月

ヤリカツギ目 Encalyptales ヤリカツギ科 Encalyptaceae

シロウマヤリカツギ

Encalypta alpina Sm.

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD)

③

基準 A: —	基準 B: データ不足	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。				
③生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。				
【判断理由】				
本種は高山帯の岩場の岩隙の土上に生育する種であり、本州の数か所に孤立して分布している。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

シロウマヤリカツギは国内では本州中部の高山に、国外ではヨーロッパ、シベリア、中国、北米に分布する直立性の蘚類。岩隙の土上に生育する。第5次レッドリストの調査では既知産地1か所で生育が確認され、新たな生育地が1か所確認された。

協力者： 山口富美夫（広島大学）・佐藤匠（広島大学）・桐生賢太（広島大学）

基礎情報

【形態】

植物体は直立し、茎は長さ 2 cm 以上。茎は分枝せず、下部は仮根が密生する。葉は卵形～卵状披針形、長さ 1.7-2.8 mm、先端は尖る。中肋は 1 本で長く、先端から短く突出する。葉身細胞は六角形～横長の六角形で、C 形のパピラが数個ある。本種はヤリカツギ属の他種から、藓帽が大きく、蒴の基部よりだいぶ下方まで覆うこと、蒴齒を欠くこと、孢子の表面に大きなパピラがまばらにあることなどで区別される。

【生活史】

雌雄同株（異苞）。

【生育環境】

高山帯の岩場の岩隙の土上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地】裸地

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では本州中部に分布し、国外ではヨーロッパ、シベリア、中国、北米に分布する。国内では山梨県北岳、静岡県悪沢岳、長野県仙丈ヶ岳から報告されている。

現在の生育状況

【分布域の現況】

2016 年の調査では山梨県北岳、静岡県悪沢岳で生育が確認された。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

産地が局限し、絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	シロウマヤリカツギ	<i>Encalypta alpina</i> Sm.	CR+EN
第4次 2019:	シロウマヤリカツギ	<i>Encalypta alpina</i> Sm.	CR+EN
第4次 2018:	シロウマヤリカツギ	<i>Encalypta alpina</i> Sm.	CR+EN
第4次 2017:	シロウマヤリカツギ	<i>Encalypta alpina</i> Sm.	CR+EN
第4次 2015:	シロウマヤリカツギ	<i>Encalypta alpina</i> Sm.	CR+EN
第4次:	シロウマヤリカツギ	<i>Encalypta alpina</i> Sm.	CR+EN
第3次:	シロウマヤリカツギ	<i>Encalypta alpina</i> Sm.	CR+EN
第2次:	シロウマヤリカツギ	<i>Encalypta alpina</i> Sm.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

長野県[絶滅危惧 I 類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 樋口正信, 2015. シロウマヤリカツギ. 環境省（編）, レッドデータブック 2014 ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー 9 植物 II（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）. p. 32. ぎょうせい, 東京.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Encalypta alpina has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Encalypta alpina* is listed as DD under criteria ③.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

③Distribution is biogeographically isolated (e.g., endemic species confined to a narrow range).

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area】 Bare area
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	樋口正信（国立科学博物館）
Author:	Masanobu Higuchi

公表年月：2025 年 3 月

ヤリカツギ目 Encalyptales ヤリカツギ科 Encalyptaceae

ミヤマヤリカツギ

Encalypta rhaptocarpa Schwägr.

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD)

③

基準 A: —

基準 B: データ不足

基準 C: —

基準 D: —

基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

③生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。

【判断理由】

本種は高山帯の岩場の岩隙の土上に生育する種であり、山梨県の2か所（北岳、富士山）に孤立して分布している。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

ミヤマヤリカツギは国内では本州中部の高山に、国外では北半球に広く分布する直立性の蘚類。岩隙の土上に生育する。

協力者： 山口富美夫（広島大学）・佐藤匠（広島大学）・桐生賢太（広島大学）

基礎情報

【形態】

植物体は直立し、茎は長さ 1-3 cm。葉は卵形～長楕円形、長さ 2.5 mm 以下、先端は尖る。中肋は先端から長く突出する。葉身細胞は六角形、多くの先の分かれたパピラがある。蒴は乾くと縦にみぞができる。本種はヤリカツギ属の他種から、葉の先端が尖り、中肋は先端から長く突出すること、蒴には縦にみぞがあること、蒴歯を持つことで区別される。

【生活史】

雌雄同株。

【生育環境】

高山帯の岩場の岩隙の土上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地】岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では本州中部に、国外では北半球に広く分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

2016 年の調査では山梨県北岳で生育が確認された。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

産地が局限し、絶滅が危惧される。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ミヤマヤリカツギ	<i>Encalypta rhaptocarpa</i> Schwägr.	CR+EN
第4次 2019:	ミヤマヤリカツギ	<i>Encalypta rhaptocarpa</i> Schwägr.	CR+EN
第4次 2018:	ミヤマヤリカツギ	<i>Encalypta rhaptocarpa</i> Schwägr.	CR+EN
第4次 2017:	ミヤマヤリカツギ	<i>Encalypta rhaptocarpa</i> Schwägr.	CR+EN
第4次 2015:	ミヤマヤリカツギ	<i>Encalypta rhaptocarpa</i> Schwägr. [= <i>E. vulgaris</i> var. <i>rhaptocarpa</i> (Schwägr.) E.Lawton]	CR+EN
第4次:	ミヤマヤリカツギ	<i>Encalypta rhaptocarpa</i> Schwägr. [= <i>E. vulgaris</i> var. <i>rhaptocarpa</i> (Schwägr.) E.Lawton]	CR+EN
第3次:	ミヤマヤリカツギ	<i>Encalypta rhaptocarpa</i> Schwägr. [= <i>E. vulgaris</i> var. <i>rhaptocarpa</i> (Schwägr.) E.Lawton]	CR+EN
第2次:	ミヤマヤリカツギ	<i>Encalypta rhabdocarpa</i> Schwaegr. Syn. <i>E. vulgaris</i> var. <i>rhabdocarpa</i> (Schwaegr.) Lawton	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

埼玉県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 長野県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 樋口正信, 2015. ミヤマヤリカツギ. 環境省（編）, レッドデータブック 2014 ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー 9 植物Ⅱ（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）. p. 34. ぎょうせい, 東京.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Encalypta rhaptocarpa has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Encalypta rhaptocarpa* is listed as DD under criteria ③.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

③Distribution is biogeographically isolated (e.g., endemic species confined to a narrow range).

Habitat types: 【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area】 Cliff/Talus area (e.g.

	limestone area)
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	樋口正信（国立科学博物館）
Author:	Masanobu Higuchi

公表年月：2025 年 3 月

クサスギゴケ目 Timmiales クサスギゴケ科 Timmiaceae

ミヤマクサスギゴケ

Timmia megapolitana Hedw.

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD)

②

基準 A: —

基準 B: データ不足

基準 C: —

基準 D: データ不足

基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

②生育地が局限されている。

【判断理由】

北海道から中部地方にかけての石灰岩地に点在している。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

ミヤマクサスギゴケは、北半球北方域に分布する蘚類で、外観はタチゴケ属に似る。やや湿った石灰岩やそれらを覆った腐植土上に生育する。北海道、埼玉県秩父市と東京都奥多摩町の周辺、長野県南アルプス周辺から記録がある。第5次レッドリストのための調査では秩父と長野県大鹿村で生育が確認された。生育地付近の森林伐採や石灰採掘、ダム建設、登山道の開発や崩落の影響が懸念される。

協力者: 井上侑哉（国立科学博物館）・古木達郎（元千葉県立中央博物館）・木口博史（岡山コケの会）

基礎情報

【形態】

外観はタチゴケ属 *Atrichum* に似て、植物体は頑丈で、茎は高さ 6~7 cm と大きい。葉は披針形、長さ約 10 mm。基部は鞘状になり、葉縁には下部まで 2~3 細胞からなる大きな歯がある。中肋は太く、葉先に届く。葉身細胞は方形~六角形。葉鞘部の細胞は長い矩形、透明、薄壁、2~5 個の丸い乳頭が縦に並ぶが、最下部の細胞は平滑。同属のラクヨウクサスギゴケ *Timmia norvegica* は葉身細胞に高い円筒形のマミラを持つことと、葉が基部から落ちやすいことなどで本種から区別できる。

【生活史】

雌雄同株。

【生育環境】

やや湿った石灰岩やそれらを覆った腐植土上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では北海道と本州に分布しており、国外では中国、極東ロシア、ヨーロッパと、北アメリカに分布している。

現在の生育状況

【分布域の現況】

北海道宗谷・上川、埼玉県秩父市と東京都奥多摩町、長野県南アルプス周辺（長谷村（現、伊那市）塩沢、大鹿村燕岩、塩川）、から記録がある（Tanaka & Tateishi, 2002; 田中, 2012）。ほかに、北海道釧路市で 1999 年に撮られた写真が岩月ほか（2001）に掲載されている。第 5 次レッドリストのための調査では 2017 年に埼玉県秩父市大血川で、2018 年に長野県大鹿村燕岩で生育が確認されている。

【生育地の現況】

石灰岩地のややしめった石灰岩上に点在する。埼玉県秩父市大血川西谷では洪水時にも直接影響を受けないような川の中の砂地に 2 群落が確認された。いずれの生育地においても生育環境の詳細は不明。

【個体数の現況】

2017 年の調査では、埼玉県秩父市大血川西谷で 20×40 cm、および 5×5 cm の群落を確認された。2018 年の調査では、長野県大鹿村燕岩で 15~30 cm 四方の群落が 5 か所以上確認された。

存続を脅かす要因

生育地付近の森林伐採や、石灰採掘、ダム建設、登山道の開発や崩落の影響が懸念される。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 石灰採掘, ダム・河川工作物建設, その他(遊歩道整備)
	(現在)	森林伐採, 石灰採掘, ダム・河川工作物建設, その他(遊歩道整備)

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ミヤマクススギゴケ	<i>Timmia megapolitana</i> Hedw.	VU
第4次 2019:	ミヤマクススギゴケ	<i>Timmia megapolitana</i> Hedw.	VU
第4次 2018:	ミヤマクススギゴケ	<i>Timmia megapolitana</i> Hedw.	VU
第4次 2017:	ミヤマクススギゴケ	<i>Timmia megapolitana</i> Hedw.	VU
第4次 2015:	ミヤマクススギゴケ	<i>Timmia megapolitana</i> Hedw.	VU
第4次:	ミヤマクススギゴケ	<i>Timmia megapolitana</i> Hedw.	VU
第3次:	ミヤマクススギゴケ	<i>Timmia megapolitana</i> Hedw.	VU
第2次:	ミヤマクススギゴケ	<i>Timmia megapolitana</i> Hedw.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況(令和4年度末時点)

埼玉県[絶滅危惧Ⅰ類(CE)] 長野県[絶滅危惧Ⅱ類(VU)]

保護に係る法令指定状況(令和4年度末時点)

指定なし

参考文献

- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- 神田啓史, 2000. ミヤマクススギゴケ. 環境庁(編), 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—9. 植物Ⅱ(維管束植物以外). p. 57. 自然環境研究センター, 東京.
- Noguchi, A., 1989. Illustrated Moss Flora of Japan. Part 3. pp. 493-742, Hattori Bot. Lab., Nichinan.
- Tanaka, A. and Y. Tateishi, 2002. *Timmia norvegica* var. *norvegica* (Timmiaceae, Bryopsida) new to Japan. Bryol. Res., 8: 97-101.

- 田中敦司, 2012. 日本の石灰岩性藓類. Naturalistae, 16: 47-82.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Timmia megapolitana has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Timmia megapolitana* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limestone mining, Dam/River structures construction, Other (遊歩道整備)
Law designation status for conservation	—

執筆者: 有川智己 (慶應義塾大学)

Author: Tomotsugu Arikawa

公表年月: 2025 年 3 月

ギボウシゴケ目 Grimmiales ギボウシゴケ科 Grimmiaceae

ミギワギボウシゴケ

Grimmia mollis Bruch & Schimp.

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD) ②				
基準 A: —	基準 B: データ不足	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。 ②生育地が局限されている。 【判断理由】 生育地が一地点。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

ミギワギボウシゴケは国内では長野県に、国外ではヨーロッパ、シベリア、北米に分布する直立性の蘚類。高山の水際の岩上に生育する。

基礎情報

【形態】

植物体は直立し、茎は長さ 1-2 cm。茎はほとんど分枝せず、長卵形の葉を密につける。葉は長さ 1.25-1.75 mm で、先端は鈍頭になる。葉身細胞は大型、薄壁で、平滑である。ギボウシゴケ属の他の種から、蒴が葉から抜き出ること、口環が分化しないことで区別される。

【生活史】

雌雄異株。

【生育環境】

北アルプス穂高岳の高山帯、標高約 2,500 m の雪渓沿いの水際の岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地】裸地

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では長野県穂高岳に、国外ではヨーロッパ、シベリア、北米に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

国内の生育地は一地点で、現在の生育状況は不明。

【生育地の現況】

資料が少なく不明。

【個体数の現況】

資料が少なく不明。

存続を脅かす要因

産地が局限し、絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

本種は桜井（1954）によって、本州中部から報告されたが詳細は不明であった。1986 年になって、岩月ほか（1986）によって日本の生育が確認された。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ミギワギボウシゴケ	<i>Grimmia mollis</i> Bruch & Schimp.	CR+EN
第4次 2019:	ミギワギボウシゴケ	<i>Grimmia mollis</i> Bruch & Schimp.	CR+EN
第4次 2018:	ミギワギボウシゴケ	<i>Grimmia mollis</i> Bruch & Schimp.	CR+EN
第4次 2017:	ミギワギボウシゴケ	<i>Grimmia mollis</i> Bruch & Schimp.	CR+EN
第4次 2015:	ミギワギボウシゴケ	<i>Grimmia mollis</i> Bruch & Schimp.	CR+EN
第4次:	ミギワギボウシゴケ	<i>Grimmia mollis</i> Bruch & Schimp.	CR+EN
第3次:	ミギワギボウシゴケ	<i>Grimmia mollis</i> Bruch & Schimp.	CR+EN
第2次:	ミギワギボウシゴケ	<i>Grimmia mollis</i> Bruch et Schimp.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

長野県[絶滅危惧 I 類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 樋口正信, 2015. ミギワギボウシゴケ. 環境省（編）, レッドデータブック 2014 ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー 9 植物 II（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）. p. 41. ぎょうせい, 東京.
- 岩月善之助・木口博史・出口博則, 1986. ミギワギボウシゴケ（*Grimmia mollis* Bruch et Schimp.）は日本にある. *Hikobia*, 9: 485-489.
- 桜井久一, 1954. 日本の蘚類. 247pp., 70pls. 岩波書店, 東京.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Grimmia mollis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Grimmia mollis* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area】 Bare area

Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	樋口正信（国立科学博物館）
Author:	Masanobu Higuchi

公表年月：2025 年 3 月

ノグチゴケ

Brachydontium noguchii Z.Iwats., Tad.Suzuki & Kiguchi

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD) ③

基準 A: —	基準 B: データ不足	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

③生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。

【判断理由】

本種は火山性の高山の土が薄く堆積した岩上、岩の割れ目などに生育する種であり、北海道と本州中部の高山に孤立して分布している日本固有種である。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

ノグチゴケは日本固有で、北海道、栃木県、長野県に分布する微小な直立性の蘚類。高山の岩上に生育する。

基礎情報

【形態】

植物体は直立し、茎は長さ 1.4-2.5 mm。茎はほとんど分枝せず、長さ 1.25-1.9 mm の線形の葉を密につける。蒴は葉の間に隠れる。キヌシッポゴケモドキ属の種はとても小さい。同属の他種からは、茎の中心束が分化しないこと、蒴柄が短いこと（0.3-0.4 mm）、蒴のふたが円錐状であることなどで区別される。

【生活史】

雌雄同株。

【生育環境】

北海道の羅臼岳、栃木県の白根山、長野県の菅平、八ヶ岳、御岳など、火山性の高山の土が薄く堆積した岩上、岩の割れ目などに生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】裸地

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

日本固有で、北海道、栃木県、長野県に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

詳細については不明。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

産地が局限し、個体群の数もサイズも小さく、絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

従来、スガダイラゴケ (*Brachydontium olympicum*) と認識されてきた種は実体が異なるとして、2004 年に新種ノグチゴケとして記載された。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ノグチゴケ	<i>Brachydontium noguchii</i> Z.Iwats., Tad.Suzuki & Kiguchi	CR+EN
第4次 2019:	ノグチゴケ	<i>Brachydontium noguchii</i> Z.Iwats., Tad.Suzuki & Kiguchi	CR+EN
第4次 2018:	ノグチゴケ	<i>Brachydontium noguchii</i> Z.Iwats., Tad.Suzuki & Kiguchi	CR+EN
第4次 2017:	ノグチゴケ	<i>Brachydontium noguchii</i> Z.Iwats., Tad.Suzuki & Kiguchi	CR+EN
第4次 2015:	ノグチゴケ	<i>Brachydontium noguchii</i> Z.Iwats., Tad.Suzuki & H.Kiguchi	CR+EN
第4次:	ノグチゴケ	<i>Brachydontium noguchii</i> Z.Iwats., Tad.Suzuki & H.Kiguchi	CR+EN
第3次:	ノグチゴケ	<i>Brachydontium noguchii</i> Z.Iwats., Tad.Suzuki & H.Kiguchi	CR+EN
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

長野県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Deguchi, H., 1979. A revision of the genera *Grimmia*, *Schistidium* and *Coscinodon* (Musci) of Japan. J. Sci. Hiroshima Univ., ser. b, div. 2 (Bot.), 16: 121-256.
- 樋口正信, 2015. ノグチゴケ. 環境省（編）, レッドデータブック 2014 ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー 9 植物Ⅱ（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）. p. 14. ぎょうせい, 東京.
- Iwatsuki, Z., T. Suzuki and H. Kiguchi, 2004. *Brachydontium olympicum*, a moss misunderstood by Japanese bryologists. J. Hattori Bot. Lab., 95: 199-205.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Brachydontium noguchii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Brachydontium noguchii* is listed as DD under criteria ③.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

③Distribution is biogeographically isolated (e.g., endemic species confined to a narrow range).

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Bare area
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	樋口正信（国立科学博物館）
Author:	Masanobu Higuchi

公表年月：2025 年 3 月

ギボウシゴケ目 Grimmiales チヂレゴケ科 Ptychomitriaceae

キヌシツポゴケモドキ

Brachydontium trichodes (F.Weber) Milde

カテゴリー判定結果

情報不足 (DD)

③

基準 A: —

基準 B: データ不足

基準 C: —

基準 D: —

基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

③生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。

【判断理由】

本種は高地の岩や礫の上に生育する種であり、国内では北海道と本州の高山に孤立して分布している。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

キヌシツポゴケモドキは国内では北海道と本州の高山に、国外ではヨーロッパ、中国、北米に分布する微小な直立性の蘚類。高地の岩や礫の上に生育する。

協力者： 坂井奈緒子（富山市立科学博物館）

基礎情報

【形態】

微小で茎は長さ 1 mm 以下、密に葉をつける。葉は卵形の鞘部から細く針状に伸び、長さ 1-1.6 mm、中肋は太くて葉身部の大部分を占める。葉縁はほとんど全縁。葉身部の細胞は卵形～菱形で壁は厚いが、鞘部では狭長で薄壁。蒴柄は頂生し、長さ約 2 mm。蒴は卵形で直立し、明瞭な縦の溝があり、乾くと深くしわ寄る。口環はよく分化し、蒴齒は非常に短く、帽は鐘状。同属のオリンピックゴケ (*Brachydontium olympicum* (E.G.Britton) T.T.McIntosh & J.R.Spence) よりも本種は長い蒴柄を持ち、蒴は葉の上に超出し、蒴の形も長くて、縦の条があることなどで区別できる。

【生活史】

雌雄同株（異苞）。

【生育環境】

高地の岩や礫の上などにまばらに生える。

生育環境区分：	【陸域_高標高地 中標高地】裸地

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では北海道、本州に分布し、国外ではヨーロッパ、中国、北米に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

国内では北海道、栃木県、新潟県、富山県、石川県、長野県、岐阜県、鳥取県から報告されている。第 5 次レッドリスト調査（2016-2019）では富山県立山で少数の個体が確認された。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

産地が局限しているため絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	キヌシッポゴケモドキ	<i>Brachydontium trichodes</i> (F.Weber) Milde	VU
第4次 2019:	キヌシッポゴケモドキ	<i>Brachydontium trichodes</i> (F.Weber) Milde	VU
第4次 2018:	キヌシッポゴケモドキ	<i>Brachydontium trichodes</i> (F.Weber) Milde	VU
第4次 2017:	キヌシッポゴケモドキ	<i>Brachydontium trichodes</i> (F.Weber) Milde	VU
第4次 2015:	キヌシッポゴケモドキ	<i>Brachydontium trichodes</i> (F.Weber) Milde	VU
第4次:	キヌシッポゴケモドキ	<i>Brachydontium trichodes</i> (F.Weber) Milde	VU
第3次:	キヌシッポゴケモドキ	<i>Brachydontium trichodes</i> (F.Weber) Milde	VU
第2次:	キヌシッポゴケモドキ	<i>Brachydontium trichodes</i> (Web.) Mild.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

宮城県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 福島県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 栃木県[絶滅危惧Ⅱ類（Bランク）] 富山県[絶滅危惧Ⅱ類] 長野県[準絶滅危惧（NT）] 鳥取県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Iwatsuki, Z., 1956. Bryological miscellanies, IV-VI. J. Hattori Bot. Lab., 17: 59-63.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- Noguchi, A., 1987. Illustrated Moss Flora of Japan. Part 1. pp. 1-242. Hattori Bot. Lab., Nichinan.
- 坂井奈緒子, 2011. 富山県立山室堂平周辺の蘚苔類相の訂正と追記. 富山市科学博物館研究報告, 34: 135-136.
- 山口富美夫, 2015. キヌシッポゴケモドキ. 環境省（編）, レッドデータブック 2014 ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー 9 植物Ⅱ（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）. p. 152. ぎょうせい, 東京.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Brachydontium trichodes has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition.

Brachydontium trichodes is listed as DD under criteria ③.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

③Distribution is biogeographically isolated (e.g., endemic species confined to a narrow range).

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area Mid-altitude area】 Bare area
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—



©樋口正信

執筆者: 樋口正信 (国立科学博物館)
Author: Masanobu Higuchi

公表年月：2025 年 3 月

ギボウシゴケ目 Grimmiales キヌシツポゴケ科 Seligeriaceae

キヌシツポゴケ

Blindiadelphus recurvatus (Hedw.) Fedosov & Ignatov

カテゴリー判定結果

情報不足 (DD)

③

基準 A: —

基準 B: データ不足

基準 C: —

基準 D: —

基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

③生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。

【判断理由】

本種は湿った石灰岩の岩壁に生育する種であり、国内では山梨県の 1 か所でのみ生育が確認されている。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

キヌシツポゴケは国内では山梨県に、国外ではヨーロッパ、極東ロシア、北米に分布する微小な直立性の蘚類。石灰岩の岩壁に生育する。

基礎情報

【形態】

植物体は直立し、茎は長さ 1-2.5 mm。茎は分枝せず、葉は長さ 1.0-1.3 mm、基部が卵形で上部が線形になる。キヌシッポゴケ属の他の種からは、広い基部から錐状に尖る葉と蒴柄が長く（2-3 mm）、湿ると弓状に曲がることで区別される。

【生活史】

雌雄同株。

【生育環境】

湿った石灰岩の岩壁に生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地】岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では山梨県に、国外ではヨーロッパ、極東ロシア、北米に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

詳細については不明。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

産地が局限し、石灰採掘により生育地が消滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	石灰採掘, 分布・産地局限
	(現在)	石灰採掘, 分布・産地局限

特記事項

Sakurai (1938) は本種を国内（熊本県）から初めて報告し、次いで鈴木他 (1996) は山梨県の北岳から報告した。なお、Suzuki et al. (2006) は Sakurai (1938) の報告の元になった標本を調べ、それが別種であることを確認した。したがって、本種の国内における産地は北岳のみになったが、現況は不明である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	キヌシッポゴケ	<i>Seligeria recurvata</i> (Hedw.) Bruch & Schimp.	CR+EN
第4次 2019:	キヌシッポゴケ	<i>Seligeria recurvata</i> (Hedw.) Bruch & Schimp.	CR+EN
第4次 2018:	キヌシッポゴケ	<i>Seligeria recurvata</i> (Hedw.) Bruch & Schimp.	CR+EN
第4次 2017:	キヌシッポゴケ	<i>Seligeria recurvata</i> (Hedw.) Bruch & Schimp.	CR+EN
第4次 2015:	キヌシッポゴケ	<i>Seligeria recurvata</i> (Hedw.) Bruch & Schimp.	CR+EN
第4次:	キヌシッポゴケ	<i>Seligeria recurvata</i> (Hedw.) Bruch & Schimp.	CR+EN
第3次:	キヌシッポゴケ	<i>Seligeria recurvata</i> (Hedw.) Bruch & Schimp.	CR+EN
第2次:	キヌシッポゴケ	<i>Seligeria recurvata</i> (Hedw.) B. S. G.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 樋口正信, 2015. キヌシッポゴケ. 環境省（編）, レッドデータブック 2014 ―日本の絶滅のおそれのある野生生物― 9 植物 II（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）. p. 85. ぎょうせい, 東京.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355pp., 192pls. 平凡社, 東京.
- Sakurai, K., 1938. Beobachtungen über Japanische Moosflora. XVII. Bot. Mag. Tokyo, 52: 467-473.
- Suzuki, T., Z. Iwatsuki and H. Kiguchi, 2006. The family Seligeriaceae (Bryopsida) in Japan. J. Hattori Bot. Lab., 100: 469-493.
- 鈴木 直・木口博史・立石幸敏, 1996. *Seligeria recurvata*, *S. calcarea* は日本にも産する. 日本蘚苔類学会会報, 6: 220-224.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Blindiadelphus recurvatus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Blindiadelphus recurvatus* is listed as DD under criteria ③.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

③Distribution is biogeographically isolated (e.g., endemic species confined to a narrow range).

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area】 Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Limestone mining, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	樋口正信 (国立科学博物館)
Author:	Masanobu Higuchi

公表年月：2025 年 3 月

ギボウシゴケ目 Grimmiales キヌシツポゴケ科 Seligeriaceae

ハナシキヌシツポゴケ

Seligeria donniana (Sm.) Muell.Hal.

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD)

③

基準 A: —

基準 B: データ不足

基準 C: —

基準 D: —

基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

③生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。

【判断理由】

本種は石灰岩地の林内や溪谷部で、日陰の湿った石灰岩壁上に生育する種であり、国内では本州と四国の数か所に孤立して分布している。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

ハナシキヌシツポゴケは国内では本州および四国に、国外では極東ロシア、ヨーロッパ、北米に分布する微小な直立性の蘚類。日陰の湿った石灰岩地の岩隙に生育する。

協力者： 井上侑哉（国立科学博物館）

基礎情報

【形態】

植物体は微小で、高さ 1.5 mm、葉は披針形から線状に狭くなり、先端に向かって芒状になり、長さ 0.2-1 mm。葉身細胞は方形～短い長方形、下部で長くなる。葉基部の葉縁に細鋸歯がある。蒴柄は短く、蒴は短い卵形で、乾燥すると大きく口を開き、逆三角形になる。蒴歯を欠く。本種はコキヌシツポゴケ (*Seligeria pusilla* (Hedw.) Bruch & Schimp.) に似るが葉の基部の縁に細鋸歯があり、蒴歯がないことで区別できる。

【生活史】

雌雄同株（異苞）。

【生育環境】

石灰岩地の林内や溪谷部で、日陰の湿った石灰岩壁上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では岩手県、埼玉県、福井県、山梨県、長野県、滋賀県、徳島県から報告されている。国外では極東ロシア、ヨーロッパ、北米に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第5次レッドリスト調査(2016-2019)では長野県大鹿村青木川上流部の1地点で確認された。その他の生育地の詳細については不明。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

森林伐採や石灰採掘による生育環境の変化、生育地の減少、消失が危惧される。また、産地が局限しているため絶滅が危惧される。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 石灰採掘
	(現在)	森林伐採, 石灰採掘

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ハナシキヌシッポゴケ	<i>Seligeria donniana</i> (Sm.) Müll.Hal.	VU
第4次 2019:	ハナシキヌシッポゴケ	<i>Seligeria donniana</i> (Sm.) Müll.Hal.	VU
第4次 2018:	ハナシキヌシッポゴケ	<i>Seligeria donniana</i> (Sm.) Müll.Hal.	VU
第4次 2017:	ハナシキヌシッポゴケ	<i>Seligeria donniana</i> (Sm.) Müll.Hal.	VU
第4次 2015:	ハナシキヌシッポゴケ	<i>Seligeria donniana</i> (Sm.) Müll.Hal.	VU
第4次:	ハナシキヌシッポゴケ	<i>Seligeria donniana</i> (Sm.) Müll.Hal.	VU
第3次:	ハナシキヌシッポゴケ	<i>Seligeria donniana</i> (Sm.) Müll.Hal.	VU
第2次:	ハナシキヌシッポゴケ	<i>Seligeria donniana</i> (Sm.) C. Muell.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

栃木県[情報不足] 埼玉県[絶滅危惧Ⅰ類(CE)] 長野県[絶滅危惧Ⅱ類(VU)] 宮崎県[絶滅危惧Ⅱ類(VU-r)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 古木達郎・樋口正信, 1983. ハナシキヌシッポゴケハケ岳に産す. 日本蘚苔類学会会報, 3: 122.
- Suzuki, T., Z. Iwatsuki and H. Kiguchi, 2006. The family Seligeriaceae (Bryopsida) in Japan. J. Hattori Bot. Lab., 100: 469-493.
- 鈴木 直, 1983. *Seligeria donniana* (ハナシキヌシッポゴケ, 新称) は日本にも産する. 蘚苔地衣雑報, 9: 157-158.
- 山口富美夫, 2015. ハナシキヌシッポゴケ. 環境省(編), レッドデータブック 2014 ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー 9 植物Ⅱ (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類). p. 198. ぎょうせい, 東京.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Seligeria donniana has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Seligeria donniana* is listed as DD under criteria ③.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due

to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

③Distribution is biogeographically isolated (e.g., endemic species confined to a narrow range).

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limestone mining
Law designation status for conservation	—

執筆者:	樋口正信（国立科学博物館）
Author:	Masanobu Higuchi

公表年月：2025 年 3 月

マユハケゴケ

Campylopus fragilis (Brid.) Bruch & Schimp.

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD) ③				
基準 A: —	基準 B: データ不足	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。				
③生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。				
【判断理由】				
山地から亜高山帯までの登山道沿いの土手など乾燥した地上にのみ生育する。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

マユハケゴケは、アジア、ヨーロッパ、北米、アフリカに分布し、日本では山地から亜高山帯までの登山道沿いの土手など乾燥した地上に生育する。茎の先端部に無性芽がつくことが特徴である。丹沢山地や秩父山地で近年数か所確認されている。観光客の増加による踏みつけによって、絶滅が危惧される。

協力者： 古木達郎（元千葉県立中央博物館）・木口博史（岡山コケの会）

基礎情報

【形態】

植物体は黄緑色を帯び、高さ 20 mm に達する。茎の先端部に多数の小葉状の無性芽をつける。葉は狭い長楕円形の基部からしだいに狭くなり、長い錐状に尖り、長さ 4~5 mm になる。中肋は基部で幅の半分以上を占める。中肋の断面で腹側は大きく、薄壁の細胞からなり、背側は小さな厚壁細胞からなる。茎の先端部に小葉状の無性芽がつくことで本属の他の種と区別できる。

【生活史】

雌雄異株。国内では孢子体は見つかっていない。

【生育環境】

山地から亜高山帯までの登山道沿いの土手など乾燥した地上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】裸地, 森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では本州、四国に分布し、国外では中国、朝鮮半島、ミャンマー、マレー半島、極東ロシア、ヨーロッパ、北米、アフリカに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

Iwatsuki et al. (1997) が本種を整理したときに引用した標本の産地は以下のとおり。群馬県赤城山、中里村（現神流町）叶山、埼玉県大滝村（現秩父市）前白岩山、雲取山、東京都奥多摩町日原、山梨県鳴沢村富士山剣丸尾、岡山県上斎原村（現鏡野町）、山口県山口市金鷄滝、旭村（現萩市）、愛媛県西条市石鎚山、東赤石山。このほか、青森県では八甲田山で記録されている（太田, 2020）。神奈川県では有川ほか（2006）が県新産として箱根町金時山、山北町菰釣山、丹沢山から報告したが、その後丹沢山に隣接する蛭が岳や塔ノ岳からも報告された（有川, 2022）。長野県では八ヶ岳が挙げられている（長野県, 2014）。宮崎県では五ヶ瀬町で確認されている（松本, 2022）。第 5 次レッドリストのための調査では 2019 年に秩父山地の長野県川上村の弁慶白岩と五郎山で生育を確認した。

【生育地の現況】

神奈川県では見つかっているのは、いずれも観光客による踏みつけが懸念される登山道沿いである。

【個体数の現況】

宮崎県五ヶ瀬町では日当たりの良い登山道脇の土手に 1 か所のみで生育量は少ない（松本, 2022）。第 5 次レッドリストのための調査では 2019 年に秩父山地の長野県川上村において、弁慶白岩付近で石灰岩上に 10 cm 四方程度の群落 2 か所、五郎山付近で数 cm 四方の群落 2 か所が確認された。

存続を脅かす要因

産地が局限しており、遊歩道・登山道の整備などの影響が懸念される。観光客の増加による踏みつけによって、絶滅が危惧される。

要因の区分：	(過去)	人の踏みつけ, 分布・産地局限, その他(遊歩道整備)
	(現在)	人の踏みつけ, 分布・産地局限, その他(遊歩道整備)

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	マユハケゴケ	<i>Campylopus fragilis</i> (Brid.) Bruch & Schimp.	VU
第4次 2019:	マユハケゴケ	<i>Campylopus fragilis</i> (Brid.) Bruch & Schimp.	VU
第4次 2018:	マユハケゴケ	<i>Campylopus fragilis</i> (Brid.) Bruch & Schimp.	VU
第4次 2017:	マユハケゴケ	<i>Campylopus fragilis</i> (Brid.) Bruch & Schimp.	VU
第4次 2015:	マユハケゴケ	<i>Campylopus fragilis</i> (Brid.) Bruch & Schimp.	VU
第4次:	マユハケゴケ	<i>Campylopus fragilis</i> (Brid.) Bruch & Schimp.	VU
第3次:	マユハケゴケ	<i>Campylopus fragilis</i> (Brid.) Bruch & Schimp.	VU
第2次:	マユハケゴケ	<i>Campylopus fragilis</i> (Brid.) B. S. G.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

青森県[希少野生生物（Cランク）] 埼玉県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 神奈川県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 長野県[絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）] 岡山県[絶滅危惧Ⅱ類] 山口県[情報不足（DD）] 愛媛県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 宮崎県[絶滅危惧Ⅱ類（VU-r）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 有川智己・平岡照代・木口博史・平岡正三郎, 2006. コケ植物. 高桑正敏・勝山輝男・木場英久（編）, 神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006. pp. 131-145. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原.

- 有川智己, 2022. コケ植物. 神奈川県 (編), 神奈川県レッドデータブック 2022 植物編, pp. 328-360. 神奈川県.
- Deguchi, H., 1981. Noteworthy mosses from the Shikoku district of Japan (2). Mem. Fac. Sci. Kochi. Univ., Ser. D, 2: 1-9.
- Iwatsuki, Z., J. -P. Frahm, T. Suzuki and N. Takaki, 1997. Gemmiferous species of *Campylopus* in Japan. J. Hattori Bot. Lab., 92: 175-180.
- 岩月善之助 (編), 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- 松本美津, 2022. マユハケゴケ. 宮城県 (編), 三訂・宮城県版レッドデータブック 宮城県の保護上重要な野生生物. p. 153. 宮城県.
- 長野県, 2014. 長野県版レッドリスト 長野県の絶滅のおそれのある野生生物 植物編 2014. 224 pp. 長野県.
- Noguchi, A., 1987. Illustrated Moss Flora of Japan. Part 1. pp. 1-242. Hattori Bot. Lab., Nichinan.
- 太田正文, 2020. マユハケゴケ. 青森県 (編), 青森県の希少な野生生物 青森県レッドデータブック (2020 年版). p. 125. 青森県.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Campylopus fragilis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Campylopus fragilis* is listed as DD under criteria ③.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

③Distribution is biogeographically isolated (e.g., endemic species confined to a narrow range).

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Bare area, Forest
Threat types:	Human trampling, Limited distribution, Other (遊歩道整備)
Law designation status for conservation	—

執筆者: 有川智己 (慶應義塾大学)
Author: Tomotsugu Arikawa

公表年月: 2025 年 3 月

ツチゴケ目 Archidiales シラガゴケ科 Leucobryaceae

ヒロスジツリバリゴケ

Campylopus gracilis (Mitt.) A.Jaeger

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD)

②

基準 A: —

基準 B: データ不足

基準 C: —

基準 D: データ不足

基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

②生育地が局限されている。

【判断理由】

本州、四国、九州の高地にのみ点々と分布しているが、どの生育地においても少量で、局所的に生育していると判断される。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

ヒロスジツリバリゴケは国内では本州、四国、九州の高地にのみ点々と分布するが、どの生育地においても少量で、局所的に分布している。ツリバリゴケ属の他の種からは、中肋の断面でステライドを欠くこと、葉の肩部の細胞が方形～長方形になることで区別される。2016年の調査では南アルプス赤石岳で、少量が確認された。

協力者： 山口富美夫（広島大学）・佐藤匠（広島大学）・桐生賢太（広島大学）

基礎情報

【形態】

植物体は直立し、茎は長さ 2～3 cm、しばしば 8 cm に達する。茎は分枝せず、長さ 4～5 mm のやや幅の広い基部から披針形に長く伸びる葉を密につける。葉の先端には少数の鋸歯がある。中肋は幅広く、基部の幅の 2/3～3/4 を占める。ツリバリゴケ属の他の種から、中肋の断面でステライドを欠くこと、葉の肩部の細胞が方形～長方形になることで区別される。

【生活史】

国内では孢子体は見つかっていない。

【生育環境】

高山など冷涼な地域のやや明るい場所の岩上に堆積した、湿り気のある腐植土や溶岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地 中標高地 低標高地】森林, 草地

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では本州、四国、九州に分布し、国外ではヨーロッパ、中国、朝鮮半島、極東ロシア、北米に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

Takaki (1967) は本種のシノニムである *Campylopus schwarzii* として、青森県、新潟県、富山県、長野県、山梨県、鹿児島県屋久島の標本を、Frahm (1992) は *Campylopus schwarzii* として山梨県と鹿児島県屋久島の標本を、同じく本種のシノニムである *Campylopus sublatius* として青森県、秋田県、滋賀県、徳島県、愛媛県の標本をあげている。これらの研究で扱われている青森県産標本の産地は青森市浅虫であり、高地に知られる本種において例外的な低山での記録で注目されるが、都市公園整備のための道路開削や樹木の伐採などにより環境が著しく変わり、この産地での生育は確認できていないという (太田, 2020)。第 5 次レッドリストのための調査では、2016 年に南アルプス赤石岳で、少量が確認された。

【生育地の現況】

高地に知られる本種において例外的な低山での記録で注目される青森県青森市浅虫の産地は、都市公園整備のための道路開削や樹木の伐採などにより環境が著しく変わり、この産地での生育は確認できていない (太田, 2020)。

【個体数の現況】

第 5 次レッドリストのための調査では、2016 年に南アルプス赤石岳で少量が確認された。その他の生育地の詳細については不明。

存続を脅かす要因

森林伐採や土地造成によって生育地が失われることが心配される。青森県青森市浅虫の産地は、都市公園整備のための道路開削や樹木の伐採などにより環境が著しく変わり、この産地での生育は確認できていない（太田, 2020）

要因の区分：	（過去）	森林伐採, 土地造成, 交通インフラ建設
	（現在）	森林伐採, 土地造成, 交通インフラ建設

特記事項

分類学的な取扱いが難しい。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ヒロスジツリバリゴケ	<i>Campylopus gracilis</i> (Mitt.) A.Jaeger	CR+EN
第4次 2019:	ヒロスジツリバリゴケ	<i>Campylopus gracilis</i> (Mitt.) A.Jaeger	CR+EN
第4次 2018:	ヒロスジツリバリゴケ	<i>Campylopus gracilis</i> (Mitt.) A.Jaeger	CR+EN
第4次 2017:	ヒロスジツリバリゴケ	<i>Campylopus gracilis</i> (Mitt.) A.Jaeger	CR+EN
第4次 2015:	ヒロスジツリバリゴケ	<i>Campylopus gracilis</i> (Mitt.) A.Jaeger [= <i>C. schwarzii</i> Schimp.; <i>C. subulatus</i> Schimp.]	CR+EN
第4次:	ヒロスジツリバリゴケ	<i>Campylopus gracilis</i> (Mitt.) A.Jaeger [= <i>C. schwarzii</i> Schimp.; <i>C. subulatus</i> Schimp.]	CR+EN
第3次:	ヒロスジツリバリゴケ	<i>Campylopus gracilis</i> (Mitt.) A.Jaeger (= <i>C. schwarzii</i> Schimp.; <i>C. subulatus</i> Schimp.)	CR+EN
第2次:	ヒロスジツリバリゴケ	<i>Campylopus gracilis</i> (Mitt.) Jaeg. Syn. <i>C. schwarzii</i> Schimp.; <i>C. subulatus</i> Schimp.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

青森県[希少野生生物(Cランク)] 福島県[絶滅危惧Ⅱ類(VU)] 新潟県[絶滅危惧(EN+VU)]
長野県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 奈良県[絶滅寸前種] 和歌山県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Frahm, J. -P., 1992. A revision of the east-Asian species of *Campylopus*. Journal of the Hattori Botanical Laboratory, 71: 133-164.
- Frahm, J. -P., 1994. Taxonomische Notizen zur Gattung *Campylopus* XVI. Nova Hedwigia, 59: 147-155.
- 小林圭介, 1963. 南アルプスで採集された興味あるツリバリゴケ属 2 種. Hikobia, 3: 215-216.
- Noguchi, A., 1987. Illustrated Moss Flora of Japan. Part 1. pp. 1-242. Hattori Bot. Lab., Nichinan.
- 太田正文, 2020. ヒロスジツリバリゴケ. 青森県 (編), 青森県の希少な野生生物 青森県レッドデータブック (2020 年版). p. 125. 青森県.
- Takaki, N., 1967. A revision of Japanese *Campylopus*. Journal of the Hattori Botanical Laboratory, 30: 231-248.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Campylopus gracilis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Campylopus gracilis* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area Mid-altitude area Low-altitude area】 Forest, Grassland
Threat types:	Logging and wood harvesting, Land development, Transportation infrastructure construction
Law designation status for conservation	—

執筆者: 有川智己 (慶應義塾大学)
Author: Tomotsugu Arikawa

公表年月: 2025 年 3 月

フジサンギンゴケモドキ

Aongstroemia julacea (Hook.) Mitt.

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD)

③

基準 A: —	基準 B: データ不足	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

③生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。

【判断理由】

本種は高山帯の岩場の岩隙の土上に生育する種であり、富士山山頂と長野県の数か所に孤立して分布している。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

フジサンギンゴケモドキは国内では本州の高山に、国外ではアフリカ、ヒマラヤ、シベリア、中米、南米に分布する直立性の蘚類。高山の土の上に生育する。

基礎情報

【形態】

植物体は直立し、茎は長さ約 2 cm。茎は分枝せず、長さ 0.5-0.6 mm の卵形～倒卵形の凹んだ葉を鱗状につける。葉の先端部は尖らず、円頭で、中肋は葉の先端に達しない。ハタキゴケ属の他種から、葉が椀状に凹むこと、中肋が葉の先端に達しないこと、葉の上半部の縁に 2 つの細胞の端が突出してできた鋸歯があることで区別される。

【生活史】

雌雄異株。

【生育環境】

高山の岩のすきまの土の上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地】岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では富士山山頂と長野県の高山に分布し、国外ではアフリカ、ヒマラヤ、シベリア、中米、南米に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

2019 年の調査では長野県川上村五郎山で生育が確認された。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

産地が局限し、絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

フジサンギンゴケモドキは富士山の採集品をもとに 1951 年にハリガネゴケ科の新種 *Anomobryum fuji-alpinum* Takaki として記載された。その後、八ヶ岳産の若い胞子体をつけた標本の研究から種の帰属に疑問が持たれた。1962 年にシッポゴケ科の *Aongstroemia*

属のものとされ、*Aongstroemia orientalis* の変種、また独立種と考えられた。現在はエクアドルの高山より記載された *Aongstroemia julacea* と同一とされている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	フジサンギンゴケモドキ	<i>Aongstroemia julacea</i> (Hook.) Mitt.	CR+EN
第4次 2019:	フジサンギンゴケモドキ	<i>Aongstroemia julacea</i> (Hook.) Mitt.	CR+EN
第4次 2018:	フジサンギンゴケモドキ	<i>Aongstroemia julacea</i> (Hook.) Mitt.	CR+EN
第4次 2017:	フジサンギンゴケモドキ	<i>Aongstroemia julacea</i> (Hook.) Mitt.	CR+EN
第4次 2015:	フジサンギンゴケモドキ	<i>Aongstroemia julacea</i> (Hook.) Mitt. [= <i>Aongstroemia fuji-alpina</i> (Takaki) Z.Iwats.]	CR+EN
第4次:	フジサンギンゴケモドキ	<i>Aongstroemia julacea</i> (Hook.) Mitt. [= <i>Aongstroemia fuji-alpina</i> (Takaki) Z.Iwats.]	CR+EN
第3次:	フジサンギンゴケモドキ	<i>Aongstroemia julacea</i> (Hook.) Mitt. [= <i>Aongstroemia fuji-alpina</i> (Takaki) Z.Iwats.]	CR+EN
第2次:	フジサンギンゴケモドキ	<i>Aongstroemia julacea</i> (Hook.) Mitt. Syn. <i>Anomobryum fuji-alpinum</i> Tak.; <i>Aongstroemia fuji-alpina</i> (Tak.) Z. Iwats.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

長野県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 樋口正信, 2015. フジサンギンゴケモドキ. 環境省（編）, レッドデータブック 2014 ―日本の絶滅のおそれのある野生生物― 9 植物Ⅱ（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）. p. 12. ぎょうせい, 東京.
- 高木典雄, 1951. 富士山頂の蘚苔類. 服部植物研究所研究報告, 6: 1-5.
- 高木典雄, 1962. 蘚類の一種 *Anomobryum fuji-alpina* Tak.の帰属. 植物分類地理, 20: 234-237.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Aongstroemia julacea has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Aongstroemia julacea* is listed as DD under criteria ③.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

③Distribution is biogeographically isolated (e.g., endemic species confined to a narrow range).

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area】 Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	樋口正信 (国立科学博物館)
Author:	Masanobu Higuchi

公表年月：2025 年 3 月

ハタキゴケ

Aongstroemia orientalis Mitt.

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD) ①				
基準 A: —	基準 B: データ不足	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。 ①どの生育地においても生育密度が低く希少である。 【判断理由】 近年本種に関する報告がないため、生育確認が困難なほど、どの生育地においても生育密度が低いのであろうと判断する。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

ハタキゴケは国内では本州の山地に、国外ではヒマラヤ、インド、ミャンマー、中国、ボルネオ、フィリピン、台湾、メキシコ、グアテマラに分布する微小な直立性の蘚類。山地の岩上や地面に生育する。

基礎情報

【形態】

植物体は直立し、茎は長さ 5 mm 以下。茎は分枝せず、長さ約 0.6 mm の卵形～広卵形の葉が密につく。葉の先端部は尖り、背方へ反り返り、中肋は葉の先端に達する。ハタキゴケ属の他種から、葉の先端部が尖ること、中肋が葉頂に達することなどで区別される。

【生活史】

雌雄異株。国内では孢子体は見つかっていない。

【生育環境】

山地の岩上や地面に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では本州に、国外ではヒマラヤ、インド、ミャンマー、中国、ボルネオ、フィリピン、台湾、メキシコ、グアテマラに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

詳細については不明。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

産地が局限し、絶滅が危惧される。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ハタキゴケ	<i>Aongstroemia orientalis</i> Mitt.	CR+EN
第4次 2019:	ハタキゴケ	<i>Aongstroemia orientalis</i> Mitt.	CR+EN
第4次 2018:	ハタキゴケ	<i>Aongstroemia orientalis</i> Mitt.	CR+EN
第4次 2017:	ハタキゴケ	<i>Aongstroemia orientalis</i> Mitt.	CR+EN
第4次 2015:	ハタキゴケ	<i>Aongstroemia orientalis</i> Mitt.	CR+EN
第4次:	ハタキゴケ	<i>Aongstroemia orientalis</i> Mitt.	CR+EN
第3次:	ハタキゴケ	<i>Aongstroemia orientalis</i> Mitt.	CR+EN
第2次:	ハタキゴケ	<i>Aongstroemia orientalis</i> Mitt.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 樋口正信, 2015. ハタキゴケ. 環境省（編）, レッドデータブック 2014 ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー 9 植物 II（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）. p. 13. ぎょうせい, 東京.
- Iwatsuki, Z., 1967. The bryogeographical relationships between eastern Asia and North America, 1. J. Hattori Bot. Lab., 30: 152-170.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- Noguchi, A., 1987. Illustrated Moss Flora of Japan. Part 1. pp. 1-242. Hattori Bot. Lab., Nichinan.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Aongstroemia orientalis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Aongstroemia orientalis* is listed as DD under criteria ①.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest

Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	樋口正信（国立科学博物館）
Author:	Masanobu Higuchi

公表年月：2025 年 3 月

シツポゴケ目 Dicranales ススキゴケ科 Dicranellaceae

ニセタマウケゴケ(シバゴケ)

Garckea flexuosa (Griff.) Margad. & Nork.

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD)

①

基準 A: —	基準 B: データ不足	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

①どの生育地においても生育密度が低く希少である。

【判断理由】

近年、本種に関する報告がないため、生育確認が困難なほど、どの生育地においても生育密度が低いのであろうと推測される。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

ニセタマウケゴケは国内では本州、四国、九州、小笠原諸島に、国外ではアフリカ、アジアの熱帯および亜熱帯、中国、オーストラリア、北米、中米に分布する小形の直立性蘚類。裸地にまばらに生える。

基礎情報

【形態】

植物体は直立し、茎は長さ 1.2-2 cm で、まばらに生える。茎は分枝せず、長さ 3 mm 以下の狭い披針形の葉をつける。葉は上部ほど大きい。葉の翼部の細胞は小型で、葉身部の細胞とほぼ同じ。蒴柄は短く、蒴は雌苞葉の間に隠れる。

【生活史】

雌雄異株。

【生育環境】

暖地のむき出しの地面に生育する。

生育環境区分：	【陸域_平地部】裸地

国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域

【分布域】

国内では本州、四国、九州、小笠原諸島に、国外ではアフリカ、アジアの熱帯および亜熱帯、中国、オーストラリア、北米、中米に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

詳細については不明。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

産地が局限し、地面に草本類が生えてくると生育環境が変わり、消失する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	遷移進行・植生変化/自然遷移, 分布・産地局限
	(現在)	遷移進行・植生変化/自然遷移, 分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ニセタマウケゴケ (シバゴケ)	<i>Garckea flexuosa</i> (Griff.) Margad. & Nork.	CR+EN
第4次 2019:	ニセタマウケゴケ (シバゴケ)	<i>Garckea flexuosa</i> (Griff.) Margad. & Nork.	CR+EN
第4次 2018:	ニセタマウケゴケ (シバゴケ)	<i>Garckea flexuosa</i> (Griff.) Margad. & Nork.	CR+EN
第4次 2017:	ニセタマウケゴケ (シバゴケ)	<i>Garckea flexuosa</i> (Griff.) Margad. & Nork.	CR+EN
第4次 2015:	ニセタマウケゴケ (シバゴケ)	<i>Garckea flexuosa</i> (Griff.) Marg. & Nork.	CR+EN
第4次:	ニセタマウケゴケ (シバゴケ)	<i>Garckea flexuosa</i> (Griff.) Marg. & Nork.	CR+EN
第3次:	ニセタマウケゴケ (シバゴケ)	<i>Garckea flexuosa</i> (Griff.) Marg. & Nork.	CR+EN
第2次:	ニセタマウケゴケ (新称) (シバゴケ)	<i>Garckea flexuosa</i> (Griff.) Marg. et Nork.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 樋口正信, 2015. ニセタマウケゴケ (シバゴケ). 環境省 (編), レッドデータブック 2014 ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー 9 植物 II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類). p. 38. ぎょうせい, 東京.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- Noguchi, A., 1987. Illustrated Moss Flora of Japan. Part 1. pp. 1-242. Hattori Bot. Lab., Nichinan.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Garckea flexuosa has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Garckea flexuosa* is listed as DD under criteria ①.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】 Bare area

Threat types:	Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	樋口正信（国立科学博物館）
Author:	Masanobu Higuchi

公表年月：2025 年 3 月

ヤクハウオウゴケ

Fissidens obscurus Mitt.

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD) ②				
基準 A: —	基準 B: データ不足	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。 ②生育地が局限されている。 【判断理由】 屋久島の標高 600-1,700 m の溪谷の岩の上などにのみ生育する。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

ヤクハウオウゴケは国内では屋久島に、国外ではインド、ネパール、中国に分布する蘚類。溪谷の湿岩上に生育する。

基礎情報

【形態】

植物体は直立し、茎は長さ 1.5-4.5 cm。茎は分枝せず、披針形の葉を密につける。葉は長さ 3.7-6.0 mm、中肋は 1 本で葉頂から数細胞下で終わる。葉の縁の細胞は分化せず、小さい鋸歯がある。本種はハウオウゴケ属の他種から、植物体が大きいこと、葉の縁の細胞が分化しないこと、葉の先端が尖ることなどで区別される。

【生活史】

雌雄異株。国内では孢子体は見つかっていない。

【生育環境】

屋久島の標高 600-1,700 m の溪谷の水の滴るような場所の岩の上などに生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】河川上流域

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では屋久島に、国外ではインド、ネパール、中国に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

詳細については不明。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

産地が局限し、比較的低地の森林内に生育するので、森林伐採による生育環境の変化によって壊滅的な影響を受ける可能性がある。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ヤクハウオウゴケ	<i>Fissidens obscurus</i> Mitt.	CR+EN
第4次 2019:	ヤクハウオウゴケ	<i>Fissidens obscurus</i> Mitt.	CR+EN
第4次 2018:	ヤクハウオウゴケ	<i>Fissidens obscurus</i> Mitt.	CR+EN
第4次 2017:	ヤクハウオウゴケ	<i>Fissidens obscurus</i> Mitt.	CR+EN
第4次 2015:	ヤクハウオウゴケ	<i>Fissidens obscurus</i> Mitt. [= <i>F. yakumontanus</i> Nog.]	CR+EN
第4次:	ヤクハウオウゴケ	<i>Fissidens obscurus</i> Mitt. [= <i>F. yakumontanus</i> Nog.]	CR+EN
第3次:	ヤクハウオウゴケ	<i>Fissidens obscurus</i> Mitt. (= <i>F. yakumontanus</i> Nog.)	CR+EN
第2次:	ヤクハウオウゴケ	<i>Fissidens obscurus</i> Mitt. Syn. <i>F. yakumontanus</i> Nog.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 樋口正信, 2015. ヤクハウオウゴケ. 環境省（編）, レッドデータブック 2014 ―日本の絶滅のおそれのある野生生物― 9 植物 II（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）. p. 36. ぎょうせい, 東京.
- Iwatsuki, Z. and T. Suzuki, 1982. A taxonomic revision of Japanese species of *Fissidens* (Musci). J. Hattori Bot. Lab., 51: 329-508.
- Noguchi, A., 1987. Illustrated Moss Flora of Japan. Part 1. pp. 1-242. Hattori Bot. Lab., Nichinan.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Fissidens obscurus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Fissidens obscurus* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data,

including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Upper river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 樋口正信 (国立科学博物館)
Author: Masanobu Higuchi

公表年月: 2025 年 3 月

ヒカリゴケ

Schistostega pennata (Hedw.) F.Weber & D.Mohr

カテゴリー判定結果

情報不足 (DD)

④

基準 A: —	基準 B: データ不足	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

④生活史の一部又は全部で特殊な環境条件を必要としている。

【判断理由】

冷涼な地域の洞穴など特殊環境に生育する。環境変化に弱いため、森林伐採、登山道整備、気候変動などによる減少傾向が危惧されるが生育情報が少なく絶滅危険度について判断できない。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

ヒカリゴケは国内では北海道、本州に、国外では極東ロシア、ヨーロッパ、北アメリカに分布する微小な直立性の蘚類。冷涼な地域の洞穴などの薄暗い場所に生育する。

協力者： 山口富美夫（広島大学）・佐藤匠（広島大学）・桐生賢太（広島大学）・横山正弘（日本蘚苔類学会）・坂井奈緒子（富山市立科学博物館）

基礎情報

【形態】

植物体は小形で直立する。茎は長さ 1 cm 以下で、枝分かれはしない。葉は披針形で茎に二列につき、基部が下の葉と癒合し、全体として平面になる。生殖器官をつける植物体はより小さく、葉は小形で上部に集まってつく。蒴はほぼ球形で蒴齒を欠く。胞子は粘性がある。

【生活史】

胞子が発芽した原糸体の一部の細胞が電球形になり、平面に並ぶことで光を効率的に利用する仕組みがある。使われなかった光の一部が反射することによって光って見える。

【生育環境】

冷涼な地域の洞窟、岩塊の隙間、木の根元の穴などの土の上に生育する。例外的に低地の洞穴や石垣のすきまに生えている場所がある。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林, 洞窟・地下浅層・地下水域

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (2) 里地里山・田園地域, (3) 都市地域

【分布域】

国内では北海道、本州に、国外ではヨーロッパ、極東ロシア、北アメリカに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリストの調査では岩手県薬師岳、山梨県北岳、富山県立山で確認された。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

森林伐採による環境変化、登山道整備による生育場所の減少などの影響が懸念される。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 交通インフラ建設
	(現在)	森林伐採, 交通インフラ建設

特記事項

光るコケとして知られる。国内最初の発見地（長野県）と低地の生育地（埼玉県、東京都）の3か所はヒカリゴケ生育地として国の天然記念物に指定されている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ヒカリゴケ	<i>Schistostega pennata</i> (Hedw.) F.Weber & D.Mohr	NT
第4次 2019:	ヒカリゴケ	<i>Schistostega pennata</i> (Hedw.) F.Weber & D.Mohr	NT
第4次 2018:	ヒカリゴケ	<i>Schistostega pennata</i> (Hedw.) F.Weber & D.Mohr	NT
第4次 2017:	ヒカリゴケ	<i>Schistostega pennata</i> (Hedw.) F.Weber & D.Mohr	NT
第4次 2015:	ヒカリゴケ	<i>Schistostega pennata</i> (Hedw.) F.Weber & D.Mohr	NT
第4次:	ヒカリゴケ	<i>Schistostega pennata</i> (Hedw.) F.Weber & D.Mohr	NT
第3次:	ヒカリゴケ	<i>Schistostega pennata</i> (Hedw.) F.Weber & D.Mohr	NT
第2次:	ヒカリゴケ	<i>Schistostega pennata</i> (Hedw.) Web. et Mohr	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

秋田県[絶滅危惧種Ⅰ類(CR+EN)] 福島県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 茨城県[絶滅危惧Ⅰ類] 栃木県[絶滅危惧Ⅱ類(Bランク)] 埼玉県[絶滅危惧Ⅰ類(CE)] 神奈川県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 新潟県[絶滅危惧(EN+VU)] 富山県[準絶滅危惧] 長野県[準絶滅危惧(NT)] 愛知県[絶滅危惧ⅠA類(CR)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 樋口正信, 2015. ヒカリゴケ. 環境省(編), レッドデータブック 2014 ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー 9 植物Ⅱ(蘚苔類・藻類・地衣類・菌類). p. 252. ぎょうせい, 東京.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Schistostega pennata has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Schistostega pennata* is listed as DD under criteria ④.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

④Specialized habitats are required at some or all stages of its life history

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest, Cave/Shallow underground/Subterranean water body
Threat types:	Logging and wood harvesting, Transportation infrastructure construction
Law designation status for conservation	—



執筆者: 樋口正信 (国立科学博物館)
Author: Masanobu Higuchi

公表年月：2025 年 3 月

ヤマゴケ

Oreas martiana (Hoppe & Hornsch.) Brid.

カテゴリー判定結果

情報不足 (DD)

②

基準 A: —

基準 B: データ不足

基準 C: —

基準 D: —

基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

②生育地が局限されている。

【判断理由】

国内の生育地は二地点。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

ヤマゴケは国内では長野県と山梨県に、国外ではヨーロッパ、コーカサス、インド、シッキム、中国、シベリア、北米、グリーンランドに分布する小形の直立性の蘚類。

基礎情報

【形態】

植物体は直立し、茎は長さ約 4 mm で、密生する。茎は分枝せず、長さ約 2 mm の卵形の基部から披針形に長く伸びる葉を密につける。蒴は球形で、蒴柄は湿ると湾曲する。

【生活史】

雌雄同株。

【生育環境】

高山帯の腐植土上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地】裸地

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では長野県八ヶ岳と山梨県北岳に、国外ではヨーロッパ、コーカサス、インド、シッキム、中国、シベリア、北米、グリーンランドに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

詳細については不明。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

産地が局限し、絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020： ヤマゴケ

Oreas martiana (Hoppe & Hornsch.) Brid.

CR+EN

第4次 2019:	ヤマゴケ	<i>Oreas martiana</i> (Hoppe & Hornsch.) Brid.	CR+EN
第4次 2018:	ヤマゴケ	<i>Oreas martiana</i> (Hoppe & Hornsch.) Brid.	CR+EN
第4次 2017:	ヤマゴケ	<i>Oreas martiana</i> (Hoppe & Hornsch.) Brid.	CR+EN
第4次 2015:	ヤマゴケ	<i>Oreas martiana</i> (Hoppe & Hornsch.) Brid.	CR+EN
第4次:	ヤマゴケ	<i>Oreas martiana</i> (Hoppe & Hornsch.) Brid.	CR+EN
第3次:	ヤマゴケ	<i>Oreas martiana</i> (Hoppe & Hornsch.) Brid.	CR+EN
第2次:	ヤマゴケ	<i>Oreas martiana</i> (Hoppe et Hornsch.) Brid.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

長野県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 樋口正信, 2015. ヤマゴケ. 環境省（編）, レッドデータブック 2014 ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー 9 植物Ⅱ（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）. p. 67. ぎょうせい, 東京.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- 飯柴永吉, 1929. 日本産蘚類総説. 295pp. 西ヶ原刊行会, 東京.
- Noguchi, A., 1987. Illustrated Moss Flora of Japan. Part 1. pp. 1-242. Hattori Bot. Lab., Nichinan.
- 櫻井久一, 1954. 日本の蘚類. 247pp. 岩波書店, 東京.
- Takaki, N., T. Amakawa, T. Osada and E. Sakuma, 1970. Bryophyte flora of Mt. Kaikoma, Mt. Senjyo and Mt. Kitadake (Southern Japan Alps). J. Hattori. Bot. Lab., 33: 171-202.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Oreas martiana has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Oreas martiana* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area】 Bare area

Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	樋口正信（国立科学博物館）
Author:	Masanobu Higuchi

公表年月：2025 年 3 月

アカネジクチゴケ

Husnotiella asperifolia (Mitt.) J.A.Jiménez & M.J.Cano

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD)

③

基準 A: —

基準 B: データ不足

基準 C: —

基準 D: —

基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

③生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。

【判断理由】

本種は高山帯の石灰岩地の岩隙の土上に生育する種であり、国内では山梨県三つ峠と北岳の山頂付近 2 か所に孤立して分布している。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

アカネジクチゴケは国内では山梨県の高山に、国外ではヨーロッパ、アフリカ、中国、シベリア、北米に分布する直立性の蘚類。現状の詳細については不明。

基礎情報

【形態】

植物体は直立し、茎は長さ 3 cm 以下。茎は分枝せず、長さ 1.8-2.2 mm の広卵形の葉をつける。葉は湿っていると反り返るが、乾くと縮れる。フタゴゴケ属の他種から、植物体が明るい褐色であること、茎に中心束を欠くことで区別される。

【生活史】

雌雄異株。国内では孢子体は見つかっていない。

【生育環境】

高山帯の石灰岩地の岩隙の土上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地】裸地

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では山梨県に分布し、国外ではヨーロッパ、アフリカ、中国、シベリア、北米に分布する。山梨県の三ツ峠と北岳の山頂付近から報告がある。

現在の生育状況

【分布域の現況】

詳細については不明。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

産地が局限し、絶滅が危惧される。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリと掲載名

第4次 2020:	アカネジクチゴケ	<i>Didymodon asperifolius</i> (Mitt.) H.A.Crum, Steere & L.E.Anderson	CR+EN
第4次 2019:	アカネジクチゴケ	<i>Didymodon asperifolius</i> (Mitt.) H.A.Crum, Steere & L.E.Anderson	CR+EN
第4次 2018:	アカネジクチゴケ	<i>Didymodon asperifolius</i> (Mitt.) H.A.Crum, Steere & L.E.Anderson	CR+EN
第4次 2017:	アカネジクチゴケ	<i>Didymodon asperifolius</i> (Mitt.) H.A.Crum, Steere & L.E.Anderson	CR+EN
第4次 2015:	アカネジクチゴケ	<i>Didymodon asperifolius</i> (Mitt.) H.A.Crum, Steere & L.E.Anderson	CR+EN
第4次:	アカネジクチゴケ	<i>Didymodon asperifolius</i> (Mitt.) H.A.Crum, Steere & L.E.Anderson	CR+EN
第3次:	アカネジクチゴケ	<i>Didymodon asperifolius</i> (Mitt.) H.A.Crum, Steere & L.E.Anderson	CR+EN
第2次:	アカネジクチゴケ	<i>Didymodon asperifolius</i> (Mitt.) Crum, Steere et Anderson	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Crum, H. A. and L. E. Anderson, 1981. Mosses of Eastern North America. Vol. 1. Columbia University Press, New York. 664pp.
- 樋口正信, 2015. アカネジクチゴケ. 環境省（編）, レッドデータブック 2014 ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー 9 植物 II（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）. p. 25. ぎょうせい, 東京.
- Saito, K., 1975. A monograph of Japanese Pottiaceae. J. Hattori Bot. Lab., 39: 373-537.
- Sakurai, K., 1938. Beobachtungen über Japanische Moosflora. XVII. Bot. Mag. Tokyo, 52: 467-500.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Husnotiella asperifolia has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition.

Husnotiella asperifolia is listed as DD under criteria ③.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

③Distribution is biogeographically isolated (e.g., endemic species confined to a narrow range).

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area】 Bare area
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	樋口正信（国立科学博物館）
Author:	Masanobu Higuchi

公表年月：2025 年 3 月

センボンゴケ目 Pottiales センボンゴケ科 Pottiaceae

ミヤマコネジレゴケ

Syntrichia sinensis (Müll.Hal.) Ochyra

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD)

③

基準 A: —

基準 B: データ不足

基準 C: —

基準 D: —

基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

③生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。

【判断理由】

本種は山地～亜高山帯の森林内の湿った石灰岩上に生育する種であり、埼玉県、長野県、高知県の数か所に孤立して分布している。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

ミヤマコネジレゴケは国内では本州中部、四国に、国外ではヨーロッパ、シベリア、中国に分布する直立性の蘚類。森林内の湿った石灰岩上に生育する。

協力者： 井上侑哉（国立科学博物館）・古木達郎（元千葉県立中央博物館）・木口博史（岡山コケの会）

基礎情報

【形態】

植物体は直立し、芝状の群落を作る。茎はほとんど分枝せず、長さは 2.5 cm 以下で、先端が丸いへら形の葉が上部に集まってつく。葉は長さ 2-3 mm。中肋は葉の先端から突出し、細鋸歯のある透明尖となる。ネジレゴケ属の他種から、葉の先端が丸くなること、中肋が突出すること、葉の下部の縁は背面側に曲がることなどで区別される。

【生活史】

雌雄同株。

【生育環境】

山地～亜高山帯の森林内の湿った石灰岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では埼玉県、長野県、高知県に、国外ではヨーロッパ、シベリア、中国に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト調査（2016-2019）では、埼玉県三国峠で 10×10 cm の群落が 3 か所、長野県梓白岩近くの尾根筋で同様の大きさの群落が 1 か所確認された。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

産地が局限し、石灰採掘により生育地が消滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	石灰採掘, 分布・産地局限
	(現在)	石灰採掘, 分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ミヤマコネジレゴケ	<i>Tortula sinensis</i> (Müll.Hal.) Levier	CR+EN
第4次 2019:	ミヤマコネジレゴケ	<i>Tortula sinensis</i> (Müll.Hal.) Levier	CR+EN
第4次 2018:	ミヤマコネジレゴケ	<i>Tortula sinensis</i> (Müll.Hal.) Levier	CR+EN
第4次 2017:	ミヤマコネジレゴケ	<i>Tortula sinensis</i> (Müll.Hal.) Levier	CR+EN
第4次 2015:	ミヤマコネジレゴケ	<i>Tortula sinensis</i> (Müll.Hal.) Levier [= <i>Syntrichia sinensis</i> (Müll.Hal.) Ochyra]	CR+EN
第4次:	ミヤマコネジレゴケ	<i>Tortula sinensis</i> (Müll.Hal.) Levier [= <i>Syntrichia sinensis</i> (Müll.Hal.) Ochyra]	CR+EN
第3次:	ミヤマコネジレゴケ	<i>Tortula sinensis</i> (Müll.Hal.) Broth. ex Levier [= <i>Syntrichia sinensis</i> (Müll.Hal.) Ochyra]	CR+EN
第2次:	ミヤマコネジレゴケ	<i>Tortula sinensis</i> (C. Muell.) Broth. ex Levier Syn. <i>Syntrichia sinensis</i> (C. Muell.) Ochyra	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

埼玉県[絶滅危惧Ⅰ類(CE)] 長野県[絶滅危惧Ⅱ類(VU)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 樋口正信, 2015. ミヤマコネジレゴケ. 環境省(編), レッドデータブック 2014 ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー 9 植物Ⅱ(蘚苔類・藻類・地衣類・菌類). p. 97. ぎょうせい, 東京.
- Noguchi, A., 1988. Illustrated Moss Flora of Japan. Part 2. pp. 243-491. Hattori Bot. Lab., Nichinan.
- Saito, K., 1973. Memoir of the Japanese Pottiaceae (1). Bull. Natl. Sci. Mus. Tokyo, 16: 61-91.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Syntrichia sinensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Syntrichia sinensis* is listed as DD under criteria ③.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

③Distribution is biogeographically isolated (e.g., endemic species confined to a narrow range).

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Limestone mining, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	樋口正信（国立科学博物館）
Author:	Masanobu Higuchi

公表年月：2025 年 3 月

ヒトヨシゴケ

Bruchia microspora Nog.

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD) ④				
基準 A: —	基準 B: データ不足	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。				
④生活史の一部又は全部で特殊な環境条件を必要としている。				
【判断理由】				
人里の空き地や田畑の畔のような不安定な立地に生育するため、人為的攪乱により絶滅する懸念がある。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

ヒトヨシゴケは国内では本州、九州に、国外では中国に分布する微小な直立性の蘚類。裸地や田畑の地面に生える。

基礎情報

【形態】

植物体は直立し、茎は長さ 4 mm 以下。茎は分枝せず、上部に葉をつける。葉は長さ 1.6-2.3 mm で、基部が卵形で急に狭まり針状に伸びる。中肋は太く、葉先に達する。蒴は直立し、頸部がよく発達し、ひょうたん形。閉鎖果でふたは分化しない。

【生活史】

雌雄同株（異苞）。

【生育環境】

裸地や田畑の地面に生える。

生育環境区分：	【陸域_平地部】裸地、田地・畑地

国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域

【分布域】

国内では本州、九州、国外では中国に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

2019 年に滋賀県で更地の盛土法面と隣接する畑に生育することが確認されている。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

土地造成、改良工事。

要因の区分：	(過去)	土地造成
	(現在)	土地造成

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020： ヒトヨシゴケ

Bruchia microspora Nog.

DD

第4次 2019:	ヒトヨシゴケ	<i>Bruchia microspora</i> Nog.	DD
第4次 2018:	ヒトヨシゴケ	<i>Bruchia microspora</i> Nog.	DD
第4次 2017:	ヒトヨシゴケ	<i>Bruchia microspora</i> Nog.	DD
第4次 2015:	ヒトヨシゴケ	<i>Bruchia microspora</i> Nog.	DD
第4次:	ヒトヨシゴケ	<i>Bruchia microspora</i> Nog.	DD
第3次:	ヒトヨシゴケ	<i>Bruchia microspora</i> Nog.	DD
第2次:	ヒトヨシゴケ	<i>Bruchia microspora</i> Nog.	DD
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

滋賀県[希少種]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 樋口正信, 2015. ヒトヨシゴケ. 環境省（編）, レッドデータブック 2014 ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー 9 植物 II（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）. p. 253. ぎょうせい, 東京.
- 小林亮平・鈴木 直, 2019. ヒトヨシゴケが滋賀県で見つかる. 蘚苔類研究, 12: 56-57.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Bruchia microspora has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Bruchia microspora* is listed as DD under criteria ④.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

④Specialized habitats are required at some or all stages of its life history

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】 Bare area, Farmland
Threat types:	Land development
Law designation status for conservation	—

執筆者: 樋口正信（国立科学博物館）
Masanobu Higuchi

Author:

公表年月：2025 年 3 月

マエバラナガダイゴケ

Trematodon mayebarae Takaki

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD)

③

基準 A: —

基準 B: データ不足

基準 C: —

基準 D: —

基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

③生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。

【判断理由】

本種は熊本県の低地の土手、水路、草地などの土上のみに生育する。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

マエバラナガダイゴケは日本固有で、熊本県に分布する。裸地にまばらに生育する。

基礎情報

【形態】

植物体は直立し、茎は長さ約 1-2 mm。茎は分枝せず、長さ 3 mm 以下の卵形の基部から披針形に長く伸びる葉を密につける。蒴の頸部が孢子のある上部とほぼ同じ長さになる。蒴齒は短く、上部で二裂せず、全面にパピラが密生する。

【生活史】

雌雄同株。

【生育環境】

低地の土手、水路、草地などの土上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_平地部】裸地, 草地

国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域

【分布域】

日本固有で、熊本県に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第4次レッドリスト作成のための調査では熊本県相良村の台地で本種の生育が確認されたが、以後、生育状況は不明。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

産地が局限し、人家や畑付近の土の上に生育するため、土地利用の変化により絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	土地造成, 分布・産地局限
	(現在)	土地造成, 分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	マエバラナガダイゴケ	<i>Trematodon mayebarae</i> Takaki	CR+EN
第4次 2019:	マエバラナガダイゴケ	<i>Trematodon mayebarae</i> Takaki	CR+EN
第4次 2018:	マエバラナガダイゴケ	<i>Trematodon mayebarae</i> Takaki	CR+EN
第4次 2017:	マエバラナガダイゴケ	<i>Trematodon mayebarae</i> Takaki	CR+EN
第4次 2015:	マエバラナガダイゴケ	<i>Trematodon mayebarae</i> Takaki	CR+EN
第4次:	マエバラナガダイゴケ	<i>Trematodon mayebarae</i> Takaki	CR+EN
第3次:	マエバラナガダイゴケ	<i>Trematodon mayebarae</i> Takaki	CR+EN
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 樋口正信, 2015. マエバラナガダイゴケ. 環境省（編）, レッドデータブック 2014 ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー 9 植物 II（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）. p. 98. ぎょうせい, 東京.
- Takaki, N., 1962. A revision of Japanese *Trematodon*. J. Hattori Bot. Lab., 25: 263-278.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Trematodon mayebarae has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Trematodon mayebarae* is listed as DD under criteria ③.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

③Distribution is biogeographically isolated (e.g., endemic species confined to a narrow range).

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Plain】 Bare area, Grassland
Threat types:	Land development, Limited distribution

Law designation status for conservation	—

執筆者:	樋口正信（国立科学博物館）
Author:	Masanobu Higuchi

公表年月：2025 年 3 月

マルバユリゴケ

Taylora hornschurchii (Grev. & Arn.) Broth.

カテゴリー判定結果

情報不足 (DD)

②

基準 A: —

基準 B: データ不足

基準 C: —

基準 D: —

基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

②生育地が局限されている。

【判断理由】

山梨県北岳のみに知られる。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

マルバユリゴケは国内では山梨県に、国外ではヨーロッパ、ヒマラヤ、中国、北アメリカに分布する直立性の蘚類。高山の湿った腐植土上に生育する。

基礎情報

【形態】

植物体は直立し、茎は長さ約 1 cm。茎は分枝せず、円頭の卵形から舌形の葉が上部に集まってつく。蒴の下部は肥大しない。ユリゴケ属の他の種からは、葉の中肋が短く、先端まで届かないことや蒴歯が披針形で、ほとんど乾湿運動をしないことで区別される。

【生活史】

成熟した胞子体が 9 月に確認されている。

【生育環境】

山梨県の北岳の標高 3,150 m 付近の岩陰の湿った腐植土上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地】裸地

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では山梨県に、国外ではヨーロッパ、ヒマラヤ、中国、北米に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

詳細については不明。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

産地が局限し、絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

国内では 1980 年に長野県の北岳から報告された。第 2 次レッドリスト作成のための調査で生育が再確認されたが（環境庁 2000）、以後、生育状況は不明。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	マルバユリゴケ	<i>Tayloria hornschurchii</i> (Grev. & Arn.) Broth.	CR+EN
第4次 2019:	マルバユリゴケ	<i>Tayloria hornschurchii</i> (Grev. & Arn.) Broth.	CR+EN
第4次 2018:	マルバユリゴケ	<i>Tayloria hornschurchii</i> (Grev. & Arn.) Broth.	CR+EN
第4次 2017:	マルバユリゴケ	<i>Tayloria hornschurchii</i> (Grev. & Arn.) Broth.	CR+EN
第4次 2015:	マルバユリゴケ	<i>Tayloria hornschurchii</i> (Grev. & Arnott) Broth.	CR+EN
第4次:	マルバユリゴケ	<i>Tayloria hornschurchii</i> (Grev. & Arnott) Broth.	CR+EN
第3次:	マルバユリゴケ	<i>Tayloria hornschurchii</i> (Grev. & Arnott) Broth.	CR+EN
第2次:	マルバユリゴケ	<i>Tayloria hornschurchii</i> (Grev. et Arnott) Broth.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 樋口正信, 2015. マルバユリゴケ. 環境省（編）, レッドデータブック 2014 —日本の絶滅のおそれのある野生生物— 9 植物 II（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）. p. 93. ぎょうせい, 東京.
- 環境庁（編）, 2000. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック— 9 植物 II（維管束植物以外）. 429 pp.
- 鈴木直, 1980. *Tayloria hornschurchii*（マルバユリゴケ, 新称）は日本にも産する. 蘚苔地衣雑報, 8: 157-159.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Tayloria hornschurchii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Tayloria hornschurchii* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area】 Bare area

Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	樋口正信（国立科学博物館）
Author:	Masanobu Higuchi

公表年月：2025 年 3 月

オオツボゴケ目 Splachnales オオツボゴケ科 Splachnaceae

ユリゴケ(タイワンユリゴケ)

Tayloria indica Mitt.

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD) ②				
基準 A: —	基準 B: データ不足	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。 ②生育地が局限されている。 【判断理由】 国内の生育地は一地点。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

ユリゴケ（タイワンユリゴケ）は国内では宮崎県に、国外ではヒマラヤ、インド、スリランカ、ミャンマー、タイ、中国、フィリピン、台湾に分布する直立性の蘚類。国内では倒木上に生育する。

基礎情報

【形態】

植物体は直立し、茎は長さ 1-2 cm。茎は分枝せず、長さ 3-4 mm の倒卵形の葉を密につける。ユリゴケ属の他の種からは、葉の中肋が長く、先端から芒状に突出することや蒴歯が披針形で、ほとんど乾湿運動をしないことで区別される。

【生活史】

雌雄同株。

【生育環境】

宮崎県の猪の谷の倒木上に生育する。

生育環境区分：	【陸域 低標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では宮崎県に分布し、国外ではヒマラヤ、インド、スリランカ、ミャンマー、タイ、中国、フィリピン、台湾に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

詳細については不明。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

産地が局限し、絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

国内では 1959 年に宮崎県南部から報告されたが、以後、生育状況は不明。ユリゴケ属の中では熱帯要素の種で、日本が分布の北限である。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ユリゴケ (台湾ユリゴケ)	<i>Tayloria indica</i> Mitt.	CR+EN
第4次 2019:	ユリゴケ (台湾ユリゴケ)	<i>Tayloria indica</i> Mitt.	CR+EN
第4次 2018:	ユリゴケ (台湾ユリゴケ)	<i>Tayloria indica</i> Mitt.	CR+EN
第4次 2017:	ユリゴケ (台湾ユリゴケ)	<i>Tayloria indica</i> Mitt.	CR+EN
第4次 2015:	ユリゴケ (台湾ユリゴケ)	<i>Tayloria indica</i> Mitt. [= <i>T. kwangsiensis</i> Reimers]	CR+EN
第4次:	ユリゴケ (台湾ユリゴケ)	<i>Tayloria indica</i> Mitt. [= <i>T. kwangsiensis</i> Reimers]	CR+EN
第3次:	台湾ユリゴケ	<i>Tayloria indica</i> Mitt. (= <i>T. kwangsiensis</i> Reimers)	CR+EN
第2次:	台湾ユリゴケ	<i>Tayloria indica</i> Mitt. Syn. <i>T. kwangsiensis</i> Reim.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況 (令和4年度末時点)

掲載なし

保護に係る法令指定状況 (令和4年度末時点)

指定なし

参考文献

- 樋口正信, 2015. ユリゴケ (台湾ユリゴケ). 環境省 (編), レッドデータブック 2014 ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー 9 植物 II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類). p. 94. ぎょうせい, 東京.
- Iwatsuki, Z., 1959. Bryological miscellanies, VII-XI. J. Hattori Bot. Lab., 21: 236-247.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355pp., 192pls. 平凡社, 東京.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Tayloria indica has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Tayloria indica* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	樋口正信（国立科学博物館）
Author:	Masanobu Higuchi

公表年月：2025 年 3 月

スルメゴケ

Tayloria splachnoides (Schwägr.) Hook.

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD) ②				
基準 A: —	基準 B: データ不足	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。 ②生育地が局限されている。 【判断理由】 山梨県の北岳の針葉樹林内の倒木上にのみ生育する。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

スルメゴケは国内では山梨県に、国外ではヨーロッパ、中国、台湾、北アメリカに分布する直立性の蘚類。国内では倒木上に生育する。現況については不明。

基礎情報

【形態】

植物体は直立し、茎は長さ約 5-10 mm。茎は分枝せず、長さ約 4 mm の鋭頭の卵形から舌形の葉が上部に集まってつく。ユリゴケ属の他の種からは、葉の中肋が短く、先端まで届かないことや蒴歯が細長いテープ状で、顕著な乾湿運動をすることで区別される。

【生活史】

雌雄同株。

【生育環境】

針葉樹林内の倒木上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では山梨県に分布し、国外ではヨーロッパ、中国、台湾、北米に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

詳細については不明。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

産地が局限し、絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

国内では 1954 年に山梨県北岳から報告されたが、以後、生育の確認はされていない。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	スルメゴケ	<i>Tayloria splachnoides</i> (Schwägr.) Hook.	CR+EN
第4次 2019:	スルメゴケ	<i>Tayloria splachnoides</i> (Schwägr.) Hook.	CR+EN
第4次 2018:	スルメゴケ	<i>Tayloria splachnoides</i> (Schwägr.) Hook.	CR+EN
第4次 2017:	スルメゴケ	<i>Tayloria splachnoides</i> (Schwägr.) Hook.	CR+EN
第4次 2015:	スルメゴケ	<i>Tayloria splachnoides</i> (Schwägr.) Hook.	CR+EN
第4次:	スルメゴケ	<i>Tayloria splachnoides</i> (Schwägr.) Hook.	CR+EN
第3次:	スルメゴケ	<i>Tayloria splachnoides</i> (Schleich. ex Schwägr.) Hook.	CR+EN
第2次:	スルメゴケ	<i>Tayloria splachnoides</i> (Schleich. ex Schwaegr.) Hook.	DD
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

栃木県[準絶滅危惧（Cランク）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Higuchi, M., K. -Y. Yao and S. -H. Lin, 2012. Mosses of Mt. Chilai, Taiwan. Mem. Natl. Mus. Nat. Sci., Tokyo, 48: 159-175.
- 樋口正信, 2015. スルメゴケ. 環境省（編）, レッドデータブック 2014 ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー 9 植物 II（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）. p. 95. ぎょうせい, 東京.
- 高木典雄, 1954. 日本産蘚類植物報告（7）. 植物研究雑誌, 29: 35-40.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Tayloria splachnoides has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Tayloria splachnoides* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest

Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	樋口正信（国立科学博物館）
Author:	Masanobu Higuchi

公表年月：2025 年 3 月

ヤスダゴケ

Anomobryum yasudae Broth.

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD) ②				
基準 A: —	基準 B: データ不足	基準 C: —	基準 D: データ不足	基準 E: —
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。 ②生育地が局限されている。 【判断理由】 本州関東地方以西と四国の湧水がしたたる岩壁にごく稀に点々と分布している。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

ヤスダゴケは、森林内の、水が飛び散り常に濡れている岩壁に生育する蘚類で、同属で地上生のヒメギンゴケモドキより植物体が大きく、葉の中肋が先端に達することで区別される。関東地方以西の本州と四国にごく稀に点々と分布しているが、森林の伐採や河川改修、水質汚濁、道路拡張等で生育地が消失する可能性がある。

基礎情報

【形態】

植物体は白緑色で、まばらに分枝し、長さ 2 cm 位になる。葉は密に鱗状に並ぶ。葉は卵状で強く凹み、先は鈍く尖る。葉の上半部は緑色で透明にはならない。蒴柄は長さ 3.5 mm 程度、蒴は傾く。内蒴齒は完全。同属で地上生のヒメギンゴケモドキ *Anomobryum filiforme* より植物体が大きく、葉の中肋が先端に達することで区別される。

【生活史】

雌雄異株。孢子体はしばしば見られている。

【生育環境】

森林内の、水が飛び散り常に濡れている岩壁に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林、岩壁・ガレ場（石灰岩地等）、河川源流域
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では本州と四国から報告がある、海外では中国南部と台湾に生育する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

Ochi (1959) は群馬県、埼玉県、富山県、山梨県、静岡県、福井県、愛媛県、高知県の標本を引用している。埼玉県では秩父地域の 1 か所のみで生育（埼玉県, 2012）。神奈川県では山北町玄倉の舗装された林道沿いの崖の、流水が流れる石垣に生育している（有川, 2022）。富山県では Ochi (1959) に黒部山という記録があるが、現在の地名は不明で現存確認できない（富山県, 2012）。滋賀県では伊吹山に分布するがその生態が明らかでない（埴田ほか, 2021）。愛媛県では東赤石山北面関川沿いから近年報告がある（藤田ほか, 2016）。

【生育地の現況】

水しぶきがかかるような場所に見られる。秩父地域では水が滝状に流れる石灰岩壁で、国道沿いに生育が確認される（埼玉県, 2012）。神奈川県では林道沿いの流水のかかる崖上に巨大な群落があり、生育状況はとても良好（有川, 2022）。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

森林内の、道路と溪流が交わるような、水が飛び散り常に濡れている岩壁によく生育するため、森林の伐採により周辺の環境が変わると群落が失われる可能性がある。ま

た、水量の減少や乾燥化により減少する。河川改修や水質汚濁によっても生育地は失われる。秩父の生育地では国道 140 号沿いに生育しているが、同じように道路沿いの岩壁に生育している地点が多いので、道路拡張等で消失する可能性がある。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 河川開発, 交通インフラ建設, 水質汚濁
	(現在)	森林伐採, 河川開発, 交通インフラ建設, 水質汚濁

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリと掲載名

第4次 2020:	ヤスダゴケ	<i>Anomobryum yasudae</i> Broth.	NT
第4次 2019:	ヤスダゴケ	<i>Anomobryum yasudae</i> Broth.	NT
第4次 2018:	ヤスダゴケ	<i>Anomobryum yasudae</i> Broth.	NT
第4次 2017:	ヤスダゴケ	<i>Anomobryum yasudae</i> Broth.	NT
第4次 2015:	ヤスダゴケ	<i>Anomobryum yasudae</i> Broth.	NT
第4次:	ヤスダゴケ	<i>Anomobryum yasudae</i> Broth.	NT
第3次:	ヤスダゴケ	<i>Anomobryum yasudae</i> Broth.	NT
第2次:	ヤスダゴケ	<i>Anomobryum yasudae</i> Broth.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

埼玉県[絶滅危惧Ⅰ類(CE)] 神奈川県[情報不足(DD)] 富山県[情報不足] 滋賀県[要注目種]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 有川智己, 2022. コケ植物. 神奈川県 (編), 神奈川県レッドデータブック 2022 植物編. pp. 328-360, 神奈川県.
- 藤田あゆな・立石幸敏・西村直樹, 2016. 赤石山系(愛媛県)の蘚類への追加. *Naturalistae*, 20: 87-88.
- Ochi, H., 1959. A revision of the Bryaceae in Japan and the adjacent regions. 124pp. The Biological Institute, Faculty of Liberal Arts, Tottori University, Tottori.

- 埼玉県, 2012. 埼玉県の希少野生生物 埼玉県レッドデータブック 2011 植物編. 埼玉県. 432 pp.
- 埴田 宏・笠井 謙・葛山博次, 2021. ヤスダゴケ. 滋賀県生きもの総合調査委員会 (編), 滋賀県で大切にすべき野生生物 滋賀県レッドデータブック 2020 年版. 滋賀県. 311pp.
- 富山県, 2012. 富山県の絶滅のおそれのある野生生物 レッドデータブックとやま 2012. 富山県, 451pp.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Anomobryum yasudae has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Anomobryum yasudae* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area Low-altitude area】 Forest, Cliff/Talus area (e.g. limestone area), River headwater
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development, Transportation infrastructure construction, Water pollution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 有川智己 (慶應義塾大学)
Author: Tomotsugu Arikawa

公表年月: 2025 年 3 月

シノブチョウチンゴケ

Cyrtomnium hymenophylloides (Huebener) T.J.Kop.

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD) ②

基準 A: —	基準 B: データ不足	基準 C: —	基準 D: データ不足	基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

②生育地が局限されている。

【判断理由】

3 地域 6 地点程度でしか見つかっていない。3 地域内では複数地点で見つかっている。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

シノブチョウチンゴケは、北半球の北部に分布する蘚類で、広卵形の葉が 2 列に並び、葉は乾燥してもほとんど縮れない。高山帯の湿った土上や石灰岩地に生育する。第 5 次レッドリスト作成のための調査では、長野県と埼玉県での生育が確認された。生育地付近の河川改修や、生育地が崩壊で埋まるなどにより、存続が心配される。

協力者： 大石善隆（福井県立大学）・井上侑哉（国立科学博物館）・古木達郎（元千葉県立中央博物館）・木口博史（岡山コケの会）

基礎情報

【形態】

植物体は青みがかった緑～褐色。茎は直立し、高さ 1～4 cm になり、下部は褐色の仮根で覆われる。葉は広卵形で、長さ 1.5～3 mm、2 列に並び、全体として扁平になる。中肋は葉頂近くに達する。葉身細胞は六角形で薄壁、細胞の角はやや厚くなる。葉縁は 1～3 列の細長い細胞で縁取られる。本種はウチワチョウチンゴケ属 *Rhizomnium* の小型の種に似るが、葉縁の舷の断面は単層であることで区別される。

【生活史】

雌雄異株。国内では孢子体は見つかっていない。

【生育環境】

常緑針葉樹林帯から落葉広葉樹林帯に分布する。石灰岩、石灰岩の裂け目、石灰岩を覆った土に生育することが知られている（田中, 2012）。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林、岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では北海道（芦別岳周辺）と埼玉県秩父山地、長野県伊那地域に記録があり、国外では北半球北部に広く分布している。

現在の生育状況

【分布域の現況】

田中（2012）は産地として北海道空知（芦別岳）、埼玉（秩父）、長野（伊那市長谷、大鹿村青木川燕岩、豊口山・塩川）を挙げている。また、2008 年に北海道芦別市岨（きりぎし）山での生育が確認されている（樋口ほか, 2009）。第 4 次レッドリスト作成のための調査では、第 3 次レッドデータブック（2000）調査に引き続き、長野県伊那市長谷と大鹿村での生育が確認された。第 5 次レッドリストのための調査では 2018 年に埼玉県秩父市三国尾根と長野県大鹿村青木川燕岩で確認された。

【生育地の現況】

高山～亜高山の主に石灰岩地に生育するが、崩壊や開発により大部分の生育地で存続が心配される。

【個体数の現況】

2018 年の第 5 次レッドリストのための調査では、秩父山地三国尾根では湿った石灰岩の割れ目に沿って生育し、10 cm×5 cm 程度の群落が 2 つ確認された。過去の確認時点に比べて増減はなかった。大鹿村燕岩周辺では、3 cm 四方の群落が数か所見つかった。その他の生育地の詳細については不明。

存続を脅かす要因

生育地付近の河川改修や森林伐採、生育地が崩壊で埋まるなどにより、存続が心配される。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 河川開発, 石灰採掘, 遷移進行・植生変化/自然遷移, 自然災害
	(現在)	森林伐採, 河川開発, 石灰採掘, 遷移進行・植生変化/自然遷移, 自然災害

特記事項

本種は日本では高木（1953）によって最初に長野県長谷村塩沢（現、伊那市）から報告された。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	シノブチョウチンゴケ	<i>Cyrtomnium hymenophylloides</i> (Huebener) T.J.Kop.	VU
第4次 2019:	シノブチョウチンゴケ	<i>Cyrtomnium hymenophylloides</i> (Huebener) T.J.Kop.	VU
第4次 2018:	シノブチョウチンゴケ	<i>Cyrtomnium hymenophylloides</i> (Huebener) T.J.Kop.	VU
第4次 2017:	シノブチョウチンゴケ	<i>Cyrtomnium hymenophylloides</i> (Huebener) T.J.Kop.	VU
第4次 2015:	シノブチョウチンゴケ	<i>Cyrtomnium hymenophylloides</i> (Huebener) T.J.Kop.	VU
第4次:	シノブチョウチンゴケ	<i>Cyrtomnium hymenophylloides</i> (Huebener) T.J.Kop.	VU
第3次:	シノブチョウチンゴケ	<i>Cyrtomnium hymenophylloides</i> (Huebener) T.J.Kop.	VU
第2次:	シノブチョウチンゴケ	<i>Cyrtomnium hymenophylloides</i> (Hueb.) Kop.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

埼玉県[絶滅危惧Ⅰ類(CE)] 長野県[絶滅危惧Ⅱ類(VU)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 樋口正信・佐藤 謙・丹羽真一, 2009. 北海道中央部に位置する岨山で確認された絶滅危惧藓類数種. 藓苔類研究, 9: 367-369.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- 神田啓史, 2000. シノブチョウチンゴケ. 環境庁 (編), 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物ーレッドデータブックー9. 植物 II (維管束植物以外). p. 53. 自然環境研究センター, 東京.
- Noguchi, A., 1989. Illustrated Moss Flora of Japan. Part 3. pp. 493-742. Hattori Bot. Lab., Nichinan.
- 高木典雄, 1953. 赤石山脈石灰岩地域の藓類相. 服部植物研究所報告, 10: 23-29.
- 田中敦司, 2012. 日本の石灰岩性藓類. Naturalistae, 16: 47-82.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Cyrtomnium hymenophylloides has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Cyrtomnium hymenophylloides* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest, Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development, Limestone mining, Successional progression/Vegetation change/Natural succession, Natural disasters
Law designation status for conservation	—

執筆者: 有川智己 (慶應義塾大学)
Author: Tomotsugu Arikawa

公表年月: 2025 年 3 月

ハリガネゴケ目 Bryales チョウチンゴケ科 Mniaceae

タチチョウチンゴケ

Orthomnion dilatatum (Mitt.) P.C.Chen

カテゴリ判定結果 情報不足 (DD)

③

基準 A: —	基準 B: データ不足	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

③生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。

【判断理由】

本種は低地の樹幹上や稀に岩上に生育する種であり、国内では本州西部、四国、九州の数か所に孤立して分布している。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

タチチョウチンゴケは国内では本州、四国、九州に、国外ではヒマラヤ、ベトナム、マレーシア、インドネシア、中国、台湾に分布する直立性の蘚類。低地の樹幹または岩の上に生育する。

協力者： 林正典（日本蘚苔類学会）

基礎情報

【形態】

植物体は全長 10 cm になることがあり、下部は這い、上部は直立する。茎は分枝せず、仮根が密生し、匍匐部分では葉が扁平につき、直立部分では葉は丸くつく。匍匐茎の葉はほぼ円形で、長さ約 4 mm。直立茎の葉は卵形～へら形で、長さ約 7 mm。どちらの葉も基部両端は茎の上を下延しない。中肋は葉の先端からかなり下で終わる。胞子体は茎の直立部分の先端につき、蒴柄は短く、楕円状円筒形の蒴は直立し、曲がらない。

【生活史】

雌雄同株。

【生育環境】

低地の樹幹上、まれに岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林

国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域

【分布域】

国内では本州、四国、九州に分布し、国外ではヒマラヤ、ベトナム、マレーシア、インドネシア、中国、台湾に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト調査（2016-2019）では、山口県周南市で生育が確認された。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

低地の森林内に生育するので、樹木伐採による生育基物そのものの消失や生育環境の変化によって壊滅的な影響を受ける可能性がある。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	タチチョウチンゴケ	<i>Orthomnion dilatatum</i> (Mitt.) P.C.Chen	CR+EN
第4次 2019:	タチチョウチンゴケ	<i>Orthomnion dilatatum</i> (Mitt.) P.C.Chen	CR+EN
第4次 2018:	タチチョウチンゴケ	<i>Orthomnion dilatatum</i> (Mitt.) P.C.Chen	CR+EN
第4次 2017:	タチチョウチンゴケ	<i>Orthomnion dilatatum</i> (Mitt.) P.C.Chen	CR+EN
第4次 2015:	タチチョウチンゴケ	<i>Orthomnion dilatatum</i> (Mitt.) P.C.Chen [= <i>Orthomniopsis japonica</i> Broth.]	CR+EN
第4次:	タチチョウチンゴケ	<i>Orthomnion dilatatum</i> (Mitt.) P.C.Chen [= <i>Orthomniopsis japonica</i> Broth.]	CR+EN
第3次:	タチチョウチンゴケ	<i>Orthomnion dilatatum</i> (Mitt.) P.C.Chen (= <i>Orthomniopsis japonica</i> Broth.)	CR+EN
第2次:	タチチョウチンゴケ	<i>Orthomnion dilatatum</i> (Mitt.) Chen Syn. <i>Orthomniopsis japonica</i> Broth.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

愛知県[絶滅危惧ⅠA類(CR)] 三重県[絶滅危惧ⅠB類(EN)] 京都府[絶滅寸前種] 大阪府[EX]
兵庫県[Aランク] 奈良県[絶滅危惧種] 和歌山県[絶滅危惧Ⅱ類(VU)] 広島県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 山口県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 愛媛県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 大分県[絶滅危惧ⅠA類(CR)] 宮崎県[絶滅危惧ⅠA類(CR-r)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 樋口正信, 2015. タチチョウチンゴケ. 環境省 (編), レッドデータブック 2014 ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー 9 植物Ⅱ (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類). p. 68. ぎょうせい, 東京.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- Noguchi, A., 1988. Illustrated Moss Flora of Japan. Part 2. pp. 243-491. Hattori Bot. Lab., Nichinan.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Orthomnion dilatatum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Orthomnion dilatatum* is listed as DD under criteria ③.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due

to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

③Distribution is biogeographically isolated (e.g., endemic species confined to a narrow range).

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	樋口正信（国立科学博物館）
Author:	Masanobu Higuchi

公表年月：2025 年 3 月

ハリガネゴケ目 Bryales チョウチンゴケ科 Mniaceae

タチチョウチンゴケモドキ

Orthomnion javense (M.Fleisch.) T.J.Kop.

カテゴリー判定結果

情報不足 (DD)

③

基準 A: —

基準 B: データ不足

基準 C: —

基準 D: —

基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

③生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。

【判断理由】

本種は低地の樹幹上に生育する種であり、高知県と宮崎県の数か所に孤立して分布している。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

タチチョウチンゴケモドキは国内では高知県と宮崎県に、国外では中国、フィリピン、ニューギニアに分布する直立性の蘚類。低地の樹幹に着生する。

基礎情報

【形態】

日本産のタチチョウチンゴケ属のもう 1 種、タチチョウチンゴケ (*Orthomnion dilatatum* (Mitt.) P.C.Chen) との区別は孢子体がないと難しい。タチチョウチンゴケからは、植物体がより小型であること、匍匐茎の葉が楕円形からへら形になること、葉のほぼ全周の縁に細長い細胞があること、葉身細胞が薄壁になること、カリプトラに毛が生えること、蒴は蒴柄より短いことで区別される。

【生活史】

雌雄異株。国内では孢子体は見つかっていない。

【生育環境】

低地の樹幹に生育する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では高知県と宮崎県に分布し、国外では中国、フィリピン、ニューギニアに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

詳細については不明。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

産地が局限し、絶滅が危惧される。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

高知県物部村（現、香美市）の別府峡と宮崎県日南市周辺 3 か所の計 4 か所から報告されているが、2000 年以降、生育が確認されていない。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	タチチョウチンゴケモドキ	<i>Orthomnion loheri</i> Broth.	CR+EN
第4次 2019:	タチチョウチンゴケモドキ	<i>Orthomnion loheri</i> Broth.	CR+EN
第4次 2018:	タチチョウチンゴケモドキ	<i>Orthomnion loheri</i> Broth.	CR+EN
第4次 2017:	タチチョウチンゴケモドキ	<i>Orthomnion loheri</i> Broth.	CR+EN
第4次 2015:	タチチョウチンゴケモドキ	<i>Orthomnion loheri</i> Broth.	CR+EN
第4次:	タチチョウチンゴケモドキ	<i>Orthomnion loheri</i> Broth.	CR+EN
第3次:	タチチョウチンゴケモドキ	<i>Orthomnion loheri</i> Broth.	CR+EN
第2次:	タチチョウチンゴケモドキ	<i>Orthomnion loheri</i> Broth.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

宮崎県[絶滅危惧 I A 類(CR-r)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 樋口正信, 2015. タチチョウチンゴケモドキ. 環境省（編）, レッドデータブック 2014 ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー 9 植物 II（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）. p. 69. ぎょうせい, 東京.
- Koponen, T., 1980. A synopsis of Mniaceae (Bryophyta). II. *Orthomnion*. Ann. Bot. Fennici, 17: 35-55.
- Koponen, T., 1980. Miscellaneous notes on Mniaceae (Bryophyta) VII. *Orthomnion loheri* in Japan. Misc. Bryol. Lichenol., 8: 181-182.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Orthomnion javense has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Orthomnion javense* is listed as DD under criteria ③.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

③Distribution is biogeographically isolated (e.g., endemic species confined to a narrow range).

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	樋口正信（国立科学博物館）
Author:	Masanobu Higuchi

公表年月：2025 年 3 月

ハリガネゴケ目 Bryales チョウチンゴケ科 Mniaceae

テヅカチョウチンゴケ(アズミチョウチンゴケ)

Plagiomnium tezukae (Sakurai) T.J.Kop.

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD) ②

基準 A: —	基準 B: データ不足	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

②生育地が局限されている。

【判断理由】

北海道から四国にまで分布しているとされているが、稀で、生育地は点在しており、どこにでも生育する種類ではない。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

テヅカチョウチンゴケは、日本、朝鮮半島と中国に分布する蘚類で、岩上、石灰岩上、カラマツ林などの林床の土上などに生育する。葉縁に1～4細胞からなる歯を持つことが特徴である。近年、神奈川県や栃木県からも新たな報告があった。生育地付近の森林伐採で生育環境が損なわれる心配がある。

基礎情報

【形態】

植物体は光沢のある黄緑色で、時には褐色～紅色を帯びる。茎は這い、茎葉は卵形で、長さ 6～8 mm、葉先は円頭で短い突起がある。葉縁の筋は基部まで明瞭。中肋は葉頂部に終わり、葉身細胞は長い六角形で厚壁、ところどころでくびれる。外形はオオバチョウチンゴケ *Plagiomnium vesicatum* に似るが、1～4 細胞からなる葉縁の大きな歯によって区別される。

【生活史】

雌雄異株。国内では胞子体は見つかっていなかったが、神山・鈴木（2010）が確認した。

【生育環境】

岩上、石灰岩上、カラマツ林などの林床の土上などに生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (2) 里地里山・田園地域

【分布域】

国内では北海道、本州、四国に分布しており、国外では朝鮮半島と中国に分布している。

現在の生育状況

【分布域の現況】

2005 年の調査では東京都奥多摩町小川谷で少数が、2011 年の調査では茨城県大子町左貫で少数が確認されている。ほかに、神奈川県伊勢原市、秦野市、津久井町（現相模原市）での生育について有川ほか（2006）、栃木県那須塩原市、日光市、黒磯市、鹿沼市（2 か所）の計 5 か所での生育について神山・鈴木（2010）に報告がある。埼玉では 1 か所で生育が報告されている。長野県では塩尻市、川上村、八ヶ岳に記録がある（長野県, 2005）。

【生育地の現況】

山地の腐植上などに点在する。長野県八ヶ岳ではカラマツ林床に大きな群落が発達している（長野県, 2005）。その他の生育地の詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

生育地付近の森林伐採で生育環境が損なわれる心配がある。

要因の区分：	(過去)	森林伐採
	(現在)	森林伐採

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	テヅカチョウチンゴケ（アズミチョウチンゴケ）	<i>Plagiomnium tezukae</i> (Sakurai) T.J.Kop.	VU
第4次 2019:	テヅカチョウチンゴケ（アズミチョウチンゴケ）	<i>Plagiomnium tezukae</i> (Sakurai) T.J.Kop.	VU
第4次 2018:	テヅカチョウチンゴケ（アズミチョウチンゴケ）	<i>Plagiomnium tezukae</i> (Sakurai) T.J.Kop.	VU
第4次 2017:	テヅカチョウチンゴケ（アズミチョウチンゴケ）	<i>Plagiomnium tezukae</i> (Sakurai) T.J.Kop.	VU
第4次 2015:	テヅカチョウチンゴケ（アズミチョウチンゴケ）	<i>Plagiomnium tezukae</i> (Sakurai) T.J.Kop.	VU
第4次:	テヅカチョウチンゴケ（アズミチョウチンゴケ）	<i>Plagiomnium tezukae</i> (Sakurai) T.J.Kop.	VU
第3次:	テヅカチョウチンゴケ（アズミチョウチンゴケ）	<i>Plagiomnium tezukae</i> (Sakurai) T.J.Kop.	VU
第2次:	テヅカチョウチンゴケ（アズミチョウチンゴケ）	<i>Plagiomnium tezukae</i> (Sak.) Kop.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 有川智己・平岡照代・木口博史・平岡正三郎，2006．コケ植物．高桑正敏・勝山輝男・木場英久（編），神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006．pp.131-145．神奈川県立生命の星・地球博物館，小田原．

- 岩月善之助・出口博則・古木達郎，2001．日本の野生植物コケ．平凡社，東京．355pp., 192pls.
- 神山隆之・鈴木 直，2010．栃木県で新たに見つかった絶滅危惧藓類 12 種．藓苔類研究，10: 18-20.
- 神田啓史，2000．テヅカチョウチンゴケ．環境庁（編），改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物－レッドデータブック－9 植物 II（維管束植物以外）．p. 56．自然環境研究センター，東京．
- 長野県環境保全研究所・長野県環境部自然保護課，2005．長野県版レッドデータブック-長野県の絶滅のおそれのある野生生物-非維管束植物編・植物群落編．205 pp．信州豊かな環境づくり県民会議，長野．
- Noguchi, A., 1989. Illustrated Moss Flora of Japan. Part 3. pp. 493-742. Hattori Bot. Lab., Nichinan.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Plagiomnium tezukae has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Plagiomnium tezukae* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area Mid-altitude area Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting
Law designation status for conservation	—

執筆者: 有川智己（慶應義塾大学）
Author: Tomotsugu Arikawa

公表年月：2025 年 3 月

ツブツブヘチマゴケ

Pohlia drummondii (Müll.Hal.) A.L.Andrews

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD) ②

基準 A: —	基準 B: データ不足	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

②生育地が局限されている。

【判断理由】

高山の日当たりのよい土上に生育し、生育地が局限されていると考えられるが、これまで見逃されていたため報告例が少ないと考えられる。調査を進めると新たな生育地が見つかる可能性がある。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

ツブツブヘチマゴケは富山県と鹿児島県に分布する。腐植土上に生育する。茎は分枝せず、披針形の葉を密につける。中肋は1本で長く、葉頂下で終わる。上部の葉腋には1個の大型で、小さな葉を上部から下部にもつ無性芽をつける。第5次レッドリスト作成のための調査では富山県立山で確認された。分布が局在し、生育地が登山道沿いにあるため人の踏みつけによって個体群の減少が懸念される。

協力者： 坂井奈緒子（富山市立科学博物館）

基礎情報

【形態】

植物体は直立し、茎の長さ約 7 mm。茎は分枝せず、披針形の葉を密につける。葉は長さ 0.9～1.2 mm、中肋は 1 本で長く、葉頂下で終わる。上部の葉腋には 1 個の大型で、小さな葉を上部から下部にもつ無性芽をつける。ヘチマゴケ属の他の種から、特徴的な無性芽を持つことで区別される。

【生活史】

雌雄異株。国内では孢子体は見つかっていない。葉腋に小さい葉をつけた球状の無性芽をつける。

【生育環境】

山地から亜高山の腐植土上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では富山県の立山と鹿児島県の屋久島に分布し、国外では北半球に広く分布し、南米のパタゴニアからも知られる。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト作成のための調査では、富山県立山で再確認された。

【生育地の現況】

登山道の木製階段上に生育していたものを、木の段ごと移植したものが歩道沿いに群落として維持されている。

【個体数の現況】

個体数は少ない。

存続を脅かす要因

産地が局限し、生育地が登山道沿いにあるため人の踏みつけによって絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	人の踏みつけ、分布・産地局限
	(現在)	人の踏みつけ、分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ツブツブヘチマゴケ	<i>Pohlia drummondii</i> (Müll.Hal.) A.L.Andrews	CR+EN
第4次 2019:	ツブツブヘチマゴケ	<i>Pohlia drummondii</i> (Müll.Hal.) A.L.Andrews	CR+EN
第4次 2018:	ツブツブヘチマゴケ	<i>Pohlia drummondii</i> (Müll.Hal.) A.L.Andrews	CR+EN
第4次 2017:	ツブツブヘチマゴケ	<i>Pohlia drummondii</i> (Müll.Hal.) A.L.Andrews	CR+EN
第4次 2015:	ツブツブヘチマゴケ	<i>Pohlia drummondii</i> (Müll.Hal.) A.L.Andrews	CR+EN
第4次:	ツブツブヘチマゴケ	<i>Pohlia drummondii</i> (Müll.Hal.) A.L.Andrews	CR+EN
第3次:	ツブツブヘチマゴケ	<i>Pohlia drummondii</i> (Müll.Hal.) Andrews	CR+EN
第2次:	和名なし	<i>Calymperes strictifolium</i> (Mitt.) Roth Syn. <i>C. tuberosum</i> (Ther. et Dix.) Broth.	DD
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

富山県[情報不足] 奈良県[希少種] 山口県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 秋山弘之・山口富美夫, 2006. アジア産蘚苔類分類・生態ノート, 13: ツブツブヘチマゴケは九州・屋久島に隔離的に分布する. 蘚苔類研究, 9: 15-116.
- 秋山弘之, 1996. アジア産蘚苔類分類・生態ノート, 6. 日本新産のヘチマゴケ属植物: ツブツブヘチマゴケ. 植物分類・地理, 47: 125-126.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Pohlia drummondii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Pohlia drummondii* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Human trampling, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	山口富美夫（広島大学）
Author:	Tomio Yamaguchi

公表年月：2025 年 3 月

ホソバゴケ

Schizymenium japonicum (Besch.) Tad.Suzuki

カテゴリー判定結果		情報不足 (DD)			②④
基準 A: —	基準 B: データ不足	基準 C: —	基準 D: データ不足	基準 E: —	
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。					
②生育地が局限されている。					
【判断理由】					
高山の岩陰に点在する。					
④生活史の一部又は全部で特殊な環境条件を必要としている。					
【判断理由】					
火山地帯にのみ生育し、火山活動により生育量が変動する。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

ホソバゴケは、火山地帯の硫気孔近くの岩上に生える蘚類。国外では中国、極東ロシアに分布し、国内では北海道、本州、四国の火山地帯から報告がある。長野県御嶽山頂では 1979 年の噴火以降増えたと言われていたが、2011 年の調査では、それまでに比べて 10 分の 1 に減少していた。火山の噴火により生育量が変動するようである。

協力者： 立石幸敏（岡山コケの会）・木口博史（岡山コケの会）・鈴木直（服部植物研究所）

基礎情報

【形態】

茎は長さ 3 mm 以下で、光沢のある密なマットを作る。葉は卵状披針形。葉縁に舷はなく、平坦で、上部に鋸歯がある。中肋は葉先近くで終わる。葉身細胞は薄壁で、表面に微細な肥厚（ベルカ）がある。同属のコシノシンジゴケ *Schizymenium sasaokae* とは細胞が六角形～菱形で中肋が葉先近くで終わり、より小型なことなどで区別される。

【生活史】

雌雄異株。生殖器官は茎の基部の短い側枝にできる。

【生育環境】

火山地帯の硫気孔近くの岩上に生える。

生育環境区分：	【陸域_高標高地 中標高地】砂地・風衝地、岩壁・ガレ場（石灰岩地等）
国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では北海道、本州、四国に分布し、国外では中国、極東ロシアに分布している。

現在の生育状況

【分布域の現況】

北海道、本州、四国の火山地帯から局所的に報告がある。長野県御嶽山頂では 1979 年～2011 年の調査で生育が確認されている。ほかに、2005 年の調査では栃木県那須茶臼岳と埼玉県秩父市中津川で生育が確認されている。青森県では八甲田山で記録されている（Deguchi, 1981; 太田, 2020）。

【生育地の現況】

長野県御嶽山頂では火山の噴火により生育量が変動している。

【個体数の現況】

長野県御嶽山頂では 1979 年の爆発以降、生育量が増えたと言われており、1995 年、1999 年、2005 年の調査の際には生育量の変化は認められなかったが、2011 年の調査の際、それまでに比べて 10 分の 1 に減少していることが確認されている。その他の生育地の詳細については不明。

存続を脅かす要因

火山の噴火や、着生基物となっている石垣の改修により生育地が損なわれる心配がある。青森県レッドデータブック（太田, 2020）では大気汚染が挙げられている。

要因の区分：	（過去）	自然災害、大気汚染、基質・基物の減少及び消失

	(現在)	自然災害, 大気汚染, 基質・基物の減少及び消失

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ホソバゴケ	<i>Mielichhoferia japonica</i> Besch.	VU
第4次 2019:	ホソバゴケ	<i>Mielichhoferia japonica</i> Besch.	VU
第4次 2018:	ホソバゴケ	<i>Mielichhoferia japonica</i> Besch.	VU
第4次 2017:	ホソバゴケ	<i>Mielichhoferia japonica</i> Besch.	VU
第4次 2015:	ホソバゴケ	<i>Mielichhoferia japonica</i> Besch.	VU
第4次:	ホソバゴケ	<i>Mielichhoferia japonica</i> Besch.	VU
第3次:	ホソバゴケ	<i>Mielichhoferia japonica</i> Besch.	VU
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

青森県[希少野生生物（Cランク）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Deguchi, H., 1981. Mosses of Mts. Hakkoda, Northern Japan. Ecological Review, 19: 87-235.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- 神田啓史, 2010. ホソバゴケ. 改訂レッドリスト付属説明資料 蘚苔類. p. 7. 環境省自然環境局野生生物課, 東京.
- Noguchi, A., 1988. Illustrated Moss Flora of Japan. Part 2. pp. 243-491. Hattori Bot. Lab., Nichinan.
- 太田正文, 2020. 蘚苔類. 青森県レッドデータブック改訂検討会（編）, 青森県の希少な野生生物 青森県レッドデータブック（2020年版）. pp. 119-133. 青森県, 青森.
- Suzuki, T., 2014. Notes on Bryaceae (Bryopsida) in Japan. Hattoria, 5: 51-70.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Schizymenium japonicum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Schizymenium japonicum* is listed as DD under criteria ②④.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

④Specialized habitats are required at some or all stages of its life history

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area Mid-altitude area】 Sandy area/Wind-eroded area, Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Natural disasters, Air pollution, Reduction or loss of substrate
Law designation status for conservation	—

執筆者: 有川智己（慶應義塾大学）
Author: Tomotsugu Arikawa

公表年月：2025 年 3 月

イブキタチヒダゴケ

Orthotrichum cupulatum Brid.

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD) ②				
基準 A: データ不足	基準 B: データ不足	基準 C: データ不足	基準 D: データ不足	基準 E: —
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。 ②生育地が局限されている。 【判断理由】 全国 4 県の RDB で扱われており、全国に 7 か所程度から報告があるが、近年確認されていて、確実に現存すると思われるのは滋賀県伊吹山周辺のみ。極めて生育地が局限されており、近年の確認や情報集約が十分にされていない。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

イブキタチヒダゴケは本州の 7 か所程度から報告がある日本固有の岩上生の蘚類だが、確実に現存すると思われるのは滋賀県伊吹山周辺のみで、近年の確認や情報集約が十分にされていない。

基礎情報

【形態】

外見はタチバヒダゴケ *Orthotrichum sordidum* に似るが、より大きく、葉縁がより強く巻き、気孔が沈生し、外蒴歯がわずかに分かれる点で区別できる。岩上生で、蒴はやつと苞葉の上に出る。蒴柄は短い。

【生活史】

雌雄同株（異苞）。

【生育環境】

岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

本州（島根県から新潟県にかけて）。

現在の生育状況

【分布域の現況】

Noguchi (1968) に挙がっている産地は、新潟県佐渡島金北山、滋賀県伊吹村、兵庫県養父郡関宮村、鳥取県大山、広島県三次市、島根県隠岐の島五箇村。しかし Suzuki (2014) が確認しているのは伊吹山近傍の滋賀県霊仙山のみ。長野県、滋賀県、鳥取県、広島県のレッドデータブックに挙げられている。すなわち、全国にのべ7か所の生育が期待されるのだが、滋賀県伊吹山周辺から継続的に生育が報告されている（滋賀県 RDB; 埴田・葛山, 2011）以外は、近年の確認が全くされていない。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

森林伐採により周辺環境が変化し消失することが心配される。

要因の区分：	(過去)	森林伐採
	(現在)	森林伐採

特記事項

Suzuki (2014) は 29 種の本属植物を日本新産として報告し、本種については世界中に分布する *Orthotrichum cupulatum* のシノニムとした。本種の分類学的な評価を再検討する必要がある。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	イブキタチヒダゴケ	<i>Orthotrichum ibukiense</i> Toyama	DD
第4次 2019:	イブキタチヒダゴケ	<i>Orthotrichum ibukiense</i> Toyama	DD
第4次 2018:	イブキタチヒダゴケ	<i>Orthotrichum ibukiense</i> Toyama	DD
第4次 2017:	イブキタチヒダゴケ	<i>Orthotrichum ibukiense</i> Toyama	DD
第4次 2015:	イブキタチヒダゴケ	<i>Orthotrichum ibukiense</i> Toyama	DD
第4次:	イブキタチヒダゴケ	<i>Orthotrichum ibukiense</i> Toyama	DD
第3次:	イブキタチヒダゴケ	<i>Orthotrichum ibukiense</i> Toyama	DD
第2次:	イブキタチヒダゴケ	<i>Orthotrichum ibukiense</i> Toy.	DD
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

長野県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）] 滋賀県[分布上重要種] 鳥取県[情報不足（DD）] 広島県[情報不足（DD）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Noguchi, A., 1968. Musci Japonici. VIII. The genus *Orthotrichum*. Journ. Hattori Bot. Lab., 31: 113-129.
- Suzuki T., 2014. Notes on *Orthotrichum* (Orthotrichaceae, Bryopsida) in Japan. Hattoria, 5: 1-50.
- 埜田宏・葛山博次, 2011. イブキタチヒダゴケ 滋賀県生きものの総合調査委員会（編）, 滋賀県で大切にすべき野生生物 滋賀県レッドデータブック 2010 年版. p. 269. サンライズ出版, 彦根市.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Orthotrichum cupulatum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Orthotrichum cupulatum* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data,

including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting
Law designation status for conservation	—

執筆者: 有川智己（慶應義塾大学）
Author: Tomotsugu Arikawa

公表年月：2025 年 3 月

ヒログチキンモウゴケ

Ulota eurystoma Nog.

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD)

②

基準 A: —

基準 B: データ不足

基準 C: —

基準 D: —

基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

②生育地が局限されている。

【判断理由】

既知の確かな生育地についての情報が限られている。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

ヒログチキンモウゴケは、日本と中国に分布する蘚類で、カラフトキンモウゴケに似るが、蒴はふたが取れて乾くと広く開口し、ほぼ半球形になることと、蒴歯は 16 本であることで区別できる。本州から九州にかけて分布しているとされており、2005 年の調査では三重県美杉村（現、津市）平倉山でわずかに確認されたが、それ以外の確かな記録は不明。森林伐採により生育地の存続が心配される。

協力者： 鈴木直（服部植物研究所）

基礎情報

【形態】

木の枝の上に密な塊を作る。茎は立ち、高さ約 1 cm、まばらに分枝する。葉は密につき、乾くと強く縮れる。蒴柄は長く 2 mm 以上で、蒴は苞葉からはっきり抜け出る。蒴はふたが取れて乾くと広く開口し、ほぼ半球形になる。蒴齒は 16 本で離れ、対をなさないことが多い。雌苞葉は普通葉よりずっと小型で円頭。全形はカラフトキンモウゴケ *Ulota crispa* に似るが、カラフトキンモウゴケは蒴が円筒形で広く開口せず、蒴齒が 8 本であることで区別できる。

【生活史】

雌雄同株（異苞）。

【生育環境】

山地の樹上に着生する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では本州から九州にかけて分布しているとされている（Iwatsuki, 1959; Noguchi, 1989; 岩月ほか, 2001）が、タイプロカリティである三重県津市美杉町平倉峰以外の具体的な生育地はわからない。微小で見つけにくく、記録が十分でない。国外では中国に分布している。

現在の生育状況

【分布域の現況】

2005 年の調査ではタイプロカリティの三重県美杉村（現、津市）平倉山でわずかに確認されているが、他の確かな記録は不明。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。希な種。大部分の生育地で存続が心配される。

存続を脅かす要因

山地の樹上に生育するが、生育地での森林伐採により生育地の存続が心配される。

要因の区分：	（過去）	森林伐採
	（現在）	森林伐採

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ヒログチキンモウゴケ	<i>Ulotia eurystoma</i> Nog.	VU
第4次 2019:	ヒログチキンモウゴケ	<i>Ulotia eurystoma</i> Nog.	VU
第4次 2018:	ヒログチキンモウゴケ	<i>Ulotia eurystoma</i> Nog.	VU
第4次 2017:	ヒログチキンモウゴケ	<i>Ulotia eurystoma</i> Nog.	VU
第4次 2015:	ヒログチキンモウゴケ	<i>Ulotia eurystoma</i> Nog.	VU
第4次:	ヒログチキンモウゴケ	<i>Ulotia eurystoma</i> Nog.	VU
第3次:	ヒログチキンモウゴケ	<i>Ulotia eurystoma</i> Nog.	VU
第2次:	ヒログチキンモウゴケ	<i>Ulotia eurystoma</i> Nog.	DD
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

奈良県[希少種] 和歌山県[準絶滅危惧（NT）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岩月善之助・出口博則・古木達郎，2001．日本の野生植物コケ．平凡社，東京．355pp., 192pls.
- Noguchi, A., 1989. Illustrated Moss Flora of Japan. Part 3. pp. 493-742. Hattori Bot. Lab., Nichinan.
- 山田耕作，2015．セン・タイ類、三重県農林水産部みどり共生推進課（編），三重県レッドデータブック 2015 三重県の絶滅のおそれのある野生生物，pp. 659-690．三重県農林水産部みどり共生推進課，津．

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Ulotia eurystoma has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Ulotia eurystoma* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data,

including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting
Law designation status for conservation	—

執筆者: 有川智己（慶應義塾大学）
Author: Tomotsugu Arikawa

公表年月：2025 年 3 月

カメゴケモドキ

Zygodon viridissimus (Dicks.) Brid.

カテゴリー判定結果		情報不足 (DD)			①②
基準 A: —	基準 B: データ不足	基準 C: —	基準 D: データ不足	基準 E: —	
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。					
①どの生育地においても生育密度が低く希少である。					
【判断理由】					
それぞれの生育地で僅かに点在するのみ。					
②生育地が局限されている。					
【判断理由】					
点々としか見つかっておらず極めて稀。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

カメゴケモドキは、北半球に広く分布するが、国内では北海道と本州の山地の谷間などの樹幹に着生する。近年では、北海道、栃木県、埼玉県、神奈川県、山梨県、長野県、静岡県、奈良県などで確認されている。生育地が局限されており、生育量もわずかで、森林伐採により生育地の存続が心配される。

協力者： 堀清鷹（高知県立牧野植物園）

基礎情報

【形態】

植物体は小型で、高さ 1 cm 以下、葉は乾くと茎に接してあまり縮れない。葉は披針形で先端はやや急に短く尖り、長さ約 1 mm、葉縁は平坦でほとんど全縁、中肋は太いが葉頂よりはるか下で終わり、横断面でガイドセルは腹側の表面にある。しばしば葉腋に数細胞からなる楕円形で長さ 50~90 μm の無性芽をつける。

【生活史】

雌雄異株で国内では孢子体は非常にまれである。葉腋にできる無性芽で繁殖する。

【生育環境】

山地の谷間などの湿った場所の樹幹上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では北海道と本州に分布している。国外では、中国、ヒマラヤ、極東ロシア、ヨーロッパ、北アメリカ、中央アメリカ、北アフリカに分布している。基本変種は長野県、静岡県、神奈川県、栃木県で確認されており（立石, 2004; 有川ほか, 2006; 神山・鈴木, 2010）、変種ナメリカメゴケモドキは北海道、栃木県、埼玉県、長野県、山梨県、静岡県、奈良県で確認されている（堀・村上, 2012）。

現在の生育状況

【分布域の現況】

基本変種は長野県上高地（立石, 2004）、静岡県春野町川上（岩月, 2000）、神奈川県丹沢山（有川ほか, 2006）、栃木県日光市湯元と土呂部（神山・鈴木, 2010）で確認されており、変種ナメリカメゴケモドキは北海道帯広市と阿寒町（現、釧路市）（立石・松井, 2005）、栃木県日光市白根山、埼玉県白岩山、長野県上高地・菅平、山梨県忍野村、静岡県中川根町（現、川根本町）駿河徳山、奈良県大台ヶ原（土永, 1984）で確認されている（堀・村上, 2012）。第 4 次レッドリスト作成のための調査では、変種ナメリカメゴケモドキが長野県菅平の菅平湿原と大明神沢で確認されたが、基本変種は、1970 年にあったとされる菅平湿原では発見されなかった。

【生育地の現況】

神奈川県丹沢山ではブナ樹幹上に散在しているが生育状況はきわめて不良（有川ほか, 2006）。その他の生育地の詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

希な種で、いずれの生息地でも小さな群落である。生育地での森林伐採により生育地の存続が心配される。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 分布・産地局限

特記事項

無性芽に縦の隔壁がないものを変種ナメリカメゴケモドキ *Zygodon viridissimus* var. *rupestris* として、縦横両方の隔壁を持つ基本変種 *Zygodon viridissimus* var. *viridissimus* から区別するが、両者を別種とする考えもある。このレッドリストでは、両変種をあわせて種レベルで扱っている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	カメゴケモドキ	<i>Zygodon viridissimus</i> (Dicks.) Brid.	VU
第4次 2019:	カメゴケモドキ	<i>Zygodon viridissimus</i> (Dicks.) Brid.	VU
第4次 2018:	カメゴケモドキ	<i>Zygodon viridissimus</i> (Dicks.) Brid.	VU
第4次 2017:	カメゴケモドキ	<i>Zygodon viridissimus</i> (Dicks.) Brid.	VU
第4次 2015:	カメゴケモドキ	<i>Zygodon viridissimus</i> (Dicks.) Brid.	VU
第4次:	カメゴケモドキ	<i>Zygodon viridissimus</i> (Dicks.) Brid.	VU
第3次:	カメゴケモドキ	<i>Zygodon viridissimus</i> (Dicks.) Brid.	VU
第2次:	カメゴケモドキ	<i>Zygodon viridissimus</i> (Dicks.) Brid.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

栃木県[情報不足] 神奈川県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 長野県[絶滅危惧Ⅱ類 (VU)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 有川智己・平岡照代・木口博史・平岡正三郎, 2006. コケ植物. 高桑正敏・勝山輝男・木場英久 (編), 神奈川県レッドデータ生物調査報告書 2006. pp. 131-145. 神奈川県立生命の星・地球博物館, 小田原.
- 堀 清鷹・村上哲明, 2012. 山梨県でナメリカメゴケモドキを確認. 蘚苔類研究, 10: 261.
- 岩月善之助, 2000. カメゴケモドキ. 環境庁 (編), 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物ーレッドデータブックー9 植物 II (維管束植物以外). p. 160. 自然環境研究センター, 東京.
- 神山隆之・鈴木 直, 2010. 栃木県で新たに見つかった絶滅危惧蘚類 12 種. 蘚苔類研究, 10: 18-20.
- 立石幸敏, 2004. 上高地 (長野県南安曇郡安曇村) の蘚類. 岡山コケの会ニュース, 20: 41-46.
- 立石幸敏・松井眞治, 2005. ナメリカメゴケモドキ *Zygodon viridissimus* var. *rupestris* とサジバオウゴンゴケ *Leptodontium pergemmascens* は北海道にも産する. 蘚苔類研究, 9: 20-21.
- 土永浩史, 1984. 大台ヶ原産蘚類 2 種について. 日本蘚苔類学会会報, 3: 187.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Zygodon viridissimus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Zygodon viridissimus* is listed as DD under criteria ①②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 有川智己 (慶應義塾大学)

Author: Tomotsugu Arikawa

公表年月: 2025 年 3 月

コアブラゴケ

Thamniopsis utacamundiana (Mont.) W.R.Buck

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD) ②				
基準 A: —	基準 B: データ不足	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。				
②生育地が局限されている。				
【判断理由】				
国内では屋久島の山地、溪流沿いの岩上に生育していたことが報告されている。1967 年の報告以来、確認がされていない。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

コアブラゴケは国内では九州に、国外ではアジアの熱帯、亜熱帯に広く分布する小形の蘚類。

基礎情報

【形態】

柔らかい、黄緑色の偏平なマットを作る。茎は長さ 2-3 cm、茎、枝ともに這い、偏平に葉をつける。葉は乾いてもあまり縮れず、長さ 1.3-1.8 mm、卵形～やや狭い卵形で非相称、多少弓形になることがある。葉先は広く尖り、縁に明瞭な歯が並び、基部の片方の縁は内曲する。成長した茎の葉では葉面が部分的に紫褐色となることが多い。中肋は 2 本で長く、葉の中部、またはそれ以上に達することが、この属の重要な特徴である。葉身細胞は大きくてまばら、長い菱形～六角形で長さ 40-50 μm、幅 13-20 μm、薄壁。サオヒメゴケ (*Callicostella papillata* (Mont.) Mitt.) の葉も 2 本の長い中肋を持つが、葉身細胞には 1 個の大きなパピラがあるので区別できる。

【生活史】

雌雄同株（異苞）。国内では孢子体は見つかっていない。

【生育環境】

山地の自然林内の溪流近くの岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では屋久島に分布し、国外では中国を含むアジアの熱帯、亜熱帯に広く分布する。屋久島は本種の分布の北限である。

現在の生育状況

【分布域の現況】

詳細については不明。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

産地が局限しているため絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

本種の国内からの報告は Toyama (1937) と Iwatsuki & Sharp (1967) のみである。

旧レッドリストカテゴリと掲載名

第4次 2020:	コアブラゴケ	<i>Hookeriopsis utacamundiana</i> (Mont.) Broth.	CR+EN
第4次 2019:	コアブラゴケ	<i>Hookeriopsis utacamundiana</i> (Mont.) Broth.	CR+EN
第4次 2018:	コアブラゴケ	<i>Hookeriopsis utacamundiana</i> (Mont.) Broth.	CR+EN
第4次 2017:	コアブラゴケ	<i>Hookeriopsis utacamundiana</i> (Mont.) Broth.	CR+EN
第4次 2015:	コアブラゴケ	<i>Hookeriopsis utacamundiana</i> (Mont.) Broth. [= <i>Thamniopsis utacamundiana</i> (Mont.) W.R.Buck]	CR+EN
第4次:	コアブラゴケ	<i>Hookeriopsis utacamundiana</i> (Mont.) Broth. [= <i>Thamniopsis utacamundiana</i> (Mont.) W.R.Buck]	CR+EN
第3次:	コアブラゴケ	<i>Hookeriopsis utacamundiana</i> (Mont.) Broth. [= <i>Thamniopsis utacamundiana</i> (Mont.) W.R.Buck]	CR+EN
第2次:	コアブラゴケ	<i>Hookeriopsis utacamundiana</i> (Mont.) Broth. Syn. <i>Thamniopsis utacamundiana</i> (Mont.) Buck	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Iwatsuki, Z. and A. J. Sharp, 1967. Mosses of Yakushima Island, southern Japan. J. Hattori Bot. Lab., 30: 277-314.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 355pp., 192pls. 平凡社, 東京.
- Noguchi, A., 1991. Illustrated Moss Flora of Japan. Part 4. pp. 743-1012. Hattori Bot. Lab., Nichinan.
- Toyama, R., 1937. Specilegium muscologiae Asiae Orientalis. 2. Acta Phytotax. Geobot., 4: 213-219.
- 山口富美夫, 2015. コアブラゴケ. 環境省（編）, レッドデータブック 2014 ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー 9 植物 II（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）. p. 47. ぎょうせい, 東京.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Thamniopsis utacamundiana has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Thamniopsis utacamundiana* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 樋口正信 (国立科学博物館)
Author: Masanobu Higuchi

公表年月: 2025 年 3 月

ミハラシゴケ

Aerobryum speciosum Dozy & Molk. var. *nipponicum* Nog.

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD)

②

基準 A: —	基準 B: データ不足	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

②生育地が局限されている。

【判断理由】

これまでに伊豆の日金山と奄美大島湯湾岳山頂の 2 か所で報告されているが、それ以外の報告はない。伊豆からは 1931 年に採集されてから確認されていない。奄美大島では 2011 年に採集された標本があるが、それ以来確認されていない。いずれにしても、日本国内の分布は極めて限られると考えられる。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

大型の蘚類で、日本では静岡県伊豆および奄美大島のみから記録され、湿度の高い森林内の樹幹基部に生育する。奄美大島の産地では人為的な攪乱を受けやすい場所にあるため、今後の生存が危ぶまれる。

基礎情報

【形態】

大型でやや光沢のある柔らかな感じの蘚類で、茎は長く這うか、または基物から垂れ下がり、長さ 10～20 cm になり、不規則に枝分かれする。枝は葉を含めて幅 5～7 mm。葉は黄緑色でゆるく扁平に茎、枝につき、広い卵形で、長さ 3～4 mm、葉先は急に細く糸状に尖る。葉縁のほぼ全周に細かい歯がある。中肋は細いが、葉の中部以上に達する。葉身細胞は線形で、長さ 70～130 μm 、幅 6～8 μm 、平滑で壁は薄い。葉の基部の細胞は幅広く、厚壁でくびれがあるが、翼細胞は分化しない。本属の種は日本ではこの種のみである。

【生活史】

雌雄異株。孢子体は知られていない。

【生育環境】

本種は霧のかかりやすい、空中湿度の高い環境を好み、暖地の山頂域の森林内で、樹幹や竹の根元に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

中国、ブータン、インド、スリランカ、タイ、ベトナム、フィリピン、パプアニューギニアに分布し、日本からは伊豆（日金山）と奄美大島のみに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

伊豆からは 1911 年および 1931 年に採集された *Aerobryum speciosum* var. *nipponicum* の元となった標本以外は知られていない。奄美大島湯湾岳では、2011 年に採集された標本が広島大学植物標本庫に保管されているが、それ以来確認されていない。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

森林伐採や人の踏みつけによって生育環境の悪化が危惧される。また、産地が局限しているため絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 人の踏みつけ, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 人の踏みつけ, 分布・産地局限

特記事項

日本は分布の北限となっている。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ミハラシゴケ	<i>Aerobryum speciosum</i> Dozy & Molk. var. <i>nipponicum</i> Nog.	CR+EN
第4次 2019:	ミハラシゴケ	<i>Aerobryum speciosum</i> Dozy & Molk. var. <i>nipponicum</i> Nog.	CR+EN
第4次 2018:	ミハラシゴケ	<i>Aerobryum speciosum</i> Dozy & Molk. var. <i>nipponicum</i> Nog.	CR+EN
第4次 2017:	ミハラシゴケ	<i>Aerobryum speciosum</i> Dozy & Molk. var. <i>nipponicum</i> Nog.	CR+EN
第4次 2015:	ミハラシゴケ	<i>Aerobryum speciosum</i> (Dozy & Molk.) Dozy & Molk. var. <i>nipponicum</i> Nog.	CR+EN
第4次:	ミハラシゴケ	<i>Aerobryum speciosum</i> (Dozy & Molk.) Dozy & Molk. var. <i>nipponicum</i> Nog.	CR+EN
第3次:	コサナダゴケモドキ	<i>Aerobryum speciosum</i> (Dozy & Molk.) Dozy & Molk. var. <i>nipponicum</i> Nog.	CR+EN
第2次:	コサナダゴケモドキ	<i>Aerobryum speciosum</i> Dozy et Molk. var. <i>nipponicum</i> Nog.	DD
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- Noguchi, A. 1976. A taxonomic revision of the family Meteoriaceae of Asia. Journal of the Hattori Botanical Laboratory, 41: 231-357.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Aerobryum speciosum var. *nipponicum* has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Aerobryum speciosum* var. *nipponicum* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

② Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Human trampling, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	山口富美夫 (広島大学)
Author:	Tomio Yamaguchi

公表年月：2025 年 3 月

スギバシノブゴケ

Bryochenea vestitissima (Besch.) Touw

カテゴリー判定結果		情報不足 (DD)			①②
基準 A: —	基準 B: データ不足	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。					
①どの生育地においても生育密度が低く希少である。					
【判断理由】					
石灰岩地に転々と微量ずつみられるが、過去に記録があった地点でもみつからないことが多く、ほとんど情報がない。					
②生育地が局限されている。					
【判断理由】					
石灰岩地に転々と微量ずつみられるが、過去に記録があった地点でもみつからないことが多く、ほとんど情報がない。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

スギバシノブゴケは、日本、台湾、中国、ヒマラヤ、極東ロシアに分布する小型の蘚類で、第二次茎にも毛葉が生える。落葉広葉樹林帯の森林内の腐植土、石灰岩の崖に生育する。生育地付近の森林伐採や石灰採掘で生育地が失われるおそれがある。

基礎情報

【形態】

茎は3～6 cm、規則的に2～3回羽状に分岐する。毛葉は茎とすべての枝に多数生える。茎葉は三角形、先端で鋭く尖り、鎌状に曲がる。中肋は葉身の4/5に達し、背面にパピラがある。葉身細胞は方形～長方形、細胞に1個のパピラがある。葉先付近の細胞は平滑。枝葉はくぼみ、三角形～卵状三角形、短く尖る。シノブゴケ属 *Thuidium* に似るが、小さく繊細で、葉がまばらにつき、二次枝にも毛葉が生えていることが本種の特徴である。

【生活史】

雄花序は見つかっていない。雌雄性は不明 (Touw, 2001)。

【生育環境】

落葉広葉樹林帯の森林内の腐植土、石灰岩の崖に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林、岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では北海道、本州と四国に分布し、国外では、台湾、中国、ヒマラヤ、極東ロシアに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

田中 (2012) は産地として北海道日高、釧路、福島、群馬、埼玉、東京、長野、新潟、滋賀、徳島を挙げている。有川・木口 (2023) は鳥取県若桜町から県内新産として報告している。神奈川県からは40年以上前の文献記録があるのみ (有川, 2022)。岡山県でも1か所 (羅生門) から報告があるが現状は不明 (西村, 2022)。愛媛県では東赤石山から報告がある (弘田・松井, 2000)。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

生育地付近の森林伐採や石灰採掘で生育地が失われるおそれがある。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 石灰採掘
	(現在)	森林伐採, 石灰採掘

特記事項

本属には本種だけが含まれる (Touw, 2001)。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	スギバシノブゴケ	<i>Bryochenea vestitissima</i> (Besch.) Touw	VU
第4次 2019:	スギバシノブゴケ	<i>Bryochenea vestitissima</i> (Besch.) Touw	VU
第4次 2018:	スギバシノブゴケ	<i>Bryochenea vestitissima</i> (Besch.) Touw	VU
第4次 2017:	スギバシノブゴケ	<i>Bryochenea vestitissima</i> (Besch.) Touw	VU
第4次 2015:	スギバシノブゴケ	<i>Bryochenea vestitissima</i> (Besch.) Touw	VU
第4次:	スギバシノブゴケ	<i>Bryochenea vestitissima</i> (Besch.) Touw	VU
第3次:	スギバシノブゴケ	<i>Bryochenea vestitissima</i> (Besch.) Touw	VU
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

福島県[希少(D)] 神奈川県[情報不足(DD)] 滋賀県[絶滅危機増大種] 奈良県[希少種] 鳥取県[絶滅危惧Ⅱ類(VU)] 岡山県[情報不足]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 有川智己・木口博史, 2023. スギバシノブゴケ. 永松大・鶴崎展巨・有川智己・(株) エスジーズ (編), レッドデータブックとっとり第3版 2022. p. 228. 鳥取県生活環境部緑豊かな自然課, 鳥取.
- 有川智己, 2022. コケ植物. 神奈川県環境農政局緑政部自然環境保全課・神奈川県立生命の星地球博物館 (編), 神奈川県レッドデータブック 2022 植物編. pp. 328-360, 神奈川県, 横浜.
- 藤田あゆな・立石幸敏・西村直樹, 2016. 赤石山系(愛媛県)の蘚類への追加. *Naturalistae*, 20: 87-88.
- 弘田龍也・松井 透, 2000. 東赤石山(愛媛県)の蘚類相. 高知大学理学部紀要(生物学) 21: 1-23.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.

- 神田啓史, 2010. スギバシノブゴケ. 改訂レッドリスト付属説明資料 蘚苔類, p. 8. 環境省自然環境局野生生物課, 東京.
- 西村直樹, 2020. スギバシノブゴケ. 岡山県野生動植物調査検討会 (編), 岡山県レッドデータブック 2020 植物編. p345. 岡山県環境文化部自然環境課, 岡山.
- 田中敦司, 2012. 日本の石灰岩性蘚類. *Naturalistae*, 16: 47-82.
- Touw, A., 2001. A taxonomic revision of the Thuidiaceae (Musci) of tropical Asia, the western Pacific, and Hawaii. *J. Hattori. Bot. Lab.*, 91: 1-136.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Bryochenea vestitissima has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Bryochenea vestitissima* is listed as DD under criteria ①②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area Low-altitude area】 Forest, Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limestone mining
Law designation status for conservation	—

執筆者: 有川智己 (慶應義塾大学)
Author: Tomotsugu Arikawa

公表年月: 2025 年 3 月

オオヤマトイタチゴケ

Leucodon giganteus (Nog.) Nog.

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD) ③

基準 A: —	基準 B: データ不足	基準 C: —	基準 D: データ不足	基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

③生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。

【判断理由】

1930 年に採集されたタイプ標本 1 点のみで知られている種である。高知県大正町で唯一報告されていたが、1986 年の調査でも発見されず、その後の調査でも確認されていない。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

オオヤマトイタチゴケは日本固有種で、長さ 8 cm に達する大型の蘚類である。葉身細胞が強く肥厚することが特徴である。高知県大正町（現、四万十町）で唯一報告されていたが、その後の調査では確認されていない。

基礎情報

【形態】

植物体は剛強で大きく、もろくて光沢があり、第二次茎は長さ 50～80 mm に達し、弓形に斜上する。茎葉は卵形でいくらか鎌状に曲がり、先端は幅広く尖り、長さ約 3 mm になる。中部から上部にかけて葉細胞は線状～菱形で、壁は強く肥厚する。蒴柄は長さ 15～20 mm で短く、蒴は栗色で楕円形～卵形。外蒴齒は三角形～披針形で、不規則に 4 裂する。クロイタチゴケ *Leucodon atrovirens* に似るが、葉身細胞が強く肥厚すること、外蒴齒が 4 裂することで区別される。

【生活史】

詳細については不明。

【生育環境】

詳細については不明。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】その他

国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域

【分布域】

日本固有で、四国（高知県）に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

1930 年に採集されたタイプ標本 1 点のみで知られている。高知県大正町（現、四万十町）で唯一報告されていたが、1986 年の調査でも発見されず、その後の調査でも確認されていない。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

道路建設やダム建設によって生育地が消失する危険があり、産地が局限しているため絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	交通インフラ建設, ダム・河川工作物建設, 分布・産地局限
	(現在)	交通インフラ建設, ダム・河川工作物建設, 分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	オオヤマトイタチゴケ	<i>Leucodon giganteus</i> (Nog.) Nog.	CR+EN
第4次 2019:	オオヤマトイタチゴケ	<i>Leucodon giganteus</i> (Nog.) Nog.	CR+EN
第4次 2018:	オオヤマトイタチゴケ	<i>Leucodon giganteus</i> (Nog.) Nog.	CR+EN
第4次 2017:	オオヤマトイタチゴケ	<i>Leucodon giganteus</i> (Nog.) Nog.	CR+EN
第4次 2015:	オオヤマトイタチゴケ	<i>Leucodon giganteus</i> (Nog.) Nog.	CR+EN
第4次:	オオヤマトイタチゴケ	<i>Leucodon giganteus</i> (Nog.) Nog.	CR+EN
第3次:	オオヤマトイタチゴケ	<i>Leucodon giganteus</i> (Nog.) Nog.	CR+EN
第2次:	オオヤマトイタチゴケ	<i>Leucodon giganteus</i> (Nog.) Nog.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

掲載なし

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 秋山弘之, 2021. 新・コケ百選 第23回 イタチゴケ科・イトヒバゴケ科・ヒムロゴケ科（蘚類）. 蘚苔類研究, 12: 188-200.
- 野口 彰, 1947. 日本、琉球、台湾産イタチゴケ亜族及びメリンスゴケ亜族の研究 I. 服部植物研究所報告, 2: 27-79.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Leucodon giganteus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Leucodon giganteus* is listed as DD under criteria ③.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

③Distribution is biogeographically isolated (e.g., endemic species confined to a narrow range).	
Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Other
Threat types:	Transportation infrastructure construction, Dam/River structures construction, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	有川智己（慶應義塾大学）
Author:	Tomotsugu Arikawa

公表年月：2025 年 3 月

キタイタチゴケ

Leucodon sciuiroides (Hedw.) Schwägr.

カテゴリー判定結果		情報不足 (DD)			①②
基準 A: —	基準 B: データ不足	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —	
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。					
①どの生育地においても生育密度が低く希少である。					
【判断理由】					
近年では唯一の生育報告である南アルプスでの報告でも、極少量が確認されたのみである。					
②生育地が局限されている。					
【判断理由】					
報告がごく少ない。確実な報告は少ない。					
評価分科会： 蘚苔類分科会					

概要

キタイタチゴケは、北半球北部に広く分布する蘚類だが、日本国内では近年確実な報告はほとんどない。2016 年の調査では南アルプス赤石岳で極少量が確認された。

協力者： 山口富美夫（広島大学）

基礎情報

【形態】

二次茎は長さ 4 cm ほどで、立ち上がる。茎には中心束があり、茎葉は卵形で 2～2.6 mm 程度と短い。茎の翼部は、全長の半分以上に達する。前葉歯は 1 層。しばしば早落生の小枝を無性芽としてつける。

【生活史】

雌雄異株。

【生育環境】

東日本や北日本の日当たりの良い場所の孤立木の樹幹などに生育（秋山, 2021）。

生育環境区分：	【陸域_高標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

北海道～九州。北半球の北部。

現在の生育状況

【分布域の現況】

2016 年の調査では南アルプス赤石岳（赤石沢）で確認されている。奈良県 RDB で希少種、鳥取県 RDB で情報不足（DD）とされているが、鳥取県では 100 年以上確認されていない（有川, 2023）。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

赤石岳では 10 cm² ～20 cm² 程度の極少量が確認された。その他の生育地の詳細については不明。

存続を脅かす要因

森林伐採により着生木やその周辺の環境が損なわれることで存続が脅かされる。

要因の区分：	(過去)	森林伐採
	(現在)	森林伐採

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	キタイタチゴケ	<i>Leucodon sciuroides</i> (Hedw.) Schwägr.	DD
第4次 2019:	キタイタチゴケ	<i>Leucodon sciuroides</i> (Hedw.) Schwägr.	DD
第4次 2018:	キタイタチゴケ	<i>Leucodon sciuroides</i> (Hedw.) Schwägr.	DD
第4次 2017:	キタイタチゴケ	<i>Leucodon sciuroides</i> (Hedw.) Schwägr.	DD
第4次 2015:	キタイタチゴケ	<i>Leucodon sciuroides</i> (Hedw.) Schwägr.	DD
第4次:	キタイタチゴケ	<i>Leucodon sciuroides</i> (Hedw.) Schwägr.	DD
第3次:	キタイタチゴケ	<i>Leucodon sciuroides</i> (Hedw.) Schwägr.	DD
第2次:	キタイタチゴケ	<i>Leucodon sciuroides</i> (Hedw.) Schwägr.	DD
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

奈良県[希少種] 鳥取県[情報不足（DD）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 秋山弘之, 2021. 新・コケ百選 第23回 イタチゴケ科・イトヒバゴケ科・ヒムロゴケ科（蘚類）. 蘚苔類研究, 12: 188-200.
- 有川智己, 2023. キタイタチゴケ. 永松 大・鶴崎展巨・有川智己・エスジーズ（編）, レッドデータブックとっとり第3版 2022 鳥取県の絶滅のおそれのある野生動植物, p. 228. 鳥取県.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Leucodon sciuroides has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Leucodon sciuroides* is listed as DD under criteria ①②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

①Low population density and rarity are exhibited in all habitats where it occupies.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area】 Forest

Threat types:	Logging and wood harvesting
Law designation status for conservation	—

執筆者:	有川智己（慶應義塾大学）
Author:	Tomotsugu Arikawa

公表年月：2025 年 3 月

ヨコグライタチゴケ

Leucodon sohayakiensis H.Akiyama

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD) ②

基準 A: —	基準 B: データ不足	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

②生育地が局限されている。

【判断理由】

九州・四国・近畿南部の石灰岩地（ソハヤキ地域の一部）にのみ産地は限定される。これまで 5 か所での生育が報告されたのみ。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

ヨコグライタチゴケは、キイタチゴケに似るが、乾くと茎葉が圧着して茎が円柱状になることや、葉の長さが短いことで区別できる。日本固有で、九州・四国・近畿南部の石灰岩地（ソハヤキ地域の一部）にのみ産地が限定され、これまで 5 か所での生育が報告されたのみ。産地が局限しており、森林伐採により絶滅が心配される。

基礎情報

【形態】

植物体は光沢のない黄緑色を帯び、第一次茎は匍匐し、密に分枝し、第二次茎の先端は尾状になり、長さ約 7 cm に達する。二次茎の中心束は欠く。偽毛葉は少なく、披針形、葉腋毛は 4 細胞からなる。茎葉は長楕円形～卵形、長さ 3 mm になり、先端は尖る。葉縁は全縁、先端付近に細鋸歯がある。葉身細胞は紡錘形で厚壁。蒴柄は長さ 3.5～5.5 mm。蒴は褐色で卵形。本種はキイタチゴケ *Leucodon luteus* に似るが、乾くと茎葉が茎に圧着し、その結果茎が円柱状になること、葉の長さが 2.4～2.8 mm と短いことなどで区別できる。(山口, 2014)

【生活史】

雌雄異株。

【生育環境】

石灰岩地の樹幹や岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

日本固有で、九州・四国・近畿南部の石灰岩地（ソハヤキ地域の一部）にのみ産地は限定される（秋山, 2011）。Akiyama (1988) は、和歌山県那智山、徳島県那賀町沢谷、高知県石立山、横倉山、熊本県人吉市矢岳の標本を挙げている。

現在の生育状況

【分布域の現況】

Akiyama (1988) は、和歌山県那智山、徳島県那賀町沢谷、高知県石立山、横倉山、熊本県人吉市矢岳の標本を挙げている。第 4 次レッドリスト作成のための調査でも第 5 次レッドリスト作成のための調査でも、確認されていない。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

森林伐採によって生育環境の変化が心配される。また、産地が局限しているため絶滅が危惧される。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 石灰採掘, 分布・産地局限

	(現在)	森林伐採, 石灰採掘, 分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ヨコグライタチゴケ	<i>Leucodon sohayakiensis</i> H.Akiyama	CR+EN
第4次 2019:	ヨコグライタチゴケ	<i>Leucodon sohayakiensis</i> H.Akiyama	CR+EN
第4次 2018:	ヨコグライタチゴケ	<i>Leucodon sohayakiensis</i> H.Akiyama	CR+EN
第4次 2017:	ヨコグライタチゴケ	<i>Leucodon sohayakiensis</i> H.Akiyama	CR+EN
第4次 2015:	ヨコグライタチゴケ	<i>Leucodon sohayakiensis</i> H.Akiyama	CR+EN
第4次:	ヨコグライタチゴケ	<i>Leucodon sohayakiensis</i> H.Akiyama	CR+EN
第3次:	ヨコグライタチゴケ	<i>Leucodon sohayakiensis</i> H.Akiyama	CR+EN
第2次:	ヨコグライタチゴケ	<i>Leucodon sohayakiensis</i> Akiyama	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

和歌山県[情報不足（DD）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Akiyama, H., 1988. Studies on *Leucodon* (Leucodontaceae, Musci) and related genera in East Asia, IV. Taxonomic revision of *Leucodon* in East Asia. J. Hattori Bot. Lab., 65: 1-80.
- 秋山弘之, 2021. 新・コケ百選 第23回 イタチゴケ科・イトヒバゴケ科・ヒムロゴケ科（蘚類）. 蘚苔類研究, 12: 188-200.
- 山口富美夫, 2015. ヨコグライタチゴケ. 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室（編）, レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—9 植物 II（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）, p. 57, ぎょうせい, 東京.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Leucodon sohayakiensis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Leucodon sohayakiensis* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limestone mining, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 有川智己（慶應義塾大学）
Author: Tomotsugu Arikawa

公表年月：2025 年 3 月

ホソヒモゴケ

Meteorium papillarioides Nog.

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD)

②

基準 A: —

基準 B: データ不足

基準 C: —

基準 D: —

基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

②生育地が局限されている。

【判断理由】

これまで国内からは熊本県、福岡県、山口県から報告されているが、1998年に熊本県で採集されて以来、日本からの報告はない。いずれにしても生育地は局限しており、生育状況については、今後さらに調査する必要がある。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

日本で記載され、中国にも分布する。石灰岩上に生育するが、日本では本州と九州の少数の地点から報告があるだけである。

基礎情報

【形態】

茎は這い、全体がひものように見える。本属の種としては小型で、黄緑色であるが、古い部分は黒くなる。茎は 50 mm くらいになり、不規則に分枝する。枝は短く、長さ 5～10 mm、丸く葉をつけ、枝先は尖る。枝は乾くと曲がる。葉は卵形で凹み、葉先は漸尖し、基部はやや耳状、長さ 1.5～2.0 mm、幅 0.7～1.2 mm。中肋は葉の中部に達する。葉身中部の細胞は楕円形ないし菱形、長さ 12～18 μm 、幅 5～6 μm の大きさ、各細胞の中央に 1 個の大きなパピラがある。葉の先端部の細胞は長く、20～35 μm 。植物体が比較的小型で細いこと、葉先が短く漸尖すること、葉身細胞が楕円形～菱形であることなどで、同属の他種から区別できる。

【生活史】

雌雄異株。孢子体は知られていない。

【生育環境】

石灰岩地の石灰岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林、岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では本州、九州に分布し、国外では中国に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第 5 次レッドリスト作成のための調査では確認できなかった。詳細については不明。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

石灰採掘や道路建設などによる森林伐採により、生育環境の悪化や生育地の消失が危惧される。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 石灰採掘, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 石灰採掘, 分布・産地局限

特記事項

本種は、初め熊本県芦北町と球磨村から報告され（Noguchi 1976, 1989）、その後福岡県、山口県のほか、中国大陸の数か所に分布することが確認された。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ホソヒモゴケ	<i>Meteorium papillarioides</i> Nog.	CR+EN
第4次 2019:	ホソヒモゴケ	<i>Meteorium papillarioides</i> Nog.	CR+EN
第4次 2018:	ホソヒモゴケ	<i>Meteorium papillarioides</i> Nog.	CR+EN
第4次 2017:	ホソヒモゴケ	<i>Meteorium papillarioides</i> Nog.	CR+EN
第4次 2015:	ホソヒモゴケ	<i>Meteorium papillarioides</i> Nog.	CR+EN
第4次:	ホソヒモゴケ	<i>Meteorium papillarioides</i> Nog.	CR+EN
第3次:	ホソヒモゴケ	<i>Meteorium papillarioides</i> Nog.	CR+EN
第2次:	ホソヒモゴケ	<i>Meteorium papillarioides</i> Nog.	VU
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

山口県[情報不足（DD）] 熊本県[絶滅危惧 I B 類（EN）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Noguchi, A., 1976. Noguchi, A., 1976. A taxonomic revision of the family Meteoriaceae of Asia. J. Hattori Bot. Lab., 41: 231-357. Jouranl of the Hattori Botanical Laboratory, 41: 231-357.
- Noguchi, A., 1989. Noguchi, A., 1989. Illustrated Moss Flora of Japan. Part 3. pp. 493-742. Hattori Botanical Laboratory, Nichinan.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Meteorium papillarioides has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Meteorium papillarioides* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data,

including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest, Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limestone mining, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	山口富美夫（広島大学）
Author:	Tomio Yamaguchi

公表年月：2025 年 3 月

ハナシタチヒラゴケ

Homaliadelphus targionianus (Mitt.) Dixon & P.de la Varde var. *laevidentatus* (S.Okamura) Nog.

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD)

②

基準 A: —

基準 B: データ不足

基準 C: —

基準 D: —

基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

②生育地が局限されている。

【判断理由】

これまでに報告された地点が 5 か所のみ。しかし、それらが現存しているかも分からないし、他に未知の地点があるかもしれない。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

ハナシタチヒラゴケは、形態的にヒメタチヒラゴケ *Homaliadelphus targionianus* var. *rotundatus* に非常によく似ている。本州、四国、九州から報告されているが、産地は少ない。

基礎情報

【形態】

ヒメタチヒラゴケ *Homaliadelphus targionianus* var. *rotundatus* に似るが、植物体はヒメタチヒラゴケよりやや小型で、葉は倒卵円形となり、蒴柄は 1.5～3 mm と短い。ヒメタチヒラゴケが石灰岩上に生育するのに対し、本種は石灰岩地域の石灰岩のほか、非石灰岩上あるいは樹幹上にも生育する。

【生活史】

雌雄異株。雄植物体は小型の矮雄となり、雌植物体の葉上に生育する。

【生育環境】

石灰岩地の樹幹、石灰岩あるいは非石灰岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林、岩壁・ガレ場（石灰岩地等）
国土地域区分：	(2) 里地里山・田園地域

【分布域】

国内では本州、四国、九州に分布し、国外では極東ロシアに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

原記載（野口, 1950）で引用されている標本の産地は、陸前太白山（宮城県）、上野ミクリ村（群馬県）、安芸福王寺山（広島県）、出雲清水寺（島根県）、土佐杉村（高知県）。しかし、それ以降に本変種であるとする確実な記録は見当たらない。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

森林伐採や石灰採掘によって生育環境の変化、生育地の減少、消失が危惧される。また、産地が局限しているため地域絶滅する可能性がある。

要因の区分：	（過去）	森林伐採、石灰採掘、分布・産地局限
	（現在）	森林伐採、石灰採掘、分布・産地局限

特記事項

この変種について、原記載以降に有意な記録を見いだせていない。過去の記録に基づ

いてリストアップされているだけの可能性があり、本当に変種として認められるのか検討する余地がある。分類学的再検討が望まれる。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ハナシタチヒラゴケ	<i>Homaliadelphus targionianus</i> (Mitt.) Dixon & P.de la Varde var. <i>laevidentatus</i> (S.Okamura) Nog.	CR+EN
第4次 2019:	ハナシタチヒラゴケ	<i>Homaliadelphus targionianus</i> (Mitt.) Dixon & P.de la Varde var. <i>laevidentatus</i> (S.Okamura) Nog.	CR+EN
第4次 2018:	ハナシタチヒラゴケ	<i>Homaliadelphus targionianus</i> (Mitt.) Dixon & P.de la Varde var. <i>laevidentatus</i> (S.Okamura) Nog.	CR+EN
第4次 2017:	ハナシタチヒラゴケ	<i>Homaliadelphus targionianus</i> (Mitt.) Dixon & P.de la Varde var. <i>laevidentatus</i> (S.Okamura) Nog.	CR+EN
第4次 2015:	ハナシタチヒラゴケ	<i>Homaliadelphus targionianus</i> (Mitt.) Dixon & P.Vard. var. <i>laevidentatus</i> (S.Okamura) Nog.	CR+EN
第4次:	ハナシタチヒラゴケ	<i>Homaliadelphus targionianus</i> (Mitt.) Dixon & P.Vard. var. <i>laevidentatus</i> (S.Okamura) Nog.	CR+EN
第3次:	ハナシタチヒラゴケ	<i>Homaliadelphus targionianus</i> (Mitt.) Dixon & P.Vard. var. <i>laevidentatus</i> (Okam.) Nog.	CR+EN
第2次:	ハナシタチヒラゴケ	<i>Homaliadelphus laevidentatus</i> (Okam.) Z. Iwats.	DD
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

大阪府[CR+EN] 奈良県[希少種]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Noguchi, A., 1950. A review of Leucodontineae and Neckerineae of Japan, Loo Choo and of Formosa, III. J. Hattori Bot. Lab., 4: 1-48.

- Noguchi, A., 1989. Illustrated Moss Flora of Japan. Part 3. pp. 493-742., Hattori Bot. Lab., Nichinan.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Homaliadelphus targionianus var. *laevidentatus* has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Homaliadelphus targionianus* var. *laevidentatus* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest, Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limestone mining, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 有川智己 (慶應義塾大学)
Author: Tomotsugu Arikawa

公表年月：2025 年 3 月

ヤクシマナワゴケ

Oedicladium rufescens (Reinw. & Hornsch.) Mitt. var. *yakushimense* (Sakurai) Z.Iwats.

カテゴリ判定結果 情報不足 (DD) ②

基準 A: —	基準 B: —	基準 C: —	基準 D: データ不足	基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

②生育地が局限されている。

【判断理由】

紀伊半島南部から四国、九州の湿潤な谷沿いの森の岩上に点々と分布している。大型のコケで色が独特で生育していれば見つけやすいが、多くは見つかっておらず、産地は限られている。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

ヤクシマナワゴケは、大型でやや暗い黄緑色、時に赤色を帯びた光沢のあるマットを作る蘚類。変種としては日本固有。紀伊半島南部から四国、九州の湿潤な谷沿いの森の岩上に点々と分布している。2017年に徳島県から四国新産として報告された。2016年には屋久島で確認され、第5次レッドリストの現地調査では、2018年に和歌山県で確認されている

協力者： 土永浩史（日本蘚苔類学会）

基礎情報

【形態】

植物体は大型でやや暗い黄緑色、時に赤色を帯びた光沢のあるマットを作る。色が独特なので生育していれば見つけやすい。葉は密につき、乾くと茎に接着し、楕円状卵形で深く凹み、先は急に細く針状に尖り、全長 3～4 mm。葉縁上部は広く内曲し、小歯がある。葉身細胞は厚壁でところどころにくびれがある。葉の基部は黄褐色、翼細胞は方形、褐色～黄褐色の明瞭な区画を作る。日本産の標本は植物体が大型で、葉先が比較的短く尖ること、葉先の縁の歯が小さいことなどで、変種とされている。近縁のカタナワゴケ *Oedocladium fragile* よりも大型で、葉先は急に狭く尖る。

【生活史】

雌雄異株。孢子体と無性芽は知られていない。

【生育環境】

やや開けた、湿度の高い環境を好み、暖地の谷沿いの半日陰の岩上に群生する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林, 河川源流域, 河川上流域

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では、本州（紀伊半島）と九州、四国に分布する日本固有変種。基本種はアジア、オセアニアの熱帯地方に広く分布する。日本列島は種として北限にあたる。

現在の生育状況

【分布域の現況】

三重県大台ヶ原、奈良県十津川村滝川溪谷、和歌山県新宮市、佐賀県太良町多良岳、宮崎県尾鈴山地、鹿児島県屋久島から報告があった（Iwatsuki, 1979）。2016 年には屋久島のヤクスギランドで確認されている（岩田, 2018）。大台ヶ原では三重県側（大台町平等嶺）でも奈良県側（上北山村滝見尾根）でも見つかっている（土永, 1988）。立石ほか（2017）は徳島県海陽町から四国新産として報告した。

【生育地の現況】

いずれの生育地においても生育環境に大きな変化はないと考えられる。

【個体数の現況】

立石ほか（2017）は 2015～2016 年の調査で徳島県海陽町轟九十九滝の岩壁に数か所の生育を確認している。第 5 次レッドリストの現地調査では、2018 年に和歌山県新宮市熊野川町和田川で少量が確認されている。以前調査したときと同じ岩上で、量にも変化はないとのことである。その他の生育地の詳細については不明。

存続を脅かす要因

生育地付近の森林伐採で生育環境が損なわれる心配がある。

要因の区分：	(過去)	森林伐採
	(現在)	森林伐採

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ヤクシマナワゴケ	<i>Oedycladium rufescens</i> (Reinw. & Hornsch.) Mitt. var. <i>yakushimense</i> (Sakurai) Z.Iwats.	VU
第4次 2019:	ヤクシマナワゴケ	<i>Oedycladium rufescens</i> (Reinw. & Hornsch.) Mitt. var. <i>yakushimense</i> (Sakurai) Z.Iwats.	VU
第4次 2018:	ヤクシマナワゴケ	<i>Oedycladium rufescens</i> (Reinw. & Hornsch.) Mitt. var. <i>yakushimense</i> (Sakurai) Z.Iwats.	VU
第4次 2017:	ヤクシマナワゴケ	<i>Oedycladium rufescens</i> (Reinw. & Hornsch.) Mitt. var. <i>yakushimense</i> (Sakurai) Z.Iwats.	VU
第4次 2015:	ヤクシマナワゴケ	<i>Oedycladium rufescens</i> (Reinw. & Hornsch.) Mitt. var. <i>yakushimense</i> (Sakurai) Z.Iwats.	VU
第4次:	ヤクシマナワゴケ	<i>Oedycladium rufescens</i> (Reinw. & Hornsch.) Mitt. var. <i>yakushimense</i> (Sakurai) Z.Iwats.	VU
第3次:	ヤクシマナワゴケ	<i>Oedycladium rufescens</i> (Reinw. & Hornsch.) Mitt. var. <i>yakushimense</i> (Sakurai) Z.Iwats.	VU
第2次:	ヤクシマナワゴケ	<i>Oedycladium rufescens</i> var. <i>yakushimense</i> (Sak.) Z. Iwats.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

奈良県[絶滅寸前種] 和歌山県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 宮崎県[絶滅危惧Ⅱ類(VU-r)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 岩田和鷹, 2018. 屋久島（鹿児島県）における蘚苔類の垂直分布. *Naturalistae*, 22: 73-84.
- Iwatsuki, Z., 1979. Re-examination of *Myurium* and its related genera from Japan and its adjacent areas. *J. Hattori Bot. Lab.*, 46: 257-283.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- 岩月善之助, 2000. ヤクシマナワゴケ. 環境庁（編）, 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—9 植物 II（維管束植物以外）. p. 96. 自然環境研究センター, 東京.
- 立石幸敏・木口博史・西村直樹, 2017. 轟九十九滝（徳島県海陽町）の蘚類. *Naturalistae*, 21: 89-96.
- 土永浩史, 1988. 大台ヶ原の蘚苔類 II. *南紀生物*, 30: 87-97.
- 和歌山県環境生活部環境政策局環境生活総務課自然環境室, 2022. 保全上重要なわかやまの自然—和歌山県レッドデータブック—2022 年改訂版. 和歌山県環境生活部環境政策局環境生活総務課自然環境室. 783pp.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Oedycladium rufescens var. *yakushimense* has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Oedycladium rufescens* var. *yakushimense* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest, River headwater, Upper river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting
Law designation status for conservation	—

執筆者: 有川智己（慶應義塾大学）

Author: Tomotsugu Arikawa

公表年月：2025 年 3 月

エビスゴケ

Neckeropsis cyclophylla (Müll.Hal.) S.Olsson, Enroth & D.Quandt

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD)

②

基準 A: —	基準 B: データ不足	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

②生育地が局限されている。

【判断理由】

本種は Horikawa (1934)、Yamaguchi (1985) や Enroth (1992) によって西表島から報告されている。日本では西表島以外からの報告はない。また、広島大学植物標本庫には 1981 年に西表島仲良川で、1999 年に西表島浦内川で採集された標本が保管されている。しかし、それ以来日本からは確認されていない。日本国内の分布は極めて限られていると考えられる。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

アジア～オセアニアの熱帯に広く分布する。日本は分布の北限にあたり、西表島から報告されている。

基礎情報

【形態】

第一次茎は基物上を這い、第二次茎は長さ 5～10 cm、基物から立ち上がり、大きくなると先の方はやや垂れ下がる。第二次茎の基部は柄状になり、上部は扁平に枝を出す。茎と枝は著しく扁平に葉をつけ、植物体全体が扁平になる。葉は舌状、左右非相称で深くくぼみ、長さ 2～3 mm、横方向に波を打ち、しわがあり、縦方向にも褶曲する。葉身細胞は厚壁でくびれがあり、とくに基部の細胞は大きくなって強くくびれがある。本種はハネエビスゴケ (*Himantocladium plumura*) に似るが、ハネエビスゴケは雌雄同株（同苞）であり、葉はそれほど扁平にはならずにしわも弱く、葉基部の細胞はほとんどくびれない。

【生活史】

雌雄異株。国内では孢子体は見つかっていない。

【生育環境】

空中湿度の高い自然林内の溪流沿いで、樹幹上あるいは岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林

国土地域区分：	(7) 島嶼地域

【分布域】

国内では沖縄県（西表島）に分布し、国外ではアジアとオセアニアの熱帯地域に広く分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

過去に西表島から報告されているが、第 5 次レッドリスト調査（2016-2019）では西表島、およびその他の地域からは確認されていない。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

森林伐採によって生育環境の変化が危惧される。また、産地が局限しているため絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 分布・産地局限

特記事項

本種は Horikawa (1934) によって西表島から *Himantocladium loriforme* として報告されたが、その後、*Himantocladium cyclophyllum* の異名とされ、現在では *Neckeropsis* に組み替えられており、*Neckeropsis cyclophylla* とされている。日本では本種とハネエビスゴケ (*H. plumura*) が混同されている可能性がある。岩月 (2001) ほかの図鑑では、*Himantocladium plumura* の和名がエビスゴケとされている。Enroth (1992) は *Himantocladium cyclophyllum* として、1973 年に西表島浦内川で採集された標本を引用しており、広島大学植物標本庫には 1981 年に西表島仲良川で、1999 年に西表島浦内川で採集された標本が保管されている。しかし、それ以来日本からは確認されていない。

旧レッドリストカテゴリと掲載名

第4次 2020:	エビスゴケ	<i>Himantocladium cyclophyllum</i> (Müll.Hal.) M.Fleisch.	CR+EN
第4次 2019:	エビスゴケ	<i>Himantocladium cyclophyllum</i> (Müll.Hal.) M.Fleisch.	CR+EN
第4次 2018:	エビスゴケ	<i>Himantocladium cyclophyllum</i> (Müll.Hal.) M.Fleisch.	CR+EN
第4次 2017:	エビスゴケ	<i>Himantocladium cyclophyllum</i> (Müll.Hal.) M.Fleisch.	CR+EN
第4次 2015:	エビスゴケ	<i>Himantocladium cyclophyllum</i> (Müll.Hal.) M.Fleisch.	CR+EN
第4次:	エビスゴケ	<i>Himantocladium cyclophyllum</i> (Müll.Hal.) M.Fleisch.	CR+EN
第3次:	エビスゴケ	<i>Himantocladium cyclophyllum</i> (Müll.Hal.) M.Fleisch.	CR+EN
第2次:	エビスゴケ	<i>Himantocladium cyclophyllum</i> (C. Muell.) Fl. Syn. <i>H. loriforme</i> (Bosch et Lac.) Fl.	DD
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

沖縄県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Enroth, J., 1992. Notes on the Neckeraceae (Musci), 13. Taxonomy of the genus *Himantocladium*. *Annales Botanici Fennici*, 29: 79-88.
- Horikawa, Y., 1934. *Symbolae florae bryophytae orientali-asiae*, III. *Botanical Magazine, Tokyo*, 48: 708-719.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- Olsson, S., V. Buchbener, J. Enroth, L. Hedenäs, S. Huttunen and D. Quandt, 2010. Phylogenetic relationships in the *Pinnatella* clade of the moss family Neckeraceae (Bryophyta). *Organisms Diversity & Evolution*, 10: 107-122.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Neckeropsis cyclophylla has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Neckeropsis cyclophylla* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 山口富美夫 (広島大学)
Author: Tomio Yamaguchi

公表年月: 2025 年 3 月

レイシゴケ

Myurella sibirica (Müll.Hal.) Reimers

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD) ②				
基準 A: —	基準 B: データ不足	基準 C: —	基準 D: データ不足	基準 E: —
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。				
②生育地が局限されている。				
【判断理由】				
国内では北海道から九州までの広い範囲であるが、石灰岩地に限り、点々と分布している。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

レイシゴケは、北半球に広く分布する蘚類で、細胞の棘状のパピラが特徴。第5次レッドリスト作成のための調査では、埼玉県、長野県、山口県、徳島県、熊本県で確認されている。青森県でも近年発見された。北海道から九州までの広い範囲で新産地も多く確認されているが、石灰岩地に限られ、点々と分布している。

協力者: 山口富美夫（広島大学）・佐藤匠（広島大学）・桐生賢太（広島大学）・立石幸敏（岡山コケの会）・林正典（日本蘚苔類学会）・井上侑哉（国立科学博物館）・古木達郎（元千葉県立中央博物館）・木口博史（岡山コケの会）・出口博則（広島大学）

基礎情報

【形態】

植物体は小さく、明るい緑色。茎は匍匐し、枝先はしばしば鞭枝状となる。葉は瓦状につくが、乾いてもあまり茎に接しない。葉はスプーン状にくぼみ、広い卵形から急に伸び、長さ約 0.5 mm。トガリカイガラゴケ *Myurella tenerrima* に似るが、葉身細胞の背面中央に 1 個の大きな棘状のパピラがあることで区別される。

【生活史】

雌雄異株。

【生育環境】

高山帯の道路沿いの石灰岩の岩隙の土上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地 中標高地】森林、岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では、北海道、本州、四国、九州に分布し、国外では北半球に広く分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

近年新産地の報告も相次いでいる。近年確実に報告が上がっているところを挙げると、北海道（芦別市など、樋口ほか, 2009）、本州各地（栃木県日光市（神山・鈴木, 2010）、埼玉県秩父山地、長野県上田市・伊那市・大鹿村、静岡県南アルプス（樋口・有川, 2004, 2005）、奈良県大台ヶ原（土永, 2009）、山口県美祢市）、四国（徳島県剣山、愛媛県天狗高原、立石ほか, 2007）、九州（熊本県山江村）などで確認されている。太田（2020）は 2018 年に青森県西目屋村の大沢川沿いで青森県新産として本種を報告している。

【生育地の現況】

第 5 次レッドリストのための調査では、以下のような現況が寄せられている。埼玉県の秩父山地では、2018 年に三国尾根の湿った石灰岩の棚に 3 個の群落を確認されており、各群落は 10×20 cm 程度で、以前にくらべて変化はなかった。2019 年には、十文字山と弁慶岩間の石灰岩地でも 3×3 cm の群落が 3 か所、梓白岩で同様の大きさの群落 1 か所確認されている。長野県大鹿村燕岩では第 4 次レッドリストの調査では少数が確認されていたが、2018 年の調査では 15～30 cm 四方の群落が 5 か所以上確認された。南アルプスでは、2016 年に南アルプスの北岳、赤石岳、千枚岳（樺島）で 1 か所ずつ確認された。山口県美祢市美東町では、前回調査では、鍾乳洞入り口の石灰岩岩壁の湿潤な窪地で少量が確認できていたが、荒廃により草が茂り、この 5 年で 10 分の 1 程度に減少しているとされていた。ところが、2018 年の調査では、入り口の別の場所で直径 5 cm 程度の群落を 4～5 か所確認することができ、増加していた。徳島県美馬市木屋平の剣山では、第 4 次レッドリストの調査では 2 か所で少数が確認されていたが、2019 年には石灰岩岩

隙の土壤にごく薄い微小な群落（2×3 cm 程度）がいくつも視認できた。さらに、土上だけでなく他のコケの群落の間に散生して生育しているので、現在の森林環境が維持される限り、群落は健全に維持されると思われた。熊本県山江村では 2010 年では道路沿いの沢の石灰岩の湿ったクレバスに生育していることが新たに確認されたが、2018 年には大雨で沢が崩れ生育が確認できなかった。

【個体数の現況】

詳細については不明だが、上記のとおりいくつかの地域では減少が認められる。

存続を脅かす要因

森林の伐採、溪流の改修や道路の工事、石灰採掘によって生育地の存続が脅かされる。また、荒廃した鍾乳洞の管理放棄により草が茂ったり、逆に観光開発により過度に踏みつけられるところで減少が見られている。

要因の区分：	（過去）	森林伐採、河川開発、石灰採掘、交通インフラ建設、人の踏みつけ、管理放棄
	（現在）	森林伐採、河川開発、石灰採掘、交通インフラ建設、人の踏みつけ、管理放棄

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	レイシゴケ	<i>Myurella sibirica</i> (Müll.Hal.) Reimers	VU
第4次 2019:	レイシゴケ	<i>Myurella sibirica</i> (Müll.Hal.) Reimers	VU
第4次 2018:	レイシゴケ	<i>Myurella sibirica</i> (Müll.Hal.) Reimers	VU
第4次 2017:	レイシゴケ	<i>Myurella sibirica</i> (Müll.Hal.) Reimers	VU
第4次 2015:	レイシゴケ	<i>Myurella sibirica</i> (Müll.Hal.) Reimers	VU
第4次:	レイシゴケ	<i>Myurella sibirica</i> (Müll.Hal.) Reimers	VU
第3次:	レイシゴケ	<i>Myurella sibirica</i> (Müll.Hal.) Reimers	VU
第2次:	レイシゴケ	<i>Myurella sibirica</i> (C. Muell.) Reim.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

福島県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 栃木県[情報不足] 埼玉県[絶滅危惧Ⅰ類(CE)] 新潟県[絶滅危惧(EN+VU)] 富山県[情報不足] 長野県[準絶滅危惧(NT)] 滋賀県[要注目種] 奈良県[絶滅危惧種] 鳥取県[絶滅危惧Ⅱ類(VU)] 岡山県[絶滅危惧Ⅰ類] 山口県[絶滅危惧ⅠA類(CR)] 愛媛県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 宮崎県[絶滅危惧Ⅱ類(VU-r)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 樋口正信・有川智己, 2004. 長野県南信濃村のイトヒバゴケ, レイシゴケ, イシヅチゴケ. 蘚苔類研究, 8: 281-282.
- 樋口正信・有川智己, 2005. 静岡県北部に位置する光岩で確認された絶滅危惧蘚類数種. 蘚苔類研究, 8: 402-403.
- 樋口正信・佐藤 謙・丹羽真一, 2009. 北海道中央部に位置する岨山で確認された絶滅危惧蘚類数種. 蘚苔類研究, 9: 367-369.
- 神山隆之・鈴木直, 2010. 栃木県で新たに見つかった絶滅危惧蘚類 12 種. 蘚苔類研究, 10: 18-20.
- 太田正文, 2020. 青森県コケ植物分布ノート (5). 青森県立郷土館研究紀要, 44: 19-20.
- 立石幸敏・川合啓二・西村直樹, 2009. 石立山の蘚類. Naturalisae, 11: 57-66.
- 土永浩史, 2009. 大台ヶ原山山麓の絶滅危惧蘚類数種. 蘚苔類研究, 9: 396-397.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Myurella sibirica has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Myurella sibirica* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area Mid-altitude area】 Forest, Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development, Limestone mining, Transportation infrastructure construction, Human trampling, Abandonment of management
Law designation status for conservation	—

執筆者: 有川智己（慶應義塾大学）
Author: Tomotsugu Arikawa

公表年月：2025 年 3 月

ホソバツヤゴケ(タチミツヤゴケ)

Orthothecium rufescens (Brid.) Schimp.

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD) ②				
基準 A: —	基準 B: データ不足	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。				
②生育地が局限されている。				
【判断理由】				
落葉広葉樹林帯の石灰岩地に点々と見られる。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

ホソバツヤゴケは、北半球の北方域に広く分布する蘚類で、石灰岩地に生育する。第4次レッドリスト作成のための調査では長野県大鹿村で再確認されたほか、四国で初めて愛媛県天狗高原でわずかに確認された。近年ではこのほか、静岡県や北海道でも生育が報告されている。産地が石灰岩地に限られており、石灰採掘で生育地が失われる心配がある。

協力者： 立石幸敏（岡山コケの会）・大石善隆（福井県立大学）

基礎情報

【形態】

植物体は黄緑色で時に褐色を帯び、光沢がある。茎は不規則に分枝する。葉は乾いても縮れず、長さ 2～4 mm、葉面には深い縦溝がある。葉縁は全縁で、全体にわたって弱く反曲する。中肋は不明瞭。本種は同属のコホソバツヤゴケ *Orthothecium intricatum* とは、植物体が大きく、褐色～紅色を帯び、葉面に縦溝があることで区別される。

【生活史】

雌雄異株。国内ではめったに孢子体をつけない。

【生育環境】

落葉広葉樹林帯で石灰岩に生育するが、まれに砂岩や角岩に生育し、北海道では蛇紋岩にみられる（田中, 2012）。岩上、とくに石灰岩上に生育し、石灰水の滴る崖を好むので、よく植物体に石灰粒が付いている。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林、岩壁・ガレ場（石灰岩地等）

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では北海道と本州から知られていたが、第 4 次レッドリスト作成のための調査で初めて四国から見つかった。国外では中国、シベリア、ヨーロッパと北アメリカに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

田中（2012）は本種の生育地として北海道上川、埼玉、東京、長野、新潟、静岡、岡山を挙げている。第 4 次レッドリスト作成のための調査では、長野県大鹿村では少数が確認され、四国では初めて愛媛県久万高原町天狗高原でわずかに確認された（有川, 2014）。近年ではこのほか、静岡県南アルプス光岳（樋口・有川, 2005）や北海道芦別市嵯山（樋口ほか, 2009）でも生育が報告されていた。青森県では津軽山地と白神山地で記録されている（太田, 2020）。

【生育地の現況】

石灰岩地に限られる種類であり、大部分の生育地が不安定である。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

産地が石灰岩地に限られており、石灰採掘で生育地が失われる心配がある。

要因の区分：	(過去)	石灰採掘、分布・産地局限

	(現在)	石灰採掘, 分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリと掲載名

第4次 2020:	ホソバツヤゴケ (タチミツヤゴケ)	<i>Orthothecium rufescens</i> (Brid.) Schimp.	VU
第4次 2019:	ホソバツヤゴケ (タチミツヤゴケ)	<i>Orthothecium rufescens</i> (Brid.) Schimp.	VU
第4次 2018:	ホソバツヤゴケ (タチミツヤゴケ)	<i>Orthothecium rufescens</i> (Brid.) Schimp.	VU
第4次 2017:	ホソバツヤゴケ (タチミツヤゴケ)	<i>Orthothecium rufescens</i> (Brid.) Schimp.	VU
第4次 2015:	ホソバツヤゴケ (タチミツヤゴケ)	<i>Orthothecium rufescens</i> (Brid.) Schimp.	VU
第4次:	ホソバツヤゴケ (タチミツヤゴケ)	<i>Orthothecium rufescens</i> (Brid.) Schimp.	VU
第3次:	ホソバツヤゴケ (タチミツヤゴケ)	<i>Orthothecium rufescens</i> (Brid.) Schimp.	VU
第2次:	ホソバツヤゴケ (タチミツヤゴケ)	<i>Orthothecium rufescens</i> (Brid.) B. S. G.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況 (令和4年度末時点)

掲載なし

保護に係る法令指定状況 (令和4年度末時点)

指定なし

参考文献

- 有川智己, 2014. ホソバツヤゴケ (タチミツヤゴケ). 環境省自然環境局野生生物課希少種保全推進室 (編), レッドデータブック 2014—日本の絶滅のおそれのある野生生物—9 植物 II (蘚苔類・藻類・地衣類・菌類). p. 190. ぎょうせい, 東京.
- 樋口正信・有川智己, 2005. 静岡県北部に位置する光岩で確認された絶滅危惧蘚類数種. 蘚苔類研究, 8: 402-403.
- 樋口正信・佐藤 謙・丹羽真一, 2009. 北海道中央部に位置する嵯山で確認された絶滅危惧蘚類数種. 蘚苔類研究, 9: 367-369.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- 岩月善之助, 2000. ホソバツヤゴケ. 環境庁 (編), 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—9 植物 II (維管束植物以外). p. 94. 自然環境研究センター, 東京.

- Noguchi, A., 1994. Illustrated Moss Flora of Japan. Part 5. pp. 1013-1253. Hattori Bot. Lab., Nichinan.
- 太田正文, 2020. 蘚苔類. 青森県レッドデータブック改訂検討会 (編), 青森県の希少な野生生物 青森県レッドデータブック (2020 年版). pp. 119-133. 青森県, 青森.
- 田中敦司, 2012. 日本の石灰岩性蘚類. Naturalistae, 16: 47-82.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Orthothecium rufescens has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Orthothecium rufescens* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest, Cliff/Talus area (e.g. limestone area)
Threat types:	Limestone mining, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 有川智己 (慶應義塾大学)
Author: Tomotsugu Arikawa

公表年月: 2025 年 3 月

オオサナダゴケ

Plagiothecium neckeroideum Schimp.

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD)

②

基準 A: データ不足	基準 B: データ不足	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

②生育地が局限されている。

【判断理由】

山地帯、亜高山帯に稀で量が少ない。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

オオサナダゴケは、中国、日本、極東ロシアに分布し、ヨーロッパにもまれに見られる蘚類。国内では高地に多く、南アルプスや秩父などで確認されているが、産地が限られており、大部分の生育地が不安定で少量の生育である。その生育地での森林伐採により生育環境が失われる心配がある。

協力者: 鵜沢美穂子（茨城県自然博物館）・立石幸敏（岡山コケの会）・堀清鷹（高知県立牧野植物園）・古木達郎（元千葉県立中央博物館）・木口博史（岡山コケの会）・山口富美夫（広島大学）

基礎情報

【形態】

植物体は黄緑色、葉は強く偏平につき、長さ約 3～4 mm、非相称で、葉身上半部に著しい横しわがある。葉先は狭い鋭頭で、仮根や無性芽をつけるか、少なくともその部分の細胞は分化して幅広い。葉の基部は茎の上に下延する。翼細胞は葉基部の他の細胞から徐々に移行して明瞭な境はない。全形はオオサナダゴケモドキ *Plagiothecium euryphyllum* に似るが、翼部の細胞があまり明瞭に分化しないことや、葉身細胞に細菌のついたような細かい肥厚（ベルカ）があることで区別できる。

【生活史】

雌雄異株。

【生育環境】

国内では高地に多く、岩上、腐植土上、地上、時に樹木の基部に生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では北海道、本州、四国に分布しており、国外では中国、極東ロシア、ヨーロッパに分布しているが、北アメリカには分布しない。ヨーロッパではまれ。熱帯アジアでは高地にのみ、本種の変種とされるものが分布している。

現在の生育状況

【分布域の現況】

Iwatsuki (1970) は、岩手県、埼玉県、山梨県、長野県、岐阜県の標本を引用しているが、青森県（太田, 2020）、栃木県（富永, 2018）、新潟県（新潟県, 2014）、富山県（富山県, 2012）などでも多数見つかっている。2007 年の調査では静岡県南アルプス聖岳で少数が、2011 年の調査では長野県王滝村清滝で少数が、菅平中ノ沢でごくわずかな量が確認された。第 5 次レッドリストのための調査では 2016 年に南アルプス仙丈ヶ岳、赤石岳、北岳でそれぞれ少量が、2018 年に埼玉県秩父市十文字小屋付近の 2 か所で少量が確認されている。

【生育地の現況】

高山の湿った土上に希に見られる。埼玉県では秩父亜高山帯の湿った腐植土上に生育し、比較的多くの場所で報告されている（埼玉県, 2012）。大部分の生育地が不安定で少量の生育である。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

産地が限られているが、その生育地での森林伐採により生育環境が失われる心配がある。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	オオサナダゴケ	<i>Plagiothecium neckeroideum</i> Bruch & Schimp.	VU
第4次 2019:	オオサナダゴケ	<i>Plagiothecium neckeroideum</i> Bruch & Schimp.	VU
第4次 2018:	オオサナダゴケ	<i>Plagiothecium neckeroideum</i> Bruch & Schimp.	VU
第4次 2017:	オオサナダゴケ	<i>Plagiothecium neckeroideum</i> Bruch & Schimp.	VU
第4次 2015:	オオサナダゴケ	<i>Plagiothecium neckeroideum</i> Bruch & Schimp.	VU
第4次:	オオサナダゴケ	<i>Plagiothecium neckeroideum</i> Bruch & Schimp.	VU
第3次:	オオサナダゴケ	<i>Plagiothecium neckeroideum</i> Schimp.	VU
第2次:	オオサナダゴケ	<i>Plagiothecium neckeroideum</i> B. S. G.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

青森県[要調査野生生物（D ランク）] 福島県[絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)] 栃木県[絶滅危惧Ⅱ類（B ランク）] 埼玉県[絶滅危惧Ⅰ類(CE)] 新潟県[絶滅危惧（EN+VU）] 富山県[情報不足] 長野県[準絶滅危惧（NT）] 熊本県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Iwatsuki, Z., 1970. A revision of *Plagiothecium* and its related genera from Japan and her adjacent areas, I. J. Hattori Bot. Lab., 33: 331-380.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- 岩月善之助, 2000. オオサナダゴケ. 環境庁（編）, 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物ーレッドデータブックー9. 植物Ⅱ（維管束植物以外）. p. 95. 自然環境研究センター, 東京.

- 長野県環境部自然保護課・長野県環境保全研究所自然環境部，2014. 長野県版レッドリスト 長野県の絶滅のおそれのある野生生物 植物編 2014. 224 pp. 長野県環境部自然保護課・長野県環境保全研究所自然環境部，長野.
- 長野県環境保全研究所・長野県環境部自然保護課，2005. 長野県版レッドデータブック 長野県の絶滅のおそれのある野生生物 非維管束植物編・植物群落編. 205 pp. 信州豊かな環境づくり県民会議，長野.
- 新潟県県民生活・環境部環境企画課，2014. 新潟県第2次レッドリスト（新潟県の保護上重要な野生生物の種リスト）植物（維管束植物及びコケ植物）編. 82 pp. 新潟県県民生活・環境部環境企画課，新潟.
- Noguchi, A., 1994. Illustrated Moss Flora of Japan, part 5. pp. 1013-1253. Hattori Bot. Lab., Nichinan.
- 太田正文，2020. オオサナダゴケ. 青森県レッドデータブック海底検討会・青森県環境生活部自然保護課（編），青森県の希少な野生生物 青森県レッドデータブック（2020年版）. p. 129. 青森県，青森.
- 埼玉県環境部自然環境課，2012. 埼玉県の希少野生生物 埼玉県レッドデータブック 2011 植物編. 432 pp. 埼玉県環境部自然環境課，さいたま.
- 富永孝昭，2018. オオサナダゴケ. 栃木県環境森林部自然環境課・栃木県立博物館（編），レッドデータブックとちぎ 2018 栃木県の保護上注目すべき地形・地質・野生動植物. p. 332. 栃木県，宇都宮.
- 富山県生活環境部自然保護課，2012. 富山県の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブックとやま 2012-. 451 pp. 富山県生活環境部自然保護課，富山.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Plagiothecium neckeroideum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Plagiothecium neckeroideum* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 有川智己（慶應義塾大学）
Author: Tomotsugu Arikawa

公表年月：2025 年 3 月

ハイゴケ目 Hypnales キヌゴケ科 Pylaisiaceae

ハイヒバゴケモドキ

Buckia vaucheri (Lesq.) D.Ríos, M.T.Gallego & J.Guerra

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD) ③				
基準 A: —	基準 B: データ不足	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。				
③生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。				
【判断理由】				
本種は亜高山帯の林床や高山の石灰岩上に生育する種であり、国内では埼玉県、東京都、山梨県の数か所に孤立して分布している。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

ハイヒバゴケモドキは国内では本州中部に、国外では北半球の冷温帯に広く分布する匍匐性の蘚類。亜高山から高山の石灰岩上に生育する。

協力者： 古木達郎（元千葉県立中央博物館）・木口博史（岡山コケの会）

基礎情報

【形態】

植物体は匍匐し、茎は長さ 3-5 cm。茎は不規則、まばらに羽状に分枝し、茎の表皮細胞は内側の細胞に比べ小さく、外側の壁は薄い。茎葉は卵状～長楕円状披針形で、長さ 1.4-1.6 mm、比較的短く尖り、先は鎌状に曲がる。中肋は 2 本で短い。葉身細胞は狭い菱形～線形、翼細胞は方形でよく分化する。本種は茎の表皮細胞が小さいこと、翼細胞がよく分化することなどの特徴を持ち、ハイヒバゴケ (*Hypnum cupressiforme* Hedw.) に似るが中肋が明瞭であること、葉身細胞が短いこと、翼細胞と葉身細胞の境界が不明瞭であることなどで区別できる。

【生活史】

雌雄異株。国内では孢子体は見つかっていない。

【生育環境】

亜高山帯の林床や高山の石灰岩上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_高標高地 中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では埼玉県、東京都、山梨県に、国外では北半球の冷温帯に広く分布する。埼玉県の赤沢山、東京都の日原～天目山、山梨県の北岳から報告がある。

現在の生育状況

【分布域の現況】

2019 年の調査で埼玉県秩父三国峠～弁慶白岩で生育が確認された。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

産地が局限し、絶滅が危惧される。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ハイヒバゴケモドキ	<i>Hypnum vaucheri</i> Lesq.	CR+EN
第4次 2019:	ハイヒバゴケモドキ	<i>Hypnum vaucheri</i> Lesq.	CR+EN
第4次 2018:	ハイヒバゴケモドキ	<i>Hypnum vaucheri</i> Lesq.	CR+EN
第4次 2017:	ハイヒバゴケモドキ	<i>Hypnum vaucheri</i> Lesq.	CR+EN
第4次 2015:	ハイヒバゴケモドキ	<i>Hypnum vaucheri</i> Lesq.	CR+EN
第4次:	ハイヒバゴケモドキ	<i>Hypnum vaucheri</i> Lesq.	CR+EN
第3次:	ハイヒバゴケモドキ	<i>Hypnum vaucheri</i> Lesq.	CR+EN
第2次:	ハイヒバゴケモドキ	<i>Hypnum vaucheri</i> Lesq.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

埼玉県[絶滅危惧Ⅰ類(CE)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 樋口正信, 2015. ハイヒバゴケモドキ. 環境省（編）, レッドデータブック 2014 ー日本の絶滅のおそれのある野生生物ー 9 植物Ⅱ（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）. p. 49. ぎょうせい, 東京.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Buckia vaucheri has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Buckia vaucheri* is listed as DD under criteria ③.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

③Distribution is biogeographically isolated (e.g., endemic species confined to a narrow range).

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_High-altitude area Mid-altitude area】 Forest
Threat types:	Limited distribution

Law designation status for conservation	—

執筆者:	樋口正信（国立科学博物館）
Author:	Masanobu Higuchi

公表年月：2025 年 3 月

クイシコモチイトゴケ

Bonnosukea serrulata (Cardot & P.de la Varde) H.Akiyama

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD)

②

基準 A: —

基準 B: データ不足

基準 C: —

基準 D: —

基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

②生育地が局限されている。

【判断理由】

Akiyama (2019)、秋山 (2020) によると、本種は高知県内で採集された標本 1 点のみで知られているが、今後良く調査すればさらに見つかる可能性があると報告している。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

これまで日本では広義の *Gammiella ceylonensis* とされてきた種は、Akiyama (2019) によって再検討され、4 種に分類された。本種はそのうちの 1 種、*Bonnosukea serrulata* である。本種は日本、インド、タイ、ベトナム、ラオス、インドネシアに分布し、林内の樹幹上に生育する。

基礎情報

【形態】

狭義のヒロハコモチイトゴケが含まれるヒメコモチイトゴケ属の種に似ているが、葉細胞の壁が顕微鏡下で不明瞭となり、二次茎の葉は丸くついて、尾上に曲がる傾向が強く、葉は長さ 1.6 mm 内外になることで区別される。

【生活史】

雌雄異株。

【生育環境】

産地のやや開けた場所にある小灌木の樹幹上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では高知県に分布しており、国外ではインド南部、タイ北部、ベトナム、ラオス、インドネシア（ジャワ島）に分布している。

現在の生育状況

【分布域の現況】

Akiyama (2019)、秋山 (2020) は、高知県高知市の工石山で採集された標本を報告しているが、現在は確認されていない。

【生育地の現況】

過去の報告では、山地のやや開けた場所にある小灌木の樹幹上に生育することが分かっているが、詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

森林伐採。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 分布・産地局限

特記事項

本種はこれまでヒロハコモチイトゴケとされてきた種の一部である。従来報告されてきたヒロハコモチイトゴケについては、再検討を要する。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	—	—	—
第4次 2019:	—	—	—
第4次 2018:	—	—	—
第4次 2017:	—	—	—
第4次 2015:	—	—	—
第4次:	—	—	—
第3次:	—	—	—
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

宮崎県[絶滅危惧Ⅱ類(VU-r)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Akiyama, H., 2019. Phylogenetic re-examination of the "*Gammiella ceylonensis*" complex reveals three new genera in the Phylaisiadelphaceae (Bryophyta). *Bryophyte Diversity & Evolution*, 41: 35-64.
- 秋山弘之, 2020. アジア産蘚苔類の分類・生態ノート 34. ヒロハコモチイトゴケ種複合体とはどんな蘚類かー日本産ニセタマコモチイトゴケ属 *Bonnosukea* およびヒメコモチイトゴケ属 *Clastobryellina*（蘚類、コモチイトゴケ科）の分類学的研究の紹介ー. *蘚苔類研究*, 12(4): 99-105.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Bonnosukea serrulata has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Bonnosukea serrulata* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area Low-altitude area】 Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	山口富美夫（広島大学）
Author:	Tomio Yamaguchi

公表年月：2025 年 3 月

ナメリヒメコモチイトゴケ

Clastobryellina merrillii (Broth.) H.Akiyama

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD) ②

基準 A: —	基準 B: データ不足	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

②生育地が局限されている。

【判断理由】

Akiyama (2019)、秋山 (2020) によると、本種は屋久島のみで確認されていて、生育地が局限されている。非常に小形で生育量が少ないため、今後現地の個体群の様子を確認する必要がある。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

これまで日本では広義の *Gammiella ceylonensis* とされてきた種は、Akiyama (2019) によって再検討され、4 種に分類された。本種はそのうちの 1 種、*Clastobryellina merrillii* である。本種は東～東南アジアに分布し、日本では屋久島のみに生育している。本種は、沢沿いの樹木の樹幹部の枝上に生育する。しばしば、林床に落ちた枝状で見つかることがある。

基礎情報

【形態】

狭義のヒロハコモチイトゴケに似ているが、植物体には多少光沢があり、二次茎は葉が弱く丸くついて細い円柱状となり、茎に多少とも圧着する。葉縁の先から基部まで小さくて鋭い鋸歯がある。また、無性芽はほとんど平滑であることで区別される。

【生活史】

雌雄異株。

【生育環境】

林内の沢沿いにある樹冠の枝上に着生する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林, 河川源流域

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では屋久島のみ分布しており、国外ではベトナム、ミャンマー、タイ北部、フィリピン（ルソン島）、インドネシア（ジャワ島）、台湾に分布している。

現在の生育状況

【分布域の現況】

秋山（2020）は、鹿児島県（屋久島）から報告している。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

森林伐採。

要因の区分：	（過去）	森林伐採, 分布・産地局限
	（現在）	森林伐採, 分布・産地局限

特記事項

秋山（2020）によると、Suzuki et al.（2014）および Suzuki（2016）が *Gammiella ceylonensis* として報告したセイロンタマコモチイトゴケには、本種とニセヒロハコモチイトゴケの2種が含まれている。これまでヒロハコモチイトゴケあるいはセイロンタマコモチイトゴケとして報告されてきた種については、再検討を要する。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	—	—	—
第4次 2019:	—	—	—
第4次 2018:	—	—	—
第4次 2017:	—	—	—
第4次 2015:	—	—	—
第4次:	—	—	—
第3次:	—	—	—
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

宮崎県[絶滅危惧Ⅱ類(VU-r)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Akiyama, H., 2019. Phylogenetic re-examination of the "*Gammiella ceylonensis*" complex reveals three new genera in the Phylaisiadelphaceae (Bryophyta). *Bryophyte Diversity & Evolution*, 41: 35-64.
- 秋山弘之, 2020. アジア産蘚苔類の分類・生態ノート 34. ヒロハコモチイトゴケ種複合体とはどんな蘚類かー日本産ニセタマコモチイトゴケ属 *Bonnosukea* およびヒメコモチイトゴケ属 *Clastobryellina* (蘚類, コモチイトゴケ科) の分類学的研究の紹介ー. *蘚苔類研究*, 12: 99-105.
- Suzuki, T., Y. Inoue and H. Tsubota, 2014. Notes on *Clastobryella tenella* and *Gammiella ceylonensis* (Sematophyllaceae, Bryopsida) in Japan. *Hattoria*, 5: 101-113.
- Suzuki, T., 2016. A revised new catalog of the mosses on Japan. *Hattoria*, 7: 9-223.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Clastobryellina merrillii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Clastobryellina merrillii* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data,

including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest, River headwater
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 山口富美夫（広島大学）
Author: Tomio Yamaguchi

公表年月：2025 年 3 月

ニセヒメコモチイトゴケ

Clastobryellina orientalis H.Akiyama

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD) ②

基準 A: —	基準 B: データ不足	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

②生育地が局限されている。

【判断理由】

秋山（2020）によると、本種は非常に小形の種で、生育も徳島県、高知県、宮崎県、鹿児島県にある湿度の高い林内、あるいは深い渓谷内に局限されている。これまで広義のヒコハコモチイトゴケに含まれていたことから、今後本種の生育状況を確認する必要がある。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

これまで日本では広義の *Gammiella ceylonensis* とされてきた種は、Akiyama（2019）によって再検討され、4 種に分類された。本種はそのうちの 1 種、*Clastobryellina orientalis* である。本種は日本南西部、ベトナム北部に分布し、深い渓谷内あるいは湿った林内にある樹幹上に生育する。

基礎情報

【形態】

狭義のヒロハコモチイトゴケに似ているが、二次茎は常に平板に葉をつけ、基物に接してほとんど立ち上がらず、枝の上部が壊れやすいことはない。また、葉は長さ 0.6-0.9 mm で、まれに 1 mm に達することがあり、無性芽のマミラは先端のみにあり、下方のマミラは弱いかほとんど平滑となることで区別される。

【生活史】

生殖器官及び孢子体は見つかっていない。

【生育環境】

ヒロハコモチイトゴケと同様に、暖地の深い渓谷内で、よく湿った環境下にある樹幹上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林, 河川源流域

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では香川県、徳島県、高知県、宮崎県、鹿児島県に分布しており、国外ではベトナム北部、台湾に分布している。

現在の生育状況

【分布域の現況】

秋山（2020）は、徳島県、高知県、宮崎県、鹿児島県（屋久島）から報告している。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

森林伐採。

要因の区分：	（過去）	森林伐採, 分布・産地局限
	（現在）	森林伐採, 分布・産地局限

特記事項

秋山（2020）によると、Suzuki et al.（2014）および Suzuki（2016）が *Gammiella ceylonensis* として報告したセイロンタマコモチイトゴケには、本種とナメリヒメコモチ

イトゴケの2種が含まれている。これまでヒロハコモチイトゴケあるいはセイロンタマコモチイトゴケとして報告されてきた種の中に本種が含まれていることも考えられ、本種の生育状況については再検討を要する。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	—	—	—
第4次 2019:	—	—	—
第4次 2018:	—	—	—
第4次 2017:	—	—	—
第4次 2015:	—	—	—
第4次:	—	—	—
第3次:	—	—	—
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

宮崎県[絶滅危惧Ⅱ類(VU-r)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Akiyama, H., 2019. Phylogenetic re-examination of the "*Gammiella ceylonensis*" complex reveals three new genera in the Phylaisiadelphaceae (Bryophyta). *Bryophyte Diversity & Evolution*, 41: 35-64.
- 秋山弘之, 2020. アジア産蘚苔類の分類・生態ノート 34. ヒロハコモチイトゴケ種複合体とはどんな蘚類かー日本産ニセタマコモチイトゴケ属 *Bonnosukea* およびヒメコモチイトゴケ属 *Clastobryellina* (蘚類, コモチイトゴケ科) の分類学的研究の紹介ー. *蘚苔類研究*, 12: 99-105.
- Suzuki, T., Y. Inoue and H. Tsubota, 2014. Notes on *Clastobryella tenella* and *Gammiella ceylonensis* (Sematophyllaceae, Bryopsida) in Japan. *Hattoria*, 5: 101-113.
- Suzuki, T., 2016. A revised new catalog of the mosses on Japan. *Hattoria*, 7: 9-223.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Clastobryellina orientalis has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition.

Clastobryellina orientalis is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area Low-altitude area】 Forest, River headwater
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	山口富美夫 (広島大学)
Author:	Tomio Yamaguchi

公表年月：2025 年 3 月

コモチイチイゴケ

Isopterygium propaguliferum Toyama

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD)

③

基準 A: —	基準 B: データ不足	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

③生物地理上、孤立した分布特性を有する（分布域がごく限られた固有種等）。

【判断理由】

本種は林内の倒木上などに生育する種であり、国内では和歌山県、徳島県、高知県、宮崎県などに孤立して分布している。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

コモチイチイゴケは国内では和歌山県、四国、九州に、国外ではベトナム、カンボジア、中国、台湾に分布する匍匐性の蘚類。倒木上に生育する。

協力者： 木口博史（岡山コケの会）・立石幸敏（岡山コケの会）・土永浩史（日本蘚苔類学会）

基礎情報

【形態】

植物体は匍匐する。茎はやや羽状に分枝し、小さな葉をつけた無性芽をつける特殊な枝が立ち上がる。無性芽は枝の先端につき、棍棒状で、一列の数個の細胞からなる。葉は卵形～卵状披針形で、長さ 0.7-1.0 mm、先端部は急に狭くなり、細長く尖る。中肋を欠く。本種は本属の他種から、無性芽をつける特殊な枝が茎から立ち上がり、葉の先端部が急に狭くなり、細長く尖ることで区別される。

【生活史】

特殊な枝の先端に作られる無性芽で繁殖する。

【生育環境】

林床の腐った木の上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】裸地

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では和歌山県、四国、九州に、国外ではベトナム、カンボジア、中国、台湾に分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

第5次レッドリスト調査(2016-2019)では、和歌山県、徳島県、高知県で生育が確認された。和歌山県熊野川の支流和田川、古座川の支流成見川の倒木上に生育が見られた。徳島県海部郡海陽町久尾(野根川流域)で 50×10 cm の群落、僧都谷で 30×10 cm の群落がスギの倒木上に見られた。高知県安芸郡の神社境内のスギの倒木上に 150×100 cm の群落が見られた。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

産地が局限し、絶滅する可能性が高い。

要因の区分：	(過去)	分布・産地局限
	(現在)	分布・産地局限

特記事項

特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	コモチイチイゴケ	<i>Isopterygium propaguliferum</i> Toyama	CR+EN
第4次 2019:	コモチイチイゴケ	<i>Isopterygium propaguliferum</i> Toyama	CR+EN
第4次 2018:	コモチイチイゴケ	<i>Isopterygium propaguliferum</i> Toyama	CR+EN
第4次 2017:	コモチイチイゴケ	<i>Isopterygium propaguliferum</i> Toyama	CR+EN
第4次 2015:	コモチイチイゴケ	<i>Isopterygium propaguliferum</i> Toyama	CR+EN
第4次:	コモチイチイゴケ	<i>Isopterygium propaguliferum</i> Toyama	CR+EN
第3次:	コモチイチイゴケ	<i>Isopterygium propaguliferum</i> Toyama	CR+EN
第2次:	コモチイチイゴケ	<i>Isopterygium propaguliferum</i> Toy.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

和歌山県[準絶滅危惧（NT）] 熊本県[絶滅危惧ⅠB類（EN）] 宮崎県[絶滅危惧ⅠA類（CR-r）]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- 樋口正信, 2015. コモチイチイゴケ. 環境省（編）, レッドデータブック 2014 ―日本の絶滅のおそれのある野生生物― 9 植物Ⅱ（蘚苔類・藻類・地衣類・菌類）. p. 50. ぎょうせい, 東京.
- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- Noguchi, A., 1994. Illustrated Moss Flora of Japan. Part 5. pp. 1013-1253. Hattori Bot. Lab., Nichinan.
- 土永浩史, 2008. 紀伊半島産の興味ある蘚苔類Ⅴ, 南紀生物, 50: 22-226.
- 土永浩史, 2009. 紀伊半島における蘚苔類の絶滅危惧種群の現状. 和歌山県高等学校理科学研究会誌, 45: 24-37.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Isopterygium propaguliferum has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Isopterygium propaguliferum* is listed as DD under criteria ③.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

③Distribution is biogeographically isolated (e.g., endemic species confined to a narrow range).

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Bare area
Threat types:	Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	樋口正信（国立科学博物館）
Author:	Masanobu Higuchi

公表年月：2025 年 3 月

ニセシダレウニゴケ

Symphyodon asper (Mitt.) A.Jaeger

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD) ②				
基準 A: —	基準 B: データ不足	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。 ②生育地が局限されている。 【判断理由】 Akiyama et al. (2021)、秋山 (2022) によると、確認されている生育地は、高知県、徳島県、宮崎県、熊本県、鹿児島県の 7 か所で、いずれも産地の湿度の高い森林内の深い溪谷あるいは林床であって、生育地が局限されている。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

Akiyama et al. (2021) によって日本から初めて報告された。本種の生育は照葉樹林内の溪谷あるいは湿った林内の転石上、灌木上に限られる。

基礎情報

【形態】

植物体の形態はシダレウニゴケ (*Symphyodon recurvomarginatus*) に似ているが、シダレウニゴケの葉は左右対称であるのに対し、本種は非対称である。

【生活史】

雌雄異株。

【生育環境】

シダレウニゴケが樹木の枝や梢上に生育するのにに対し、本種は照葉樹林内の溪谷や湿った林内の転石上、あるいは灌木上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林, 河川上流域

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

日本では高知県、徳島県、宮崎県、熊本県、鹿児島県に分布し、国外では台湾、タイ、ベトナム、ミャンマー、インドに分布している。

現在の生育状況

【分布域の現況】

Akiyama et al. (2021)、秋山 (2022) は高知県、徳島県、宮崎県、熊本県、鹿児島県から報告している。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

森林伐採や河川開発。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 河川開発, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 河川開発, 分布・産地局限

特記事項

これまでシダレウニゴケ (*Symphyodon perrottetii*) として報告されてきた日本産の種は、Akiyama et al. (2021) によって分類・系統学的に再検討され、狭義の *Symphyodon perrottetii* は日本には存在せず、シダレウニゴケとされてきた種は、少なくとも 5 種の独

立種が含まれていることが明らかになった。日本産のシダレウニゴケ属の分類と分布については、秋山（2022）が詳しく解説している。ニセシダレウニゴケは、これまで広義のシダレウニゴケに含まれていたもので、Akiyama et al.（2021）によるシダレウニゴケ（*Symphyodon recurvomarginatus*）と混同されている可能性がある。日本産シダレゴケ属 5 種の分布と生育状況については、今後より詳細な調査を要する。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	—	—	—
第4次 2019:	—	—	—
第4次 2018:	—	—	—
第4次 2017:	—	—	—
第4次 2015:	—	—	—
第4次:	—	—	—
第3次:	—	—	—
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

埼玉県[絶滅危惧Ⅰ類(CE)] 宮崎県[絶滅危惧Ⅱ類(VU-r)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Akiyama, H., R. Pepin and M. Suleiman, 2021. Re-examination of the *Symphyodon perrottetii* (Symphyodontaceae) and related species in East and Southeast Asia. Hattoria, 12: 51-92.
- 秋山弘之, 2022. 日本産ウニゴケ属（ウニゴケ科、蘚類）5種の紹介と和名の提唱. 植物地理・分類研究, 70: 153-165.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Symphyodon asper has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Symphyodon asper* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due

to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area Low-altitude area】 Forest, Upper river basin
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 山口富美夫 (広島大学)

Author: Tomio Yamaguchi

公表年月: 2025 年 3 月

ハイゴケ目 Hypnales ウニゴケ科 Symphyodontaceae

チチブウニゴケ

Symphyodon copelandii Broth.

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD)

②

基準 A: —

基準 B: データ不足

基準 C: —

基準 D: —

基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

②生育地が局限されている。

【判断理由】

Akiyama et al. (2021) や秋山 (2022) によると、生育地は関東北部の秩父・奥多摩石灰岩地に限られており、極めて局限している。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

Akiyama et al. (2021) によって日本から初めて報告された。本種の生育地は関東地方の石灰岩地に限られている。

基礎情報

【形態】

植物体の形態はシダレウニゴケ (*Symphyodon recurvomarginatus*) に似ているが、葉身細胞の上端が目立って突出し、しばしば短い棘状になり、植物体が細くしばしば糸状になることで区別される。

【生活史】

雌雄異株。

【生育環境】

石灰岩地の落葉広葉樹林内で、流水沿いの湿った環境下の、チャート質の岸壁や転石上、あるいは岸壁近くの灌木上に生育する。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林, 岩壁・ガレ場（石灰岩地等）, 河川源流域

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

国内では、埼玉県、東京都に分布し、国外では、インドネシア、フィリピンに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

Akiyama et al. (2021)、秋山 (2022) は埼玉県と東京都から報告している。なお、埼玉県から報告された種は、かつて *Symphyodon perrottetii* と同定されたものである。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

森林伐採や石灰岩の採掘。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 石灰採掘, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 石灰採掘, 分布・産地局限

特記事項

これまでシダレウニゴケ (*Symphyodon perrottetii*) として報告されてきた日本産の種は、Akiyama et al. (2021) によって分類・系統学的に再検討され、狭義の *Symphyodon perrottetii* は日本には存在せず、シダレウニゴケとされてきた種は、少なくとも 5 種の独

立種が含まれていることが明らかになった。日本産のシダレウニゴケ属の分類と分布については、秋山（2022）が詳しく解説している。チチブウニゴケは、かつて埼玉県からシダレウニゴケとして報告されてきたもので、Akiyama et al.（2021）によってフィリピンから記載された *Symphyodon copelandii* であることが明らかになった。本種を含め日本産シダレゴケ属 5 種の分布と生育状況については、今後より詳細な調査を要する。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	—	—	—
第4次 2019:	—	—	—
第4次 2018:	—	—	—
第4次 2017:	—	—	—
第4次 2015:	—	—	—
第4次:	—	—	—
第3次:	—	—	—
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

埼玉県[絶滅危惧Ⅰ類(CE)] 宮崎県[絶滅危惧Ⅱ類(VU-r)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Akiyama, H., R. Pepin and M. Suleiman, 2021. Re-examination of the *Symphyodon perrottetii* (Symphyodontaceae) and related species in East and Southeast Asia. Hattoria, 12: 51-92.
- 秋山弘之, 2022. 日本産ウニゴケ属（ウニゴケ科、蘚類）5種の紹介と和名の提唱. 植物地理・分類研究, 70: 153-165.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Symphyodon copelandii has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Symphyodon copelandii* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due

to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area】 Forest, Cliff/Talus area (e.g. limestone area), River headwater
Threat types:	Logging and wood harvesting, Limestone mining, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	山口富美夫 (広島大学)
Author:	Tomio Yamaguchi

公表年月：2025 年 3 月

ハイゴケ目 Hypnales ウニゴケ科 Symphyodontaceae

ラッコゴケモドキ

Symphyodon gollanioides Nog.

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD)

②

基準 A: —

基準 B: データ不足

基準 C: —

基準 D: —

基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

②生育地が局限されている。

【判断理由】

Akiyama et al. (2021) は、三重県松坂市の 1 か所から報告しているが、これ以外の国内の産地は確認されていない。生育地は局限されている。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

Akiyama et al. (2021) によって日本から初めて報告された。本種の生育地は三重県内にある溪谷部に限られている。

基礎情報

【形態】

植物体の形態はシダレウニゴケ (*Symphyodon recurvomarginatus*) に似ているが、葉が広い倒卵形で、葉先が鈍頭で、中肋が葉の中部にまで達することで区別される。

【生活史】

雌雄異株。

【生育環境】

渓谷の転石上に薄いマットを形成する。

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林, 河川源流域

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

国内では、三重県に分布し、国外では、タイ、インドに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

Akiyama et al. (2021) が三重県から報告している。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

森林伐採や河川改修。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 河川開発, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 河川開発, 分布・産地局限

特記事項

これまでシダレウニゴケ (*Symphyodon perrottetii*) として報告されてきた日本産の種は、Akiyama et al. (2021) によって分類・系統学的に再検討され、狭義の *Symphyodon perrottetii* は日本には存在せず、シダレウニゴケとされてきた種は、少なくとも 5 種の独立種が含まれていることが明らかになった。日本産のシダレウニゴケ属の分類と分布については、秋山 (2022) が詳しく解説している。ラッコゴケモドケは Akiyama et al. (2021) によって日本から初めて報告された種である。これまでに確認されている本種

の分布は三重県の1か所に限られているが、本種を含め日本産シダレゴケ属5種の分布と生育状況については、今後より詳細な調査を要する。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	—	—	—
第4次 2019:	—	—	—
第4次 2018:	—	—	—
第4次 2017:	—	—	—
第4次 2015:	—	—	—
第4次:	—	—	—
第3次:	—	—	—
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

埼玉県[絶滅危惧Ⅰ類(CE)] 宮崎県[絶滅危惧Ⅱ類(VU-r)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Akiyama, H., Pepin, R. & Suleiman, M., 2021. Re-examination of the *Symphyodon perrottetii* (Symphyodontaceae) and related species in East and Southeast Asia. Hattoria, 12: 51-92.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Symphyodon gollanioides has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Symphyodon gollanioides* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest, River headwater

Threat types:	Logging and wood harvesting, River development, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者:	山口富美夫（広島大学）
Author:	Tomio Yamaguchi

公表年月：2025 年 3 月

シダレウニゴケ

Symphyodon recurvomarginatus (Dixon & Sakurai) H.Akiyama

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD)

②

基準 A: —

基準 B: データ不足

基準 C: —

基準 D: —

基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

②生育地が局限されている。

【判断理由】

Akiyama et al. (2021) や秋山 (2022) によれば、国内での生育地は 10 か所以上存在するが、生育可能な場所は風通しの良い特殊な環境に限定されており、不安定な環境にあって、生育地の存続が危惧される。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

日本からはかつて *Symphyodon perrottetii* として報告されてきたが、Akiyama et al. (2021) によって、分類学的再検討がなされ、これまで *Symphyodon perrottetii* とされてきた種の多くは *Symphyodon recurvomarginatus* に相当すると改められた。日本国内では 10 か所以上の生育地があるが、温暖で湿潤な森林内の風通しの良い場所に生育が限られている。

基礎情報

【形態】

植物体はどうか、基物から垂れ下がり、時に 10 cm 以上になることがある。茎葉は卵状披針形でやや非相称、長さ 1.5 mm、葉先は鋭頭、基部はわずかに下延する。中肋は二又して短い。本属のもっとも顕著な特徴は、円筒形の莖に棘状の突起があることであるが、めったに莖につけない。外見はアカイチゴケ属 (*Pseudotaxiphyllum*) の小型の種に似るが、莖に棘状の突起があることと、生育環境が違うことなどで区別できる。

【生活史】

雌雄異株。

【生育環境】

降水量の多い太平洋沿岸部の温暖な林内で風通しのよい場所の樹木の幹や葉、あるいは岩から垂れ下がるように生育している。

生育環境区分：	【陸域_中標高地 低標高地】森林, 河川源流域

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

国内では、伊豆諸島（八丈島、御蔵島）、三重県、徳島県、熊本県、宮崎県、鹿児島県、琉球列島（奄美大島、徳之島）に分布し、国外では、台湾、ベトナムに分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

Syrrhopodon recurvomarginatus としては、Akiyama et al. (2021)、秋山 (2022) が伊豆諸島（八丈島、御蔵島）、三重県、徳島県、熊本県、宮崎県、鹿児島県、琉球列島（奄美大島、徳之島）産の標本を報告している。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

森林伐採や、付近を流れる川の改修などで生育地の存続が危ぶまれる。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 河川開発, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 河川開発, 分布・産地局限

特記事項

これまでシダレウニゴケ (*Symphiodon perrottetii*) として報告されてきた日本産の種は、Akiyama et al. (2021) によって分類・系統学的に再検討され、狭義の *Symphiodon perrottetii* は日本には存在せず、シダレウニゴケとされてきた種は、少なくとも 5 種の独立種が含まれていることが明らかになった。日本産のシダレウニゴケ属の分類と分布については、秋山 (2022) が詳しく解説している。これまでシダレウニゴケと同定されてきた種の多くは *Symphiodon recurvomarginatus* と考えられているが、日本産シダレゴケ属 5 種の分布と生育状況については、今後より詳細な調査を要する。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	シダレウニゴケ	<i>Symphiodon perrottetii</i> Mont.	VU
第4次 2019:	シダレウニゴケ	<i>Symphiodon perrottetii</i> Mont.	VU
第4次 2018:	シダレウニゴケ	<i>Symphiodon perrottetii</i> Mont.	VU
第4次 2017:	シダレウニゴケ	<i>Symphiodon perrottetii</i> Mont.	VU
第4次 2015:	シダレウニゴケ	<i>Symphiodon perrottetii</i> Mont.	VU
第4次:	シダレウニゴケ	<i>Symphiodon perrottetii</i> Mont.	VU
第3次:	シダレウニゴケ	<i>Symphiodon perrottetii</i> Mont.	VU
第2次:	シダレウニゴケ	<i>Symphiodon perrottetii</i> Mont.	CR+EN
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

埼玉県[絶滅危惧Ⅰ類(CE)] 宮崎県[絶滅危惧Ⅱ類(VU-r)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Akiyama, H., R. Pepin and M. Suleiman, 2021. Re-examination of the *Symphiodon perrottetii* (Symphyodontaceae) and related species in East and Southeast Asia. Hattoria, 12: 51-92.
- 秋山弘之, 2022. 日本産ウニゴケ属（ウニゴケ科、蘚類）5種の紹介と和名の提唱. 植物地理・分類研究, 70: 153-165.
- Ando, H. and T. Seki, 1962. A remarkable range extension of *Symphiodon perrottetii* Mont. Hikobia, 3: 80-85.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Symphyodon recurvomarginatus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Symphyodon recurvomarginatus* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Mid-altitude area Low-altitude area】 Forest, River headwater
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 山口富美夫 (広島大学)
Author: Tomio Yamaguchi

公表年月: 2025 年 3 月

ナガレウニゴケ

Symphyodon rheophilus H.Akiyama

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD) ②				
基準 A: —	基準 B: データ不足	基準 C: —	基準 D: —	基準 E: —
環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。 ②生育地が局限されている。 【判断理由】 Akiyama et al. (2021) や秋山 (2022) は、三重県、徳島県、宮崎県から報告している。低山地、密な森林内を流れる溪流沿いで、増水時に水没するような転石上に生育しており、生育地が局限されている。				
評価分科会： 蘚苔類分科会				

概要

Akiyama et al. (2021) によって新種記載された日本の固有種である。本種は低山地の密な森林内を流れる溪流沿いで、増水時に水没するような転石上に生育している。

基礎情報

【形態】

植物体の形態はシダレウニゴケ (*Symphyodon recurvomarginatus*) に似ているが、葉身細胞の上端が目立って突出し、しばしば短い棘状になる。葉身細胞の形態はチチブウニゴケ (*S. copelandii*) に似ているが、枝葉は丸～扁平につき、先が細く糸状になることがないことで区別される。

【生活史】

雌雄異株。

【生育環境】

低山地、密な森林内を流れる溪流沿いで、増水時に水没するような転石上に生育する

生育環境区分：	【陸域_低標高地】森林, 河川源流域

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域, (7) 島嶼地域

【分布域】

日本の固有種で、三重県、徳島県、宮崎県から報告されている。

現在の生育状況

【分布域の現況】

Akiyama et al. (2021) や秋山 (2022) は三重県、徳島県、宮崎県から報告している。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。

存続を脅かす要因

森林伐採や河川改修。

要因の区分：	(過去)	森林伐採, 河川開発, 分布・産地局限
	(現在)	森林伐採, 河川開発, 分布・産地局限

特記事項

これまでシダレウニゴケ (*Symphyodon perrottetii*) として報告されてきた日本産の種は、Akiyama et al. (2021) によって分類・系統学的に再検討され、狭義の *Symphyodon perrottetii* は日本には存在せず、シダレウニゴケとされてきた種は、少なくとも 5 種の独立種が含まれていることが明らかになった。日本産のシダレウニゴケ属の分類と分布に

については、秋山（2022）が詳しく解説している。ナガレウニゴケは、Akiyama et al.（2021）によって、新種として記載された日本の固有種である。これまでに確認された本種の生育地は3か所のみであるが、日本産シダレゴケ属5種の分布と生育状況については、今後より詳細な調査を要する。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	—	—	—
第4次 2019:	—	—	—
第4次 2018:	—	—	—
第4次 2017:	—	—	—
第4次 2015:	—	—	—
第4次:	—	—	—
第3次:	—	—	—
第2次:	—	—	—
第1次:	—	—	—

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）

埼玉県[絶滅危惧Ⅰ類(CE)] 宮崎県[絶滅危惧Ⅱ類(VU-r)]

保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）

指定なし

参考文献

- Akiyama, H., R. Pepin and M. Suleiman, 2021. Re-examination of the *Symphyodon perrottetii* (Symphyodontaceae) and related species in East and Southeast Asia. Hattoria, 12: 51-92.
- 秋山弘之, 2022. 日本産ウニゴケ属（ウニゴケ科、蘚類）5種の紹介と和名の提唱. 植物地理・分類研究, 70: 153-165.

アセスメントサマリー（Assessment summary）

Symphyodon rheophilus has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Symphyodon rheophilus* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data,

including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area_Low-altitude area】 Forest, River headwater
Threat types:	Logging and wood harvesting, River development, Limited distribution
Law designation status for conservation	—

執筆者: 山口富美夫（広島大学）
Author: Tomio Yamaguchi

公表年月：2025 年 3 月

ハイゴケ目 Hypnales シノブゴケ科 Thuidiaceae

カラフトシノブゴケ

Echinophyllum sachalinense (Lindb.) T.J.O'Brien

カテゴリー判定結果 情報不足 (DD)

②

基準 A: —	基準 B: データ不足	基準 C: —	基準 D: データ不足	基準 E: —

環境条件の変化によって、容易に絶滅危惧カテゴリーに移行し得る属性（具体的には次の要素）を有しているが、生育状況をはじめとしてカテゴリーを判定するに足る情報が得られていない種。

②生育地が局限されている。

【判断理由】

北海道から本州にかけての高山に点々と分布しているのが知られている。

評価分科会： 蘚苔類分科会

概要

カラフトシノブゴケは、東アジアに分布する蘚類で、茎に密に毛葉があり、葉縁に長い棘があることが特徴である。2004 年に北海道利尻島で安定して生育していたという報告があり、2018 年の調査でも確認されている。生育地付近の森林伐採で生育環境が損なわれる心配がある。

協力者: 樋口正信 (国立科学博物館)・古木達郎 (元千葉県立中央博物館)・内田暁友 (日本蘚苔類学会)

基礎情報

【形態】

植物体は褐色を帯び、茎は這い、規則的に1回羽状に分枝し、密に毛葉をつける。茎葉は広卵形、長さ1~1.5 mm、葉縁の中部以下には多細胞の長い棘が並び、先には細かい歯がある。中肋は強壯で葉先近くに達し、背面に大きな歯がある。本種はヌマシノブゴケ *Helodium paludosum* に似るが、茎葉は広い卵形で葉縁には中部近くまで長い棘があることで区別される。

【生活史】

国内では孢子体は見つかっていない。

【生育環境】

高山~亜高山帯の森林内の根もとの腐植土上にマットを作る。

生育環境区分：	【陸域_中標高地】森林

国土地域区分：	(1) 奥山自然地域

【分布域】

国内では北海道と本州に分布しており、国外では朝鮮半島、中国、サハリンに分布する。中部地方以北の高山に点々と分布する。

現在の生育状況

【分布域の現況】

Watanabe (1972) は国内の標本産地として北海道利尻岳、斜里岳、山梨県富士山、南アルプス北岳を挙げている。2000年のレッドデータブックでは北岳のほかに新潟県の妙高山、妙高高原で生育が確認されたとしている(神田, 2000)が、証拠がなくほかの文献での裏付けがとれない。富山県(2012)では立山町の2か所で報告があるとされている。長野県では八ヶ岳の中部と南部で確認されている(木口ほか, 2006)。2004年に北海道利尻島で安定して生育していたという報告(大石, 2006)があり、2018年の調査でも確認されている。岩月ほか(2001)は1998年に北岳で取られた写真を載せている。長年確認されていない産地も多いが、その後の調査が行われていないので、現存しないとも思われない。

【生育地の現況】

詳細については不明。

【個体数の現況】

詳細については不明。大石(2006)は、利尻山の登山道沿い(標高1000 m)に安定した群落を確認している。2018年の調査ではほぼ同じような地点で20 cm四方の安定した群落が確認されている。

存続を脅かす要因

生育地付近の森林伐採で生育環境が損なわれる心配がある。登山道沿いにある群落では登山道整備の際に生育地に配慮する必要がある（大石, 2006）。		
要因の区分：	（過去）	森林伐採, その他（遊歩道整備）
	（現在）	森林伐採, その他（遊歩道整備）

特記事項
特になし

旧レッドリストカテゴリーと掲載名				
第4次 2020:	カラフトシノブゴケ	<i>Echinophyllum sachalinense</i> (Lindb.) T.J.O'Brien	VU	
第4次 2019:	カラフトシノブゴケ	<i>Echinophyllum sachalinense</i> (Lindb.) T.J.O'Brien	VU	
第4次 2018:	カラフトシノブゴケ	<i>Echinophyllum sachalinense</i> (Lindb.) T.J.O'Brien	VU	
第4次 2017:	カラフトシノブゴケ	<i>Echinophyllum sachalinense</i> (Lindb.) T.J.O'Brien	VU	
第4次 2015:	カラフトシノブゴケ	<i>Echinophyllum sachalinense</i> (Lindb.) O'Brien [= <i>Helodium sachalinense</i> (Lindb.) Broth.]	VU	
第4次:	カラフトシノブゴケ	<i>Echinophyllum sachalinense</i> (Lindb.) O'Brien [= <i>Helodium sachalinense</i> (Lindb.) Broth.]	VU	
第3次:	カラフトシノブゴケ	<i>Echinophyllum sachalinense</i> (Lindb.) O'Brien [= <i>Helodium sachalinense</i> (Lindb.) Broth.]	VU	
第2次:	カラフトシノブゴケ	<i>Helodium sachalinense</i> (Lindb.) Broth.	CR+EN	
第1次:	—	—	—	

都道府県レッドリスト・レッドデータブック掲載状況（令和4年度末時点）
富山県[絶滅危惧Ⅱ類] 長野県[絶滅危惧Ⅱ類（VU）]
保護に係る法令指定状況（令和4年度末時点）
指定なし

参考文献

- 岩月善之助・出口博則・古木達郎, 2001. 日本の野生植物コケ. 平凡社, 東京. 355pp., 192pls.
- 神田啓史, 2000. カラフトシノブゴケ. 環境庁 (編), 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物レッドデータブック 9 植物 II (維管束植物以外), p. 91. 自然環境研究センター, 東京.
- 木口博史・立石幸敏・西村直樹, 2006. ハケ岳蘚類予備目録. *Naturalistae*, 10: 69-80.
- 大石善隆, 2006. 利尻島に生育する稀少種のコケ植物 (予備調査報告). *利尻研究*, 25: 67-70.
- 富山県生活環境部自然保護課, 2012. 富山県の絶滅のおそれのある野生生物-レッドデータブックとやま 2012-. 451 pp, 富山県生活環境部自然保護課, 富山.
- Watanabe, R., 1972. A revision of the family Thuidiaceae in Japan and adjacent areas. *J. Hattori Bot. Lab*, 36: 171-320.

アセスメントサマリー (Assessment summary)

Echinophyllum sachalinense has been assessed for threatened wildlife of Japan Red List 5th edition. *Echinophyllum sachalinense* is listed as DD under criteria ②.

The species that possesses attributes which could easily shift it into the threatened categories due to changes in environmental conditions (specifically, the following criteria), yet lacks sufficient data, including habitat status, to determine its category.

②Habitats are highly limited.

Habitat types:	【Terrestrial/Freshwater area Mid-altitude area】Forest
Threat types:	Logging and wood harvesting, Other (遊歩道整備)
Law designation status for conservation	—

執筆者: 有川智己 (慶應義塾大学)
Author: Tomotsugu Arikawa

公表年月: 2025 年 3 月

第5次レッドリスト（蘚苔類）においてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった種の解説

レッドリスト 2020 掲載名

アブラゴケ目	アブラゴケ科
タカサゴツガゴケ	
<i>Distichophyllum mittenii</i> Bosch & Sande Lac.	

第5次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由

①現時点での絶滅危険度は小さい	
②評価するに足る情報が極めて少ない	
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	○
④その他	

具体的理由

本種は Sakurai (1932) によって日本から初めて報告された。水島 (1968) はこの報告の元になった標本を再検討し、本種が *Distichophyllum collenchymatosum* の誤同定であると確認した。Sakurai (1932) 以来、日本からはいくつかの報告があるが、いずれも、Sakurai (1932) を引用したものである。ここでは水島 (1968) にしたがって、本種を日本のフロラから除外した。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	タカサゴツガゴケ	<i>Distichophyllum mittenii</i> Bosch & Sande Lac.	DD
第4次 2019:	タカサゴツガゴケ	<i>Distichophyllum mittenii</i> Bosch & Sande Lac.	DD
第4次 2018:	タカサゴツガゴケ	<i>Distichophyllum mittenii</i> Bosch & Sande Lac.	DD
第4次 2017:	タカサゴツガゴケ	<i>Distichophyllum mittenii</i> Bosch & Sande Lac.	DD
第4次 2015:	タカサゴツガゴケ	<i>Distichophyllum mittenii</i> Bosch & Sande Lac.	DD
第4次:	タカサゴツガゴケ	<i>Distichophyllum mittenii</i> Bosch & Sande Lac.	DD
第3次:	タカサゴツガゴケ	<i>Distichophyllum mittenii</i> Bosch & Sande Lac.	DD
第2次:	タカサゴツガゴケ	<i>Distichophyllum mittenii</i> Bosch et Lac.	DD
第1次:	—	—	—

参考文献

- 水島うらら, 1968. 西表島産の *Distichophyllum Mittenii* について. 植物研究雑誌, 43: 60-61.
- Sakurai, K., 1932. Beobachtungen über japanische Moosflora (II). The botanical magazine, Tokyo, 46: 496-509.
- 山口富美夫, 2024. タカサゴツガゴケ *Distichophyllum mittenii* とクロジクツガゴケ *D. nigricaula* を日本のフロラから除外する. 蘚苔類研究 13: 51-52.

執筆者： 山口富美夫（広島大学）

公表年月：2025 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名	
アブラゴケ目	アブラゴケ科
クロジクツガゴケ	
<i>Distichophyllum nigricaula</i> Bosch & Sande Lac.	

第5次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	
②評価するに足る情報が極めて少ない	
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	○
④その他	
具体的理由	
本種の日本からの報告は Horikawa (1935) のみである。Horikawa (1935) の報告は、琉球列島の蘚苔類フロラに関して日本で初めて報告した論文の一つである。Horikawa (1935) は筆者自身で採集した標本の中から、<i>Distichophyllum nigricaula</i> を沖縄島、石垣島、西表島から報告し、同時に沖縄島と西表島から <i>Distichophyllum montagneanum</i> (= <i>Distichophyllum maibarae</i>) を報告している。琉球列島からは現在 4 種の <i>Distichophyllum</i> が報告されているが、そのうち普通に見られるのは、<i>Distichophyllum collenchymatosum</i> と <i>Distichophyllum maibarae</i> の 2 種である。<i>Distichophyllum collenchymatosum</i> は <i>Distichophyllum nigricaula</i> に形態的によく似た種であるが、Horikawa (1935) は、<i>Distichophyllum collenchymatosum</i> には言及していない。琉球列島産の他の 2 種、<i>Distichophyllum osterwaldii</i> と <i>Distichophyllum obtusifolium</i> は <i>Distichophyllum mittenii</i> や <i>Distichophyllum maibarae</i> とは明らかに形態的に異なり、見誤ることはない。おそらく、Horikawa (1935) の報告は、現在 <i>Distichophyllum collenchymatosum</i> として広く知られている種の誤同定であろう。	

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第4次 2020:	クロジクツガゴケ	<i>Distichophyllum nigricaula</i> Bosch & Sande Lac.	DD
第4次 2019:	クロジクツガゴケ	<i>Distichophyllum nigricaula</i> Bosch & Sande Lac.	DD
第4次 2018:	クロジクツガゴケ	<i>Distichophyllum nigricaula</i> Bosch & Sande Lac.	DD
第4次 2017:	クロジクツガゴケ	<i>Distichophyllum nigricaula</i> Bosch & Sande Lac.	DD
第4次 2015:	クロジクツガゴケ	<i>Distichophyllum nigricaula</i> Bosch & Sande Lac.	DD
第4次:	クロジクツガゴケ	<i>Distichophyllum nigricaula</i> Bosch & Sande Lac.	DD
第3次:	クロジクツガゴケ	<i>Distichophyllum nigricaula</i> Mitt. ex Bosch & Sande Lac.	DD
第2次:	和名なし	<i>Calymperes strictifolium</i> (Mitt.) Roth Syn. <i>C. tuberculosum</i> (Ther. et Dix.) Broth.	DD

参考文献

- Horikawa, Y., 1935. Symbolae florae bryophytae orientali-asiae V. The botanical magazine, Tokyo, 49: 211-263.
- 山口富美夫. 2024. タカサゴツガゴケ *Distichophyllum mittenii* とクロジクツガゴケ *D. nigricaula* を日本のフロラから除外する. 蘚苔類研究 13: 51-52.

執筆者： 山口富美夫（広島大学）

公表年月：2025 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名	
アブラゴケ目	クジャクゴケ科
コキジノオゴケ	
<i>Cyathophorum hookerianum</i> (Griff.) Mitt.	

第5次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	○
②評価するに足る情報が極めて少ない	
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	
具体的理由	
比較的稀な種であるが、生育量が減少している、生育環境が悪化したというデータは無く、当面の絶滅危険度は相対的に低い。	

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第4次 2020:	コキジノオゴケ	<i>Cyathophorum hookerianum</i> (Griff.) Mitt.	NT
第4次 2019:	コキジノオゴケ	<i>Cyathophorum hookerianum</i> (Griff.) Mitt.	NT
第4次 2018:	コキジノオゴケ	<i>Cyathophorum hookerianum</i> (Griff.) Mitt.	NT
第4次 2017:	コキジノオゴケ	<i>Cyathophorum hookerianum</i> (Griff.) Mitt.	NT
第4次 2015:	コキジノオゴケ	<i>Cyathophorum hookerianum</i> (Griff.) Mitt. [= <i>Cyathophorella hookeriana</i> (Griff.) M.Fleisch.]	NT
第4次:	コキジノオゴケ	<i>Cyathophorum hookerianum</i> (Griff.) Mitt. [= <i>Cyathophorella hookeriana</i> (Griff.) M.Fleisch.]	NT
第3次:	コキジノオゴケ	<i>Cyathophorum hookerianum</i> (Griff.) Mitt. [= <i>Cyathophorella hookeriana</i> (Griff.) M.Fleisch.]	NT
第2次:	コキジノオゴケ	<i>Cyathophorella hookeriana</i> (Griff.) Fl.	CR+EN
第1次:	—	—	—

参考文献
● 文献なし

執筆者： 樋口正信（国立科学博物館）

公表年月：2025 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名

アブラゴケ目	クジャクゴケ科
シナクジャクゴケ	
<i>Hypopterygium tamarisci</i> (Sw.) Müll.Hal.	

第5次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由

①現時点での絶滅危険度は小さい	○
②評価するに足る情報が極めて少ない	
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	
具体的理由	
比較的稀な種であるが、生育量が減少している、生育環境が悪化したというデータは無く、当面の絶滅危険度は相対的に低い。	

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	シナクジャクゴケ	<i>Hypopterygium tamarisci</i> (Sw.) Müll.Hal.	NT
第4次 2019:	シナクジャクゴケ	<i>Hypopterygium tamarisci</i> (Sw.) Müll.Hal.	NT
第4次 2018:	シナクジャクゴケ	<i>Hypopterygium tamarisci</i> (Sw.) Müll.Hal.	NT
第4次 2017:	シナクジャクゴケ	<i>Hypopterygium tamarisci</i> (Sw.) Müll.Hal.	NT
第4次 2015:	シナクジャクゴケ	<i>Hypopterygium tamarisci</i> (Sw.) Brid. [= <i>H. tenellum</i> Müll.Hal.]	NT
第4次:	シナクジャクゴケ	<i>Hypopterygium tamarisci</i> (Sw.) Brid. [= <i>H. tenellum</i> Müll.Hal.]	NT
第3次:	シナクジャクゴケ	<i>Hypopterygium tamarisci</i> (Sw.) Brid. (= <i>H. tenellum</i> Müll.Hal.)	NT
第2次:	シナクジャクゴケ	<i>Hypopterygium tenellum</i> C. Muell.	CR+EN
第1次:	—	—	—

参考文献

- 文献なし

執筆： 樋口正信（国立科学博物館）

公表年月：2025 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名	
イヌマゴケ目	ヒラゴケ科
ヒメハゴロモゴケ	
<i>Homaliiodendron exiguum</i> (Bosch & Sande Lac.) M.Fleisch.	

第5次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	○
②評価するに足る情報が極めて少ない	
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	
具体的理由	
植物標本庫に保管されている標本から判断すると、西日本の各地に広範囲に分布しており、とくに琉球列島の林内ではやや普通に生育している。当面の絶滅危険度は相対的に低いと考えられる。	

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第4次 2020:	ヒメハゴロモゴケ	<i>Homaliiodendron exiguum</i> (Bosch & Sande Lac.) M.Fleisch.	NT
第4次 2019:	ヒメハゴロモゴケ	<i>Homaliiodendron exiguum</i> (Bosch & Sande Lac.) M.Fleisch.	NT
第4次 2018:	ヒメハゴロモゴケ	<i>Homaliiodendron exiguum</i> (Bosch & Sande Lac.) M.Fleisch.	NT
第4次 2017:	ヒメハゴロモゴケ	<i>Homaliiodendron exiguum</i> (Bosch & Sande Lac.) M.Fleisch.	NT
第4次 2015:	ヒメハゴロモゴケ	<i>Homaliiodendron exiguum</i> (Bosch & Sande Lac.) M.Fleisch.	NT
第4次:	ヒメハゴロモゴケ	<i>Homaliiodendron exiguum</i> (Bosch & Sande Lac.) M.Fleisch.	NT
第3次:	ヒメハゴロモゴケ	<i>Homaliiodendron exiguum</i> (Bosch & Sande Lac.) M.Fleisch.	NT
第2次:	ヒメハゴロモゴケ	<i>Homaliiodendron exiguum</i> (Bosch et Lac.) Fl.	CR+EN
第1次:	—	—	—

参考文献

- 文献なし

執筆者： 山口富美夫（広島大学）

公表年月：2025 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名	
イヌマゴケ目	ヒラゴケ科
トサヒラゴケ	
<i>Neckeropsis obtusata</i> (Mont.) M.Fleisch.	

第5次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	○
②評価するに足る情報が極めて少ない	
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	
具体的理由	
2015～2021 年にレッドリスト現地調査や論文で報告されたり、採集されて植物標本庫に保管された標本から、伊豆諸島から琉球列島まで 20 か所以上の産地が確認されている。森林伐採や倒木などによる環境変化で生育地が縮小あるいは消滅する危険はあるが、多くの生育地があることから、絶滅の危険度は低いものとする。	

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第4次 2020:	トサヒラゴケ	<i>Neckeropsis obtusata</i> (Mont.) M.Fleisch.	NT
第4次 2019:	トサヒラゴケ	<i>Neckeropsis obtusata</i> (Mont.) M.Fleisch.	NT
第4次 2018:	トサヒラゴケ	<i>Neckeropsis obtusata</i> (Mont.) M.Fleisch.	NT
第4次 2017:	トサヒラゴケ	<i>Neckeropsis obtusata</i> (Mont.) M.Fleisch.	NT
第4次 2015:	トサヒラゴケ	<i>Neckeropsis obtusata</i> (Mont.) M.Fleisch.	NT
第4次:	トサヒラゴケ	<i>Neckeropsis obtusata</i> (Mont.) M.Fleisch.	NT
第3次:	トサヒラゴケ	<i>Neckeropsis obtusata</i> (Mont.) M.Fleisch.	NT
第2次:	トサヒラゴケ	<i>Neckeropsis obtusata</i> (Mont.) Fl. in Broth.	CR+EN
第1次:	—	—	—

参考文献
● 文献なし

執筆者： 山口富美夫（広島大学）

公表年月：2025 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名

ウロコゼニゴケ目	ミヤマミズゼニゴケ科
ミヤマミズゼニゴケ	
<i>Calycularia laxa</i> Lindb. & Arnell	

第5次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由

①現時点での絶滅危険度は小さい	○
②評価するに足る情報が極めて少ない	
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	

具体的理由

今回の調査では、既知の産地の全てを調査したわけではないが、一部の生育地では乾燥による減少が認められる年があるものの、多くの生育地では減少傾向が認められなかった。なおかつ、新たな産地が見つかることから、顕著な分布域の縮小や個体数の減少はないと推定される。

旧レッドリストカテゴリーと掲載名

第4次 2020:	ミヤマミズゼニゴケ	<i>Calycularia laxa</i> Lindb. & Arnell	VU
第4次 2019:	ミヤマミズゼニゴケ	<i>Calycularia laxa</i> Lindb. & Arnell	VU
第4次 2018:	ミヤマミズゼニゴケ	<i>Calycularia laxa</i> Lindb. & Arnell	VU
第4次 2017:	ミヤマミズゼニゴケ	<i>Calycularia laxa</i> Lindb. & Arnell	VU
第4次 2015:	ミヤマミズゼニゴケ	<i>Calycularia laxa</i> Lindb. & Arnell [= <i>Calycularia crispula</i> auct., non Mitt.]	VU
第4次:	ミヤマミズゼニゴケ	<i>Calycularia laxa</i> Lindb. & Arnell [= <i>Calycularia crispula</i> auct., non Mitt.]	VU
第3次:	ミヤマミズゼニゴケ	<i>Calycularia crispula</i> Mitt.	VU
第2次:	ミヤマミズゼニゴケ	<i>Calycularia crispula</i> Mitt.	CR+EN
第1次:	—	—	—

参考文献

- 文献なし

執筆者： 古木達郎（元千葉県立中央博物館）

公表年月：2025 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名	
シトネゴケ目	イワダレゴケ科
ヒヨクゴケ	
<i>Hylocomiastrum umbratum</i> (Hedw.) M.Fleisch.	

第5次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	○
②評価するに足る情報が極めて少ない	
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	
具体的理由	
比較的稀な種であるが、生育量が減少している、生育環境が悪化したというデータは無く、当面の絶滅危険度は相対的に低い。	

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第4次 2020:	ヒヨクゴケ	<i>Hylocomiastrum umbratum</i> (Hedw.) M.Fleisch.	NT
第4次 2019:	ヒヨクゴケ	<i>Hylocomiastrum umbratum</i> (Hedw.) M.Fleisch.	NT
第4次 2018:	ヒヨクゴケ	<i>Hylocomiastrum umbratum</i> (Hedw.) M.Fleisch.	NT
第4次 2017:	ヒヨクゴケ	<i>Hylocomiastrum umbratum</i> (Hedw.) M.Fleisch.	NT
第4次 2015:	ヒヨクゴケ	<i>Hylocomiastrum umbratum</i> (Hedw.) M.Fleisch. [= <i>Hylocomium umbratum</i> (Hedw.) Bruch & Schimp.]	NT
第4次:	ヒヨクゴケ	<i>Hylocomiastrum umbratum</i> (Hedw.) M.Fleisch. [= <i>Hylocomium umbratum</i> (Hedw.) Bruch & Schimp.]	NT
第3次:	ヒヨクゴケ	<i>Hylocomiastrum umbratum</i> (Hedw.) M.Fleisch. [= <i>Hylocomium umbratum</i> (Hedw.) Bruch & Schimp.]	NT
第2次:	ヒヨクゴケ	<i>Hylocomium umbratum</i> (Hedw.) B.S.G.	DD
第1次:	—	—	—

参考文献
● 文献なし

執筆者： 樋口正信（国立科学博物館）

公表年月：2025 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名	
シトネゴケ目	ナガハシゴケ科
リュウキュウナガハシゴケ	
<i>Trichosteleum boschii</i> (Dozy & Molk.) A.Jaeger	

第5次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	○
②評価するに足る情報が極めて少ない	
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	
具体的理由	
第5次レッドリスト調査や論文での報告、標本庫に保管されている標本から判断して、琉球列島内では出現頻度が高く、生育状況も良好であると判断できる。屋久島～西表島の4つの国立公園内に生育地があり、しばらくは絶滅の危険はないと考えられる。	

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第4次 2020:	リュウキュウナガハシゴケ	<i>Trichosteleum boschii</i> (Dozy & Molk.) A.Jaeger	NT
第4次 2019:	リュウキュウナガハシゴケ	<i>Trichosteleum boschii</i> (Dozy & Molk.) A.Jaeger	NT
第4次 2018:	リュウキュウナガハシゴケ	<i>Trichosteleum boschii</i> (Dozy & Molk.) A.Jaeger	NT
第4次 2017:	リュウキュウナガハシゴケ	<i>Trichosteleum boschii</i> (Dozy & Molk.) A.Jaeger	NT
第4次 2015:	リュウキュウナガハシゴケ	<i>Trichosteleum boschii</i> (Dozy & Molk.) A.Jaeger [=	NT
		<i>Rhaphidostichum boschii</i> (Dozy & Molk.) Seki ssp. <i>thelidictyon</i> (Sull. & Lesq.) Seki]	
第4次:	リュウキュウナガハシゴケ	<i>Trichosteleum boschii</i> (Dozy & Molk.) A.Jaeger [=	NT
		<i>Rhaphidostichum boschii</i> (Dozy & Molk.) Seki ssp. <i>thelidictyon</i> (Sull. & Lesq.) Seki]	
第3次:	リュウキュウナガハシゴケ	<i>Trichosteleum boschii</i> (Dozy & Molk.) A.Jaeger [=	NT
		<i>Rhaphidostichum boschii</i> ssp. <i>thelidictyon</i> (Sull. & Lesq.) Seki]	
第2次:	リュウキュウナガハシゴケ	<i>Trichosteleum boschii</i> (Dozy et Molk.) Jaeg.Syn.	CR+EN
		<i>Rhaphidostichum boschii</i> ssp. <i>thelidictyon</i> (Sull. et Lesq.) Seki	
第1次:	—	—	—

参考文献

- 文献なし

執筆者： 山口富美夫（広島大学）

公表年月：2025 年 3 月

レッドリスト 2020 掲載名	
ツボミゴケ目	ツキヌキゴケ科
マルバホラゴケモドキ	
<i>Calypogeia aeruginosa</i> Mitt.	

第5次レッドリストにおいてカテゴリー外（レッドリスト不掲載）となった理由	
①現時点での絶滅危険度は小さい	○
②評価するに足る情報が極めて少ない	
③最新の研究成果から独立種等とすることが妥当でない	
④その他	
具体的理由	
調査の結果、屋久島の河川環境周辺において普通に生育することが判明したため、絶滅のおそれは低いと判断した。	

旧レッドリストカテゴリーと掲載名			
第4次 2020:	マルバホラゴケモドキ	<i>Calypogeia aeruginosa</i> Mitt.	VU
第4次 2019:	マルバホラゴケモドキ	<i>Calypogeia aeruginosa</i> Mitt.	VU
第4次 2018:	マルバホラゴケモドキ	<i>Calypogeia aeruginosa</i> Mitt.	VU
第4次 2017:	マルバホラゴケモドキ	<i>Calypogeia aeruginosa</i> Mitt.	VU
第4次 2015:	マルバホラゴケモドキ	<i>Calypogeia aeruginosa</i> Mitt.	VU
第4次:	マルバホラゴケモドキ	<i>Calypogeia aeruginosa</i> Mitt.	VU
第3次:	マルバホラゴケモドキ	<i>Calypogeia aeruginosa</i> Mitt.	VU
第2次:	マルバホラゴケモドキ	<i>Calypogeia aeruginosa</i> Mitt.	VU
第1次:	—	—	—

参考文献
● 文献なし

執筆者： 古木達郎（元千葉県立中央博物館）

公表年月：2025 年 3 月

■ 学名索引

- Acrobolbus ciliatus* (Mitt.) Schiffn. 727
Acrobolbus knightii (Mitt.) Briscoe 442
Acroporium secundum (Reinw. & Hornsch.) M.Fleisch.
 393
Aerobryidium laosense (Broth. & Paris) S.H.Lin .. 650
Aerobryopsis parisii (Cardot) Broth. 654
Aerobryum speciosum Dozy & Molk. var. *nipponicum*
 Nog. 1080
Anastrepta orcadensis (Hook.) Schiffn. 715
Anastrophyllum ellipticum Inoue 37
Andreaea nivalis Hook. 769
Aneura hirsuta Furuki 29
Anomobryum yasudae Broth. 1036
Aongstroemia julacea (Hook.) Mitt. 984
Aongstroemia orientalis Mitt. 988
Apotreubia nana (S.Hatt. & Inoue) S.Hatt. & Mizut.
 425
Aptychella robusta (Broth.) M.Fleisch. 682
Archilejeunea amakawana Inoue 237
Asterella cruciata (Steph.) Horik. 413
Asterella wallichiana (Lehm. & Lindenb.) Grolle... 703
Aulacopilum glaucum Wilson subsp. *trichophyllum*
 (Ångstr.) Pursell 799
Barbilophozia hatcheri (A.Evans) Loeske 141
Bazzania ovistipula (Steph.) Abeyw. 450
Blindiadelphus recurvatus (Hedw.) Fedosov & Ignatov
 968
Bonnosukea serrulata (Cardot & P.de la Varde)
 H.Akiyama 1132
Brachydontium noguchii Z.Iwats., Tad.Suzuki &
 Kiguchi 960
Brachydontium olympicum (E.Britton) T.T.McIntosh &
 J.R.Spence 81
Brachydontium trichodes (F.Weber) Milde 964
Breutelia arundinifolia (Duby) M.Fleisch. 325
Bruchia microspora Nog. 1016
Bryochenea vestitissima (Besch.) Touw 1084
Bryonorrhisia acutifolia (Mitt.) Enroth 634
Buckia vaucheri (Lesq.) D.Ríos, M.T.Gallego &
 J.Guerra 1128
Callicostella papillata (Mont.) Mitt. 630
Calycularia laxa Lindb. & Arnell 1182
Calymperes boninense Z.Iwats. 556
Calymperes strictifolium (Mitt.) G.Roth 85
Calypogeia aeruginosa Mitt. 1186
Calypothecium philippinense Broth. 369
Campylopodium medium (Duby) Giese & J.-P.Frahm
 305
Campylopus fragilis (Brid.) Bruch & Schimp. 976
Campylopus gracilis (Mitt.) A.Jaeger 980
Campylostelium brachycarpum (Nog.) Z.Iwats.,
 Yuk.Tateishi & Tad.Suzuki 777
Cephaloziella crispata N.Kitag. 872
Cephaloziella elachista (Gottsche & Rabenh.) Schiffn.
 169
Cephaloziella massalongii (Spruce) Müll.Frib. 723
Cheilolejeunea ryukyuensis Mizut. 241
Chiastocaulon theriotanum (Steph.) S.D.F.Patzak,
 M.A.M.Renner.Schäff.-Verw. & Heinrichs. 65
Circulifolium microdendron (Mont.) S.Olsson, Enroth
 & D.Quandt 860
Clastobryellina ceylonensis (Broth.) H.Akiyama. 381
Clastobryellina merrillii (Broth.) H.Akiyama. 1136
Clastobryellina orientalis H.Akiyama 1140
Clastobryum cuculligerum (Sande Lac.) Tixier 385
Clastobryum glabrescens (Z.Iwats.) B.C.Tan, Z.Iwats.
 & D.H.Norris. 389
Clevea pusilla (Steph.) Rubas. & D.G.Long 417
Cololejeunea aequabilis (Sande Lac.) Schiffn. 920
Cololejeunea ceratilobula (P.C.Chen) R.M.Schust. 245
Cololejeunea drepanolejeuneoides (Horik.) R.M.Schust.
 73
Cololejeunea inflata Steph. 486
Cololejeunea schmidtii Steph. 490

<i>Cololejeunea sintenisii</i> (Steph.) Pócs	249		924
<i>Cololejeunea subfloccosa</i> Mizut.....	494	<i>Echinophyllum sachalinense</i> (Lindb.) T.J.O'Brien ..	1168
<i>Cololejeunea subminutilobula</i> Mizut.	253	<i>Encalypta alpina</i> Sm.	944
<i>Cololejeunea trichomanis</i> (Gottsche) Besch.	747	<i>Encalypta raptocarpa</i> Schwägr.	948
<i>Colura inuii</i> Horik.	498	<i>Encalypta streptocarpa</i> Hedw.	535
<i>Colura meijeri</i> Jovet-Ast	502	<i>Entodon conchophyllus</i> Cardot	825
<i>Colura tenuicornis</i> (A.Evans) Steph.....	506	<i>Eocalypogeia quelpaertensis</i> (S.Hatt. & Inoue)	
<i>Crossocalyx hellerianus</i> (Nees ex Lindenb.) Meyl....	41	R.M.Schust.	446
<i>Cryphaea obovatocarpa</i> S.Okamura	816	<i>Eremonotus myriocarpus</i> (Carrington) Pearson	53
<i>Cryptocoleopsis imbricata</i> Amakawa.....	181	<i>Eucladium verticillatum</i> (With.) Bruch & Schimp...790	
<i>Ctenidium molluscum</i> (Hedw.) Mitt.....	662	<i>Exostratum blumei</i> (Hampe) L.T.Ellis.....	560
<i>Cyathodium cavernarum</i> Kunze ex Lehm.	21	<i>Filibryum yakoushimae</i> (Cardot) W.Kim & T.Yamag.	
<i>Cyathophorum adiantum</i> (Griff.) Mitt.	808		405
<i>Cyathophorum hookerianum</i> (Griff.) Mitt.	1177	<i>Fissidens geppii</i> M.Fleisch.....	568
<i>Cylindrocolea tagawae</i> (N.Kitag) R.M.Schust.....	876	<i>Fissidens javanicus</i> Dozy & Molk.	572
<i>Cyrtodontopsis leveillei</i> (Thér.) P.Rao & Enroth.....	821	<i>Fissidens obscurus</i> Mitt.....	996
<i>Cyrtomnium hymenophylloides</i> (Huebener) T.J.Kop.		<i>Folioceros glandulosus</i> (Lehm. & Lindenb.)	
.....	1040	D.C.Bharadwaj	17
<i>Daltonia carinata</i> (Dixon & W.E.Nicholson) B.C.Ho &		<i>Fontinalis antipyretica</i> Hedw.	833
L.Pokorny	101	<i>Fontinalis hypnoides</i> Hartm.	837
<i>Dendroceros japonicus</i> Steph.	699	<i>Forsstroemia noguchii</i> L.R.Stark	670
<i>Dendroceros tubercularis</i> S.Hatt.	409	<i>Fossombronia myrioides</i> Inoue	430
<i>Dendrocyathophorum decolyi</i> (M.Fleisch.) Kruijer	622	<i>Fossombronia pusilla</i> (L.) Nees	25
<i>Dichelyma japonicum</i> Cardot	829	<i>Frullania gaudichaudii</i> (Nees & Mont.) Nees & Mont.	
<i>Diphyscium chiapense</i> D.H.Norris subsp.			470
<i>unipapillosum</i> (Deguchi) T.Y.Chiang & S.H.Lin....	527	<i>Frullania iriomotensis</i> S.Hatt.....	229
<i>Diphyscium kashmirensense</i> (H.Rob.) Magombo.....	531	<i>Frullania okinawensis</i> Kamim.	916
<i>Diphyscium lorifolium</i> (Cardot) Magombo	940	<i>Frullania repandistipula</i> Sande Lac.....	233
<i>Diphyscium perminutum</i> Takaki	277	<i>Frullania sackawana</i> Steph.....	474
<i>Diphyscium suzukii</i> Z.Iwats.	281	<i>Frullania trichodes</i> Mitt.....	478
<i>Distichophyllum mittenii</i> Bosch & Sande Lac.....	1173	<i>Garckea flexuosa</i> (Griff.) Margad. & Nork.....	992
<i>Distichophyllum nigricaula</i> Bosch & Sande Lac... 1175		<i>Garovaglia elegans</i> (Dozy & Molk.) Bosch & Sande	
<i>Distichophyllum obtusifolium</i> Thér.....	329	Lac.....	618
<i>Distichophyllum osterwaldii</i> M.Fleisch.....	626	<i>Gollania japonica</i> (Cardot) Ando & Higuchi.....	373
<i>Distichophyllum yakumontanum</i> H.Akiyama & Matsui		<i>Gollania splendens</i> (Ihsiba) Nog.....	377
.....	105	<i>Grimmia mollis</i> Bruch & Schimp.....	956
<i>Drepanolejeunea obtusifolia</i> T.Yamag.	257	<i>Gymnomitrium laceratum</i> (Steph.) Horik.	892
<i>Drepanolejeunea spicata</i> (Steph.) Grolle & R.L.Zhu		<i>Gymnomitrium mucronulatum</i> (N.Kitag.) N.Kitag. ..	896

<i>Gymnostomiella longinervis</i> Broth.	795	<i>Lewinskya iwatsukii</i> (Ignatov) F.Lara, Garilleti & Goffinet	597
<i>Habrodon perpusillus</i> (De Not.) Lindb.	638	<i>Limnohypnum mizushimae</i> (Sakurai) Ignatov & Czernjad.	345
<i>Haplohymenium flagelliforme</i> L.I.Savicz.....	341	<i>Luisierella barbula</i> (Schwägr.) Steere.....	285
<i>Haplomitrium hookeri</i> (Lydell ex Sm.) Nees.....	117	<i>Macromitrium holomitrioides</i> Nog.....	97
<i>Hattoria yakushimensis</i> (Horik.) R.M.Schust.....	145	<i>Macrothamnium macrocarpum</i> (Reinw. & Hornsch.) M.Fleisch.....	349
<i>Helodium paludosum</i> (A.Jaeger) Broth.	642	<i>Mannia androgyna</i> (L.) A.Evans.....	2
<i>Heteroscyphus aselliformis</i> (Reinw., Blume & Nees) Schiffn.	462	<i>Mannia californica</i> (Underw.) L.C.Wheeler	6
<i>Heteroscyphus wettsteinii</i> (Schiffn.) Schiffn.	61	<i>Mannia triandra</i> (Scop.) Grolle	121
<i>Homaliadelphus targionianus</i> (Mitt.) Dixon & P.de la Varde var. <i>laevidentatus</i> (S.Okamura) Nog.	1104	<i>Marsupella boeckii</i> (Austin) Lindb. ex Kaal.	185
<i>Homaliadelphus targionianus</i> (Mitt.) Dixon & P.de la Varde var. <i>rotundatus</i> Nog.	850	<i>Marsupella vermiformis</i> (R.M.Schust.) Bakalin & Fedosov	189
<i>Homaliodendron exiguum</i> (Bosch & Sande Lac.) M.Fleisch.	1179	<i>Mastigophora diclados</i> (Brid. ex F.Weber) Nees	466
<i>Husnotiella asperifolia</i> (Mitt.) J.A.Jiménez & M.J.Cano	1008	<i>Meiothecium microcarpum</i> (Harv.) Mitt.....	397
<i>Hylocomiastrum umbratum</i> (Hedw.) M.Fleisch. ...	1183	<i>Mesoptychia collaris</i> (Nees) L.Söderstr. & Váňa.....	201
<i>Hypnodendron vitiense</i> Mitt.	614	<i>Mesoptychia heterocolpos</i> (Thed. ex Hartm.) L.Söderstr. & Váňa	57
<i>Hypnodontopsis apiculata</i> Z.Iwats. & Nog.	785	<i>Mesoptychia igiana</i> (S.Hatt.) L.Söderstr. & Váňa.....	735
<i>Hypopterygium tamarisci</i> (Sw.) Müll.Hal.	1178	<i>Meteoriopsis reclinata</i> (Müll.Hal.) M.Fleisch.....	658
<i>Isopterygium propaguliferum</i> Toyama.....	1144	<i>Meteorium papillarioides</i> Nog.	1100
<i>Jungermannia borealis</i> Damsh. & Váňa.....	197	<i>Moerckia blytii</i> (Mørck) Brockm.	434
<i>Lejeunea apiculata</i> Sande Lac.....	261	<i>Molendoa hornschurchiana</i> (Hook.) Limpr.....	585
<i>Lejeunea otiana</i> S.Hatt.	510	<i>Monosolenium tenerum</i> Griff.	707
<i>Lejeunea sordida</i> (Nees) Nees.....	265	<i>Myurella julacea</i> (Schwägr.) Schimp.	674
<i>Lejeunea syoshii</i> Inoue	928	<i>Myurella sibirica</i> (Müll.Hal.) Reimers.....	1116
<i>Lepicolea yakusimensis</i> (S.Hatt.) S.Hatt.....	10	<i>Myurella tenerrima</i> (Brid.) Lindb.	678
<i>Leptolejeunea elliptica</i> (Lehm. & Lindenb.) Besch.	751	<i>Nardia breidlerii</i> (Limpr.) Lindb.	193
<i>Lethocolea naruto-toganensis</i> Furuki.....	49	<i>Nardia compressa</i> (Hook.) Gray	731
<i>Leucobryum glaucum</i> (Hedw.) Ångstr.	548	<i>Nardia hiroshii</i> Amakawa.....	900
<i>Leucobryum javense</i> (Brid.) Mitt.	552	<i>Nardia unispinalis</i> Amakawa.....	904
<i>Leucodon alpinus</i> H.Akiyama	357	<i>Neckeropsis cyclophylla</i> (Müll.Hal.) S.Olsson, Enroth & D.Quandt	1112
<i>Leucodon corensis</i> Cardot.....	646	<i>Neckeropsis obtusata</i> (Mont.) M.Fleisch.....	1181
<i>Leucodon giganteus</i> (Nog.) Nog.....	1088	<i>Neobarbella comes</i> (Griff.) Nog.....	841
<i>Leucodon sciurioides</i> (Hedw.) Schwägr.....	1092	<i>Neodolichomitra yunnanensis</i> (Besch.) T.J.Kop.	353
<i>Leucodon sohayakiensis</i> H.Akiyama	1096	<i>Neohattoria herzogii</i> (S.Hatt.) Kamim.	482
<i>Leucophanes angustifolium</i> Renauld & Cardot	564		

<i>Neolepidozia mamillosa</i> (Schiffn.) E.D.Cooper	205	<i>Pogonatum camusii</i> (Thér.) Touw	773
<i>Neoorthocaulis floerkei</i> (F.Weber & D.Mohr)		<i>Pohlia drummondii</i> (Müll.Hal.) A.L.Andrews	1056
L.Söderstr., De Roo & Hedd.....	149	<i>Polytrichum juniperinum</i> Hedw. subsp. <i>strictum</i> (Brid.)	
<i>Nowellia aciliata</i> (P.C.Chen & P.C.Wu) Mizut.....	165	Nyl. & Saelan	936
<i>Obtusifolium obtusum</i> (Lindb.) S.W.Arnell.....	880	<i>Porella acutifolia</i> (Lehm. & Lindenb.) Trevis. subsp.	
<i>Odontoschisma francisci</i> (Hook.) L.Söderstr. & Váňa		<i>acutifolia</i>	932
.....	45	<i>Pseudolepicolea andoi</i> (R.M.Schust.) Inoue	213
<i>Odontoschisma jishibae</i> (Steph.) L.Söderstr. & Váňa		<i>Pseudospiridentopsis horrida</i> (Cardot) M.Fleisch. ..	109
.....	719	<i>Pterogoniadelphus esquirolii</i> (Thér.) Ochyra & Zijlstra	
<i>Oedicladium fragile</i> Cardot	666		13
<i>Oedicladium rufescens</i> (Reinw. & Hornsch.) Mitt. var.		<i>Radula boninensis</i> Furuki & K.Yamada.....	77
<i>yakushimense</i> (Sakurai) Z.Iwats.	1108	<i>Radula campanigera</i> Mont. subsp. <i>obiensis</i> (S.Hatt.)	
<i>Oedipodium griffithianum</i> (Dicks.) Schwägr.	523	K.Yamada	514
<i>Oreas martiana</i> (Hoppe & Hornsch.) Brid.	1004	<i>Radula chinensis</i> Steph.	519
<i>Orthomnion dilatatum</i> (Mitt.) P.C.Chen	1044	<i>Radulina borbonica</i> (Bél.) W.R.Buck	401
<i>Orthomnion javense</i> (M.Fleisch.) T.J.Kop.....	1048	<i>Rhachithecium nipponicum</i> (Toyama) Wijk & Margad.	
<i>Orthothecium rufescens</i> (Brid.) Schimp.	1120		576
<i>Orthotrichum anomalum</i> Hedw.	601	<i>Rhachithecium perpusillum</i> (Thwaites & Mitt.) Broth.	
<i>Orthotrichum cupulatum</i> Brid.	1064		581
<i>Pachyneuropsis perinvoluta</i> (Tixier) M.Alonso,		<i>Rhodobryum ontariense</i> (Kindb.) Paris	804
M.J.Cano & J.A.Jiménez	309	<i>Riccardia pumila</i> Furuki.....	33
<i>Palisadula katoi</i> (Broth.) Z.Iwats.	855	<i>Ricciocarpos natans</i> (L.) Corda	711
<i>Paludella squarrosa</i> (Hedw.) Brid.....	89	<i>Sandeothallus japonicus</i> (Inoue) Crand.-Stotl. & Stotler	
<i>Papillidiopsis macrosticta</i> (Broth. & Paris) W.R.Buck			133
& B.C.Tan.....	687	<i>Sasaokaea aomoriensis</i> (Paris) Kanda.....	812
<i>Peltolepis quadrata</i> (Saut.) Müll.Frib.....	125	<i>Sauteria spongiosa</i> (Kashyap) S.Hatt.....	129
<i>Pinnatella ambigua</i> (Bosch & Sande Lac.) M.Fleisch.		<i>Scapania ciliatospinosa</i> Horik.	884
.....	113	<i>Scapania crassiretis</i> Bryhn.....	888
<i>Pinnatella makinoi</i> (Broth.) Broth.	864	<i>Scapania cuspiduligera</i> (Nees) Müll.Frib.	173
<i>Plagiobryum japonicum</i> Nog.....	593	<i>Scapania ornithopoides</i> (With.) Waddel	438
<i>Plagiochila fordiana</i> Steph.	743	<i>Scapania verrucosa</i> Heeg.....	177
<i>Plagiochila shangaica</i> Steph.	209	<i>Schistidium maritimum</i> (R.Scott) Bruch & Schimp.	289
<i>Plagiochila vexans</i> Schiffn. ex Steph.	912	<i>Schistochila aligera</i> (Nees & Blume) J.B.Jack & Steph.	
<i>Plagiomnium tezukae</i> (Sakurai) T.J.Kop.	1052		69
<i>Plagiothecium neckeroideum</i> Schimp.....	1124	<i>Schistochila nuda</i> Horik.	221
<i>Plagiothecium obtusissimum</i> Broth.	365	<i>Schistochila sciurea</i> (Nees) Schiffn.....	225
<i>Pleurozia purpurea</i> Lindb.....	137	<i>Schistostega pennata</i> (Hedw.) F.Weber & D.Mohr	1000
<i>Podperaea krylovii</i> (Podp.) Z.Iwats. & Glime.....	333	<i>Schizophyllopsis bidens</i> (Reinw., Blume & Nees) Váňa	

& L.Söderstr.....	153	<i>Thysananthus retusus</i> (Reinw., Blume & Nees)	
<i>Schizymenium japonicum</i> (Besch.) Tad.Suzuki	1060	B.M.Thiers & Gradst.....	273
<i>Schizymenium sasaokae</i> (Broth.) Tad.Suzuki	93	<i>Timmia megapolitana</i> Hedw.....	952
<i>Seligeria donniana</i> (Sm.) Muell.Hal.....	972	<i>Timmia norvegica</i> J.E.Zetterst.....	540
<i>Seligeria pusilla</i> (Hedw.) Bruch & Schimp.	544	<i>Tortula hoppeana</i> (Schultz) Ochyra	589
<i>Seligeria tristichoides</i> Kindb.	293	<i>Trachycladiella aurea</i> (Mitt.) M.Menzel.....	846
<i>Solenostoma handelii</i> (Schiffn.) Müll.Frib.	739	<i>Trematodon mayebarae</i> Takaki	1020
<i>Solenostoma hokkaidense</i> (Váňa) Váňa, Hentschel & Heinrichs.....	908	<i>Trichocolea japonica</i> T.Katag.	217
<i>Sphagnum junghuhnianum</i> Dozy & Molk.	760	<i>Tricholepidozia neesii</i> (Lindenb.) E.D.Cooper.....	454
<i>Sphagnum palustre</i> L.	764	<i>Trichosteleum boschii</i> (Dozy & Molk.) A.Jaeger ...	1184
<i>Sphenolobopsis pearsonii</i> (Spruce) R.M.Schust.....	157	<i>Trichosteleum lutschianum</i> (Broth. & Paris) Broth.	695
<i>Sphenolobus saxicola</i> (Schrad.) Steph.....	161	<i>Ulota eurystoma</i> Nog.	1068
<i>Splachnum ampullaceum</i> Hedw.....	317	<i>Ulota perbreviseta</i> Dixon & Sakurai.....	605
<i>Splachnum melanocaulon</i> (Wahlenb.) Schwägr.	321	<i>Ulota yakushimensis</i> Z.Iwats.....	610
<i>Stereodontopsis pseudorevoluta</i> (Reimers) Ando	691	<i>Zoopsis liukuensis</i> Horik.	458
<i>Stictolejeunea iwatsukii</i> Mizut.....	269	<i>Zygodon viridissimus</i> (Dicks.) Brid.....	1072
<i>Symphyodon asper</i> (Mitt.) A.Jaeger.....	1148		
<i>Symphyodon copelandii</i> Broth.....	1152		
<i>Symphyodon gollanioides</i> Nog.	1156		
<i>Symphyodon recurvomarginatus</i> (Dixon & Sakurai) H.Akiyama.....	1160		
<i>Symphyodon rheophilus</i> H.Akiyama	1164		
<i>Syntrichia gemmascens</i> (P.C.Chen) R.H.Zander	313		
<i>Syntrichia sinensis</i> (Müll.Hal.) Ochyra	1012		
<i>Syrrhopodon kiiensis</i> Z.Iwats.	297		
<i>Syrrhopodon tosaensis</i> Cardot.....	781		
<i>Syrrhopodon yakushimensis</i> Takaki & Z.Iwats.....	301		
<i>Taiwanobryum anacamptolepis</i> (Müll.Hal.) S.Olsson, Enroth & D.Quandt.....	361		
<i>Taiwanobryum speciosum</i> Nog.	868		
<i>Takakia lepidozoides</i> S.Hatt. & Inoue	756		
<i>Targionia hypophylla</i> L.....	421		
<i>Taxiphyllopsis iwatsukii</i> Higuchi & Deguchi.....	337		
<i>Tayloria hornschurchii</i> (Grev. & Arn.) Broth.....	1024		
<i>Tayloria indica</i> Mitt.	1028		
<i>Tayloria splachnoides</i> (Schwägr.) Hook.....	1032		
<i>Thamniopsis utacamundiana</i> (Mont.) W.R.Buck ..	1076		

■和名索引

アオシマヒメシワゴケ	799
アカサキシロゴケ	896
アカネジクチゴケ	1008
アマカワヒメゴヘイゴケ	237
アマノウロコゴケ	462
イシバヤバネゴケ	719
イギイチョウゴケ	735
イサワゴケ	781
イシツチゴケ	523
イチョウウキゴケ	711
イトスジゴケ	33
イトヒバゴケ	816
イトミゾゴケ	185
イヌイムシトリゴケ	498
イヌコクサゴケ	841
イブキキンモウゴケ	605
イブキタチヒダゴケ	1064
イボイボカタシロゴケ	85
イボイボムクムクゴケ	217
イボタチヒダゴケ	597
イボヒシャクゴケ	177
イボミスジャバネゴケ	385
イボヤスデゴケ	233
イリオモテウロコゼニゴケ	430
イリオモテスギバゴケ (テララゴケ)	454
イリオモテヤスデゴケ	229
イワゼニゴケ	121
ウシオギボウシゴケ	289
ウルシゼニゴケ	6
ウワバミゴケ	325
エゾキヌシツポゴケ	293
エゾヒメソロイゴケ	181
エビスゴケ	1112
オオイチョウゴケ	201
オオカギイトゴケ	377
オオサイハイゴケ	413

オオサナダゴケ	1124
オオサワラゴケ	466
オオシカゴケ	353
オオシマヨウジョウゴケ	486
オオタマコモチイトゴケ	682
オオツボゴケ	317
オオハラバクサリゴケ	265
オオミスゴケ	764
オオミツヤゴケ	825
オオヤマトイタチゴケ	1088
オガサワラカタシロゴケ	556
オガサワラキブリツノゴケ	409
オガサワラキララゴケ	253
オガサワラケビラゴケ	77
オキナスギゴケ	936
オキナワサイハイゴケ	703
オキナワヤスデゴケ	916
オクヤマツガゴケ	101
オチクサリゴケ	510
オニゴケ	109
オニシメリゴケ	345
オノイチョウゴケ	37
オノクサリゴケ	928
オビケビラゴケ	514
オリニピックゴケ	81
カイガラゴケ	674
カギヨウジョウゴケ	494
カクレゴケ	618
カサゴケモドキ	804
カシ米尔クマノゴケ	531
カタナワゴケ	666
カトウゴケ	855
カネマルムチゴケ	450
カビゴケ	751
カマバコモチゴケ	638
カメゴケモドキ	1072
カラフトイチョウゴケ	161
カラフトシノブゴケ	1168

カワゴケ	837	コダマイチョウゴケ	41
カワブチゴケ	821	コバノイクビゴケ	277
ガッサンクロゴケ	769	コマイタチゴケ	646
キアミゴケ	297	コモチイチイゴケ	1144
キサゴゴケ	785	ゴマダラクサリゴケ	269
キジノオゴケ	808	サイシュウホラゴケモドキ	446
キタイタチゴケ	1092	サオヒメゴケ	630
キダチクジャクゴケ	622	サカワヤスデゴケ	474
キダチゴケ	614	サガリヤスデゴケ	478
キヌシッポゴケ	968	サケバキハネゴケ	743
キヌシッポゴケモドキ	964	ササオカゴケ（アオモリカギハイゴケ）	812
キノボリツノゴケ	699	サジバラッコゴケ	373
キノボリヒメツガゴケ	105	サトミヨツデゴケ	213
キノボリヤバネゴケ	157	サンカクヨウジョウゴケ	73
キブネゴケ	576	シダレウニゴケ	1160
キブリハネゴケ	864	シナクジャクゴケ	1178
キャラハゴケモドキ	337	シナノセンボンゴケ（セイタカヤリカツギ）	535
キヤスデゴケ	470	シノブチョウチンゴケ	1040
キララヨウジョウゴケ	245	シマフデノホゴケ	393
キレハウロコゴケ	193	シャンハイハネゴケ	209
キレハコマチゴケ	117	シライワスズゴケ	670
キレハヤバネゴケ	723	シラガゴケモドキ	560
クイシコモチイトゴケ	1132	シロウマヤリカツギ	944
クチボソミノゴケ	97	シロシラガゴケ	548
クマノゴケ	940	シワナシチビイタチゴケ	13
クロカワゴケ	833	ジャバシラガゴケ	552
クロコゴケ	285	ジャバホウオウゴケ	572
クロジクツガゴケ	1175	ジョウレンホウオウゴケ	568
ケスジャバネゴケ	169	ジンチョウゴケ	129
ケナシオヤコゴケ	221	スギバシノブゴケ	1084
ケハネゴケモドキ	442	スズキイクビゴケ	281
ケミドリゼニゴケ	29	スルメゴケ	1032
コアブラゴケ	1076	タイワントラノオゴケ	868
コキジノオゴケ	1177	タカサゴツガゴケ	1173
コキヌシッポゴケ	544	タカサゴハイヒモゴケ	658
コサキジロゴケ	892	タカネハネゴケモドキ	912
コシノシンジゴケ	93	タガワヤバネゴケ	876
コシノヤバネゴケ	829	タチクモマゴケ	715

タチチョウチンゴケ	1044	ハットリヤスデゴケ	482
タチチョウチンゴケモドキ	1048	ハナシキヌシツポゴケ	972
タニガワヒシヤクゴケ	884	ハナシタチヒラゴケ	1104
ダンゴゼニゴケ	2	ハマグリゼニゴケ	421
ダンダンゴケ	790	ハリエゾネジレゴケ	589
チチブイチョウゴケ	727	ハンデルソロイゴケ	739
チチブウニゴケ	1152	ヒカゲノカズラモドキ	654
チチブゼニゴケ	417	ヒカリゴケ	1000
チチレヤハズゴケ	434	ヒカリゼニゴケ	21
ツバサヒシヤクゴケ	888	ヒトスジウロコゴケ	904
ツブツブヘチマゴケ	1056	ヒトヨシゴケ	1016
ツメクサリゴケ	261	ヒメウキヤバネゴケ	45
ツヤダシタカネイタチゴケ	357	ヒメコガネハイゴケ	333
テヅカチョウチンゴケ (アズミチョウチンゴケ)		ヒメゴヘイゴケ	273
.....	1052	ヒメタチヒラゴケ	850
トガリカイガラゴケ	678	ヒメトロイブゴケ	425
トガリバギボウシゴケ	634	ヒメハゴロモゴケ	1179
トガリバクラマゴケモドキ	932	ヒメハナガサゴケ	321
トゲバウロコゴケ	61	ヒメハミズゴケ	773
トサノタスキゴケ	650	ヒメモミジゴケ	141
トサヒラゴケ	1181	ヒョウタンハリガネゴケ	593
ナガバハリイシバイゴケ	585	ヒヨクゴケ	1183
ナガバムシトリゴケ	506	ヒラウロコゴケ	731
ナガレウニゴケ	1164	ヒログチキンモウゴケ	1068
ナメリヒメコモチイトゴケ	1136	ヒロシウロコゴケ	900
ナンジャモンジャゴケ	756	ヒロスジツリバリゴケ	980
ニセシダレウニゴケ	1148	ヒロハコモチイトゴケ	381
ニセタマウケゴケ (シバゴケ)	992	ヒロハシノブイトゴケ	846
ニセハブタエゴケ	564	フィリピンオヤコゴケ	69
ニセヒメコモチイトゴケ	1140	フウチョウゴケ	349
ヌマシノブゴケ	642	フガゴケ	795
ヌマチゴケ	89	フクレヤバネゴケ	165
ノグチゴケ	960	フジサンギンゴケモドキ	984
ハイヒバゴケモドキ	1128	フチドリコゴケ	309
ハシボソゴケ	687	フチナシツガゴケ	626
ハタキゴケ	988	フトハイゴケ	691
ハッコウダゴケ	53	ヘビゴケ	305
ハットリムカイバハネゴケ	65	ホウライハゴロモゴケ	860

ホソバイトクスズゴケ	249	モグリゴケ	49
ホソバゴケ	1060	モミノキゴケ	361
ホソバツヤゴケ（タチミツヤゴケ）	1120	ヤエヤマサンカクゴケ	924
ホソヒモゴケ	1100	ヤエヤマスギバゴケ	205
ホソベリミズゴケ	760	ヤクシマアミゴケ	301
ボウズムシトリゴケ	502	ヤクシマアミバゴケ	145
マエバラアミバゴケ	153	ヤクシマオヤコゴケ	225
マエバラナガダイゴケ	1020	ヤクシマキンモウゴケ	610
マゴメゴケ	581	ヤクシマスギバゴケ	10
マツカリタケナガゴケ	365	ヤクシマナワゴケ	1108
マムシゴケ	397	ヤクシマヒラツボゴケ	405
マメハネゴケ	113	ヤクホウオウゴケ	996
マユハケゴケ	976	ヤスダゴケ	1036
マルバイチョウゴケ	880	ヤツガタケウロコゼニゴケ	25
マルバサンカクゴケ	257	ヤツガタケツボミゴケ	197
マルバツガゴケ	329	ヤマゴケ	1004
マルバホラゴケモドキ	1186	ヤマトチヒダゴケ	601
マルバユリゴケ	1024	ヤマトケクサリゴケ	490
ミギワイクビゴケ	527	ヤマトハクチョウゴケ	777
ミギワギボウシゴケ	956	ヤマトヤハズゴケ	133
ミジンコゴケ	458	ヤワラクシノハゴケ	662
ミジンコミゾゴケ	189	ヤワラゼニゴケ	707
ミスジャバネゴケ	389	ユキミイチョウゴケ	57
ミズゴケモドキ	137	ユリゴケ（タイワンユリゴケ）	1028
ミゾゴケモドキ	173	ユーレンキララゴケ	920
ミツデモミジゴケ	149	ヨウジョウゴケ	747
ミドリツノゴケ	17	ヨコグライタチゴケ	1096
ミハラシゴケ	1080	ラクヨウクサスギゴケ	540
ミミケビラゴケ	519	ラッコゴケモドキ	1156
ミミヒラゴケ	369	リシリゼニゴケ	125
ミヤマクサスギゴケ	952	リシリツボミゴケ	908
ミヤマコネジレゴケ	1012	リュウキュウカギホソエゴケ	401
ミヤマミズゼニゴケ	1182	リュウキュウシゲリゴケ	241
ミヤマヤリカツギ	948	リュウキュウナガハシゴケ	1184
ムカゴネジレゴケ	313	リュウキュウホソエゴケ	695
ムカシヒシャクゴケ	438	レイシゴケ	1116
ムカシヤバネゴケ	872		
ムチエダイトゴケ	341		

The 5th Red Databook Bryophytes: Threatened wildlife of Japan

Edited by

Ministry of the Environment, Japan
1-2-2 Kasumigaseki, Chiyoda-ku, Tokyo
100-8975, JAPAN

第5次レッドデータブック：絶滅のおそれのある日本の野生生物 蘚苔類

2025 年 3 月 初版 発行

編集／環境省

〒100-8975 東京都千代田区霞が関 1-2-2
電話 03-3581-3351（代表）
